

中条小学校遺跡・ 松ヶ本南遺跡 1

令和6年（2024年）3月

 茨木市教育委員会
公益財団法人 大阪府文化財センター

中条小学校遺跡・ 松ヶ本南遺跡 1

令和6年（2024年）3月

 茨木市教育委員会
公益財団法人 大阪府文化財センター



中条小学校遺跡 調査地全景
(調査区1/ 南から)

序 文

私たちの暮らす茨木市では、北部は北摂山系が、南部には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境のもと、古来数多くの歴史が育まれてきました。

文化施設の充実をはじめ、安全・安心なまちづくりをめざして発展をとげた本市は、交通の利便性や京都・大阪間という立地の良さも手伝い大規模な開発も少なくありません。昨今の時勢のなか、開発に伴う埋蔵文化財の調査件数は全国的に激減しているのに対し、本市では微減の傾向をみせているにすぎません。

本書は、令和3・4年度に学校法人立命館大学大阪いばらきキャンパス内で実施した発掘調査の成果報告書です。調査地では平成24年度に当該キャンパス新設に伴う発掘調査を実施し、これまでに知られていなかった新たな知見を数多く得ることができました。今回の調査でも、茨木の歴史を紐解く一助となるさらなる成果を得ることができました。

調査の実施にあたりましては、学校法人立命館、施工関係者、調査関係者、近隣住民の皆様にはご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育庁ならびに公益財団法人大阪府文化財センターの諸機関には、ご指導と格別のご協力をいただき、茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

令和6年3月31日

茨木市教育委員会
教育長 岡田祐一

は し が き

大阪府北部に位置する茨木市は、大阪と京都の中間に位置する人口 28 万人を擁する特例市です。京から西国諸国へと向かう西国街道と、大坂と丹波亀山をつなぐ亀山街道が本市の中央で東西・南北に交わる交通の要衝でもあり、現在はこれらの機能を受け継いだ東海道線本線や名神高速道路が、戦後の本市の発展を支えてきました。

多くの埋蔵文化財包蔵地を抱える自治体としての側面も持ち合わせており、市中心部では東奈良遺跡や郡遺跡・倍賀遺跡といった弥生時代の大規模集落が存在します。特に東奈良遺跡は、銅鐸をはじめとする青銅器生産がおこなわれた環濠集落として全国的にも著名です。また、平成 28～29 年にかけて当センターが茨木市教育委員会と共同で調査を実施した郡遺跡・倍賀遺跡では、160 基に及ぶ方形周溝墓が確認されたことは記憶に新しいところです。

本書にて報告する中条小学校遺跡は、このふたつの遺跡のほぼ中間に位置にする弥生時代から中世の複合遺跡です。立命館大学大阪いばらきキャンパスの開設時に実施された平成 24～25 年の調査では、全国的にも例をみない列状土坑群が発見され、大きな話題を集めました。今回の調査は、その際に実施された調査区の隣接地における新たなキャンパスの設置に伴って実施されたものであり、調査では弥生時代前期の石器集積遺構、古墳時代初頭の方形周溝墓・円形周溝墓、平安時代の掘立柱建物跡などが確認されています。特に石器集積遺構からは、サヌカイトの微細な剥片が集中して出土しており、類例の少ない石器製作にかかわる貴重な調査事例となります。また、茨木市は、大阪府内で円形周溝墓が集中する地域ですが、方形周溝墓とセットでみつかった良好な調査事例となったため、古墳出現期の墓制の転換を考える上で欠かせない成果となるでしょう。周辺では、東奈良遺跡をはじめとし、弥生時代から古代を中心とした豊富な調査の蓄積があるため、いずれの成果も周辺一帯の歴史的な展開や土地利用の変遷を考えるための成果になると思われます。埋蔵文化財の調査成果が有効に活用され、歴史や土地の履歴、環境変化といったこの地域のあゆみや各時代の社会像を復元するための一助となることを、切に願います。

最後になりましたが、発掘調査を円滑に実施するために、学校法人立命館ならびに茨木市教育委員会には多大なるご指導・ご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。今後とも当センターの実施する事業へのご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和 6 年 3 月 31 日

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 坂井 秀弥

例 言

1. 本書は、立命館大学 OIC 新展開施設整備事業に伴い実施した大阪府茨木市岩倉町所在の中条小学校遺跡・松ヶ本南遺跡の発掘調査報告書である。調査名称は「中条小学校遺跡・松ヶ本南遺跡 2020 - 1」である。
2. 発掘調査は、株式会社島田組の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターと、茨木市教育委員会が共同で実施した。遺物整理と本書の編集は、公益財団法人大阪府文化財センターが実施し、令和5年3月31日までにすべての資料を茨木市教育委員会に引き渡した。本書編集後の印刷・製本は、茨木市教育委員会がおこない、令和6年3月31日の本書の刊行をもって完了した。
3. 発掘調査および遺物整理に関する契約名称および契約期間は以下の通りである。
【契約名称】 立命館大学 OIC 新展開施設整備事業に伴う中条小学校遺跡・松ヶ本南遺跡発掘調査
【契約期間】 令和3年9月1日 ～ 令和5年3月31日
4. 発掘調査および遺物整理は以下の体制で実施した。
【茨木市教育委員会】
〔令和3年度・4年度〕 歴史文化財課 課長 木下典子、課長代理兼調査管理係長 前田聡志、調査管理係 坂田典彦
【公益財団法人 大阪府文化財センター】
〔令和3年度〕 事務局 次長 市本芳三、調査課 課長 岡戸哲紀、課長補佐 佐伯博光、副主査 笹栗拓（調査担当）
〔令和4年度〕 事務局 次長 市本芳三、調査課 課長 佐伯博光、課長補佐 後藤信義、副主査 笹栗拓（調査・整理担当）
5. 遺構写真は笹栗が、遺物写真は大阪府文化財センター中部調査事務所写真室が撮影した。
6. 発掘調査および整理作業の過程で、以下の委託分析を実施し、その結果を第6章に掲載した。
令和4年度 放射性炭素年代測定（AMS法）株式会社パレオ・ラボ
7. 本書の執筆は、主に笹栗が担当し、第1章第1節を坂田が分担した。第7章第3節内の石器の所見については、園原悠斗氏（公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター）にご寄稿いただいた。第6章の自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボから提出された成果報告書を掲載した。笹栗以外の分担項目については、目次と担当項目の文末に執筆者を示している。編集は、笹栗がおこなった。
8. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の諸機関・個人にご指導・ご協力を賜った。
（敬称略、令和5年3月末時点）
学校法人立命館、大阪府教育庁文化財保護課、高槻市立今城塚古代歴史館
矢野健一・木立雅朗・長友朋子（立命館大学文学部）、サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ（立命館大学政策学部）、井村舜也（南山大学大学院）、上峯篤史（南山大学）、内田真雄・三好裕太郎（高槻市立今城塚古代歴史館）、河原秋桜・新尺雅弘・原田昌浩（大阪府教育庁）、園原悠斗（公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター）、菱田哲郎（京都府立大学）
9. 本調査に関わる遺物および写真・実測図等の記録類は、茨木市教育委員会にて保管している。有効に活用されることを希望する。

凡 例

1. 図示した標高は、すべて東京湾平均海面（T.P.）+値を使用し、単位はmで表示した。
2. 発掘調査では、世界測地系（測地成果 2000）によって測量し、平面直角座標系第VI系で図示した。遺構図の表記の単位はすべてmで、方位はすべて座標北である。
3. 現地調査および整理作業は、公益財団法人大阪府文化財センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
4. 地層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2005年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
5. 各遺構の記載については、調査区・遺構面に関わらずすべて通しの遺構番号を付し、遺構番号→遺構種類の順で遺構名を記載している。建物跡などの複数の遺構の集合体によるものについては、遺構種類→遺構番号の別に番号を付した。
（例：「2土坑」・「26溝」、「掘立柱建物1」・「円形周溝墓10」など）
6. 遺構図における断面位置は、図面上に \curvearrowright \curvearrowleft 形によってその位置を示した。個別遺構の縮尺は40分の1を基本とするが、遺構の規模に応じて縮尺率を変更している。
7. 周溝墓の規模等の各計測値については、報告文の図36（P60）にて示す通りである。計測値には、周溝墓築造時の本来の形状が残存している部分と、後世の削平を受けて元々の形状が不明のものが混在している。そのため、削平を受けた部分の計測値には、〔 〕カッコ書きで明示した。
8. 遺物図の縮尺は、土器を4分の1、石器を3分の2、金属器を2分の1で図示した。土器類の挿図の断面は、須恵器・瓦器を黒塗り、施釉陶器・瓦をアミフセで表現し、その他は白抜きとした。
9. 掲載遺物は、遺物の材質ごとに頭文字を付し、下記の通りそれぞれ通し番号を付した。本文・図版・一覧表・写真図版の番号はすべて一致する。
土器・土製品（なし） 石器・石製品（S） 金属製品・関連遺物（M）
10. 遺構図において出土土器の位置を示す場合、遺物の掲載番号を 遺物 No. で囲い表示した。
11. 本書で参照した文献は、各章の末尾に記した。また、立命館大学大阪いばらきキャンパスの開設に伴う調査成果については、既に下記の報告書が刊行されている。その成果に関しては、随時触れるため、併せて参照されたい。
木村健明編 2015『中条小学校遺跡発掘調査報告書（本文編）—立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査報告書—』茨木市文化財資料集 第62集
木村健明編 2015『中条小学校遺跡発掘調査報告書（分析・考査編）—立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査報告書—』茨木市文化財資料集 第63集
木村健明編 2015『中条小学校遺跡発掘調査報告書（写真図版編）—立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査報告書—』茨木市文化財資料集 第64集
藤田徹也編 2015『松ヶ本南遺跡発掘調査報告書—立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査報告書—』茨木市文化財資料集 第65集
※ いずれも茨木市教育委員会発行
12. 出土土器の年代観・器種分類は、特に断りのない場合は下記の文献に依拠した。なお、弥生時代～古墳時代の移行期にあたる土器編年上の庄内式期は、古墳時代初頭と認識する。
〔弥生土器〕 森田克行 1990『摂津地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社
〔古式土師器〕 西村歩 2008『中河内地域の古式土師器編年と諸問題』『シンポジウム『邪馬台国時代の摂津・河内と大和』資料集』香芝市教育委員会
〔古墳時代須恵器〕 田辺昭三 1983『須恵器大成』角川書店
〔古 代〕 小田裕樹 2016『飛鳥・奈良時代における都城土器編年の現状』『土器編年研究の現在と各時代の特質—須恵器生産の成立から終焉まで—』考古学研究会関西例会 200回記念シンポジウム発表要旨集
〔平安・中世〕 橋本久和 1991『大阪北部の古代後期・中世土器の様相』『高槻市文化財年報 昭和63年・平成元年度』高槻市教育委員会
中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
13. 石器の分類や各種技法等に関する記述に際しては、下記の文献を参照した。
上峯篤史 2012『縄文・弥生時代石器研究の技術論的転回』雄山閣

目 次

巻頭図版
序文／はしがき
例言／凡例

第1章	調査に至る経緯と経過	
第1節	調査に至る経緯と包蔵地範囲の拡大	（坂田）…… 1
第2節	調査の経過	…… 3
第2章	位置と環境	
第1節	地理的・歴史的環境	…… 5
第2節	中条小学校遺跡における既往の調査	…… 14
第3章	調査・整理の方法	…… 20
第4章	発掘調査の概要と層序・地形	
第1節	調査概要	…… 22
第2節	基本層序	…… 22
第3節	旧地形の復元と造成痕跡	…… 29
第5章	遺構・遺物	
第1節	上面の遺構・遺物：中世後半～近世	…… 32
第2節	下面の遺構・遺物（1）：奈良時代～中世前半	…… 42
第3節	下面の遺構・遺物（2）：弥生時代中期～古墳時代〔周溝墓群ほか〕	…… 58
第4節	下層確認の成果：弥生時代前期以前	…… 78
第6章	自然科学分析〔放射性炭素年代測定〕	……（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ）…… 108
第7章	総括	
第1節	調査地と立命館大学大阪いばらきキャンパス内の土地利用の変遷	…… 117
第2節	石器集積遺構（139 土坑）の性格と特質	……（園原／笹栗）…… 123
第3節	古墳時代初頭の周溝墓群の位置づけ	…… 126
第4節	調査成果のまとめ	…… 131

附表 出土遺物一覧（土器・金属器）
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

図 1. 調査地の位置	1	図 44. 古墳 3 平面・断面	71
図 2. 調査区の位置と中条小学校遺跡の拡大範囲	2	図 45. 方形周溝墓 11・円形周溝墓 12 ほか 平面・断面	72
図 3. 確認調査出土遺物	3	図 46. 方形周溝墓 11・円形周溝墓 12 ほか 断面(2)・遺物出土状況・出土遺物	73
図 4. 茨木市域の地質	6	図 47. 方形周溝墓 13 平面・断面・出土遺物	76
図 5. 中条小学校遺跡周辺の地形分類	7	図 48. 31 溝 平面・断面 / 包含層出土遺物	77
図 6. 中条小学校遺跡周辺の空中写真	9	図 49. 最終面下部全体平面図	79
図 7. 遺跡分布図	11	図 50. 石器の分布傾向	81
図 8. 中条小学校遺跡の調査地一覧	15	図 51. 包含層出土石器 点数・重量別 集計データ	83
図 9. 調査区 地区割図	21	図 52. 包含層 / 自然流路 NR01 上面 (調査区 2 ; 2A - 5a 地点) 出土石器	84
図 10. 中条小学校遺跡・松ヶ本南遺跡 2020-1 区 最終遺構面 全体平面図	23	図 53. 自然流路 NR01 上面 (調査区 3 ; 2O - 5j 地点) / 石器集積遺構(139 土坑) 周辺 出土石器	85
図 11. 調査区断面① [南北方向断面① ; 調査区 2・3 西壁]	24	図 54. 石器集積遺構 (139 土坑) 平面・断面 (1)	87
図 12. 調査区断面② [南北方向断面② ; 調査区 1 西壁]	25	図 55. 石器集積遺構 (139 土坑) 平面・断面 (2)	88
図 13. 調査区断面③ [東西方向断面①・② ; 調査区 1 北壁・調査区 3 北壁]	26	図 56. 石器集積遺構 (139 土坑) 平面・断面 (3)	89
図 14. 調査区断面④ [南北方向断面③ ; 調査区 1 東壁]	27	図 57. 石器集積遺構 (139 土坑) 出土石器 点数・重量別 集計データ (全体)	91
図 15. 調査地の旧地形の復元 (遺構検出面 ; 弥生時代頃)	31	図 58. 石器集積遺構 (139 土坑) 出土石器 点数・重量別 集計データ (地点別)	95
図 16. 上面 全体平面図	33	図 59. 石器集積遺構 (139 土坑) 埋土内 出土石器 (1)	98
図 17. 上面 土坑群 (水溜遺構) 平面・断面 (1)	35	図 60. 石器集積遺構 (139 土坑) 埋土内 出土石器 (2)	99
図 18. 上面 土坑群 (水溜遺構) 平面・断面 (2)	36	図 61. 石器集積遺構 (139 土坑) 埋土内出土剥片 形状サンプル (1)	100
図 19. 上面 土坑群 (水溜遺構) 平面・断面 (3)	37	図 62. 石器集積遺構 (139 土坑) 埋土内出土剥片 形状サンプル (2)	101
図 20. 上面 土坑群 (水溜遺構) 平面・断面 (4)	38	図 63. 下層確認トレンチ自然流路 断面① [断面 A・C ; NR01・NR02]	104
図 21. 上面 大型土坑ほか 平面・断面	39	図 64. 下層確認トレンチ自然流路 断面② [断面 B・D ; NR01]	105
図 22. 古池堤防 断面	41	図 65. 測定試料採取地点	109
図 23. 下面 全体平面図 (奈良時代~中世前半)	43	図 66. 測定試料採取地点の模式断面図・柱状図	110
図 24. 下面 北東 遺構群 平面 (掘立柱建物 1・2、柱穴群ほか)	44	図 67. 自然流路 NR01・方形周溝墓 9 の 測定試料の採取位置	111
図 25. 掘立柱建物 1 平面・断面・出土遺物	45	図 68. 暦年較正結果	113
図 26. 掘立柱建物 2 平面・断面・出土遺物	46	図 69. 遺跡周辺の地形分類図	115
図 27. 柱列 1・2・3・4 平面・断面・出土遺物	47	図 70. 調査地と周辺の地形復元	117
図 28. 90 土坑・32 土坑・83 土坑・54 土坑・ 145 土坑 平面・断面・出土遺物	49	図 71. 調査地と周辺の土地利用の変遷 (1)	119
図 29. 141 土坑・137 土坑 平面・断面	50	図 72. 調査地と周辺の土地利用の変遷 (2)	121
図 30. 下面 北西 耕作関連遺構 平面・断面・出土遺物	51	図 73. 集積遺構出土石鏃の平面形同定	123
図 31. 下面 南西 東西・南北耕作溝群 平面・断面・周辺出土遺物	54	図 74. 石器集積遺構 (139 土坑) と その周辺でみられる剥片 3 種	125
図 32. 下面 南西 東西耕作溝群 断面	55	図 75. 周溝墓西群の構造と開析谷・列状土坑群・ 中期後半~後期の古墳群との関係	127
図 33. 下面 轍痕 平面・断面	56	図 76. 周溝墓西群と東側居住域および 列状土坑群の出土土器の比較	128
図 34. 下面 包含層出土遺物 (古墳時代中期~中世)	57	図 77. 方形周溝墓と円形周溝墓の構造のちがひ	129
図 35. 古墳時代初頭~前期の周溝墓群	59	図 78. 弥生時代後期後半~庄内式期の 中条小学校遺跡の構造と周辺環境	129
図 36. 周溝墓の墳丘各部の計測値	60	図 79. 摂津東部の円形周溝墓と集落・前期古墳の分布	130
図 37. 方形周溝墓 9 平面・断面	62		
図 38. 方形周溝墓 9 断面 (2)	63		
図 39. 方形周溝墓 9 出土遺物・ 関連遺構断面・遺物出土地点ほか	65		
図 40. 円形周溝墓 10 平面・断面	66		
図 41. 円形周溝墓 10 断面 (2)	67		
図 42. 円形周溝墓 10 遺物出土状況・ 下層遺構 平面・断面	68		
図 43. 円形周溝墓 10 出土遺物	69		

表 目 次

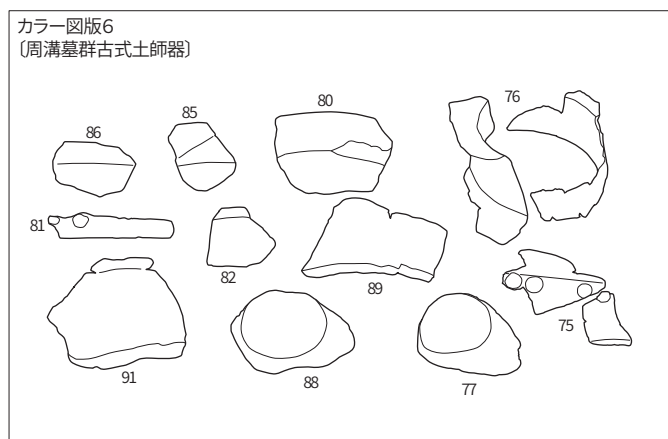
表1. 中条小学校遺跡 主要な調査一覧……………	14	表5. 石器集積遺構 (139土坑) 出土石器 一覧 (図化資料)……………	97
表2. 上面 土坑群 (水溜遺構) 一覧……………	34	表6. 測定試料および処理……………	108
表3. 包含層出土石器・弥生土器 一覧 (図化資料+未図化資料)……………	82	表7. 放射性炭素年代測定および暦年較正結果……………	112
表4. 石器集積遺構 (139土坑) 出土石器・弥生土器 一覧 (全資料分類集計データ)……………	91	表8. 周溝墓一覧 (西群のみ)……………	127
		表9. 摂津東部における円形周溝墓を伴う事例一覧……………	130

本文挿入写真目次

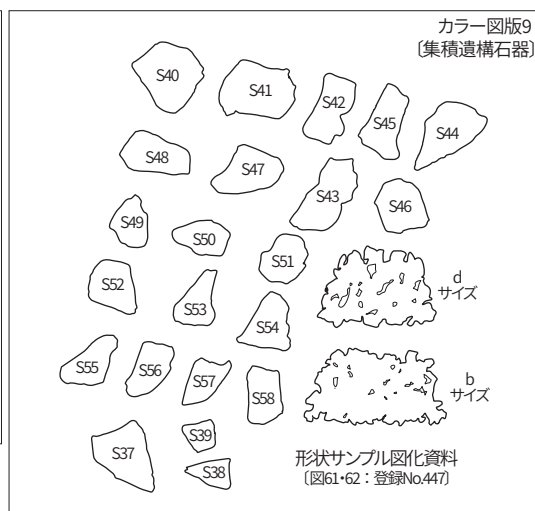
写真1. 現地見学会の状況……………	3	写真3. 測定試料……………	110
写真2. 上面に伴う耕作溝群の確認状況……………	32		

写真図版目次

巻頭図版 中条小学校遺跡 調査地全景	図版5. 古池
図版(扉) 石器集積遺構 (139土坑) 検出作業状況	図版6. 平安時代 掘立柱建物・土坑
	図版7. 奈良・平安時代の耕作関連遺構
カラー図版1. 調査地遠景	図版8. 弥生時代後期～古墳時代初頭 周溝墓群 / 轍痕
カラー図版2. 調査区遠景	
カラー図版3. 調査区遠景・全景	図版9. 方形周溝墓 9
カラー図版4. 弥生時代後期～古墳時代初頭 周溝墓群	図版10. 円形周溝墓 10
カラー図版5. 弥生時代後期～古墳時代初頭 周溝墓群	図版11. 方形周溝墓 11・円形周溝墓 12 ほか
カラー図版6. 弥生時代後期～古墳時代初頭 周溝墓群	図版12. 方形周溝墓 13 / 縄文時代～弥生時代前期 下層自然流路
カラー図版7. 平安時代～近世の遺構	図版13. 縄文時代～弥生時代前期 下層自然流路
カラー図版8. 縄文時代～弥生時代前期 下層 自然流路	図版14. 石器集積遺構 (139土坑)
カラー図版9. 石器集積遺構 (139土坑)	図版15. 石器集積遺構 (139土坑) / 包含層石器出土状況
カラー図版10. 調査地 全景俯瞰	図版16. 出土遺物 1 (古代・中世)
図版1. 基本層序・堆積状況	図版17. 出土遺物 2 (周溝墓群ほか)
図版2. 調査区全景 / 基本層序・堆積状況	図版18. 出土遺物 3 (包含層出土石器)
図版3. 調査区全景 / 基本層序・堆積状況	図版19. 出土遺物 4 (包含層出土石器)
図版4. 中世後半～近世の土地利用	図版20. 出土遺物 5 (石器集積遺構出土石器)



カラー図版 遺物番号一覧



第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と包蔵地範囲の拡大

大阪府茨木市岩倉町1番1他において、令和2年10月に埋蔵文化財発掘調査の届出が事業主である学校法人立命館より提出された（茨教歴第1790号、令和3年1月12日付け）。本市教育委員会は受理した届出を基に計画建物の範囲を対象に、令和3年2月15日～2月22日の期間で確認調査を実施した。その結果、本書で報告した範囲に埋蔵文化財が認められたため、本発掘調査の計画及び工程表の作成に着手した。

事前協議及び調整会議を重ねる中、本件の調査規模はもとより本市における当時の調査体制では発掘調査の実施が困難と判断し、大阪府教育委員会教育長に調査の協力を依頼した（茨教歴第1790-2号、令和3年3月8日付け）。結果、公益財団法人大阪府文化財センターが協力する旨、回答を得た（教文第3375号、令和3年3月15日付け）。そこで、当該調査の実施に関して、必要な事項を定め、適正かつ円滑な発掘調査を図ることを目的とした協定書の作成に着手した。協定書は、茨木市教委（以下、茨木市教委と略す）、学校法人立命館、株式会社島田組、公益財団法人大阪府文化財センター（以下、センターと略す）、株式会社竹中工務店の五者で締結した（令和3年7月21日付け）。以上の経緯を経て、令和3年8月から本発掘調査を開始した。また、今回の調査成果を受け、現地調査の終了後に周知の埋蔵文化財包蔵地「中条小学校遺跡」の範囲拡大の届出を進達し（茨教歴第582号、令和4年6月10日付け）、大阪府文化財情報管理システムに登録された（教文第11-1号、令和4年6月21日付け）。

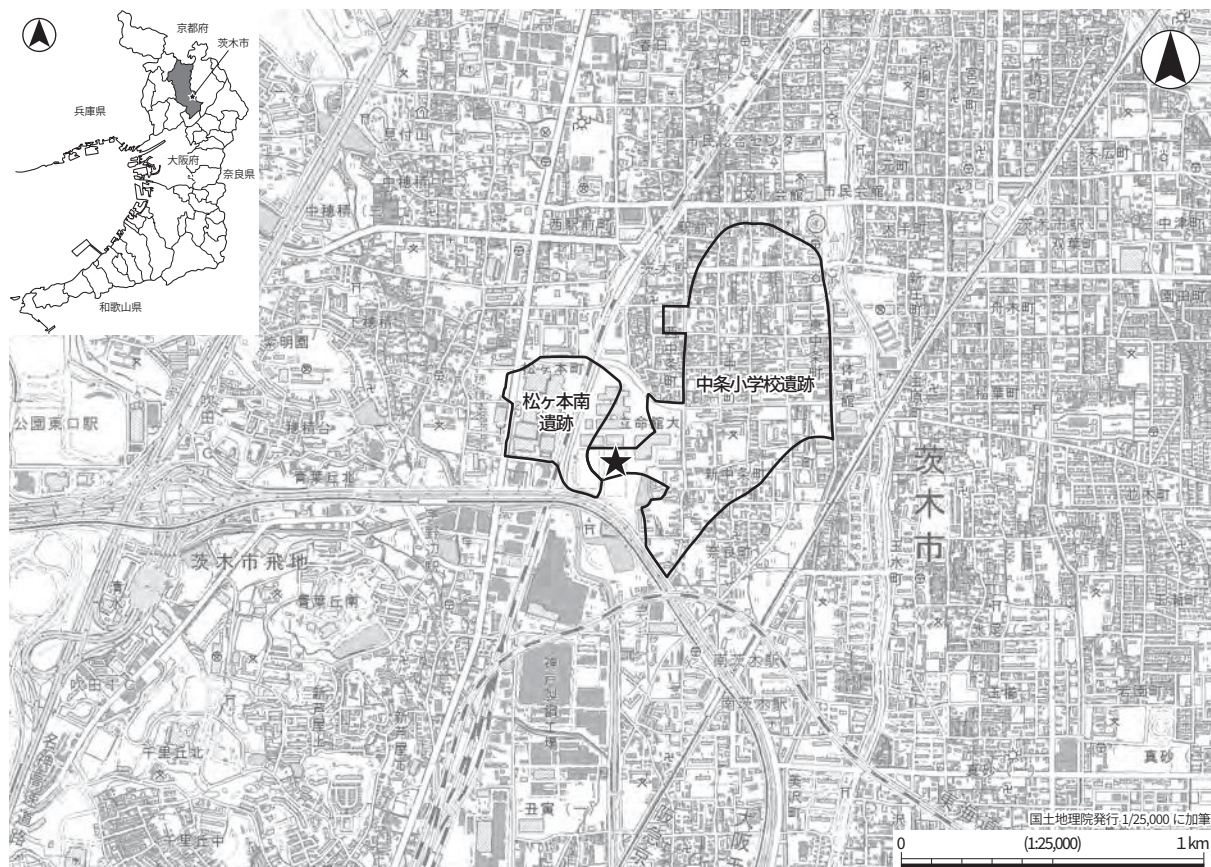


図1. 調査地の位置

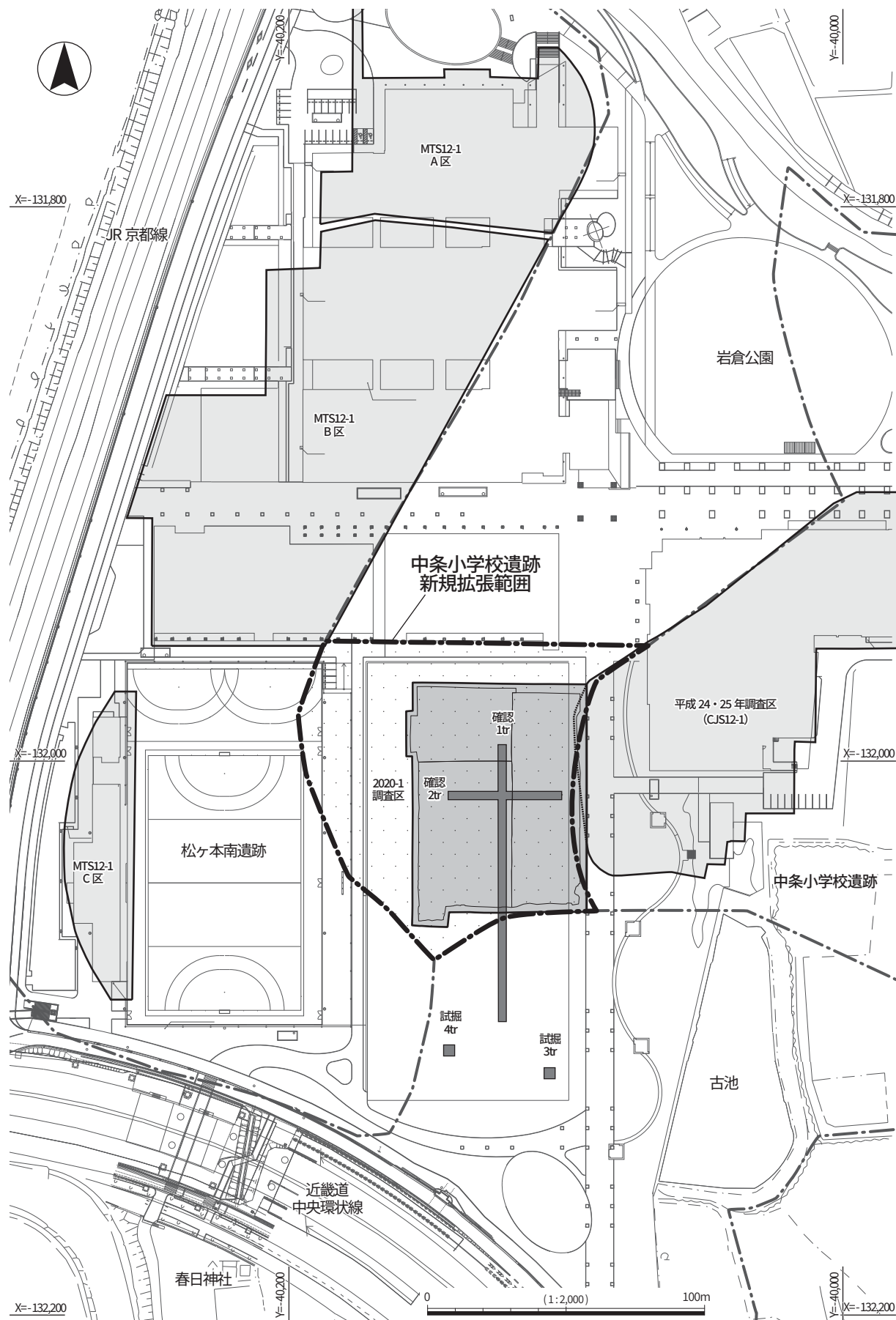


図2. 調査区の位置と中条小学校遺跡の拡大範囲

第2節 調査の経過

今回の調査地は、立命館大学大阪いばらきキャンパス内に位置する（図1）。平成24～25年度には、キャンパス開設に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期～古墳時代初頭の列状土坑群や集落跡、古墳時代中期～後期の古墳群、奈良～平安時代の灌漑水路などが確認された。今回は、キャンパス南端のリザーブスペースに新たに設置する「OIC新展開施設（仮称）」建築工事に伴うもので、前回の平成24年度調査区（CJ12-1）の南西隣接地に相当する（図2）。

現地での発掘調査は、令和3年2月の確認調査の結果を受けて（図3）、令和3年8月～令和4年6月の期間で実施した。令和3年8月23日に調査に着手し、8月中は茨木市教委が現地にて機械掘削の状況を確認しながら調査が進められた。9月以降は、センターが調査を引き継ぎ、令和4年6月30日まで調査を担当した。各調査区の調査終盤には、茨木市教委による現地立会を受け、調査完了後にはすみやかに本体工事施工業者に引き渡しをおこなった。この間、調査区2南西部の部分的な拡張や（当初目的とした古池肩部が検出できなかったため）、調査区3の調査範囲の見直し（防火水槽設置に伴う拡張と北端の既存埋設物に伴う減面）等をおこなったが、月1回の関係機関五者による調査と事業進捗に関する協議（定例会）をおこない、円滑に埋蔵文化財調査を実施することができた。また、現地調査が終了した令和4年6月7日には、五者による調査完了の現地立会をおこない、事業者・施工業者に調査区を引渡した。

なお、茨木市域では、広域的な面積の発掘調査がおこなわれる機会は限られることから、現地説明会等の実施についても協議を重ねてきた。しかし、コロナ禍におけるリスクマネジメントの必要性から、一般向けの現地公開はやむを得ず断念した。その代案として、要望のあがった文学部考古学・文化遺産専攻の教員・学生を中心とした立命館大学関係者向けの現地見学会を、施工業者の全面的な協力のもと令和3年3月10日に実施した。当日は、矢野健一教授、木立雅朗教授、長友朋子教授を中心に、調査成果や遺構・遺物の性格・年代等に関して、有益なご教示を多く頂戴することができた（写真1）。

発掘調査に関わる経過（日誌抄）については、以下の通りである。

【令和3年（2021年）】

- 8/23 調査区1 機械掘削開始、北側から着手
- 9/6 北半約1/4機械掘削完了、耕作溝群・柱穴等確認
- 9/13 北半遺構面精査、方形周溝墓の確認
- 9/21 北半上面耕作溝群検出状況写真
- 9/25 南半遺構面精査、円形周溝墓の確認
- 10/1 古池肩部確認・検出
- 10/5 機械掘削完了
- 10/6 古池肩部全景写真撮影、第1回定例会
- 10/14 北半上面耕作溝群・土坑等掘削完了
- 10/29 円形周溝墓10掘削開始
- 11/8 方形周溝墓9掘削開始

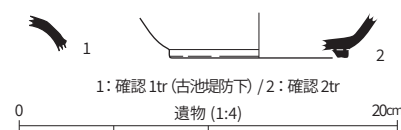


図3. 確認調査出土遺物



写真1. 現地見学会の状況

第1章 調査に至る経緯と経過

11/10 北半掘立柱建物1・2ほか掘削開始
11/16 第2回定例会
11/18 調査区1 全景写真撮影・ラジコンヘリによる空撮作業、菱田哲郎氏（京都府立大学文学部・茨木市文化財保護審議員）・サウセド・セガミ氏（立命館大学政策学部）現地見学
11/21 調査区1 市教委立会（第1回）、南半のみ事業者引渡し
1/24 調査区1 北半下層確認調査開始（機械掘削）、南半埋戻し作業開始
11/26 下層流路（自然流路1・2）検出完了、全景写真撮影
11/29 自然流路1・2下層確認トレンチ掘削
11/30 自然流路1・2断面写真撮影、調査区1調査完了、市教委完了確認、事業者引渡し
12/3 調査区1 埋戻し完了
12/6 調査区2 機械掘削開始
12/20 側溝掘削開始、長友朋子氏（立命館大学文学部）現地見学
12/21 第3回定例会
令和3年12/25～令和4年1/4 年未年始休業

【令和4年（2022年）】

1/5 北半上面検出作業
1/12 南半上面検出作業、攪乱多数確認（前身のサッポロビール工場に伴う基礎）
1/17 機械掘削完了、古池肩部が調査区外南西にのびることを確認
1/25 第4回定例会、南西部拡張に関する協議
1/27 調査区北西でサヌカイト・結晶片岩の出土を確認
2/1～2/9 立命館大学入学試験に伴い現地作業休止
2/14 掘削再開、南西拡張部機械掘削
2/17 南西拡張部古池肩部検出・写真撮影、北半方形周溝墓11検出
2/21 南西古代東西方向耕作溝群検出
2/22 南半方形周溝墓13検出、第5回定例会
2/24 調査区3 既存建物の解体作業開始

3/10 調査区2 全景写真撮影・ドローンによる空撮作業・動画撮影、市教委立会（第2回）、立命館大学関係者現地見学会（矢野健一氏・木立雅朗氏・長友朋子氏ほか、計20名）
3/11 下層確認トレンチ掘削、自然流路1の続きを確認、最上層から土器出土（時期不明）、調査区2調査完了、事業者引渡し
3/14 調査区3 既存建物解体作業完了
3/18 第6回定例会、調査区3の調査範囲に関する協議
3/22 調査区3 機械掘削開始
3/30 機械掘削完了
4/5 上面耕作溝群検出状況写真撮影、耕作溝・土坑等上面遺構掘削
4/10 上面耕作溝・土坑掘削完了、包含層人力掘削
4/19 第7回定例会議
4/20 調査区南西で炭化材・サヌカイト剥片の集中分布（139土坑周辺）を確認
4/29～5/8 大型連休に伴い現地作業休止
5/10 調査区3 遺構掘削完了
5/18 調査区3 全景写真撮影・ドローンによる空撮作業・動画撮影、市教委立会（第3回）
5/19 下層第4層人力掘削（調査区南西）、石器集積遺構（139土坑）検出、微細剥片多数出土
5/20 下層第4層機械掘削開始、石器集積遺構（139土坑）掘削開始
5/24 下層自然流路1全面検出、第8回定例会議（最終）
5/25 下層自然流路1全景写真撮影
5/25 自然流路1下層確認トレンチ掘削
6/1 石器集積遺構（139土坑）調査完了、本体工事着工
6/2 下層確認調査完了、トレンチ埋戻し
6/7 市教委・事業者（立命館）ほか埋蔵文化財調査地引渡し立会、現地調査完了
6/6～6/27 現地詰所にて土壌洗浄による石器の抽出作業・基礎整理
6/28 現地撤収作業

第2章 位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境

1. 遺跡の位置

中条小学校遺跡・松ヶ本南遺跡は、いずれも茨木市南西部に位置する弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・中世の集落跡である。中条小学校遺跡の現住所は、駅前・東中条町・下中条町・西中条町・小川町・新中条町・岩倉町・奈良町にまたがり、南北1 km、東西700 mの範囲におよぶ。松ヶ本南遺跡は、岩倉町・松ヶ本町・下穂積にまたがり、南北400 m、東西300 mの範囲におよぶ。今回の調査地は、両遺跡に挟まれた岩倉町地内の立命館大学大阪いばらきキャンパス内で、第1章第1節で記したように、本調査の結果をもって中条小学校遺跡の範囲が拡大する運びとなった(図1・2¹⁾)。

中条小学校遺跡の周囲には、南側に弥生時代の拠点集落として全国的にも著名な東奈良遺跡が接し、北側～東側には僅かな空白地を挟んで駅前遺跡・深見遺跡・茨木遺跡・新庄遺跡が近在する。これらの遺跡では、弥生時代～中世を中心に各時代の遺構・遺物が確認されており、本遺跡とも密接に関わるとみられる。一方、松ヶ本南遺跡の北側には、松ヶ本北遺跡が近接し、西側には南北に三島街道がはしる。

古代の行政区画では、摂津国島下郡に相当する。『続日本紀』和銅4年(711)正月二日条の「嶋下郡殖村駅」が史料上の初見であるが、『日本書紀』雄略九年三月条や欽明天皇23年11月条に「三島」の名称がみえ、古くから三島の名が地域名称として認識されていたことがわかる。ほか、古い時期の史料では、和銅2・3年(709・710)頃の平城宮跡内裏西南隅外郭の整地土層出土の荷札木簡に記載された「三島上郡白髪部里」や、霊亀3年(717)以前に成立した『播磨国風土記』揖保郡大田里条の「三島賀美郡」などがみられる。直接的な史料がないため、分郡の時期は明確ではないが、他の分郡の事例などから、大宝律令施行時または先行する時期に「三島郡(または評)」から「三島上郡」と「三島下郡」に分郡され、その後、「島上郡」・「島下郡」の表記が定着したと考えられる。島下郡は、10世紀前半成立の『倭名類聚抄』によれば、新野・宿久・安威・穂積の四郷で構成される。郷の地名の分布からみて、調査地は近隣に地名がみえる穂積郷の範囲にあたりとみてよい。

調査地は、近世の奈良村の範囲におさまり、12世紀前半の『後拾遺往生伝』に「嶋上郡奈良郷」の記載がみえる。文禄3年(1594)の検地帳によれば、山間部地域よりも米の生産量が低い水利条件の悪い土地であったことから溜池開発に力を入れ、今回部分的に調査をおこなった「古池」が造成された。その南側に位置する「新池」の造成年代は不明であるが、文政11年(1828)に奈良村と上穂積・中穂積・下穂積・倍賀の4か村との間に松沢池の造成をめぐる水論があり、その結果、上記4か村の一部負担によって「新池」が改修・拡大されたという記録があるため、19世紀前半以前に「新池」が造成されたことがわかる。

明治以降の変遷は、明治22年(1889)の町村制により島下郡春日村に編入し、昭和23年(1948)には茨木町・三島村・玉櫛村と合併して茨木市が発足した。調査地の明治期の地名は、大字奈良小字「惣行」に相当し、昭和41年(1966)に岩倉町となって現在に至る。

2. 地理的環境

大阪平野の北縁にあたる淀川北岸地域は、大まかには有馬一高槻構造線を境に北側の北摂山系と南側の平野部に二分される(図4)。北摂山系は、古生代～中生代の超丹波帯および丹波帯を中心とした地質で、標高500m前後の低山地からなる。山地の南端には、標高200～100mの大阪層群からなる低丘陵が取り付き、断層帯より南側の平野部は、丘陵に取り付くようにしてのびる低位段丘帯と沖積低地からなる。沖積低地は、北東から南西方向に流れる淀川と、北摂山地から南流する安威川・芥川・檜尾川などの中小河川によって形成されている。茨木市中心部の西側には、大阪層群からなる最高点130mの千里丘陵があり、その東側斜面地に現在の茨木市中心部と中条小学校・松ヶ本南遺跡が位置する。淀川北岸地域では、縄文時代後期以降に遺跡が増加する傾向にあるが、丘陵南端～沖積低地と本遺跡の位置する千里丘陵東縁を中心に遺跡が分布しており、主要な人間活動の範囲となっていたことがわかる。

中条小学校周辺の地形環境をより詳細にみれば、千里丘陵東縁は表層に薄い沖積層がのる埋没低位段丘面に相当し、調査地の西側・JR東海道本線付近に段丘崖が埋没することが指摘されている(図5・6²⁾)。ただし、現況は、やや急勾配の連続する斜面地であることから、扇状地性の強い地形的特色を備える。こうした表層地形の形成過程を考える上で鍵を握るのが、丘陵側から流下する開析谷とそれに連なる流路で、丘陵部から排出される土砂によって本遺跡周辺の表層地形が形成されたとみられる。ただし、西側丘陵部ではV字状に深い浸食谷が明瞭にみられるのに対し、丘陵東縁の斜面地では一部を除いて流路の痕跡が明確でない。特に調査地の北側では、表層地形からその存在を確認することが困難で、その要因としては、灌漑水路の整備をはじめとする古代以降の開発との関連が推定できる。旧地形や流

路を復元し、人間活動との関係を追及するためには、発掘調査データの丹念な整理が必要となろう。

このように、開析谷とそれに連なる流路や微地形に関する情報がやや不足しているが、立命館大学大阪いばらきキャンパス内では広域的な面積の発掘調査が実施されたことにより、周辺一帯の微地形の形成過程を考えるための良好なフィールドとなっている。特に2012年度の調査では、下層確認調査によって埋没流路の存在が確認され、年代測定によって縄文時代晩期、約2,900年前以前にさかのぼることが判明したことは重要である。さらに周辺では、南接する東奈良遺跡において弥生時代中期に埋没する開析谷が複数確認されており、現在みられる表層地形は弥生時代までにはほぼ形成されたと考えられる。こうした自然流路と人間活動との関係については、現在までに本遺跡周辺では有用な調査データが得られていない。ただし、南西約4kmに位置する千里丘陵南縁の明和池遺跡では、丘陵から流下する開析谷に接するように弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴建物が多数検出されている。千里丘陵縁辺という連

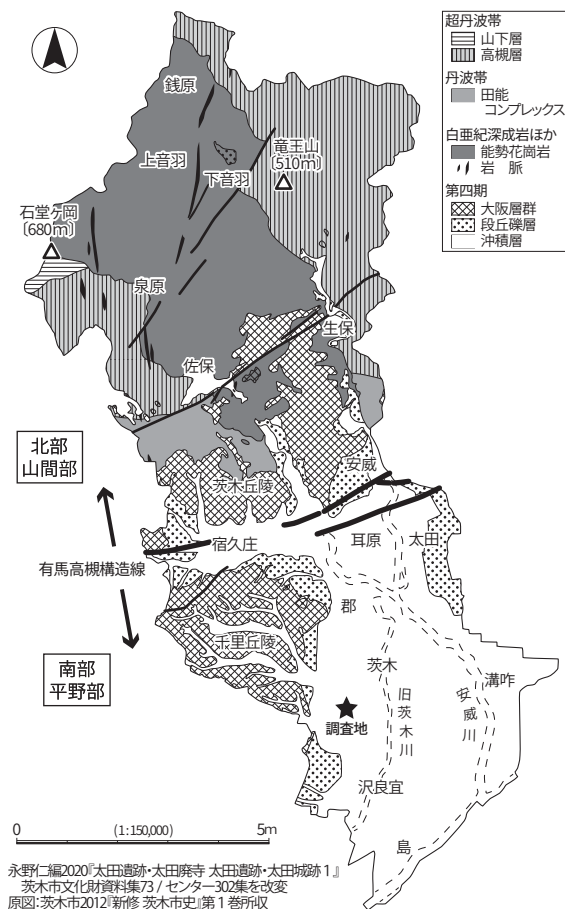
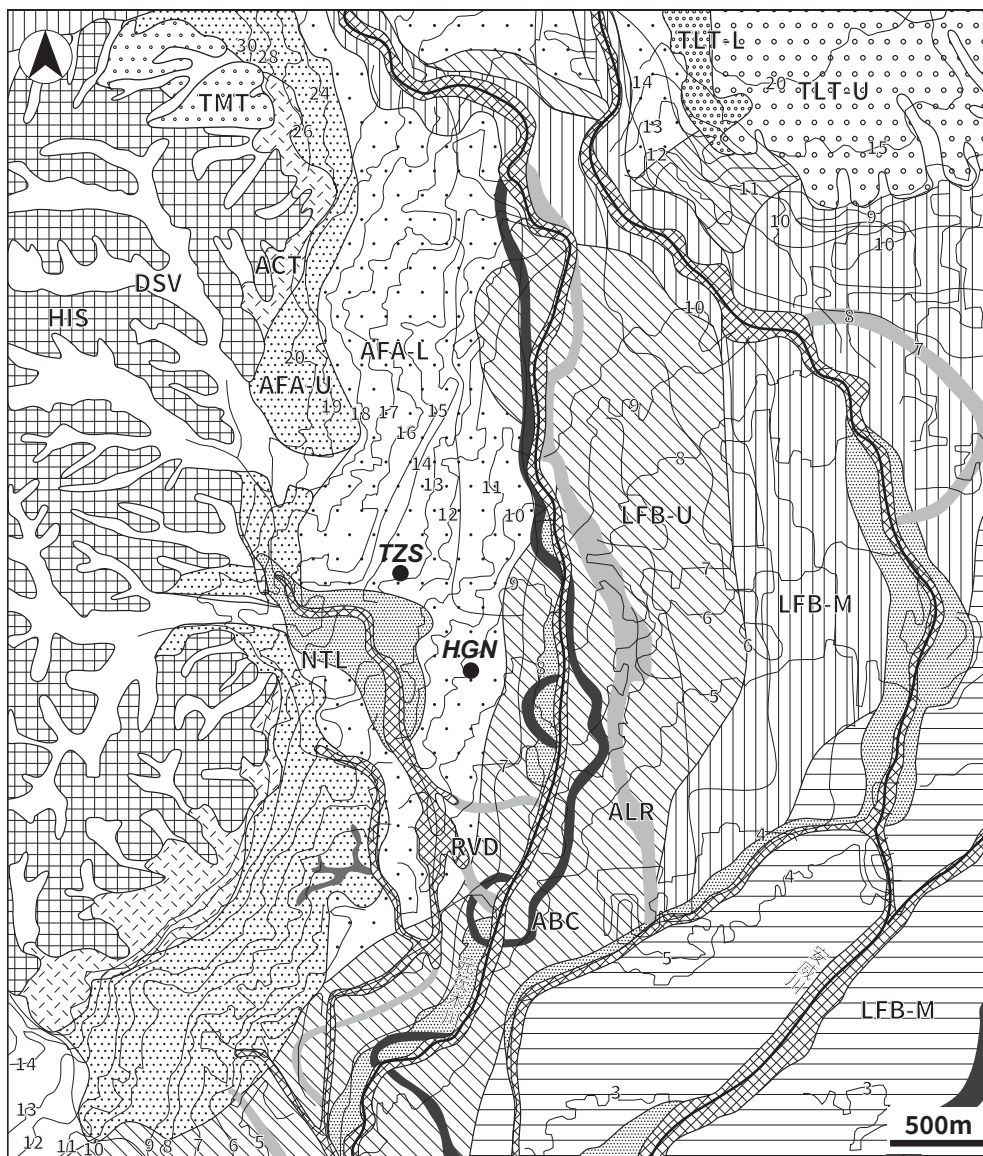


図4. 茨木地域の地質

永野仁編2020『太田遺跡・太田廃寺・太田遺跡・太田城跡1』
 茨木市文化財資料集73 / センター302集を改変
 原図:茨木市2012『新修 茨木市史』第1巻所収



地形分類凡例

等高線は、国土地理院（1977）の治水地形分類図から作成

HIS: 丘陵（大阪層群） DSV: 開析谷 BUV: 埋没谷（弥生～古墳には既に埋没） TMT: 中位段丘面 TLT-L: 低位段丘上位面 TLT-U: 低位段丘下位面
 AFA-U: 沖積扇状地上位面（低位段丘相当層） AFA-L: 沖積扇状地下位面（晩水期～完新世初頭頃） ACT: 沖積錐もしくは崩積性斜面
 LFB-U: 沖積低地上位面 LFB-M: 沖積低地中位面（現氾濫低地） ABC: 放棄流路、旧流路 ALR: 沖積リッジ
 LFB-L: 沖積低地下位面（淀川の影響を強く受ける現氾濫低地） RVD: 人工堤防 NTL: 自然堤防および人工堤防沿いの微高地（主に中世以降に発達）

遺跡略号

TZS: 中条小学校遺跡（調査地点） HGN: 東奈良遺跡

※ 文献注3、辻・矢作 2015 を一部改変

図5. 中条小学校遺跡周辺の地形分類

続する地形面上に立地することをふまえば、開析谷の周囲に古墳時代以前の居住域が展開する可能性も推測できるため、開析谷内外の遺構・遺物の存在について注意を払う必要がある。

主要河川との関係については、今回の調査地点の東 900 m に昭和 24 年（1949）に廃川した元茨木川が存在する。現在は、緑地帯として往時の面影を残すが、北側の田中付近から南の沢良宣付近まで南北にほぼ直線的にのびるため人工水路と推定されており、元茨木川の東側の新庄遺跡や玉櫛遺跡の調査成果から流路の固定化の時期は 11・12 世紀代と推定されている⁵⁾。なお、今回の調査地点より北側では、元茨木川の東西で約 2 m 地形が下がる。このため、地形の変換地点付近に人工水路が取り付けられたことが併せて推測できよう。

以上から、今回の調査地の位置する千里丘陵東縁部は、千里丘陵から南東方向に流下する開析谷と、

北摂山地に端を発し、丘陵の東縁部を南にむかって流下する茨木川を改変した人工水路が、遺跡周辺の地形環境と居住や開発といった人間活動との関係を考える上で重要な鍵を握るだろう。

3. 歴史的環境

続いて、発掘調査成果と文献史学の知見から歴史的な展開を概観する。淀川北岸地域全体の状況をふまえて、千里丘陵東縁と茨木川流域を中心に様相を整理するが、今回の調査成果との関わりが深い弥生時代～古代の動向については、やや詳しくまとめておきたい(図7)。

縄文時代以前 旧石器時代の遺跡については、主に北摂山地からのびる丘陵上や段丘上で確認されており、高槻市郡家今城遺跡や津江南遺跡などでは発掘調査によってキャンプサイトの実態が明らかとなっている⁶⁾。茨木市域では、調査や表採によって数点ずつの出土事例に限られるが、千里丘陵東縁では、中条小学校遺跡のほか、郡遺跡・見付山東遺跡・新庄遺跡でナイフ形石器が1～3点ずつ出土している。

縄文時代は、旧石器時代と同様に丘陵上や段丘上に分布する遺跡が多い。ただし、茨木川上流の山間部に位置する佐保・泉原地区や隣接する千提寺地区、淀川河川敷内の高槻市鶴殿・大塚・柱本、安威川下流部の目垣などが出現し、分布域が拡大する。時期については、中期以前は少なく、後期以降徐々に遺跡数が増加する傾向にある。千里丘陵東縁では、縄文時代の遺物はやや少なく、郡遺跡で草創期の尖頭器や晩期頃の石刀が、新庄遺跡で晩期長原式の土器や石器が出土している。東奈良遺跡では、縄文時代の遺物はごく僅かであるが、晩期～弥生時代前期の突帯文土器や石棒の出土がみられる。

弥生時代 淀川北岸地域では、弥生時代以降、遺跡数が一気に増加する。丘陵上や段丘上に分布する遺跡が多いが、平野部にも分布域が拡大しており、目垣遺跡など安威川の下流域にも集落が展開するようになる。北岸地域全体で見れば、高槻市安満遺跡、茨木市郡遺跡・倍賀遺跡と東奈良遺跡が拠点的とされる大規模な集落で、前期後葉以降拡大し、断絶期をはさみつつ後期まで長期間継続する。特に安満遺跡周辺では、中期～後期にかけて周囲に中小規模の集落遺跡が衛星的に分布することが古くから指摘されており⁷⁾、中心的な集落と周辺の集落の相互関係を探ることが課題となっている。

千里丘陵東縁から茨木川流域一帯では、上述したように、調査地南東の東奈良遺跡と北側の郡遺跡・倍賀遺跡が中核的な集落遺跡である。東奈良遺跡では、前期～後期にかけて繰り返し環濠が掘削され、銅鐸をはじめとする青銅器生産が継続する点が特筆される⁸⁾。また、これまでに110基の方形周溝墓がみつまっているが、郡遺跡・倍賀遺跡においても中期～後期の方形周溝墓が200基以上確認されており、居住域に隣接する大規模な墓域の良好な調査事例となっている⁹⁾。さらに中条小学校遺跡の北東に位置する新庄遺跡においても、弥生時代前期前半にさかのぼる竪穴建物がまとまって検出されており、中期後葉にかけて断続的に集落が続く¹⁰⁾。このほか、千里丘陵東縁～縁辺では、中条小学校遺跡と松ヶ本南遺跡に加え、深見・駅前・上中条・春日・見付山・玉櫛などの各遺跡で、弥生時代の土器・石器の出土が確認されている。ごく一部を除けば、後期に下るものがほとんどで、松沢池や茨木カントリー倶楽部周辺の丘陵部においても土器等の散布がみられる。ただし、いずれも現状では小規模な集落と考えられることから、東奈良遺跡や郡・倍賀遺跡の動態と併せて出現・廃絶の要因を考えていく必要がある。

低地部については、現状では考古学的な調査データが十分に整理されていないため、茨木川の主流路の位置など、地形環境は明確ではない。ただし、牟礼遺跡では、自然流路に設置された井堰と用水路が検出され、周辺から縄文時代晩期の突帯文土器と弥生時代前期の土器がセットで出土している¹¹⁾。その東に位置する溝咋遺跡においても、地表面下3.5mで弥生時代前期前半にさかのぼる土坑が検出されている¹²⁾。また、安威川下流域の目垣遺跡では、中期前葉～後葉(Ⅱ～Ⅳ様式)にかけて断続的に集落が営ま

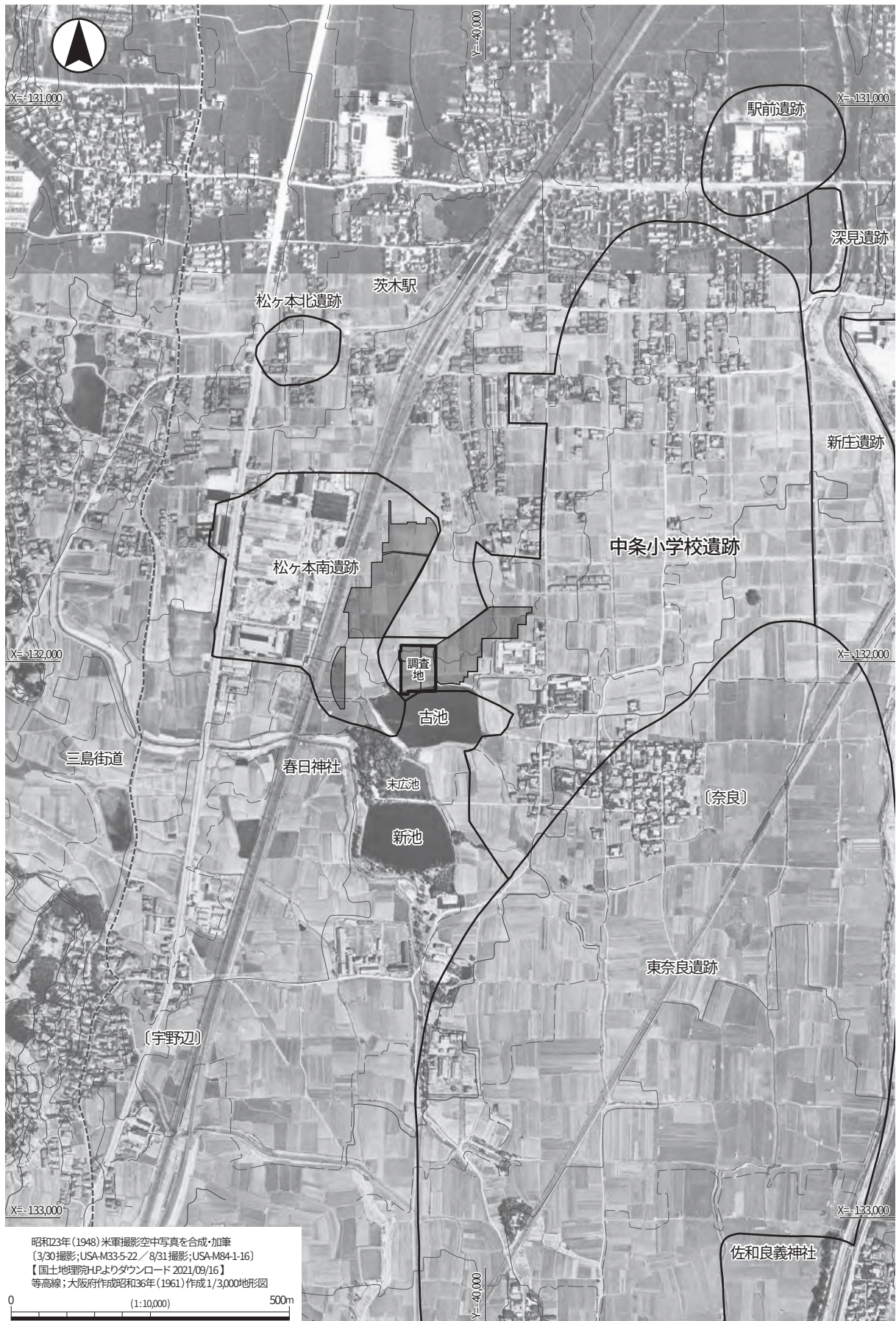


図6. 中条小学校遺跡周辺の空中写真

れ、粘板岩原石の埋納遺構や人面付土器・土製勾玉などが確認されている¹³⁾。低地部にもはやくから居住域や生産域が進出していたことが確実視できるため、地形環境と土地利用の復元が課題といえる。

古墳時代 弥生時代の拠点的な集落である郡遺跡・倍賀遺跡は、弥生時代後期以降、徐々に衰退する。一方、東奈良遺跡では、環濠が埋没するものの、後期後葉～古墳時代初頭にかけて新たに大溝が複数掘削される。大溝からは、外来系土器を含む多数の遺物が出土しており、居住域の構造が変化しながら拠点的な性格を保っていたことがうかがえる。一方、東部の嶋上郡域では、弥生後期後半以降、安満遺跡の衰退と入れ替わるようにして郡家川西遺跡が拡大するなど、地域構造に変化が生じる¹⁴⁾。特に古墳時代初頭は、列島各地で土器の広域的な移動現象が生じる時期でもあり、最近では淀川近傍で外来系土器が多数出土する上牧遺跡の存在も明らかとなった¹⁵⁾。河川を介した交通網・流通網の整備がうかがえるが、淀川北岸地域では高槻市郡家川西遺跡や芥川遺跡、茨木市溝昨遺跡や総持寺遺跡、東奈良遺跡など、淀川の支流域においても外来系土器がまとまって出土する遺跡が多数みられる¹⁶⁾。特に安威川に近接する溝昨遺跡では、外来系土器約100点の出土のほか、阿波産の結晶片岩などの搬入も確認されており、安威川流域一帯の交易の窓口を担った集落と推定されている¹⁷⁾。

他方、淀川北岸地域の全体を見渡すと、弥生後期後半頃に出現し、古墳時代初頭～前期にかけて継続する遺跡が多いことがわかる。千里丘陵東縁では、中条小学校遺跡や深見遺跡、新庄遺跡などがこの時期に小規模な居住域が形成され、ほかでは千里丘陵南縁の摂津市明和池遺跡や安威川上流～中流域の総持寺遺跡・太田遺跡などもこの時期頃から活発化する。さらにこれらの集落の近傍では、方形周溝墓とともに円形周溝墓が築造されることも大きな特徴となっている。これまでに、東奈良遺跡、深見遺跡、郡遺跡、総持寺遺跡、郡家川西遺跡で円形周溝墓が検出されているが、分布は茨木市域に偏るのが特徴で前期前葉頃まで築造が継続するようである。大型前方後円墳については、茨木市域では紫金山古墳と将軍山古墳が存在する。いずれも80～100m級の前方後円墳で、前期中葉の近い時期に築造されているが、埴輪の特徴などが異なっており、両古墳の関係が注目されている¹⁸⁾。また、中規模の安威古墳群を含め、前期中葉以降の有力な古墳は、いずれも平野部を望む北側の丘陵上に築造されているのが特徴で、前期前葉以前の集落近傍の低地の周溝墓群とは立地が大きく異なる。なお、高槻市域では、弁天山古墳群において前期前葉頃から継続的に大型古墳が築造されており、茨木市域とは対照的なあり方を示す。

茨木市域では、溝昨遺跡以外の集落は、前期のうちに縮小・廃絶する傾向にあるが、それと入れ替わるようにして中期には安威川扇頂部に安威遺跡が出現する。カマドを伴う竪穴建物や初期須恵器の出土から、摂津でいち早く渡来系集団が集住した集落として注目されており、やや下流の総持寺遺跡も含め、流域一帯では渡来系集団の活動が顕著にみられる¹⁹⁾。そして近傍の富田台地上には、全長226mの太田茶白山古墳が築造されるが、盾形周溝を伴い陪冢を配置するなど大王墓に準ずる規模・規格を備えており、その被葬者が議論的になっている²¹⁾。さらに周辺では、最新のBb種ヨコハケを施す円筒埴輪や初期須恵器を伴う総持寺古墳群をはじめとし、太田・ツゲノ・富田・西福井など周辺一帯で中小古墳群が太田茶白山古墳の築造前後に展開しており、埴輪の供給関係などからも関連が注目される²³⁾。

他方、千里丘陵東縁部では、東奈良遺跡で石釧や初期須恵器の出土がみられるものの、前期後葉～中期の動向は明確ではない。ただし、中期中葉以降、北側の郡遺跡を中心に周辺の倍賀遺跡や春日遺跡、中条小学校遺跡、玉櫛遺跡などで居住関連遺構や埴輪・須恵器を伴う小規模群集墳が出現するほか、後期以降は須恵器・馬匹・鍛冶など手工業生産に関連する遺構・遺物がまとまって出土しており特筆され



【茨木市域】

4. 大文字寺古墳群 5. 桑原古墳群 6. 初田2号墳 7. 初田1号墳 8. 安威古墳群 10. 安威寺跡 11. 熊ヶ谷古墳 12. 將軍山第2地点遺跡 13. 將軍山第1地点遺跡 16. 將軍山古墳群 17. 真龍寺古墳群 18. 大日寺跡 19. 安威西垣内遺跡 20. 新屋古墳群 21. 紫金山古墳 22. 南塚古墳 23. 海北塚北方遺跡 24. 海北塚古墳 25. 石山古墳 26. 太田茶臼山古墳 27. 太田麻寺跡 28. 太田遺跡 29. 耳原古墳 30. 農塔古墳 31. 耳原遺跡 32. 総持寺遺跡 33. 郡山宿本陣 34. 茶臼塚 35. 郡遺跡 36. 郡神社古墳 37. 郡兒童公園遺跡 38. 郡山古墳群 39. 地蔵池南遺跡 40. 上穂積山古墳 41. 茨木コルプ場内竈跡 42. 上穂積神社古墳 43. 稲穂森寺跡 44. 見付山古墳 45. 弁天山遺跡 46. 見付山遺跡 47. 倍賀遺跡 48. 松沢池北遺跡 49. 松沢池池底遺跡 50. 上寺山古墳 51. 溝作遺跡 52. 中条小学校遺跡 53. 西方浄土寺跡 54. 常楽寺跡 55. 東奈良遺跡 56. 上中条遺跡 57. 太田茶臼山古墳陪塚群 58. 目垣遺跡 59. 宿久庄遺跡 60. 春日遺跡 61. 青松塚古墳 63. 郡山古墳 65. 安威城跡 66. 茨木城跡 67. 太田城跡 68. 佐保城跡 69. 福井城跡 70. 三宅城跡 71. 西福井遺跡 74. 安威遺跡 75. 中河原遺跡 76. 駅前遺跡 77. 上穂積山遺跡 79. 五日市遺跡 80. 郡山遺跡 81. 宿久庄西遺跡 82. 牟礼遺跡 87. クルス山中世墳墓 88. 初田古墳石室(修築) 89. ぼろ塚 90. 馬塚 91. 塚原古墳群 93. 長ヶ瀬古墳群 95. 鮎川遺跡 99. 安威岩跡 100. 佐保栗栖山岩跡 101. 郡山城跡 102. 沢良宜城跡 103. 玉輪遺跡 104. 茨木遺跡 105. 阿武山古墳 106. 太田北遺跡 107. 新庄遺跡 108. 総持寺北遺跡 109. 永代遺跡 110. 南瀬戸遺跡 111. 若園遺跡 112. 真砂遺跡 113. 誓分神社東方遺跡 114. 徳園城跡 115. 松ヶ本北遺跡 116. 舟木遺跡 117. 松ヶ本南遺跡 118. 平田遺跡 122. 五日市東遺跡 123. 見付山東遺跡 124. 中河原北遺跡 125. 中穂積遺跡 127. 福井遺跡 135. 桑原遺跡 145. 丑寅遺跡 1010. 見付山南遺跡 1011. 玉島遺跡 9594. 下穂積遺跡 9597. 海田遺跡 9604. 東福井遺跡 9613. 南安威遺跡 9609. 東瀬戸遺跡 9715. 福井城跡B地点 9804. 佐保遺跡 9805. 福井北古墳群 a. 佐保栗栖山南墳群 b. 宿久庄北遺跡 c. 地福寺遺跡 d. 桑原西古墳群 e. 豊川遺跡 f. 深見遺跡 g. 牟礼東遺跡 h. 水尾遺跡 i. 島遺跡

【高機市域】

4. 片ヶ谷古墳群 11. 船塚古墳群 12. 塚古墳群 18. 安岡寺 19. 神服神社 38. 阿武山古墳 39. 塚原古墳群 40. 二子山古墳 41. 土保山古墳 42. 石塚古墳 43. 番山古墳 44. 新池遺跡 46. 關嶺山古墳 47. 皇子塚遺跡 48. 關崎神社古墳 63. 御助山古墳 64. 大蔵古墳群 65. 阿本山古墳群 66. 観音寺 67. 郡家車塚古墳 68. 前塚古墳 69. 狐塚古墳群 70. 今城家古墳 72. 水室塚古墳 73. 宮田遺跡 74. 郡家今城遺跡 75. 嶋上郡衙跡 76. 阿久刀神社 77. 真上遺跡 80. 真上安祥寺古墳 83. 慈願寺山1号墳 85. 石川岸足墓 86. 慈願寺山古墳群 88. 慈願寺山遺跡 92. 芥川遺跡 111. 輪神社跡 112. 中城遺跡 慶福寺 113. 首門寺 117. 玉川の里 118. 柱本遺跡 119. 大蔵町遺跡 120. 津之江南遺跡 125. 東五百住遺跡 126. 富田遺跡 127. 芥川遺跡 129. 川西古墳群 131. 富田寺内町 132. 真上東遺跡 134. 教行寺跡 135. 水室遺跡 136. ツケノ遺跡 137. 高樋古墳 138. 上土室遺跡 139. 上野遺跡 140. 郡家本町遺跡 141. 關嶺山古墳群 143. 宮之川原遺跡 144. ツケノ古墳群 146. 芝生遺跡 162. 盾井古墳群 163. 尼ヶ谷古墳群 164. 墓合古墳群 165. 塚原遺跡 166. 芥川原寺瓦葺跡 167. 土室遺跡 171. 弁天山古墳群 173. 上水室遺跡 174. 真上古墳群 185. ミクリ遺跡

【吹田市域】

3. 山田御嶽出土地 4. 白頭瓦葺跡 8. 新芦屋古墳 9. 青葉丘遺跡 16. 新芦屋瓦葺跡 17. 似禪寺山遺跡 103. 吹田須恵器窯跡 104. 新芦屋遺跡

【摂津市域】

8. 千里丘東2丁目遺跡 20. 千里丘東1丁目所在遺跡

図7. 遺跡分布図

²⁵⁾る。さらに、西福井遺跡、東福井遺跡、福井遺跡、宿久庄遺跡といった茨木川上流域にも中期末葉～後期にかけて集落や墓域が進出しており、全体的に遺跡数が増加する。さらに北の福井には、南塚古墳・青松塚古墳・海北塚古墳といった横穴式石室を伴う後期の有力層の古墳が継続して築造されるが、この時期には島上郡域に真の継体大王墓と目される今城塚古墳が築造されており、被葬者集団の繋がりが想定されている。²⁶⁾なお、『日本書紀』には、安閑天皇元年（531）12月条に「竹村屯倉」関連記事がみられる。在地豪族の三島県主飯粒によって「上御野・下御野・上桑原・下桑原」の良田の献上があったとされるが、「耳原」「桑原」など関連する地名が現在も安威川上流域に分布しており、先の今城塚古墳の築造も含め、淀川北岸地域が王権にとって重要な基盤となる地域であったことがうかがえる。²⁷⁾

集落に近接する小規模古墳群は、後期前葉には終焉し、その後の後期後葉には北部の丘陵上に大規模な群集墳が成立する。²⁸⁾周辺では、阿武山山麓の塚原古墳群や福井の新屋古墳群に大規模な群集墳が形成されるが、千里丘陵東縁ではこの時期の古墳の数はあまり多くはない。ただし、横穴式木室を埋葬施設とする上寺山古墳や新芦屋古墳、²⁹⁾家形石棺を伴う見付山古墳など、やや特殊性のある古墳が後期後半～飛鳥時代前半にかけて築造されており、その位置づけが注目される。特に横穴式木室は、須恵器生産地の周辺で分布する傾向があるほか、上寺山古墳のように火化行為をおこなう事例も多いことから、被葬者に須恵器生産者を想定する意見がある。³⁰⁾千里丘陵では、主に西縁～南縁にかけて分布する千里窯跡群が後期～飛鳥時代にかけて大規模化するが、³¹⁾東縁にも茨木ゴルフ場内窯跡などが存在しており、関連が注目される。³²⁾終末期古墳は、藤原鎌足墓との説がある阿武山古墳の存在が特筆され、さらに周辺では塚原古墳群や桑原古墳群、初田1・2号墳といった特異な群集墳が展開している。ほかでは、佐保川上流域の栗栖山墳墓群が、終末期古墳から古代の木棺墓・火葬墓へと推移する大規模な墓域となっており、³³⁾茨木市域は古墳の終焉からの墓制の変化を考える上で重要なフィールドとなっている。

古代 茨木市域は、古代の行政区画では摂津国島下郡に相当する。飛鳥時代には、溝咋遺跡をはじめとする低地部の集落が廃絶する。それと入れ替わるようにして段丘上の総持寺・総持寺北遺跡や郡遺跡³⁴⁾が大規模化しており、これまでに掘立柱建物が多数検出されている。淀川北岸地域は、上述したように、摂津国島上郡・島下郡に相当するが、奈良時代初頭頃に三島評から上下分国されたと推定されている。島上郡では、『上郡』と記載された土器の出土から、高槻市郡家川西遺跡が島上郡衙であることが確定しているが、³⁵⁾島下郡域では文字資料等の確実な証拠がなく、明確ではない。ただし、地名や山陽道・三島路との交差点に位置する立地などから、郡遺跡周辺が最有力候補地となっており、発掘調査で方位を揃えた掘立柱建物群が面的に検出されている。³⁶⁾ほか、茨木市域における飛鳥・奈良時代の主要な遺跡としては、安威遺跡、耳原遺跡、宿久庄西遺跡、中条小学校遺跡などがあり、これらの遺跡では掘立柱建物がまとまって検出されている。³⁷⁾

古代寺院については、島上郡域に梶原寺・芥川廃寺、島下郡域に太田廃寺、穂積廃寺が存在する。このうち調査地北西の穂積廃寺は、郡遺跡と距離が近いことから郡衙周辺寺院と推定されている。また、南西の常楽寺遺跡には、心礎が残されているほか（三宅廃寺）、安威寺跡や新庄遺跡などでも古代の瓦が出土しており、いずれも寺院との関連が推測される。

『延喜式』記載の式内社は、島上郡域に3座、島下郡域に17座があり、分布に顕著な偏りがある。特に茨木市内には、13座が存在するなど濃密な分布を示し、西河原・西福井・宿久庄の新屋坐天照御魂神社3座が社格の高い大社・名神として把握されている。ほか調査地周辺では、南東の佐和良義神社などが距離が近く、関連が推測される。

古代山陽道は、市域の中央を東西にはしる西国街道と重複すると推定されている。高槻市郡家川西遺跡では、道路状遺構とみられる石敷が確認されているが、茨木市中河原北遺跡においても類似する石敷が検出されており、³⁸⁾ 関連が注目されている。駅家については、『続日本紀』和銅4年(711)に島下郡殖村駅の設置記事がある。比定地は諸説あり、³⁹⁾ いずれも決定打はないが、古代山陽道が通過する太田、耳原、郡、宿久庄といった候補地は、上述したように古代の遺構・遺物がまとまって確認されており、今後の調査の進展が期待される。

生産遺跡では、吹田窯跡群が古墳時代後期に生産のピークを迎えたのち、飛鳥時代にかけて継続するが、奈良時代には終息にむかう。また、淀川北岸地域では、終戦直後までは方画の条里地割が良好に残存しており、天坊幸彦や服部昌之らによって条里の復元がなされてきた。⁴⁰⁾ 現存する条里地割については、その後の発掘調査の成果から、平安時代後期以降に施工された主条里を反映したものであることが明らかとなり、それと併せて、奈良時代後半～平安時代前半にさかのぼる古条里の存在も確認されている。⁴¹⁾ 島下郡域においては、溝咋遺跡や総持寺遺跡、玉櫛遺跡の調査などで、8世紀代の正方位を志向する水路や耕作溝の検出事例があり、条里の即した開発の起源を示すものとみられる。⁴²⁾

飛鳥・奈良時代に発展した古代集落は、総持寺遺跡や宿久庄遺跡、中条小学校遺跡のように平安時代へ継続するものもみられるが、郡遺跡など平安時代を境に衰退するものも多く、集落が再編されたことがうかがえる。平安時代以降に新たに出現する集落としては、新庄遺跡や玉櫛遺跡などを挙げることができる。⁴³⁾ 郡遺跡では、やや遅れる10世紀以降、ふたたび居住域が出現し、⁴⁴⁾ これらは中世にも継続する。寺院については、総持寺・忍頂寺・大文寺などが平安時代に創建された。ほかでは、佐保川上流の徳大寺遺跡で10世紀後半～11世紀前半の梵鐘鑄造遺構が検出されており、特筆される。

中世以降 茨木市域には、藤原摂関家に関連する荘園が広く存在しており、その氏神である春日神社も多く分布する。摂関家領には、沢良宜庄、新屋庄、三宅庄、福井庄などがあるほか、忍頂寺五箇庄、安井庄、造酒司領太田保、溝咋庄、宿久庄、垂水東牧、玉櫛庄、井於庄などの荘園も存在しており、平安時代後期～中世の集落遺跡とのかかわりが推測される。⁴⁵⁾ 茨木市域では、瓦器碗をはじめとする中世の遺構・遺物は普遍的に認められるものの、居住関連の遺構がまとまって見つかった調査事例は限定されている。総持寺・総持寺北遺跡、宿久庄遺跡、郡遺跡、新庄遺跡、丑寅遺跡、玉櫛遺跡、真砂遺跡、葦分神社東方遺跡などで、居住域の一端が明らかになっているが、このうちの総持寺・総持寺北遺跡は、⁴⁶⁾ 面的な調査によって屋敷地の構造が判明する良好な調査事例となっている。

集落以外の城郭や砦などの調査事例は、茨木市域ではあまり多くなく、本格的な調査としては山間部の佐保栗栖山砦跡などに限られる。⁴⁷⁾ 平地の城・砦では、市中心部に中川清秀や片桐且元を城主とした茨木城が位置する。茨木遺跡の範囲に茨木城跡が位置しており、平成18年度の調査では、精巧なつくりの建具や欄間がまとまって出土した。⁴⁸⁾ 元和元年(1615)廃城の茨木城と関連する遺物として注目を集めているが、その後の検討によってやや時期が下る可能性が高いことが示され、享保16年(1731)焼失の浄教寺との関連が指摘されている。⁴⁹⁾

ほかでは、山間部において中近世墓の調査事例が豊富にあることも大きな特徴で、栗栖山南墳墓群では土坑墓・火葬墓600基以上と7基の火葬場遺構が、⁵⁰⁾ 千提寺遺跡群では約300基の中近世墓がそれぞれ調査されている。特に千提寺遺跡群では、⁵¹⁾ キリシタン墓とみられる伸展葬の長方形墓が計29基確認されている点が特筆され、中近世の葬法や信仰の変遷をうかがい知れる貴重な調査事例となっている。

第2節 中条小学校遺跡における既往の調査

中条小学校遺跡は、1959年（昭和34）に新中条町所在の中条小学校内で発見された遺跡で、その際に弥生後期の土器などととも掘り抜きの井戸枠をもつ井戸や溝、柱穴などが確認された。その後、1976年（昭和51）の校舎改築工事の折にも弥生時代中期の竪穴建物や溝、井戸などが確認されており、弥生時代中期～古墳時代を中心とした時期の遺跡と認識されるに至った。現在の遺跡範囲は、北側のJR茨木駅東方まで拡がり、南北1.1km、東西0.7kmの範囲におよんでいる。ただし、まとまった面積の調査が少ないことや、報告が未刊の調査も多くあるため、以下ではこれまでに公表されたデータのうち、主要な調査例を取り上げながら、遺跡全体の概略をまとめておきたい（表1、図8）。

遺跡の現状と調査の略歴 中条小学校遺跡は、JR茨木駅の南東という立地もあいまって戦後急速に市街地化したため、茨木市内では調査件数の多い遺跡のひとつとなっている。そのため、小面積の調査が大半ではあるが、平成8年頃からは市街地の再開発に伴って調査が増加傾向にあり、マンション建設等による500～1,500㎡前後のまとまった調査面積の事例も増えつつある。調査された箇所は、遺跡

表1. 中条小学校遺跡 主要な調査一覧

調査名	報告	面積 (㎡)	位置 (エリア)	～ 弥生	弥生 中	弥生 後	古墳 中	飛鳥・ 奈良	平安	中世 ～	概要
S34年	—	—	新中条町 南西			●					中条小学校敷地内、弥生後期遺物、掘り抜き井戸など
S51年度	(H18概報)	—	新中条町 南西								中条小学校敷地内、弥生中期～古墳の居住域、H18年度概報に位置図のみ記載
S56年度	(H18概報)	—	新中条町 南西								中条小学校敷地内、H18年度概報に位置図のみ記載
86-2	S61概報1	252	下中条町 東			●					庄内～布留式古段階の遺構・遺物、V様式系・溝
86-1	S61概報2	—	下中条町 北			●	●				庄内式期の遺構・遺物、V様式系壘・直口壺・小型鉢など 古墳中期末～後期前葉、須恵器ほか
87-1	S62概報	115	小川町 東				●				土坑・柱穴少数、古墳中期末須恵器ほか、希薄
88-1	S63概報 (H18概報)	170	新中条町 南西		●				●		弥生中期～平安後期、攪乱多く遺構・遺物少量・摩耗、サヌカイト石鏡
89-1	H1概報	220	新中条町 東				●		●	●	※現東奈良遺跡範囲内 古墳中期、柱穴群／平安中～室町、井戸・土坑・柱穴・溝など
H8年度	(H18概報)	—	奈良町 南西								2調査区、南側調査区で東西・南北方向の溝など
H9年度	(H18概報) (市史)	1268	岩倉町 南西			●	●			●	古墳～中世、掘立柱建物・(円形周溝墓か)・古墳ほか
H11年度	H11概報	550	東中条町 北				●			●	調査区東半が蔵替川日流路(小川水路)／西半、溝、柱穴、遺物少量(古墳後期・中世)
H11年度	H11概報	310	駅前 北			●					庄内式期、溝／古墳前期の包含層 下部に東西方向流路(未掘削)、流路肩部に井戸(遺物なし)
H12年度	H12概報	330	駅前 北			●			●		弥生後期後半～庄内式期、掘立3棟ほか柱穴多数、(方形周溝状遺構) 平安、土坑など／遺物一定量あり・磨減
H12年度	H12概報	700	東中条町 東			●	●				弥生後期後半～庄内式期、方形周溝墓4以上・溝14・井戸・土坑・柱穴、竪穴(時期不明) 方形周溝墓群：供献土器・木棺痕跡、壺棺／古墳中期後葉～、円墳1期
H14年度	H14概報	1307	新中条町 中央～東		●	●					弥生中期中葉土坑、サヌカイト削片の出土／弥生後期、溝(遺物あり)・土坑 時期不明、掘立1棟(古代か)など
H15年度	H15概報	1082	新中条町 南西			●	●	●			弥生後期後半～庄内式期、(円形周溝状遺構か、2基2重以上)、V様式系壘ほか 古墳中期末～後期前葉、円墳3基／飛鳥～奈良、溝・柱列・掘立など(方位に沿う＝官衙的)
H17年度	H17概報	512	駅前 北							●	近世井戸など、耕作地、遺構・遺物軽薄
H17年度	H17概報	188	駅前 北								時期不明、北東→南西方向の溝
H17年度 CJ05-2	H18概報	845	新中条町 南西	●	●	●	●	●	●		旧石器、ナイフ形石器1点／弥生後期～庄内式期、溝・土坑・柱穴 古墳中期末～後期前葉古墳1基、円筒埴輪・須恵器 飛鳥、掘立2棟／奈良～平安初、掘立2棟・土坑・溝 平安中、掘立1棟・欄列(斜方向)／平安後期～鎌倉、土坑・井戸 ※古代の遺構を重層的に確認、古代瓦の出土
H18年度	H18概報	147	駅前 北								平安～、耕作地(土坑・有蹄類足跡)
H18年度	H18概報	349	下中条町 東			●			●		弥生後期後半～庄内、(円形周溝状遺構+竪穴建物1基)・溝27条・土坑15・井戸1 平安～の遺構遺物
H21年度 CJ09-1	H21概報	236	下中条町 中央			●	●				1面：古墳中～後期、掘立1棟・(円形周溝状遺構) 2面：弥生中～庄内、大溝2条・土坑・柱穴など、大溝幅4～5m併行・東西方向
H21年度 CJ09-4	H21概報	80	下中条町 北			●					1面：中世～近世、南北掘溝群(10c代ほか) 2面：主に弥生後期後半、土坑、完形手焙形土器など
H21年度 CJ09-5	H21概報	236	下中条町 東			●			●		1面：奈良～平安、柱穴・土坑・溝 2面：弥生～庄内式期、柱穴・土坑・井戸など／遺物一定量あり 調査区東端地形読み込み＝谷状地形、比高18m
H24年度 CJS12-1	62集	10,880	岩倉町 立命館	●	●	●	●	●	●		弥生後期～庄内中頃、列状土坑群・柱穴多数・(円形周溝状遺構)・井戸など 庄内～布留式古段階か、円形周溝墓2基 古墳中期末～後期前葉、円墳・方墳計5基以上、円筒埴輪・動物形埴輪・須恵器など 飛鳥～平安前、灌漑水路群(正方位志向のものあり)／時期不明、轆轤
中条小学校・ 松ヶ本南 2020-1	本書	4,628	岩倉町 立命館	●	●	●	●	●	●		弥生前期以前流路、サヌカイト集積遺構 庄内～布留式古段階、方形・円形周溝墓群5基以上 奈良、耕作溝群／平安前、掘立柱建物2棟ほか／中世～、耕作痕跡

※この一覧表は、既往の調査地点をすべて網羅したものではない、代表的なものを抽出・作成
 ・報告書項目「●概報」各調査年度発行概報、「●集」茨木市文化財資料集〔いずれも茨木市教委基委員会発行〕、「市史」は『新修茨木市史 第七巻』
 ・時期の項目詳細：「～弥生」=弥生前期以前、「弥生後」=弥生後期～古墳前期前葉、「古墳中」=古墳中期末葉～後期前葉、ほか項目通り



図8. 中条小学校遺跡の調査地一覽

範囲のほぼ全域におよぶが、主に遺跡北端で JR 茨木駅東方（表1・北）、遺跡南東端で東奈良遺跡にまたがる小川町付近（表1・東）、中条小学校よりも南西（表1・南西）での調査件数が多く、やや偏りがある。この中でも新中条町・岩倉町・奈良町にまたがる中条小学校南西付近は、立命館大学大阪いばらきキャンパス内も含め、まとまった面積の調査事例が多い。

これまでに検出された主な遺構・遺物は、上述したように、弥生時代中期～古墳時代が中心である。ただし、平成以降の調査によって、飛鳥時代・奈良時代・平安時代、具体的には7～10世紀代の遺構・遺物の検出も目立ってきており、その評価も重要である。一方、中世以降については、居住関連遺構の検出事例がほとんどないことも特徴といえる。

遺構・遺物の密度については、それほど高い遺跡ではない。遺物出土量をまとめた面積の調査事例で例示すれば、平成17年度調査区（CJ05-2）が845 m²でコンテナ20箱、平成24年度調査区（CJ12-1）が10,880 m²でコンテナ91箱である。ちなみに、遺跡南東に隣接する東奈良遺跡では、既往の報告によると、環濠内では弥生時代の遺物を中心に1,000 m²あたりコンテナ350～600箱程度の遺物の出土量があるなどその差は歴然で、扇状地の上位面と下位面といった遺跡の立地の差が土地利用の違いを生む要因と考えてよいだろう。

主な遺構・遺物 これまでに検出された遺構・遺物は、主要な時期が限定され、検出された遺構の種類にも一定の偏りがみられる。ただしそれ以外にも重要な出土遺物があり、古い時期では平成17年度調査区（CJ05-2）で出土した後期旧石器時代のナイフ形石器が特筆される。近隣の見付山東遺跡や新庄遺跡においてもナイフ形石器が出土していることから、本遺跡周辺では旧石器～縄文時代の遺物の出土を念頭に入れた調査が望まれよう。

最も普遍的にみられる弥生時代～古墳時代の遺構・遺物は、弥生時代後期～古墳時代前期前半と古墳中期後半～後期前半の2時期が中心となる。ほかでは、弥生時代中期の遺物も散見されるが、ごく少数であり、それ以外の時期は、遺物の出土が少ない。弥生時代後期～古墳時代前期前半では、竪穴建物や柱穴、土坑、井戸などの居住関連遺構のほか、方形周溝墓なども確認されている。ほかに遺跡内では、これまでに円形周溝遺構と呼称された円弧を描く細筋の溝群が多数検出されているが、平成18年度調査区では円形周溝の内側で竪穴建物が検出されたことにより、建物に伴う外周溝と認識できるようになった。こうした居住関連や墓にかかわる遺構は、主に北側・東側・南西の各エリアに分散しており、複数の居住域や墓域が形成されていることがわかる。特に遺跡北東端では、平成12年度調査区や平成21年度調査区（CJ09-4）などで弥生時代後期～古墳時代初頭（庄内式期）の遺構・遺物がまとめて検出されているが、東側隣接地には近年、円形周溝墓や井戸などが新たにみつかった深見遺跡があり、関連性を検討する必要がある。さらに深見遺跡の南に位置する新庄遺跡では、時期がやや下る古墳時代前期前半（布留式期）の竪穴建物や方形周溝墓群が検出されているため、隣接遺跡を含めた遺跡群の構造と変遷を復元することが課題といえよう。

古墳時代中期後半～後期前半では、埴輪や須恵器を伴う小規模な古墳が12基以上確認されている。分布は南西エリアに偏り、複数の支群に分かれるが、東側エリアにおいても平成12年度の調査で円墳1基が検出されていることから、遺跡内で同様の小規模古墳が新たに確認される可能性がある。古墳以外では、中期後葉の須恵器の出土や柱穴の検出がいくつか散見されるが、現状では遺跡の範囲内には目立った居住域が存在した形跡は見出せない。

古代では、平成15年度調査区と平成17年度調査区（CJ05-2）など、中条小学校の南西付近で主に

遺構・遺物が確認されている。この中でとりわけ重要なのが、平成17年度調査区(CJ05-2)の大型の柱穴を伴う5棟の掘立柱建物群で、方位に即した建物が飛鳥～平安時代前期にかけて重層的に確認されている。古代瓦が一定量出土したほか、最も古い建物が飛鳥時代にさかのぼる可能性が示されている点が重要で、帰属時期が正しいとするならば、正方位を志向する建物としては総持寺遺跡の事例とともに島上・島下郡域で最古の事例となる。官衙的な様相を備えることから、遺跡の性格を考える上で重要な所見となろう。

飛鳥・奈良時代の遺構が南西エリアにほぼ限定されるのに対し、平安時代前半、主に9・10世紀代の遺物は、遺跡内の比較的広域で出土する傾向がみられる。このうち主要なものでは、平成17年度調査区(CJ05-2)で井戸から土師器のての字状口縁皿や黒色土器A類碗などがまとまって出土している。一方、中世以降については、瓦器碗などの遺物が散見されるものの、まとまった居住域の検出事例は今のところ見当たらない。近世奈良村の村落域は、主に南の東奈良遺跡の範囲にあるなど、遺跡範囲の大部分は近世の村落部分とほとんど重複していない。そのため、中世以降は居住以外、具体的には耕作域としての土地利用が主体であった可能性が高い。

ここまで既往の調査成果を概観したが、いずれの時期においても居住域や墓域などが安定・継続的に展開する様子がみられない点が本遺跡の特徴である。このため、例えば弥生時代～古墳時代前期では、南東1kmに位置する東奈良遺跡との関係が本遺跡の性格や土地利用を考える上で重要である。古墳時代中期後葉～古代にかけては、東奈良遺跡が前代から大規模な集落が継続していた様子は今のところうかがえないため、ほぼ同時期から大型化する北側の郡遺跡周辺との関係を考える必要がある。

茨木市域では、戦後すぐに都市化が進んだこともあって、宅地開発など小規模な面積事例が多く遺跡の様相が掴みにくい状況も多かった。しかし近年は、大規模工場跡地の再開発などに伴う大規模調査の事例が増えつつあり、成果があがっている。その中でも立命館大学大阪いばらきキャンパス内の調査は、広域な面積におよぶ事例となることから、遺跡全体の土地利用の大枠や地形環境の特質などを考えるためのまたとない機会といえるだろう。

【注】

- 1) 以下、地理・歴史に関する総論について、特に断りのない限り以下の文献を参照した。
宮地良典・楠利夫・武蔵野實・田結庄良昭・井本伸広 2005「京都西南部地域の地質」『地域地質研究報告』5万分の1地質図幅京都(11)第39号(独)産業技術総合研究所 地質調査総合センター
茨木市史編纂委員会 1969『茨木市史』
茨木市史編さん委員会 2004『新修 茨木市史』第八巻 史料編 地理
茨木市史編さん委員会 2012『新修 茨木市史』第一巻 通史 I
茨木市史編さん委員会 2014『新修 茨木市史』第七巻 史料編 考古
摂津市史編さん委員会 2022『新修 摂津市史』第一巻 自然地理 先史・古代 中世
平凡社 1986『大阪府の地名 I』日本歴史地名体系 28巻
- 2) 木庭元晴 2015「埋没低位段丘崖下に位置する立命館大学用地での地質ボーリング試料の新たな研究手法とそれによって得られた放射性炭素年代、そして第四紀層区分」『中条小学校遺跡発掘調査報告書(分析・考察編)―立命館大学大阪いばらきキャンパスに伴う発掘調査報告書―』茨木市文化財資料集 第64集 茨木市教育委員会
- 3) 辻康男・矢作健二 2015「遺跡検出面基盤層の年代・層序」『中条小学校遺跡発掘調査報告書(分析・考察編)―立命館大学大阪いばらきキャンパスに伴う発掘調査報告書―』茨木市文化財資料集 第64集 茨木市教育委員会
- 4) 奥村茂輝 2012『明和池遺跡2』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第226集
新海正博 2012『明和池遺跡1 吹田操車場遺跡8 西の庄東遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第232集

第2章 位置と環境

- 鹿野墨編 2014 『吹田操車場遺跡10・明和池遺跡3』(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第248集
後藤信義編 2017 『明和池遺跡5』(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第279集 摂津市教育委員会・(公財)大阪府文化財センター
川瀬貴子編 2018 『明和池遺跡6』(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第293集 摂津市教育委員会・(公財)大阪府文化財センター
- 5) 阪田育功 2003 「玉櫛遺跡周辺における河道の変化と条里水田の開発」『玉櫛遺跡II』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第95集
- 6) 弥生時代以前の遺跡の主な動態は、主に下記の文献を参照した。
森田克行 1993 「新池埴輪製作遺跡の位置と環境」『新池 一新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書一』高槻市埋蔵文化財発掘調査報告書 17 高槻市教育委員会
- 7) 原口正三 1977 「II考古学からみた原始・古代の高槻」高槻市史編さん委員会編 1977 『高槻市史』第一巻 本編I
都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 8) 奥井哲秀 2014 「弥生9 東奈良遺跡」『新修茨木市史』第七巻史料編考古 茨木市史編さん委員会
清水邦彦 2017 「弥生時代鑄造技術と工人集団」『日本考古学』第44号 日本考古学協会
木村健明 2020 「東奈良遺跡の環濠の変遷」『茨木市立文化財資料館館報』第5号 茨木市立文化財資料館
黒須靖之 2021 『東奈良遺跡発見50周年記念一弥生集落と銅鐸生産一』展示パンフレット 茨木市立文化財資料館、など
- 9) 黒須靖之 2005 『郡遺跡発掘調査概要報告書』茨木市教育委員会
奥井哲秀 2014 「弥生3 郡遺跡」『新修茨木市史』第七巻 史料編 考古 茨木市史編さん委員会
伊藤武編 2018 『郡遺跡・倍賀遺跡1』茨木市文化財資料集 第71集・(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第295集 茨木市教育委員会・(公財)大阪府文化財センター
- 10) 松岡良憲 1996 『新庄遺跡』大阪府教育委員会
- 11) 中村豊 2014 「縄文7 牟礼遺跡」『新修茨木市史』第七巻史料編考古 茨木市史編さん委員会
- 12) 濱野俊一 2001 「溝作遺跡(その2)」『平成12年度発掘調査概報』茨木市教育委員会
- 13) 濱野俊一 2001 「平成9・10年度発掘事業報告 付. 目垣遺跡(第97-1次・第98-1次) 発掘調査略報」茨木市教育委員会
- 14) 森田克行 2006 『今城塚古墳と三島古墳群 摂津・淀川北岸の真の継体陵』同成社
- 15) 笹栗拓編 2021 『上牧遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第313集
- 16) 山田隆一 2003 「淀川流域の古墳時代初頭集落について」『関西大学考古学研究室開設五十周年記念 考古学論叢』同刊行会
- 17) 合田幸美・伊藤武ほか 2000a 『溝作遺跡(その1・2)』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第49集
合田幸美・伊藤武ほか 2000b 『溝作遺跡(その3・4)』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第50集
- 18) 廣瀬寛 2012 「將軍山と紫金山古墳」『新修茨木市史』第一巻通史I 茨木市史編さん委員会
- 19) 奥和之・酒井泰子 2000 『安威遺跡』大阪府教育委員会
- 20) 奥村茂輝 2014 『総持寺遺跡3』(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第250集
笹栗拓編 2017 『総持寺遺跡4』(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第280集
- 21) 内田真雄・今西康宏ほか 2017 『太田茶臼山古墳の時代一王権の進出と三島一』高槻市立今城塚古代歴史館
笹栗拓 2023 「中期大型前方後円墳の周辺集落と地域開発一摂津・安威川流域での分析から一」『考古学研究』第69巻第4巻 考古学研究会、など
- 22) 奥和之・小浜成ほか 2005 『総持寺遺跡』大阪府教育委員会
- 23) 木村理 2021 「三島地域における埴輪生産の変遷」『弁天山D4古墳整理成果報告書一埴輪・須恵器編一』高槻市など
- 24) 清水邦彦 2022 「東奈良遺跡出土の石釧とその破砕行為」『茨木市立文化財資料館館報』第7号 茨木市立文化財資料館
- 25) 清水邦彦 2014 『茨木に眠る資料一免山篤コレクションを中心に一』茨木市立文化財資料館
- 26) 高松雅文編 2010 『継体大王の時代』大阪府立近つ飛鳥博物館
今西康宏編 2021 『大王墓 今城塚古墳の実像』高槻市立今城塚古代歴史館など
- 27) 網伸也 2005 「淀川水系のミヤケ」『考古学ジャーナル』No.533 ニューサイエンス社
- 28) 笹栗拓 2016 「北摂三島の群集墳と成合地区の後・終末期古墳の位置づけをめぐって」『大阪文化財研究』第48号 (公財)大阪府文化財センター
- 29) 玉井功・三宅正浩ほか 2015 『上寺山古墳の研究』上寺山古墳研究会
竹原千佳誉 2021 『新芦屋古墳一被葬者の謎にせまる一』吹田市立博物館
- 30) 清水邦彦 2015 「横穴式木室と火化の関係」前掲註29) 玉井ほか 2015 所収
- 31) 高橋真希 2004 『千里丘陵の須恵器一古代のハイテク工場一』吹田市立博物館
- 32) 清水邦彦 2014 「古墳時代後期の茨木」『新修茨木市史年報』第十二号 茨木市
- 33) 森屋美佐子・瀬戸哲也編 2000 『栗栖山南墳墓群』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第57集
- 34) 奥和之・阿部幸一・山上弘編 2007 『総持寺遺跡II』大阪府教育委員会
岡本圭司編 1998 『総持寺遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第30集
市本芳三・信田真美世・小野亜由美編 2004 『総持寺遺跡II』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第117集

- 35) 高橋公一編 2015 『律令時代の摂津嶋上郡』高槻市立今城塚古代歴史館
- 36) 宮脇薫 1993 『郡遺跡発掘調査概報』茨木市教育委員会
鈴木雅美・濱野俊一 2002 「摂津国嶋下郡における地方官衙遺跡についての一考察」『大阪文化財研究』第21号（財）大阪府文化財調査研究センター
奥井哲秀 2014 「古代3郡遺跡」『新修茨木市史』第七巻史料編考古 茨木市史編さん委員会
- 37) 島下郡域の古代集落の動向は、前掲註36) 鈴木・濱野 2002 に文献に詳しい。
- 38) 宮脇薫 2000 「中河原北遺跡」『平成11年度発掘調査概報』茨木市教育委員会
- 39) 高村勇士 2021・2022 「島下郡随村駅を考える1・2」『茨木市立文化財資料館館報』第6・7号 茨木市立文化財資料館
- 40) 天坊幸彦 1926 「摂津総持寺々領散在田畠目録」『歴史地理』第四七巻第五号
服部昌之 1972 「淀川右岸地域の条里と水無瀬庄」『人文研究』第23巻8号 大阪市立大学文学部
- 41) 森田克行 1988 「嶋上郡の方格地割に関する覚書」『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要12』高槻市教育委員会
- 42) 前掲註5) 阪田 2003
- 43) 前掲註10) 松岡 1996
川瀬貴子編 1998 『玉櫛遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第31集
駒井正明・小野亜由美編 2003 『玉櫛遺跡II』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第95集
信田真美世・赤松佳奈編 2008 『玉櫛遺跡III』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第184集
- 44) 前掲註9) 伊藤編 2018
- 45) 島下郡域における荘園の展開と中世集落との関連については、以下の文献に詳しい。
鈴木雅美 2003 「中世茨木における集落動向（試論）」前掲註41) 駒井・小野編 2003
- 46) 前掲註34) 奥・阿部・山上編 2007、岡本編 1998、市本・信田・小野編 2004
- 47) 市本芳三編 2000 『佐保栗栖山砦跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第56集
- 48) 黒須靖之 2007 「茨木遺跡」『平成18年度発掘調査概報』茨木市教育委員会
- 49) 清水邦彦 2018 「茨木遺跡出土建具の評価をめぐる現状と課題」『茨木市立文化財資料館館報』第3号 茨木市立文化財資料館
- 50) 前掲註33) 森屋・瀬戸編 2000
- 51) 合田幸美編 2015 『千提寺西遺跡 日奈戸遺跡 千提寺市阪遺跡 千提寺クルス山遺跡』（公財）大阪府文化財センター調査報告書 第256集

第3章 調査・整理の方法

発掘調査および整理作業・報告書作成は、茨木市教委と協議の元、センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010に則り、実施した。発掘調査に関わる工事と掘削、測量と現地での基礎整理については、株式会社島田組が担当した。整理作業は、センター南部調査事務所にて実施した。

調査名・調査区名 調査地は、中条小学校遺跡・松ヶ本南遺跡の中間に位置することから、「中条小学校遺跡・松ヶ本南遺跡2021-1」と定め、調査完了後に中条小学校遺跡の範囲拡大を申請をした。調査区は、工程上、全体を3分割し、調査順に調査区1・調査区2・調査区3と定めた。

地区割 センターでは、平面直角座標系第VI系（測地成果2000）に基づく統一的な地区割を作成し、調査を進めている（図9）。包含層出土の遺物は、10m単位の第IV区画を基準に取り上げている。

地層名 隣接する2012年度調査区では、掘削対象の地層を0層～3層に区分し、基盤層を4層としている。今回の調査では、これに対応させる形で掘削対象の地層を第0層～第3層に大別し、枝番を振って各層を細分した。調査では、第0層～第2層までを機械掘削の対象とし、第3層を人力で掘削した。

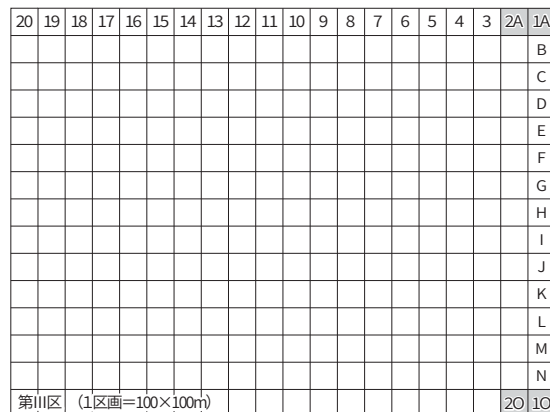
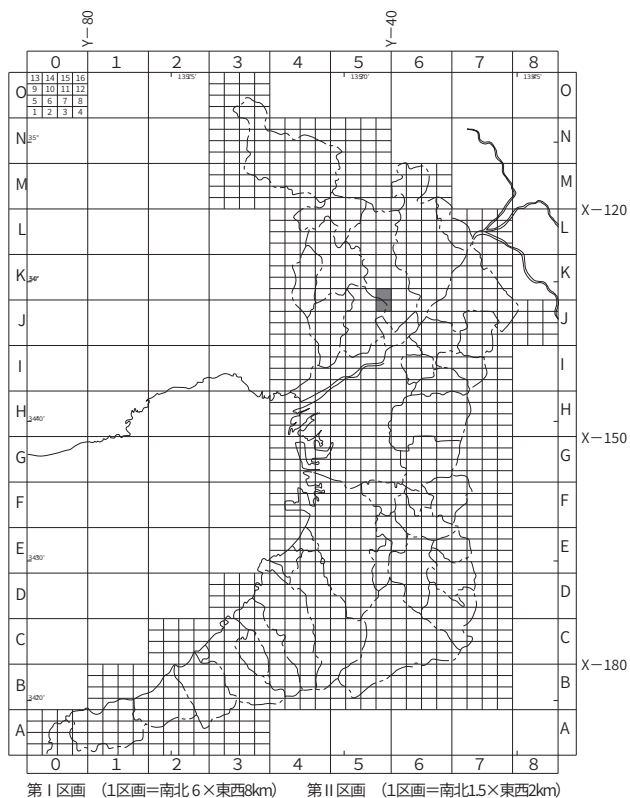
基盤層については、部分的な下層確認や攪乱の壁面精査等によって、図面や写真等の情報を取得した。2012年度調査区では、4層と一括で示されているが、弥生時代前期以前の自然流路が複数存在することが確認されるなど、変化に富むことが今回の調査で判明した。そのため、第4層以下を第7層までに大別し、層相ごとの特徴を記録した。

測量 トータルステーションを用いた電子平板システムと写真測量によって記録を作成した。すべての測量データは、デジタルデータにて作成しており、測量に関わる成果品として、dxf形式の図面データとsim形式の遺物の出土地点情報、出力した紙図面の提出を受けた。

写真撮影 現場での写真撮影には、6×7フィルムカメラ（白黒・カラーリバーサル）とデジタル一眼レフカメラを用いた。デジタル一眼レフカメラは、NIKON社製D5300（APS-Cセンサー）で、JPEGとRAWデータによる撮影をおこなった。各調査区の完了時には、ラジコンヘリコプター（CANON社製EOS 5D Mark IV搭載）またはドローンによる写真・動画撮影を実施し、デジタルデータにて成果品の提出を受けた。

整理作業 出土遺物は、現地にて洗浄・注記作業と遺物登録台帳作成を実施した。報告書作成に伴う整理作業では、出土遺物の内容を点検した上で抽出・復元作業をおこなった。図化遺物は、土器98点、石器94点、金属器1点の計193点で、土器・金属器は報告書の本文末に掲載した。石器は、未図化の資料も含めた全点を計測し、本文中に計測データと一覧表に掲載している。報告書に掲載した挿図は、dxf形式の遺構図と実測図のスキャニングデータから、Adobe社製IllustratorCC・CS6を用いてトレースおよび調整し、作図した。遺物の写真撮影は、中部調査事務所写真室にて実施した。報告書掲載遺物から、重要度の高い資料や残りの良い資料を中心に抽出しており、掲載対象遺物は97点である。報告書の編集作業には、Adobe社製InDesignCCを用いた。本文および挿図・表・図版で使用したフォントは、源ノ明朝および源ノゴシックで、報告書に関わるデータはすべてデジタルデータにて作成した。

出土遺物および成果品 整理作業終了後、出土遺物や図面・写真・台帳等の成果品は、センターから茨木市教委へ移管した。コンテナ数は、掲載遺物3箱、未掲載遺物7箱で、茨木市教育委員会歴史文化財課が保管している。



[5K-4-10-20 / 5J-16-1A-2A]

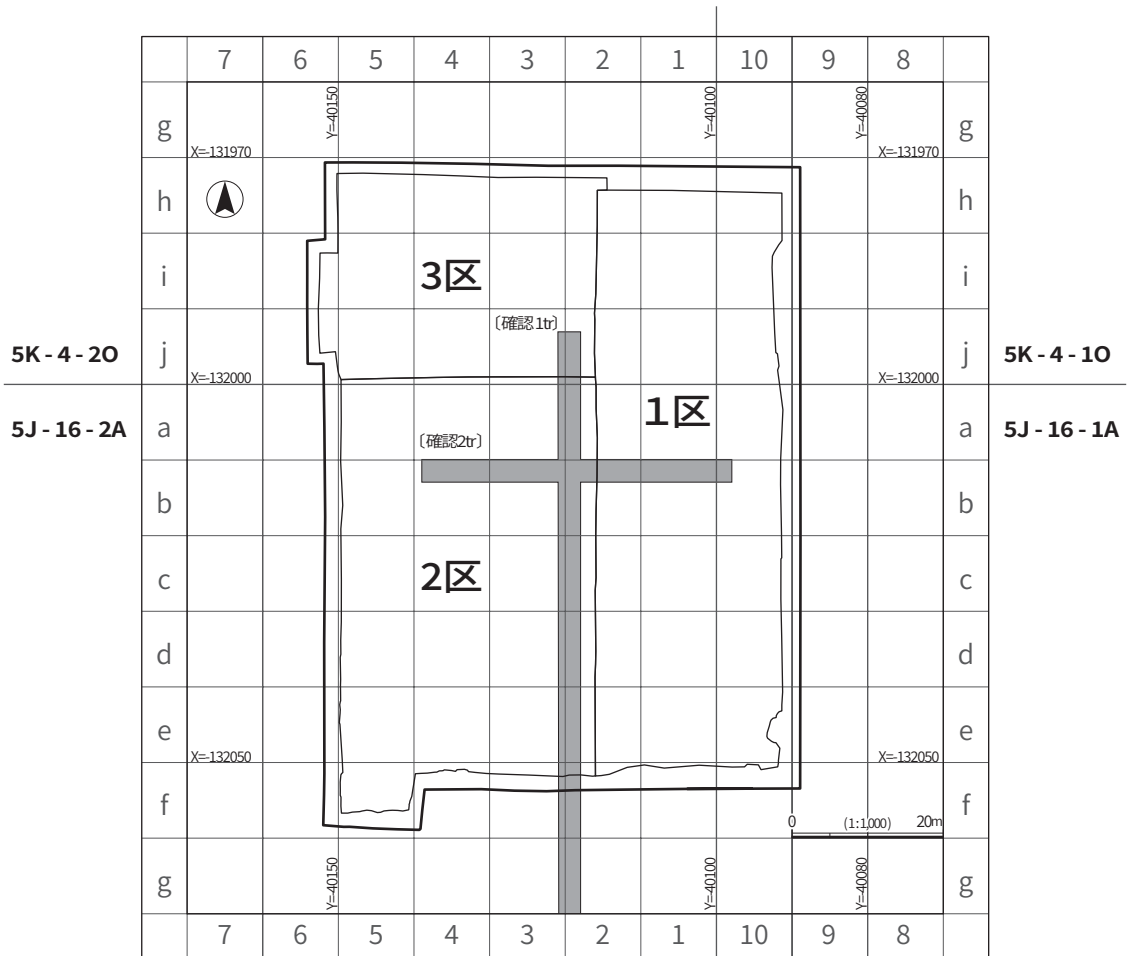
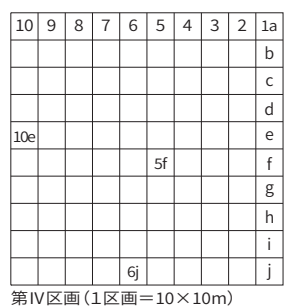


図9. 調査区 地区割図

第4章 発掘調査の概要と層序・地形

第1節 調査概要

発掘調査は、排土置場の確保と既存建物の撤去スケジュールとの兼ね合いから、調査区を3分割して実施した。立命館大学大阪いばらきキャンパスの開設以前は、調査地にはサッポロビールの工場があり、約2mの厚さで旧工場の造成に伴う盛土がある。発掘調査では、造成盛土と中世後半以降の耕土（第0層～第2層）を機械掘削で除去したのち、中世前期以前とみられる耕土と包含層（第3層）を人力で掘削した。第3層除去面を遺構検出面とし、必要な記録を取得した（図10）。

検出された主な遺構は、中世後半以降の造成痕跡や耕作関連遺構、奈良時代～中世頃の耕作溝群、平安時代前半の掘立柱建物2棟を含む柱穴群、古墳時代初頭～前期前葉頃の方形・円形周溝墓群、弥生時代前期の石器集積遺構である。全体的に堆積が薄いこともあって、ほとんどの時期の遺構が最終面で検出されたが、平成24年度調査区（CJ12-1）では上面（第3層上面；中世後半以降）と下面（第3層除去面；中世前半以前）の遺構を区別して報告している。上面と下面にそれぞれ帰属する遺構のちがいは、埋土の特徴からおおよそ分別が可能であり、本報告においても平成24年度調査区（CJ12-1）の報告を踏襲する形で、上面と下面に区分して報告する。

このほか発掘調査では、遺構検出面の下部に存在する複数の自然流路を確認した。第3層を除去した遺構検出面では、肩部が不明瞭な部分も多くあったが、今回の調査では弥生時代前期にさかのぼる遺構も検出されたため、平面的な拡がりを確認した上で、トレンチ調査による下層確認によって、遺物の有無や堆積状況、時期に関する検討をおこなっている。

出土遺物については、弥生時代前期～中世の遺物までを含んでおり、コンテナ数は10箱を数える。第2章第2節で記したように、調査面積に対して遺物出土量は多いとはいえないが、出土量の多寡は調査区の範囲の土地利用の通時的な傾向を読み取る上で貴重な情報である。出土遺物の種類は、土器類とサヌカイトの石器が主体で、ほかに金属器を少量含む。土器類については、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器類などがあり、古墳時代初頭の土師器と奈良～平安時代の遺物が大半を占める。

ほかでは、近世以降の陶磁器類や旧工場にともなう物（例えば、ビール瓶王冠をまとめて廃棄した土坑など）が調査で確認されている。これらは近世以降の土地利用の一端を示すことから、出土遺物としての取り上げはおこなっていないものの、一部の耕作溝群に近世後半の陶磁器を含むものがあり、遺構・攪乱の帰属時期を決定するための参考にした。

第2節 基本層序

調査区が長方形に近い形状なため、層相については地点ごとに大きな変化はない。隣接する2012～2013年の調査では、遺構検出面までの堆積層を第0層～第3層に、基盤層を第4層に大別しているため、今回の調査ではその層序に準ずる形で区分した。発掘調査では、第0層～第2層までを機械掘削で除去したのち、第3層を人力にて掘削して遺構を検出した。基盤層については、部分的な下層トレンチを設けて堆積状況を確認し、断面図や写真による記録を取得している。

地点ごとの地層断面図を図11～図14に示し、以下では基本層序の概要を記す。

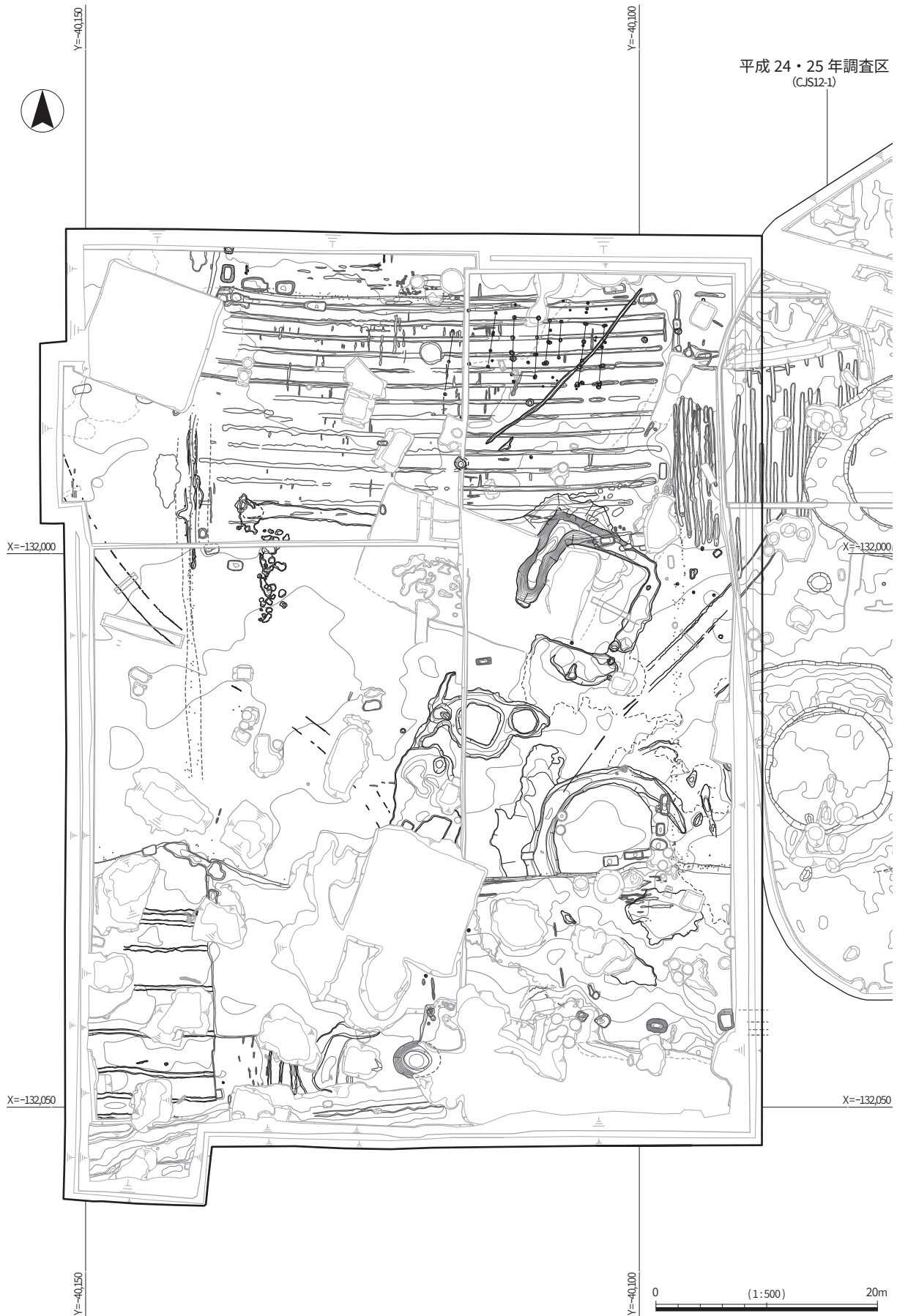


図 10. 中条小学校遺跡・松ヶ本南遺跡 2020-1 区 最終遺構面 全体平面図

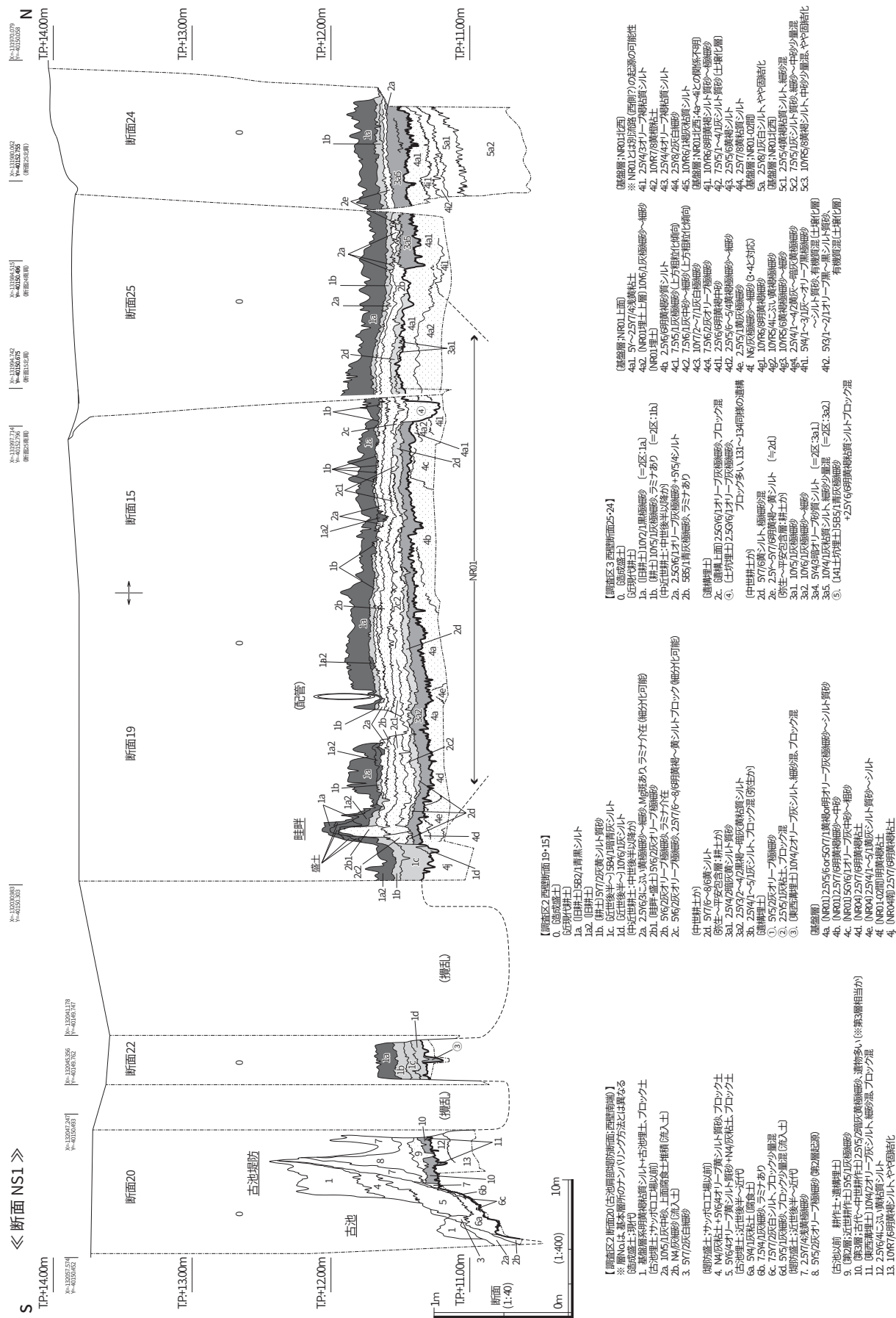


図 11. 調査区断面① (南北方向断面①；調査区2・3西壁)

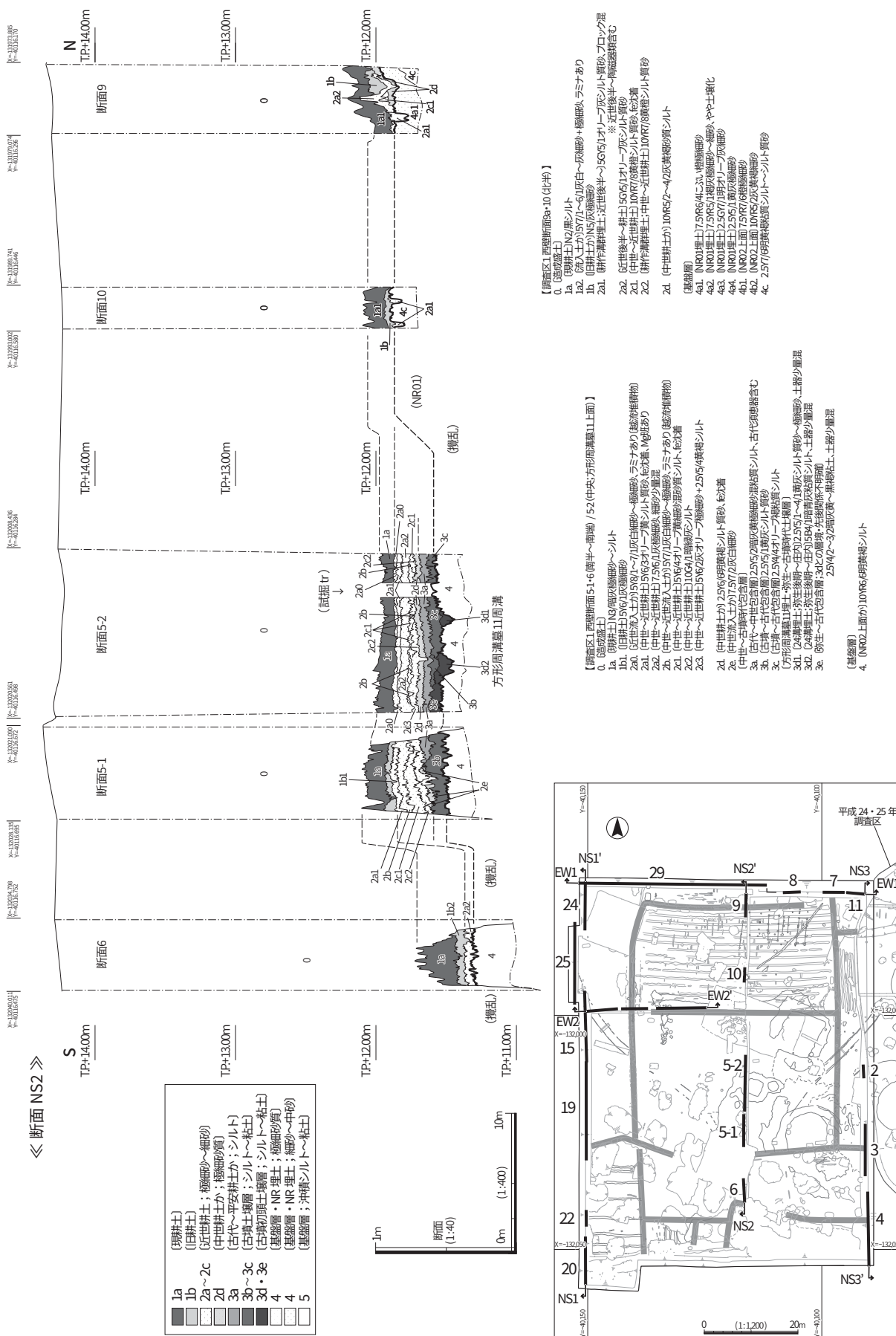


図 12. 調査区断面② (南北方向断面②；調査区1西壁)

第4章 発掘調査の概要と層序・地形

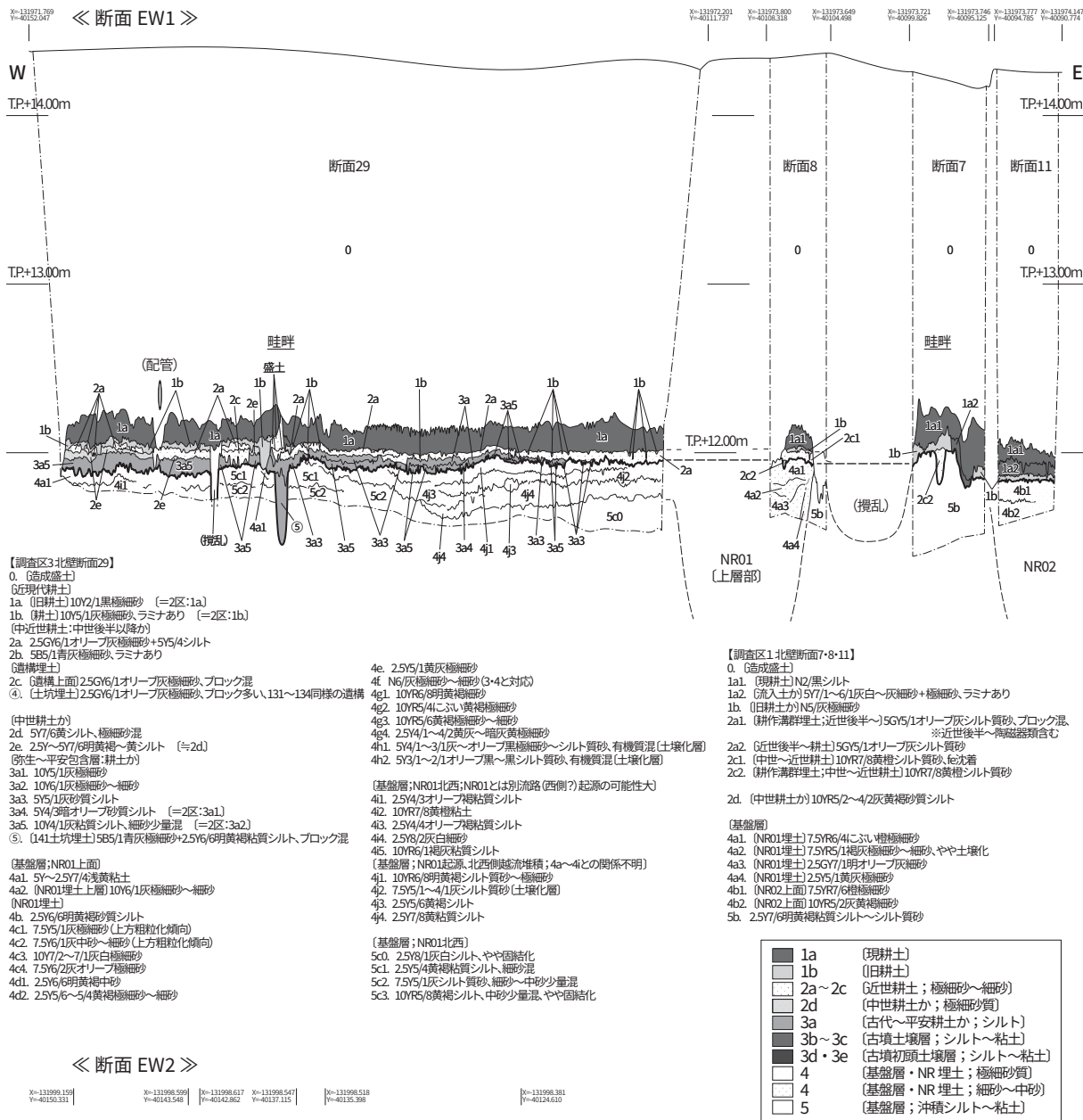


図 13. 調査区断面③ (東西方向断面①・②; 調査区1北壁・調査区3北壁)

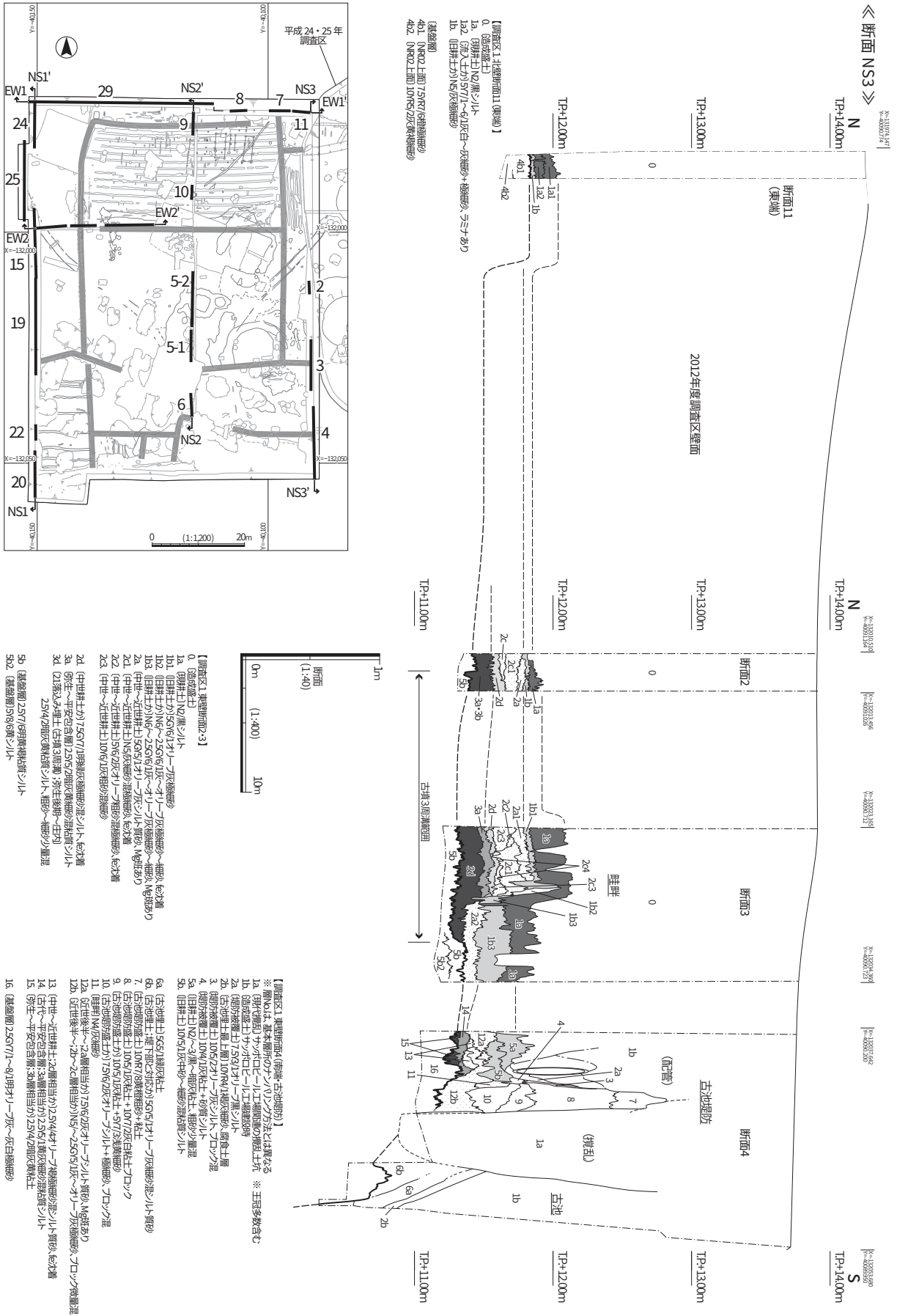


図 14. 調査区断面④ (南北方向断面③；調査区1東壁)

《遺構検出面までの堆積》

第0層：〔造成盛土〕 層厚約2 m、上面の標高値はT.P.+14.0 m前後。主に旧サッポロビールの工場造成（1969～2008年稼働）に伴って事業地外から持ち込まれた客土で、一部に立命館大学大阪いばらきキャンパス開設時の整地土を含む。古池の埋立て上面部分は、造成土にセメントが混ぜられるなど地盤改良がおこなわれていた。

第1層：〔近現代耕土〕 工場造成以前の旧耕土。層厚0.2～0.3 m。工場の造成等の影響を受けている場所や造成盛土による圧密などを考慮すれば、厚さ平均0.3 m程度であったと推察できる。直前までの耕作に伴う1aとやや古い旧耕土1bに細分できる。層相はいずれも極細砂ベースで、色調は1aが黒色傾向、旧耕土が灰色傾向。約50年間、工場造成盛土により埋め立てられていたため、全体的にグライ化傾向が強く、特に掘削直後は1aは黒ずんだ色調を呈していた。

第2層：〔近世耕土〕 調査区の北端の一部を除き、ほぼ全域に分布する耕土。遺物や出土品などから、近世段階のものとして判断されるが、その一部には中世にさかのぼる堆積が含まれるとみられる。層厚は0.05～0.3 mで、地点によって上面の削平度合いが異なるため厚さに差がある。特に調査区の中央付近～南半で堆積が厚く（図11・12・14の南北断面1・2・3の中央～南側）、この地点を中心に細分ができ、2a～2dに区分した。

2a～2cまでの層相は極細砂ベースで、特に調査区1の西壁南方（図11の南北断面2中央南寄り）では、ラミナがみられる。このことから、地形が高い調査地西側に灌漑水路があり、そこからの越流堆積物がこの層の母材と推定できる。さらに上方粗粒化傾向が認められることから、時期を追って周辺一帯、特に西側の千里丘陵での開発・植生攪乱・裸地化が進行した可能性が指摘できる。

最下部の2dについては、明るい粘質系をベースとする耕土で、上部の2a～2cとは様相が大きく異なる。2012年度調査区に対応する層がないが、下部の第3層とは峻別できるため、今回の報告では第2層の範疇に含めた。遺物は少ないが、上下の堆積土との対比から、中世段階の耕土と判断できる。

第3層：〔弥生～平安時代堆積層〕 層厚0.1～0.15 mの土壌化層。調査区のほぼ全域に拡がりを見せけているが、調査区の北西側を中心に後世の造成・削平された範囲も広く、分布範囲は調査区全体の半分～3分の1程度である。除去面の標高値、つまり最終遺構面の標高値は、T.P.+12.0～10.8 mをはかる。古代～中世段階の耕土とみられる3aと、古墳時代以前にさかのぼる可能性が高い土壌化層3b以下に大別が可能であるが、層境はそれほど明瞭ではない。全体的にみて、3aとした古代～中世段階の耕土は調査区2の北西高所部も含めて広域的に分布し、この層には主に奈良～平安時代前半頃の遺物が含まれる。それに対し、3b以下とした弥生時代～古墳時代の土壌化層は、自然堆積と判断でき、主に調査区の中央～南東に限定される。また、調査区1の中央付近、具体的には周溝墓9～12のあいだ、および周辺では、3bと類似する古土壌と下部の黄褐色土が入り混じるようなブロック土が面的に拡がっている。これについては、後述するように、古墳時代初頭～前期の周溝墓群の造成に深くかかわるものとみられる。

《基盤層》

2012年度の調査報告書では、最終遺構面下部の基盤層を第4層として一括しているが、下層確認調査の結果から細分が可能である。大まかには、自然流路の充填堆積物と基盤土となる沖積層に区別ができ、今回の報告では第4層～第7層に区分した。最終遺構面では、第4層と第5層が表出している。第

5章第4節にて自然流路の所見と併せて詳述するため（P102～106：図63・64）、ここでは概略を記す。

第4層 自然流路 NR01・02 の充填堆積物とこの流路に起因する氾濫堆積物。そのため主に調査地北西に分布しており、中砂～粘質シルトまで幅が広い。断面観察から自然流路 NR02 → NR01 の順に西側に側方移動したと判断できる。NR01 については、AMS 年代測定の結果、紀元前 10 世紀～3 世紀頃（縄文時代晩期中葉～弥生時代中期前葉）までの間、下刻・埋積があった開析谷であることが判明している。そのため NR02 については、それ以前、つまりは縄文時代晩期前葉以前の開析谷とみなすことができる。

なお、隣接する平成 24 年度調査区（CJ12-1）においても、基盤層で NR01 と同時期に存在する縄文時代晩期～弥生時代前期の開析谷が確認されている。終戦直後の 1947 年撮影の米軍空中写真や、1908 年（明治 41）測量の陸地測量部 2 万分の 1 「茨木」地形図、明治 20 年代の地籍図²⁾、近世後半・文政 11 年（1828）の奈良村文書『三穂積・倍賀新池築立絵図』³⁾などを参照する限り、周辺一帯は近世には東西南北を志向する方形の地割が拡がるのが確認できるが、古い時代には現地表面からはその存在を確認できない開析谷が多数存在したことがうかがえる。このことは、条里に即した開発が進められる前の地形環境、具体的には古墳時代以前の土地利用を考えるための前提となることから、重要な所見といえる。

第5層 自然流路 NR01・NR02 が下刻する基盤面を構成する沖積層。細粒の粘土～シルトがベースとなっており、部分的にはやや固結化している箇所も認められる。これまでに遺物の出土は確認されていない。自然流路 NR01・NR02 によって分断されることから、両流路の東西と間の 3 地点について第 5a 層・第 5b 層・第 5c 層に細分しており、2012 年度の報告で基盤層とした堆積はこの第 5 層、具体的には第 5b 層に相当する。2012 年度の報告での分析・考察によれば、大阪層群の再堆積とみなすことができ、その形成年代については更新世末期の 30,000 年前～完新世初頭の 10,000 年前頃と推定できる⁴⁾。

第6層 第 5 層の下部で、複数の自然流路（NR03・NR05）の存在が確認されたため、流路の充填堆積物を第 6 層にあてた。流路の下部まで掘削がおよんでいないため、全体の堆積状況は不明である。年代に関する情報もないが、本遺跡や周辺の新庄遺跡や見付山東遺跡では、後期旧石器時代のナイフ形石器の出土が確認されており、自然流路 NR03・NR05 のような特に古い時期の流路についても遺物の存在に注意を払う必要がある。

第7層 自然流路 NR05 の下刻面を構成する堆積を第 7 層にあてた。上面の第 5 層と同様に細粒の粘土・シルトがベースで、この層についても大阪層群の再堆積とみなすことができる。

第3節 旧地形の復元と造成痕跡

事業地一帯は、旧工場の建設時の造成盛土によってほぼ平坦に整地されているが、調査区周辺の地形は、千里丘陵の東縁という立地もあいまって、大局的には北西から南東方向にごく緩やかに地形が下がる。造成盛土下部に埋没した旧地表面については、旧地表面で平面的な記録は取っていないものの、機械掘削時の所見や断面の記録から、北西から南東方向にむかって耕作段が造成されて少しずつ地形が下がっていくことが確認できた。遺構検出面においても、概ね北西から南東にむかって緩やかに地形が下がることが確認でき、調査区内では調査区 3 の標高の最も高い北端中央付近が T.P.+11.94 m、古池

や攪乱の範囲を除いた標高の最も高い地点が T.P.+10.80 mで、南北 70 m間で 1.1 mの高低差があることがわかる（図 15）。ただし仔細にみれば、調査区 1 の西端から調査区 3 の北端東半は、西側に比べて造成面が一段高く（図 15；T.P.+11.94 m付近）、反対に調査区 3 の南半中央には南側に比べて北側が一段低い区画がある（図 15；T.P.+11.39 m付近）。こうした範囲は、下部の自然流路 NR01・NR02 の西側肩部に接する部分であることから、古い自然流路の堆積作用により、流路の周囲にわずかな地形の起伏が形成された可能性が推定できる。のちの時代の耕作地の造成が、微地形に規制される事例は枚挙にいとまがなく⁵⁾、今回の調査地点のような表層の堆積が薄い場所では微地形の把握が重要といえる。

なお、旧地表面から遺構検出面までの深さは 0.2～0.5 mで、全体的には 0.3～0.4 mの深さの地点がほとんどである。全体的に堆積が薄く、層厚に著しい差もないことから、遺構検出面では古代以降の耕作段の造成によって削平を受けている地点も多い。その一方で、主に調査区中央付近から南東側では古墳時代以前の堆積層が残存する地点があるなど、場所ごとに削平の度合いが異なることが把握された。上述したように、一定方向に階段状に造成させるのではなく、大枠としては微高地部分は高残しするのに対し、わずかに低い部分は掘り窪めるといった造成のスタイルが見受けられる。

また、周溝墓群より北側と西側は、概ね地形が一段高くなっており、いずれの地点においても T.P.+11.6 m以上の標高がある。周溝墓群の築造前・築造直後の旧地表面の状況は、その後の耕作段の造成などにより正確にはわからないが、周溝墓群の北西側で地形が高くなっていることは確かであり、地形の傾斜変換点付近に立地していると判断できる。このことは、墓域の選地のあり方を考える上で重要な所見となろう。

【註】

- 1) 近世における近畿と周辺部の山地は、はげ山や草山が入り混じる景観を呈するなど、山地荒廃が著しかったことが各地の村絵図などから推定でき、幕府直轄で土砂留めの普請が各地で頻繁におこなわれていたことが文献史学の成果から指摘されている。
水本邦彦 2022 『土砂留め奉行—河川災害から地域を守る—』歴史文化ライブラリー 550 吉川弘文館
- 2) 茨木市史編さん委員会 2004 『新修 茨木市史』第八巻 史料編 地理
- 3) 高橋伸拓 2016 『絵図で楽しむ茨木—江戸時代の村を巡る—』展示図録 茨木市立文化財資料館
- 4) 辻康男・矢作健二 2015 「遺跡検出面基盤層の年代・層序」『中条小学校遺跡発掘調査報告書（分析・考察編）—立命館大学大阪 いばらきキャンパスに伴う発掘調査報告書—』茨木市文化財資料集第 64 集 茨木市教育委員会
- 5) 金田彰裕 1993 『微地形と中世村落』吉川弘文館



図 15. 調査地の旧地形の復元 (遺構検出面；弥生時代頃)

第5章 遺構・遺物

第1節 上面の遺構・遺物：中世後半～近世

今回の発掘調査では、調査区北側を中心に最終遺構面で耕作に伴う造成段や溝、土坑などが検出された(図16)。これらは、主に第2層と類似する埋土を主体とするほか、出土遺物に近世陶磁器の細片を含むものもあるため、大半は近世に下る時期の遺構と判断されるが、時期比定が難しく中世までさかのぼる可能性が想定できる遺構も含まれる。そのほか、発掘調査で確認された耕地区画や古池の築造が、いつ頃までさかのぼるかといった点を検証することも、通時的な土地利用の変遷を復元するための重要な情報となる。そこで以下では、上面に帰属する遺構について、種類ごとに検出状況と特徴を報告する。

耕地区画 調査区北側3分の1の範囲で、基盤層の直上で耕作溝群が面的に検出された。北側は、地形が高いことから第2・3層が削平されてほとんど残っておらず、旧耕土上面から下面までの堆積が薄い。そのため新しい時期の耕作溝群が、基盤層の直上で面的に残ったと判断できる。その一方で、地形は南にむかって下がることから、第2・3層の堆積は北側に比べて調査地中央付近が特に厚いため、下面では耕作溝群は検出されなかった。ただし、機械掘削の途中で旧耕土第1層の下面で南北方向の耕作溝群が確認されたため(写真2)、調査地のほぼ全面に耕作溝群が拡がる判断できる。

耕地区画については、耕作段や擬似畦畔の検出状況、それらに沿って確認された細い木杭の検出状況などから、図16に示した通りに復元できる。1948年撮影の米軍空中写真と重ね合わせると、工場設置の直前までこの区画が踏襲されていたことがわかる。その一方で、図16の破線部分については、空中写真で畦畔等が確認できない。このことから、古い時期の耕地区画はより小さく、第2層の堆積で地形が低い部分が埋没したのち、耕地区画が拡大されて現代に至る、といった変遷を辿ることができる。

耕作溝の方向については、耕地区画ごとに異なっており、調査区北側に遺存するものは東西方向の溝が主体で、東端の北寄りでは南北方向の溝がまとまっている。ただし、東西方向の溝群が主体の北側においても、南北方向の幅の細い溝がいくつか確認されている。機械掘削の途中の旧耕土第1層の下面で確認された溝群が、南北方向にのびることをふまえれば、調査区の中央部分の区画では東西方向の溝群が先行し、南北方向の溝が相対的に新しいと判断できる。溝の時期については、調査地北側の東西溝群の埋土が主に第2層に類似するほか、18・19世紀代の近世陶磁器の細片を含むことから、大半は近世に下ると推定できる。そのため、後出する南北方向の溝については、埋土が第2層に類似するものも多



写真2. 上面に伴う耕作溝群の確認状況

いものの、基本的には近世末以降に下ると判断できる。

土坑(水溜遺構) 埋土の特徴などから上面帰属と判断される土坑状の掘り込みを計36基検出した。このうち、規模が大きく深さのある3基を除く33基は、長さ1～2m前後で、深さは0.5m以内のものが多い(図17～20、表2)。形状にややバリエーションがあるが、長方形を呈するものが大半で、埋土の堆積状況からほとんどがブロック土で人為的に埋め戻されていることがわか



図 16. 上面 全体平面図

表2. 上面 土坑群（水溜遺構）一覧

遺構 No.	調査区	地区割	形態	規模 (m) (長 x 幅 x 深)	埋土 類型	自然 堆積	遺物	遺物	備考
1	1区	K5-4 20-1h	長方形	2.0 x 0.8 x 0.24	A		-		
2	1区	K5-4 10-10h	長方形	1.6 x 0.9 x 0.5	A		○	土師器・瓦 / 中世～	
3	1区	K5-4 10-10h	不正形	0.9 x 0.7 x 0.21	A		○	瓦器 / 中世 三足釜	
4	1区	K5-4 10-10i	長方形	1.0 x 0.7 x 0.25	A		○	陶器 / 中世	
5	1区	K5-4 10-10j/ 20-1j	長方形	[1.3] x 1.2 x 0.47	D		○	土師器・須恵器 / 古代中頃～平安	
6	1区	K5-4 20-1j	長方形	1.3 x 0.6 x 0.50	E		○	須恵器 / 古墳後期～古代 細片 x 1	
7	1区	K5-4 10-10j	長方形	1.5 x 0.7 x 0.28	-		-		個別図なし
8	1区	J5-16 2A-2a	長方形	1.4 x 0.6 x 0.53	E		-		
9	1区	J5-16 1A-10c/ 2A-1c	長方形	[2.5] x 0.7 x 0.36	D	○	-		底に段差あり(0.25m)
10	1区	J5-16 2A-1c	長方形	1.4 x 0.8 x 0.17	D		-		
11	1区	J5-16 2A-1c・2c	長方形	1.1 x 0.6 x 0.26	F	○	-		
12	1区	J5-16 1A-10c	長方形	1.9 x 0.9 x 0.34	A	○	○	土師器・須恵器 / 弥生後期～庄内・平安 ～ 細片 x 3	
13	1区	J5-16 1A-10c	長方形	1.2 x 0.8 x 0.25	D		○	土師器 / 平安 細片 1点	
15	1区	J5-16 1A-10e	長方形	1.9 x 1.4 x 0.49	D		-		
16	1区	J5-16 1A-10e	隅丸長方形	1.9 x 1.2 x 0.54	C	○	○	弥生土器 / 弥生中期 壺口縁	
17	1区	J5-16 2A-1e	不正形	1.2 x 1.2 x 0.14	A		-		
18	1区	J5-16 2A-1e	方形	1.0 x 0.9 x 0.36	F		○	土師器・須恵器・瓦器 / 弥生後期～庄内・古代・平安～中世	
19	1区	J5-16 2A-1d・1e	不整形	0.7 x 0.6 x 0.10	B		-		
98	2区	J5-16 2A-4a	長方形	1.4 x 0.9 x 0.50	F		○	土師器・須恵器 / 弥生後期～庄内・古代～平安	
99	2区	J5-16 2A-5a	長方形	1.3 x 0.9 x 0.28	F		○	土師器 / 弥生後期～庄内・古代～平安	個別図なし、98と埋土同質
108	2区	J5-16 2A-4e	長方形	0.7 x 0.6 x 0.17	C		○	瓦 / 近世～	
109	2区	J5-16 2A-5c	長方形	1.3 x 0.8 x 0.33	D		○	土師器 / 弥生後期～庄内 細片 x 2	
110	2区	J5-16 2A-4d	長方形	[1.2] x 0.9 x 0.36	D		○	土師器 / 弥生後期～庄内・古代～平安 細片 x 3	
131	3区	K5-4 20-3j	不整形	0.9 x 0.5 x 0.41	D		○	土師器・須恵器 / 古墳後期・ほか 細片 x 3	
132	3区	K5-4 20-3i・3j	隅丸長方形	0.9 x 0.4 x [0.48]	B		○	須恵器 / 古代か 細片 x 2	
133	3区	K5-4 20-4h	方形	1.7 x 1.2 x 0.44	B		○	土師器 / 弥生後期～庄内・平安～ 細片 x 6	
134	3区	K5-4 20-4h	長方形	2.4 x 1.2 x 0.44	B		○	土師器・須恵器・瓦 / 弥生後期～庄内・古墳～平安・近世	
136	3区	K5-4 20-4h	不正形	3.0 x 1.1 x 0.13	A		○	土師器・須恵器・近世陶器・瓦 / 弥生後期～庄内・古墳後期・平安・近世 須恵器長脚二段高杯脚	耕作溝と接続
140	3区	K5-4 20-5i・6i	隅丸長方形	1.7 x 0.7	-		-		未掘、個別図なし
142	3区	K5-4 20-3h	長方形	1.9 x 0.9 x 1.93	A		○	土師器・須恵器 / 古代 細片 x 2	
143	3区	K5-4 20-5i	不整形	0.6 x [0.4]	-		-		未掘、個別図なし
144	3区	K5-4 20-4j	隅丸方形	0.9 x 0.7 x 0.21	D		○	土師器 / 平安か 椀底部高台 x 3	
154	3区	K5-4 20-5i	不整形	1.5 x [0.5]	-		-		未掘、個別図なし

【埋土類型凡例】 A: 褐色ベース、ブロック中～少量 / B: 暗色ベース、ブロック少量 / E: ブロック顕著
C: 褐色ベース、ブロック多い / D: 暗色ベース、ブロック多い / F: オリーブ褐色ベース、ブロック顕著 (砂)

る。検出された位置にも特徴があり、耕地区画の内部に位置する 132・131・8 土坑以外は、耕作段・区画の至近、そのなかでも特に区画のコーナー付近に集中する。さらに北西の 136・142 土坑や西側の 109・110 土坑のように、耕作溝と接続するものもみられることから、耕作に関連する遺構と認識できる。上述した形状や埋土の類似性からみて、いずれも同じ機能・性格をもつ遺構と判断でき、高燥な遺跡の立地環境をふまえれば、耕作に伴う水溜遺構とみなすのが妥当である。

135・14・97 大型土坑 上面に帰属する土坑状の掘り込みのうち、上記の 33 基を除く残りの 3 基は、規模がひとまわり以上大きい。調査区北側の 135 大型土坑と南端の 97 土坑は単独で位置するが、中央東寄りの 14 大型土坑は上記の土坑群と近接した位置にある。いずれも円形を呈するなど形状も異なるほか、上記の土坑に比べて深いことから、上記の 33 基の土坑とはやや異なった性格が想定されるところである (図 19・21)。

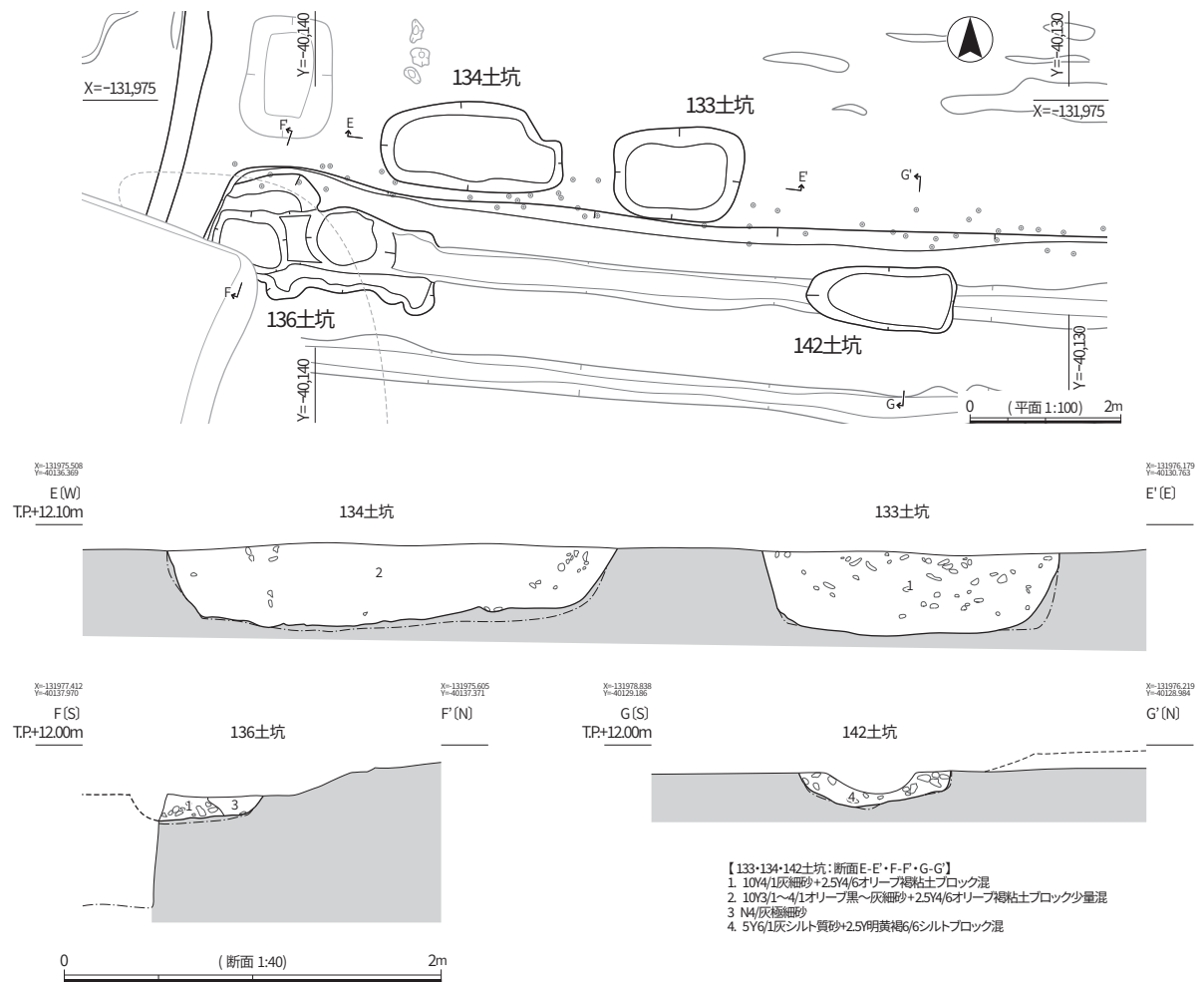
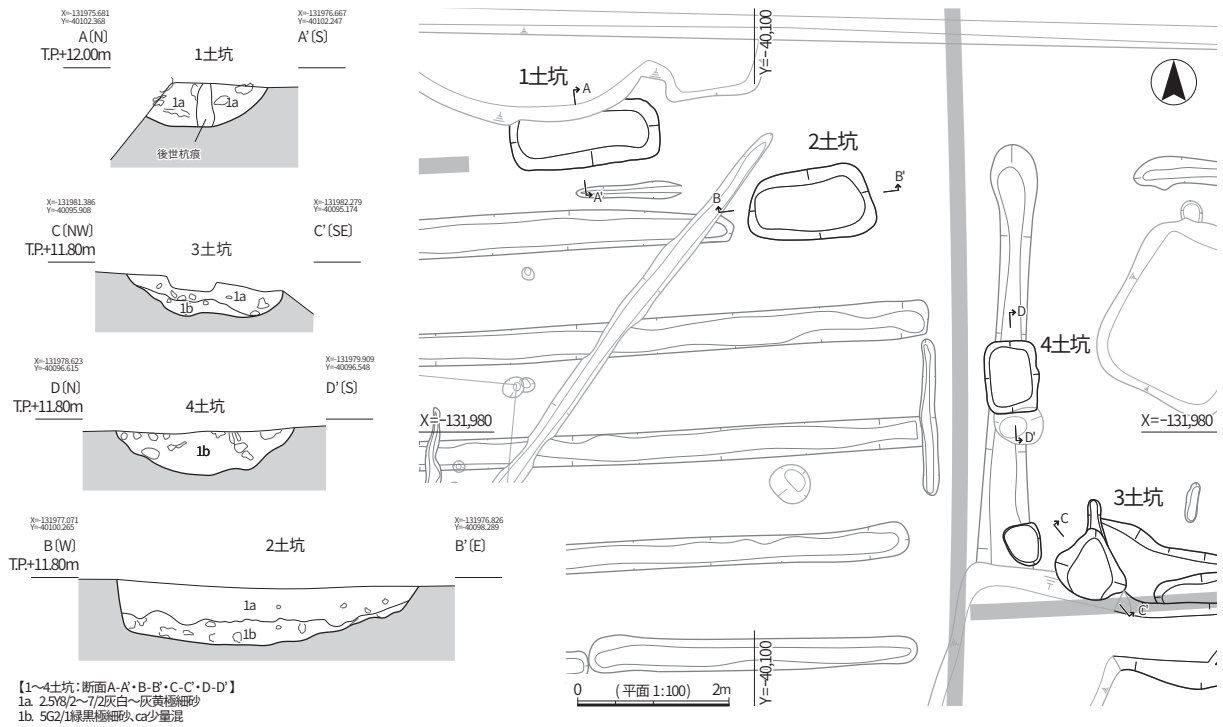


図 17. 上面 土坑群（水溜遺構） 平面・断面（1）

第5章 遺構・遺物

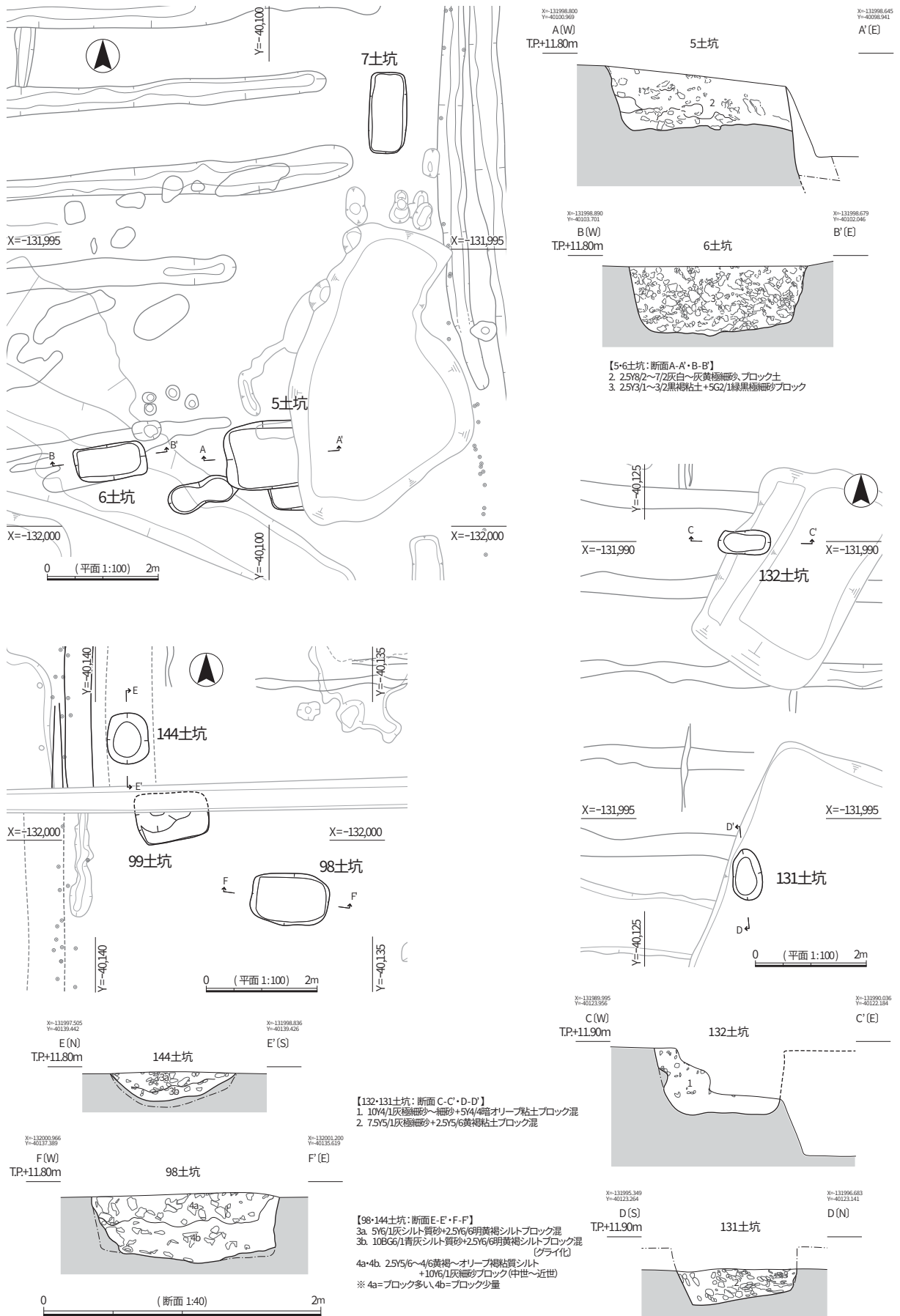


図 18. 上面 土坑群（水溜遺構） 平面・断面（2）

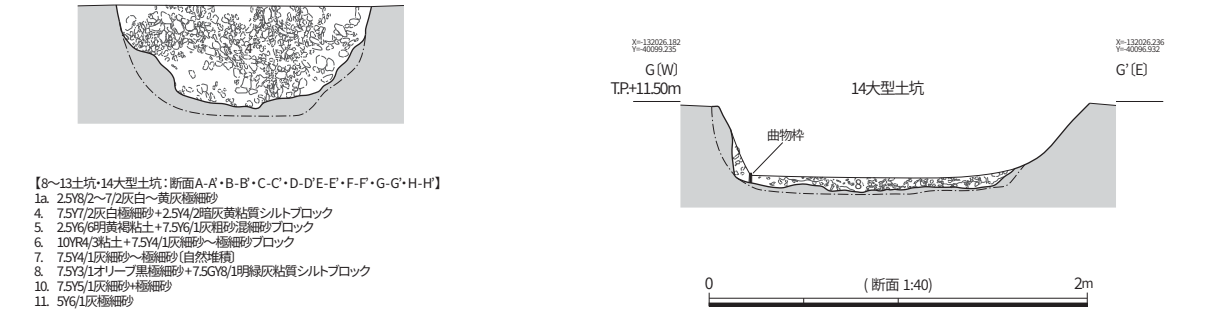
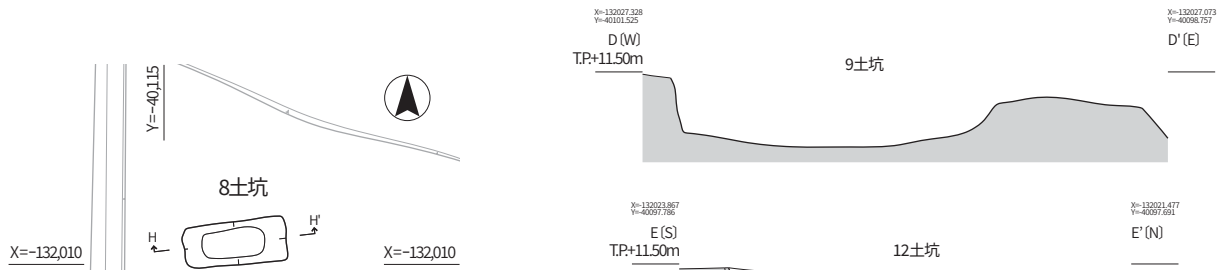
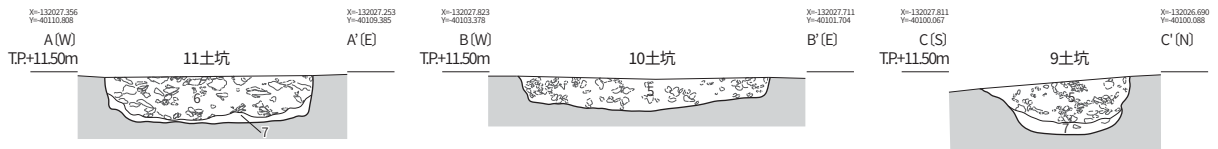
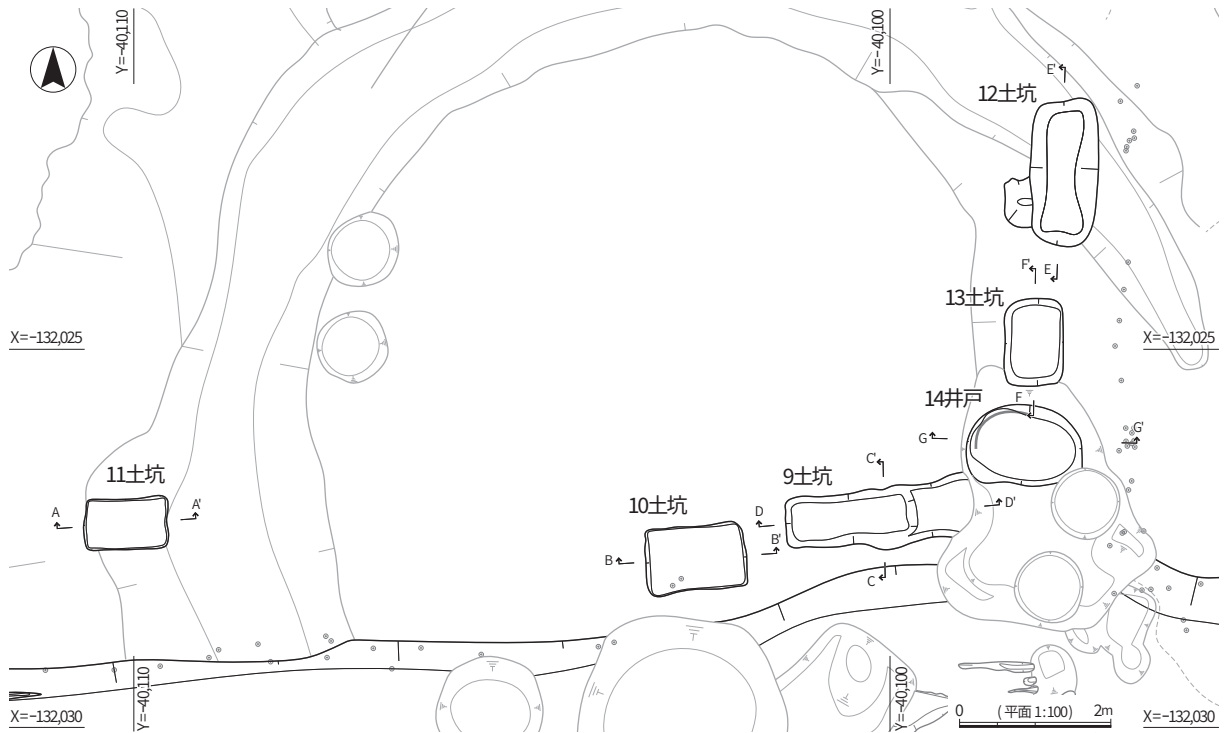


図 19. 上面 土坑群（水溜遺構） 平面・断面（3）

第5章 遺構・遺物

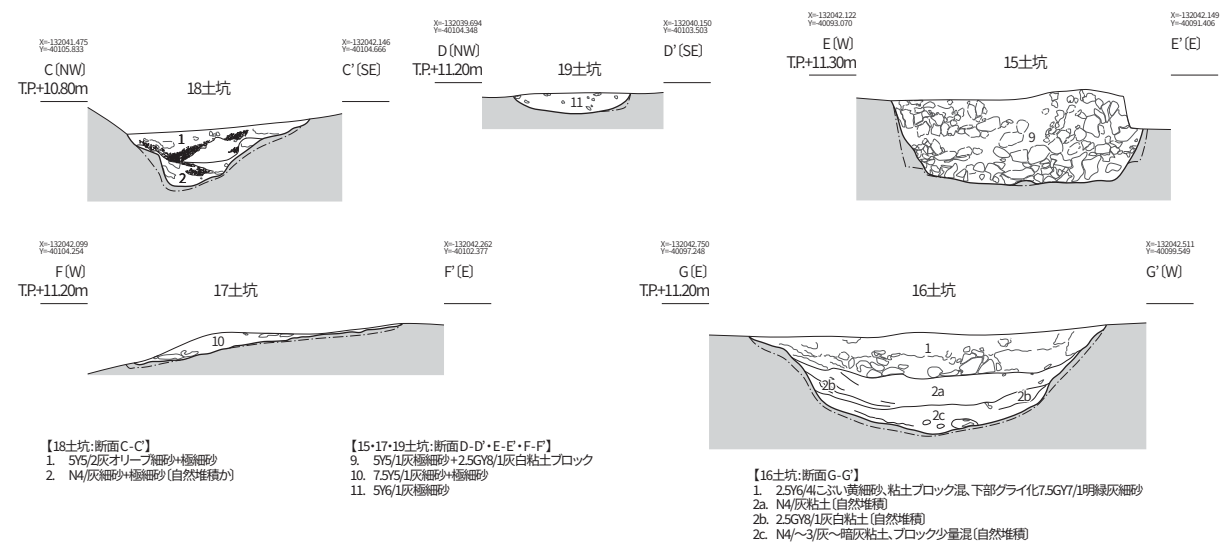
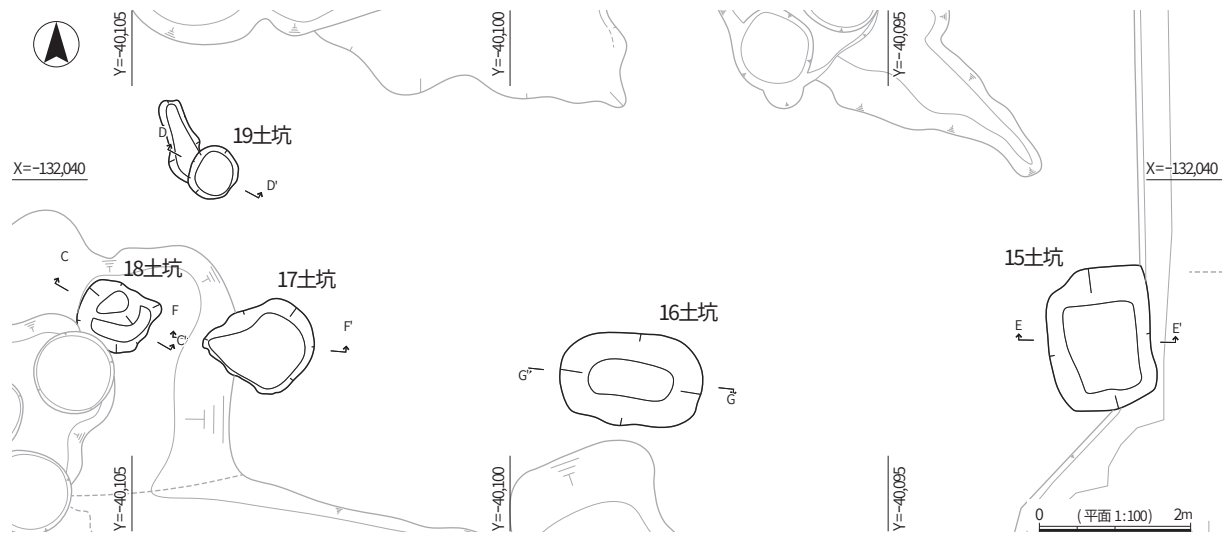
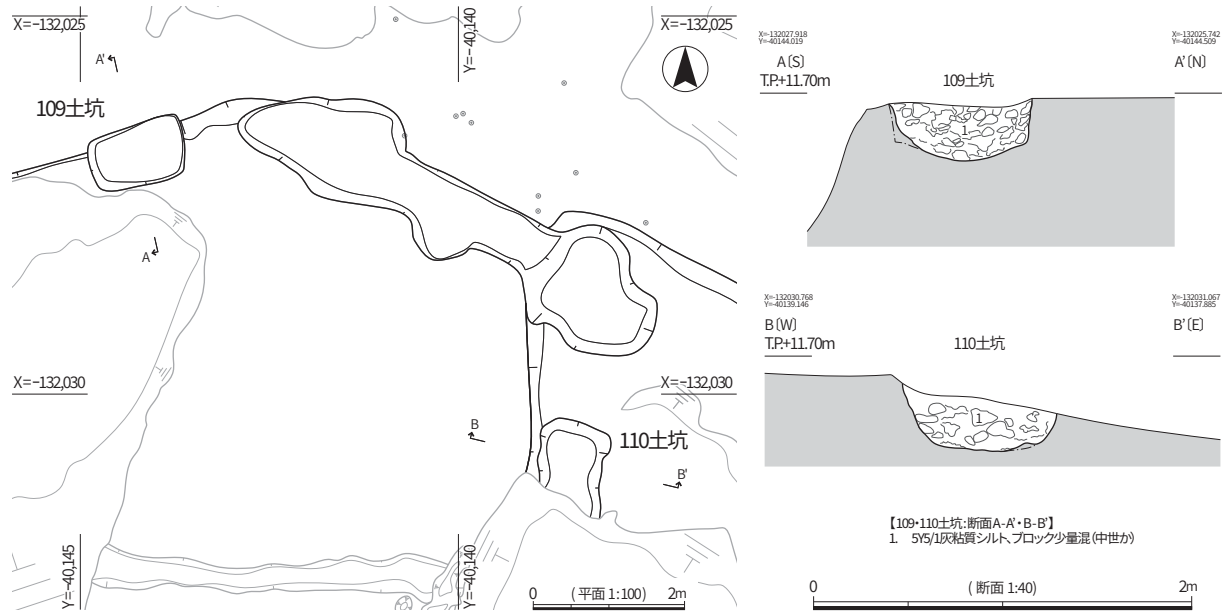


図 20. 上面 土坑群(水溜遺構) 平面・断面(4)

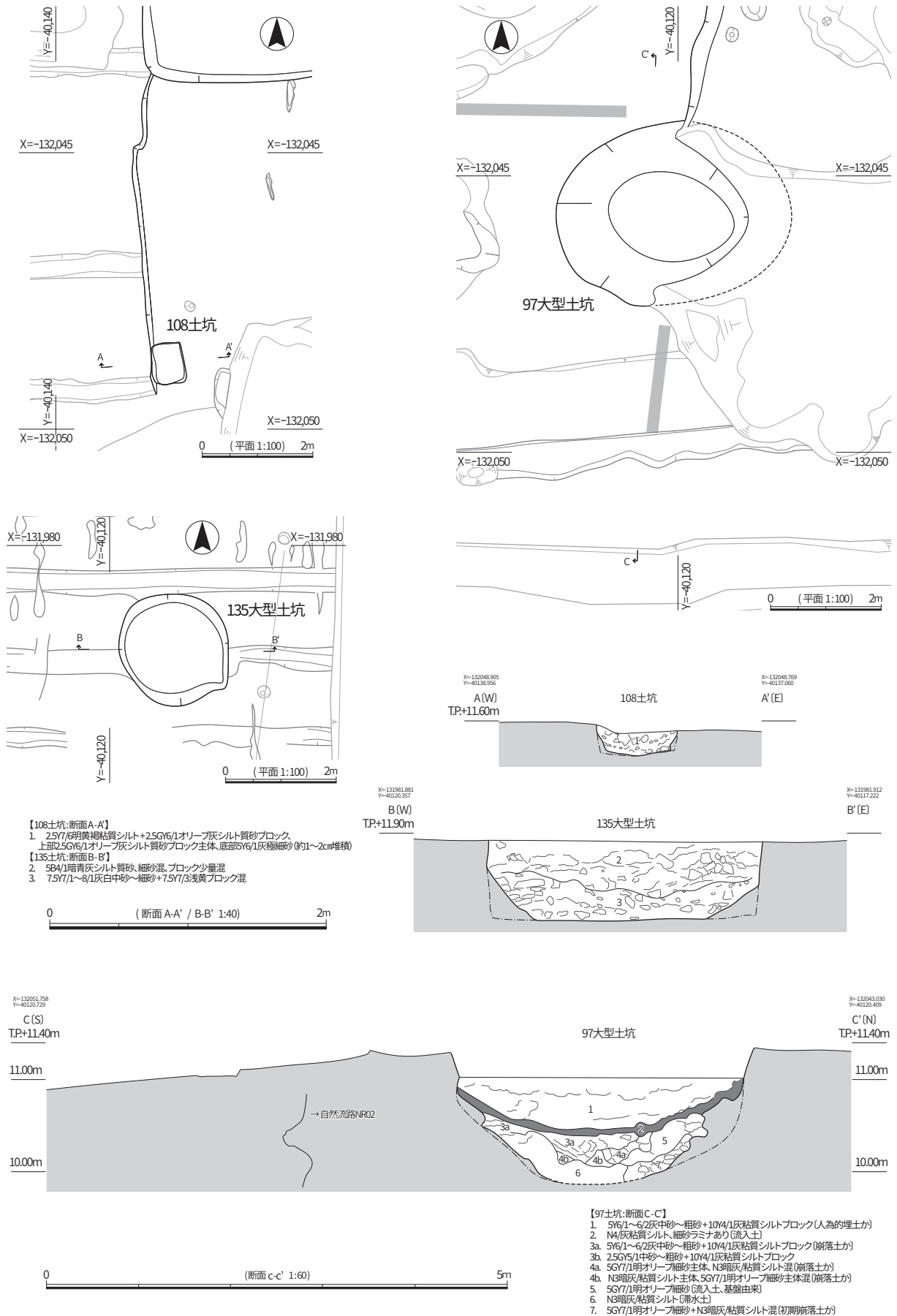


図 21. 上面 大型土坑ほか 平面・断面

135 大型土坑は、径 2.0 m の正円に近い形状を呈し、深さは 0.71 m をはかる。埋土は、上層（2）と下層（3）に大別できるが、いずれもブロック土で充填される。下部の自然流路 NR01 と重複する位置にあるため、底部からの著しい湧水があり、堆積状況と検出状況からみて下部ははやい段階で崩落したと判断でき（3）、そののちに上部が埋め戻されたことが推定できる（2）。以上のような堆積状況から、本来は井戸または水溜遺構の掘削が目的とされたが、掘削直後に崩落したため、直後に埋戻しがなされたことが推測できる。出土遺物は、土師器の細片計 3 点と近世後半の染付が出土しているため、近世後半以降に下ることがわかる。

97 大型土坑は、耕作段にまたがる位置にある東西に長い楕円形の大型土坑である。検出面での径は東西 3.5 m、南北 3.2 m をはかるが、東側上面が後世の攪乱で削平を受けているため、東西は 4.3 m 前後の長さで復元できる。検出面からの深さは 1.45 m で、埋土は上層（1・2）と下層（3～7）に大別される。下層は、ブロック土の充填が認められたが（3～7）、下部の自然流路 NR02 と重複する位置にあるため、調査時には底部からの湧水があり、はやい段階の崩落により下部は埋没した可能性が高い。上層は、下部に自然堆積とみなせる暗色の粘質シルトの堆積（2）が 0.05～0.1 m の厚さで介在し、その上部に淘汰の悪い（1）が堆積している。以上から、掘削・崩落後、一時的に放置されたのち、改めて人為的な埋め戻しと推測でき、本来は井戸または水溜遺構とする目的で掘削がなされたと考えられる。出土遺物は、土師器と黒色土器の細片計 3 点と、中世後半頃とみられる軒平瓦の破片が 1 点出土しており、時期については中世までさかのぼる可能性がある。

14 大型土坑は、現代の攪乱と重複しており、周囲には上述した長方形の土坑が密集している。攪乱の下部で検出されたため本来の形状は不明であるが、検出面での形状はやや東西に長い楕円形を呈し、長径 1.6 m、短径 1.1 m をはかる。検出面からの深さは 0.05 m であるが、本来の深さは 0.4 m 程度に復元できる。埋土はブロック土で充填され、西側～北側にかけて曲物枠が残存する。曲物は土坑壁面の保護する機能が想定できるが、湧水層に達していないことから、井戸として掘削されたのではなく、水溜遺構と推測できる。出土遺物は、瓦器と瓦質土器の細片 2 点のみのため、時期を絞り込むことはできないが、中世後半以降と判断できる。

古池 今回の調査区範囲は、古池の一部が入るような形で設定された。造成盛土が厚く積み上げられていたため、堤防の平面的な検出はできなかったが、調査区 1 の東壁と調査区 2 の西壁で堤防の断面を確認できたため、築堤の時期や層位的な関係を検証するために記録をとった（図 22）。

断面部分では、上面に攪乱等があるため、堤防上端の正確な規模は不明であるが、残りの良い調査区 1 東壁部分では、堤防の高さは 1.3 m をはかる。堤防の盛土は、両地点いずれにおいても近世耕作土の第 2 層（上段 9、下半 11・12 b）上面から直接積み上げていることが観察できる。堤防盛土の下部の第 2 層は、例えば調査区の中央付近のように細かく区分できる地点もあるが、堤防付近では細分が不可能で、2a～2c のどの層に対応するかは明確ではない。ただし調査区 1 東壁部分では、堤防盛土の下部に畦畔があり、その母材がやや粗粒な 2a 相当層とみられることから（11）、築堤時期は近世後半以降とみるのが妥当といえる。

なお、第 2 章で記した通り、古池は文禄 3 年（1594）頃に造成されたのち、文政 11 年（1828）の新池造成時に改修された記録が残されているため、築堤は文政年間の改修時におこなわれた可能性がある。また、調査区 1 東壁部分では、堤の下部で畦畔が確認されているため、元々は堤防の南側にも耕地区画が広がっていたと考えられる。文政年間の改修時に池の拡幅がおこなわれた可能性が推定できるが、古

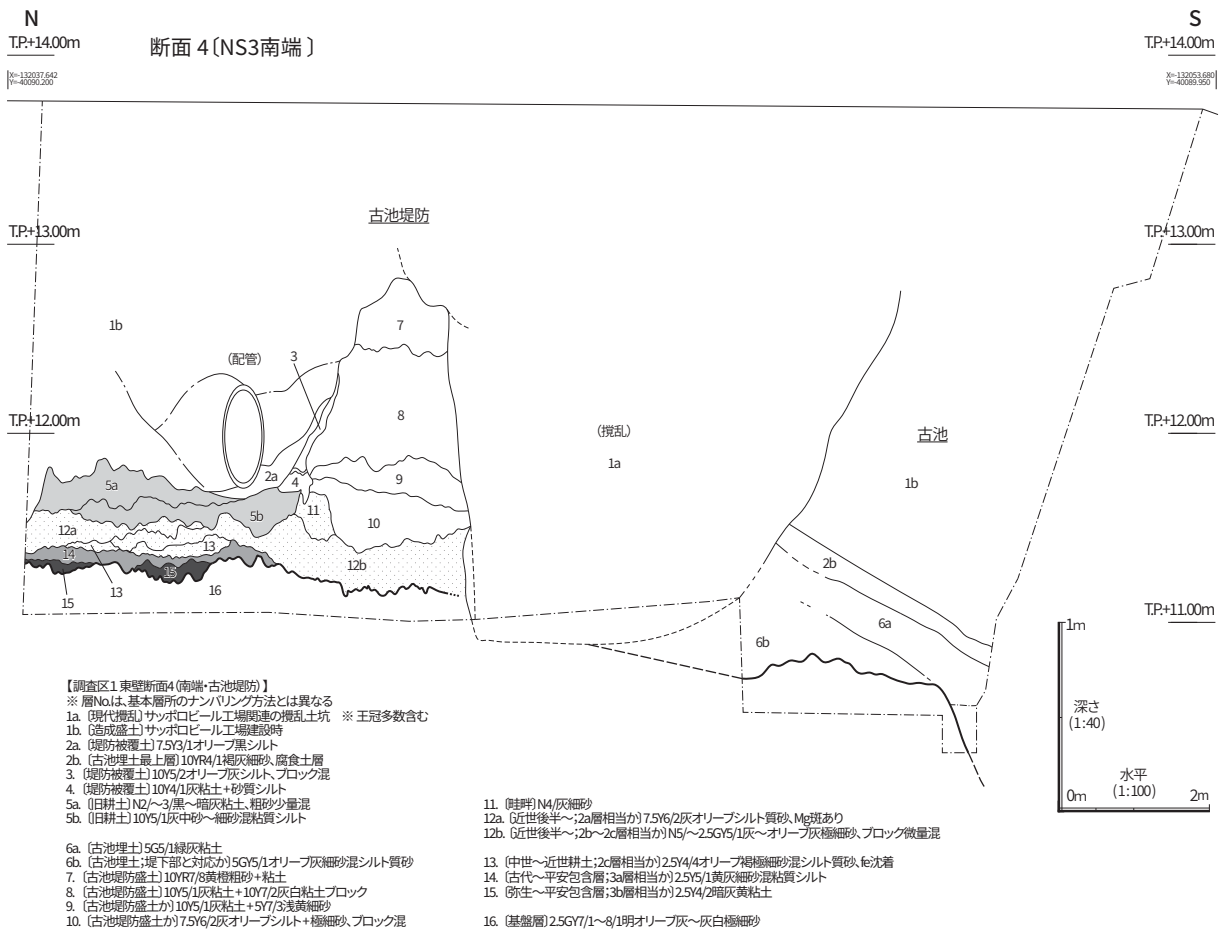
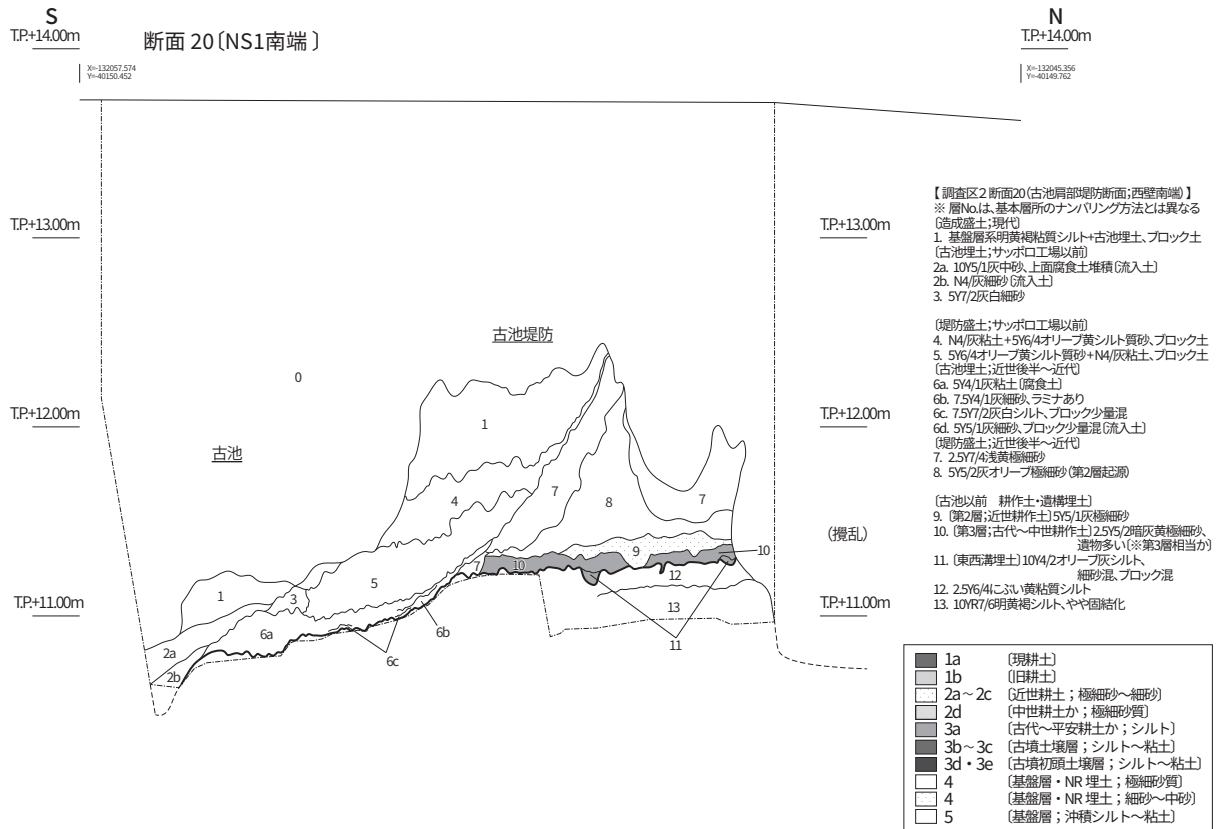


図 22. 古池堤防 断面

池の肩部付近の埋土に古い時期の堆積が認められない点も、このことを傍証する根拠になろう。

小結 今回の調査で確認された上面相当の耕作溝や土坑などは、平成24年度調査区(CJ12-1)の上面とほぼ対応する。遺物などから、おおよそ近世後半以降の姿を捉えたものと判断できるが、97大型土坑など、一部に中世後半までさかのぼる遺構も含まれる可能性がある。付近一帯は、都市化が進む前までは、島上・島下両郡にまたがる条里地割が良好に残存しており、上面の耕作関連遺構は条里制に伴う区画を踏襲する形で近世まで継続的に耕作域として土地利用がなされたことを具体的に示すものである。このことから、調査地周辺一帯も含めた土地利用の変遷を考えるための有用な情報となろう。

第2節 下面の遺構・遺物(1)：奈良時代～中世前半

1. 概要

下面では、古墳時代初頭～中世までの遺構が検出されたが、奈良時代以降と古墳時代以前のものに大別できるため、ここではまず奈良時代～中世前半までの遺構・遺物について報告する(図23)。検出された主な遺構には、掘立柱建物2棟を含む柱穴群や土坑、耕作に関連するとみられる畦畔や溝、土坑群などがある。全体的な遺構密度は低いが、調査地北東では掘立柱建物を含む柱穴群がまとまって検出されたほか、南西側では東西・南北方向にのびる溝群が検出されている。また、轍痕とみられる調査区内を斜め方向にのびる2条1対の細筋なども検出されている。以下では、一定のまとまりがある地点・遺構種類ごとに、各遺構を報告する。

2. 北東の遺構群〔掘立柱建物を含む居住関連遺構群〕

調査地の北東で、掘立柱建物2棟、柱列4列、土坑5基などがまとまって検出された(図24)。2棟の掘立柱建物は、わずかに軸がずれるが、概ね南北方向を志向しており、調査地周辺での条里の施工起源を考える上でも重要な情報となる。そのほかに、掘立柱建物や柱列に伴わない柱穴が約30基確認されているが、これらは建物周辺に偏ってみられることから、何回かの建替えがあったことを示すものとみられる。

掘立柱建物1 調査区1の北端付近で検出された南北3間×東西1間の掘立柱建物で、建物の南北軸は7.1°東に傾く(図25)。南北に長い構造の建物で、規模は南北5.3～5.6m、東西1.7～1.8m、面積9.5㎡をはかる。柱筋の通りはやや悪く、柱間隔は1.5～2.3mまで幅があるが、1.6～1.7m間隔のところが多い。柱穴の平面形は、円形または楕円形で、形が整っていないものも多い。建物を構成する柱穴に近接する位置に別の柱穴があることから、複数回の建替えがあったことがわかる。柱穴の大きさは0.3～0.4m、検出面からの深さは0.20～0.46mをはかる。底面の標高はT.P.+11.4～11.6mの間におさまるが、東側筋の柱穴に比べ西側筋の柱穴がやや深い傾向がみられる。また、隅柱はほかの柱よりもやや深い傾向がみられた。埋土断面から、柱はすべて抜取られたと推定され、断面や底部の柱あたりから、柱の太さは0.1～0.15m程度に復元される。柱掘方埋土は、ブロック混じりの黄灰シルトを主体とする。

柱穴埋土からは、一定量の土器が出土しており、37P出土の(3)など、全形を復元できるものも含まれる。周辺の柱穴も含め、内黒の黒色土器A類碗の出土が目立つが(3～6・12)、土師器皿の細片(9)や両黒の黒色土器B類碗(7・8)、須恵器の壺・甕の破片(10・11)なども含まれる。黒色土器のA類とB類の共伴から、橋本編年のI a～I b期に帰属するとみられ、実年代としては10世紀後半頃の



図 23. 下面 全体平面図（奈良時代～中世前半）



図 24. 下面 北東 遺構群 平面 (掘立柱建物 1・2、柱穴群ほか)

年代値を与えることができる。

掘立柱建物 2 掘立柱建物 1 の西 6 m に位置する南北 3 間×東西 1 間の掘立柱建物で、建物の南北軸は 2.2° 東に傾く (図 26)。掘立柱建物 1 と同様に南北に長い構造の建物で、規模は南北 5.3 m、東西 2.1 ~ 2.2 m、面積 11.7 m² をはかる。柱筋の通りはやや悪く、柱間隔は 1.4 ~ 2.2 m まで幅がある。梁行が 2.1 ~ 2.2 m と間隔が広いのに対し、桁行はやや狭く、中央の 1 間分が 1.4 ~ 1.6 m、南北外側は 1.8 ~ 1.9 m である。柱穴の平面形は、円形または楕円形で、掘立柱建物 1 と比べると形が整ったものが多い、大きさは 0.2 ~ 0.4 m をはかる。検出面からの深さは 1.5 ~ 3.3 m で、2.2 ~ 2.3 m 前後のものが多い。底面の標高は T.P.+11.5 ~ 11.6 m の間におさまり、北東の 63P 以外の隅柱はほかの柱に比べてやや深い傾向がみられた。埋土断面から、柱はすべて抜取られたと推定され、断面や底部の柱あたりから、柱の太さは 0.1 m 前後に還元される。この建物は、自然流路 NR01 の上面に位置しているため、特に西側では基底面の構成層が細砂~中砂となっており、柱抜取埋土・柱掘方埋土ともに砂質が強い。調査時には、下部から湧水する柱穴もあり、西側の 69 P では根石が検出された。

柱穴埋土に伴う遺物は少量であるが、東側の 64 P からはての字状口縁の土師器皿 (13) と黒色土器 A 類椀 (14) が重なり合って出土しており、柱抜取時に人為的に埋納されたと判断される。ほか、67 P・68 P・69 P・70 P から土師器、黒色土器 A 類、須恵器の出土があり、68 P 出土の須恵器甕の破片を図化した (15)。黒色土器 B 類の出土がない点が掘立柱建物 1 との相違であるが、ての字状口縁の土師器皿を含むことから、掘立柱建物 1 と同様に橋本編年 I a ~ I b 期に下ると判断でき、実年代として

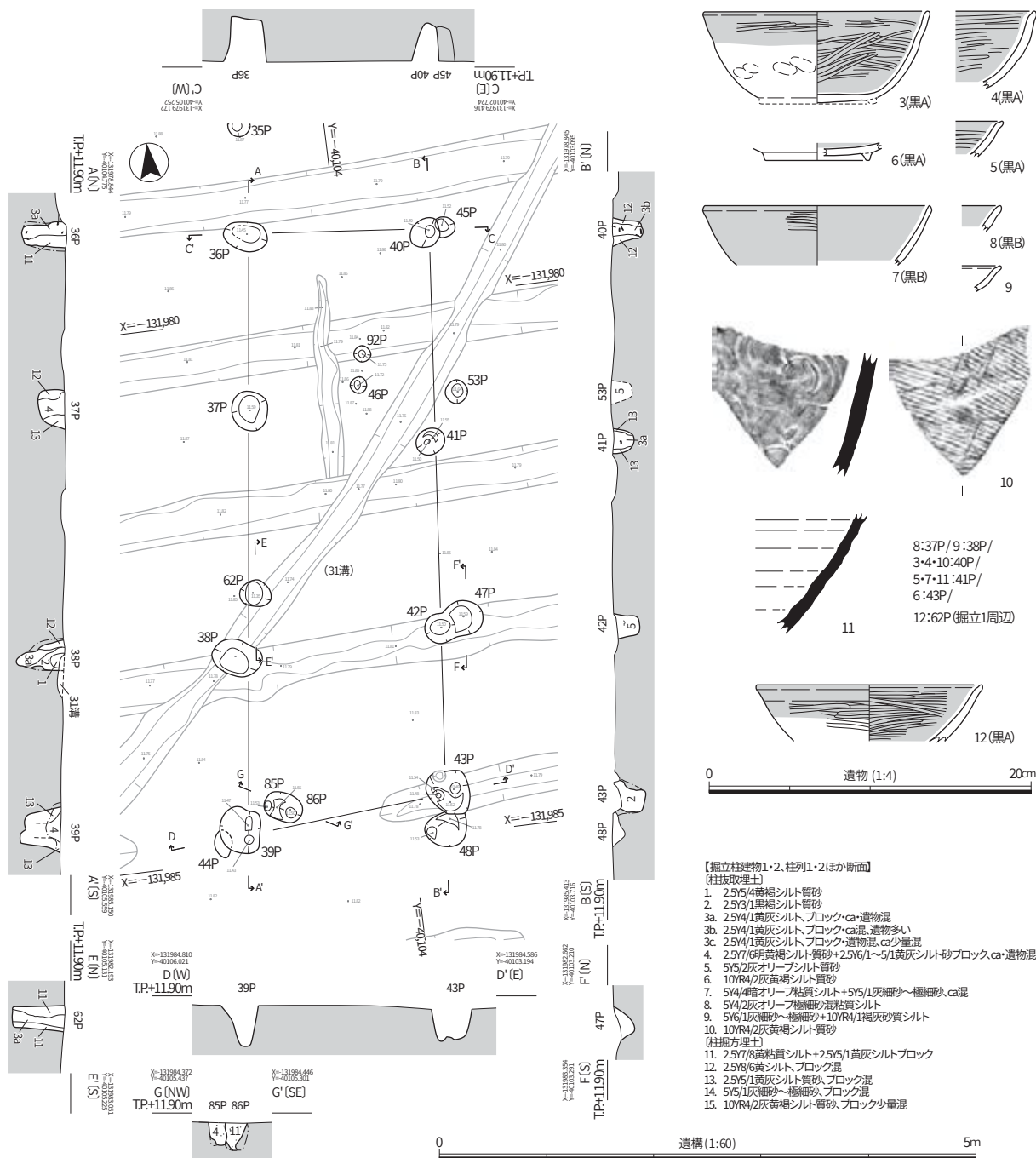


図 25. 掘立柱建物 1 平面・断面・出土遺物

は 10 世紀後半頃の年代値を与えることができる。

柱列 1 掘立柱建物 1 西側柱筋から西に 3.2 m、掘立柱建物 2 の東側柱筋から東に 1.0 m の位置で検出され、掘立柱建物 2 に近接している (図 27)。南北長 3.9 m をはかる柱穴 3 基からなる柱列で、6.2° 東に傾く。柱間はほぼ等間隔で、平面形はいずれも円形を呈する。真ん中の 58P と南側の 61P は、近接した位置に柱穴 (59P / 60P) があり、同じ位置で柱が据替えられた可能性がある。柱穴の大きさは 0.2 ~ 0.4 m、検出面からの深さは 0.3 ~ 0.4 m をはかり、底面の標高は T.P.+11.3 ~ 11.5 m の間におさまる。南北の 91P と 61P は底面の標高値が近いが、中央の 58P がやや深い。埋土断面から、柱はすべて抜取られたと推定され、埋土はブロック混じりの黄灰~黄シルトを主体とする。58P と 61P に近

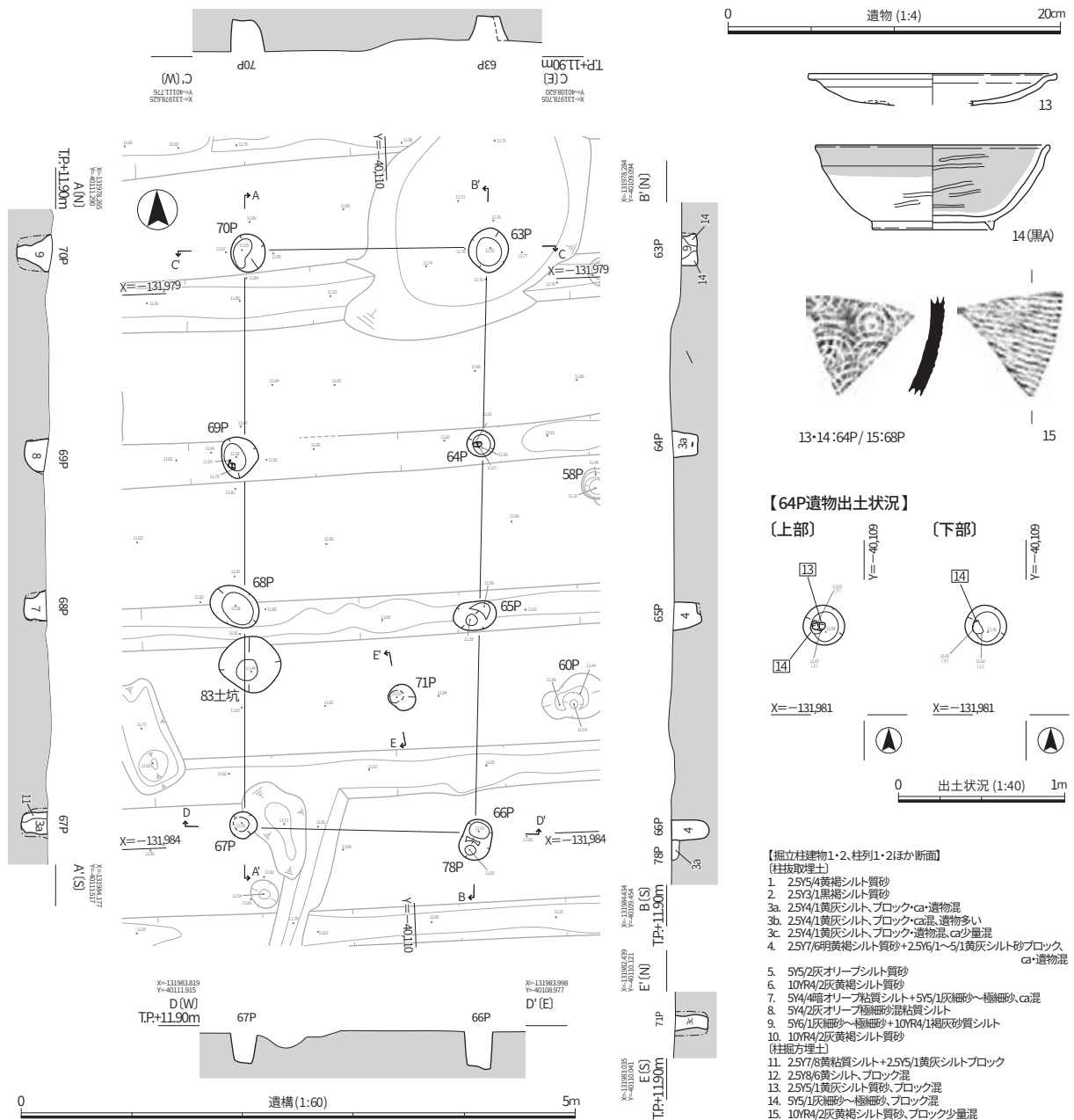


図 26. 掘立柱建物 2 平面・断面・出土遺物

接する 60 P の埋土から土師器や黒色土器 A 類の細片が出土しており、58 P 出土の黒色土器 A 類碗の高台を図化した (16)。検出位置からみて掘立柱建物 1 または 2 に伴う柵または塀となる可能性が高いが、掘立柱建物 2 の東側柱筋との間隔が狭すぎるため、掘立柱建物 1 との関連が推定できる。

柱列 2 掘立柱建物 1 の西側柱筋から西に 2.2 m、掘立柱建物 2 の東側柱筋から東に 2.1 m の位置で検出された柱穴 3 基からなる柱列で、南北長 3.3 m をはかる (図 27)。4.0° 東に傾き、柱間間隔は 1.6 ~ 1.7 m である。柱穴の平面形はいずれも円形を呈し、大きさは 0.3 m 前後である。検出面からの深さは 0.3 m 前後で、底面の標高は概ね T.P.+11.5 m 前後におさまる。埋土断面から、柱はすべて抜取られたと推定され、柱抜取埋土はブロック混じりの黄灰シルトで充填される。柱穴埋土からの出土遺物はないが、検出位置と方位からみて掘立柱建物 2 に伴う可能性が高く、柵または塀と考えられる。

柱列 3 掘立柱建物 2 の西側柱筋の西に 1.9 m の位置で検出された柱穴 4 基からなる柱列である (図

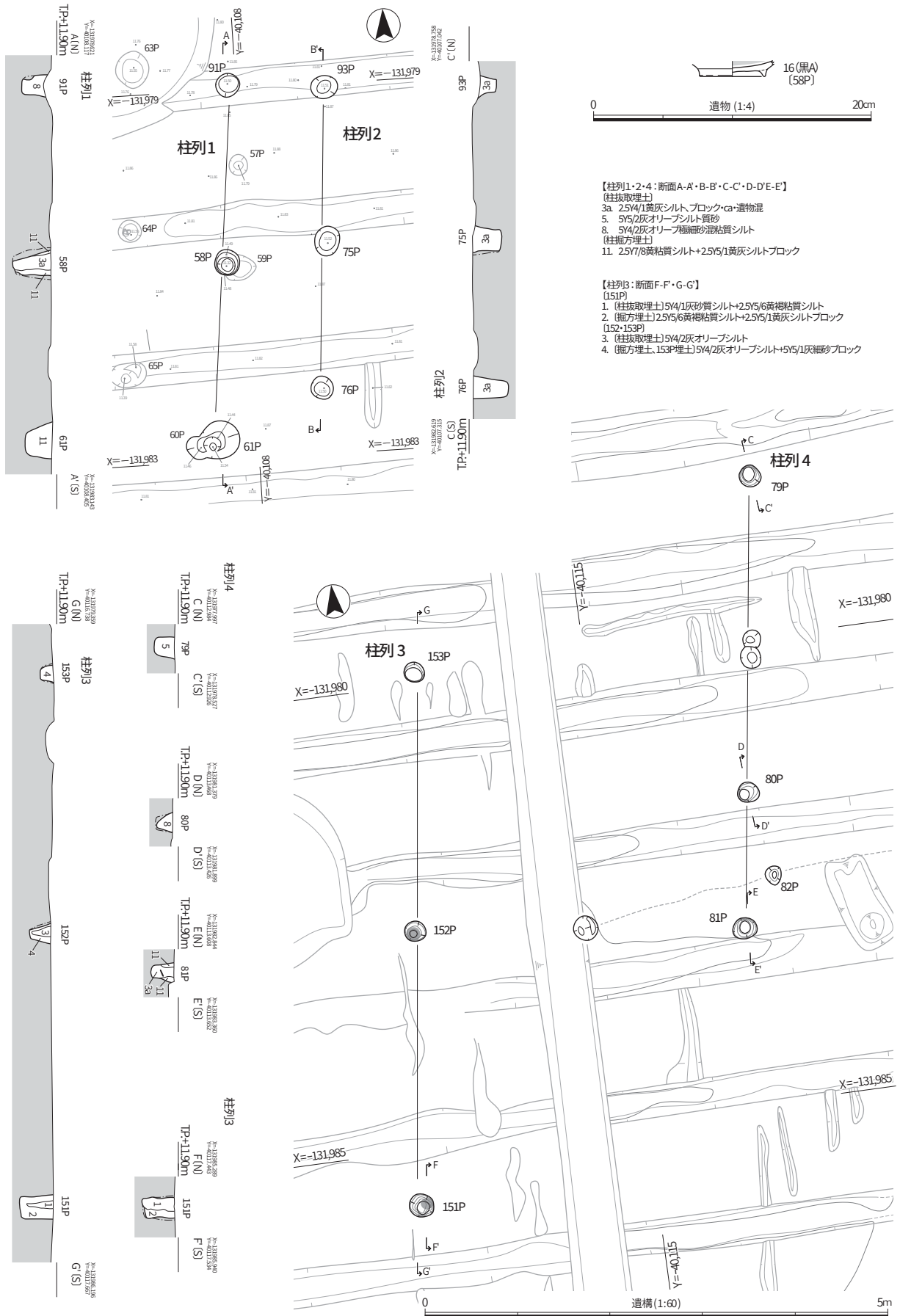


図 27. 柱列 1・2・3・4 平面・断面・出土遺物

27)。調査時は、柱列との認識がなかったが、同じような間隔で柱が並ぶほか、周辺の掘立柱建物や柱列と軸線が概ね揃うことから柱列と認識するに至った。南北長 5.8 mをはかり、7.7°東に傾く。柱間間隔は 2.8～3.0 mである。柱穴の平面形はいずれも円形を呈し、大きさはいずれも 0.2 m強である。南側の 152P と 153P では、平面検出時に柱抜取痕跡が確認できた。検出面からの深さは北側の 153P で 0.15 m、南側の 151P で 0.35 mとやや差がある。底面の標高は T.P.+11.5～11.7 mの間に概ねおさまる。埋土断面から、柱はすべて抜取られたと推定され、柱抜取埋土はブロック混じりの黄灰シルトで充填される。南端の 81P から平安時代頃とみられる土師器甕の細片が出土しているが、図化可能なものはなかった。柵または塀と考えられるが、掘立柱建物 1・2 とはやや距離が離れているため、これらの建物に伴うものであるかは不明である。

柱列 4 掘立柱建物 2 の西側柱筋から西に 5.6 m、柱列 4 から西 3.6 m の位置で検出された柱穴 3 基からなる柱列である (図 27)。南北長 4.9 mをはかり、8.0°東に傾く。柱間間隔は 1.4～1.8 mで、柱穴の平面形はいずれも円形を呈し、大きさは 0.2 m前後である。検出面からの深さは 0.2～0.3 mで、底面の標高は T.P.+11.6～11.7 mの間におさまる。埋土断面から、柱はすべて抜取られたと推定され、柱抜取埋土はブロック混じりの黄褐～黄灰シルトを主体とする。南端の 151P から平安時代頃の土師器碗の口縁部細片が出土しているが、図化可能なものはなかった。掘立柱建物 1・2 やほかの柱列とはやや距離があるが、軸線は概ね揃っているため、これらと同時併存する柵または塀と考えられる。

90 土坑 掘立柱建物 1 の東 7 mに位置する不整形の土坑で、掘立柱建物や柱穴群とはやや離れて単独で存在する (図 28)。北側は近世以降の 4 土坑と重複しており、大きさは東西 0.7 m、南北 0.5 m以上をはかる。検出面からの深さは 0.21 mで、埋土はオリーブ灰色シルトを主体とする。埋土中からは、ての字状口縁の土師器皿 1 点が出土しているが (17)、大ぶりの破片のまま出土していることから、人為的に埋められた可能性が想定される。遺構の性格は不明であるが、出土遺物から掘立柱建物 1・2 とほぼ同時期のものであり、関連する遺構と推測される。

32 土坑 掘立柱建物 1 の東 4 mに位置する不整形の土坑で、掘立柱建物や柱穴群とはやや離れて単独で存在する (図 28)。大きさは径 0.5 m、検出面からの深さ 0.16 mをはかる。埋土は、ブロック混じりの灰黄褐シルトを主体とし、後述の 54 土坑の埋土と類似している。出土遺物はないが、上面に帰属する土坑とは埋土の様相が異なっており、関連する 54 土坑の出土遺物などから、周辺の掘立柱建物 1・2 と関連する平安時代の遺構と推測される。

54 土坑 掘立柱建物 2 の東 3 mに位置する円形の土坑で、径 0.7 m、検出面からの深さ 0.23 mをはかる (図 28)。埋土は、32 土坑と類似するブロック混じりの灰黄褐シルトを主体とする。埋土からは、平安時代頃とみられる土師器の細片が 3 点出土したが、図化可能なものはなかった。出土遺物が少なく、遺構の遺構・性格も不明であるが、掘立柱建物 1・2 とほぼ同時期の関連する遺構と推測される。

83 土坑 掘立柱建物 2 の西側柱筋と重複した位置にある不整形の土坑で、径 0.5 m、検出面からの深さ 0.34 mをはかる (図 28)。周辺のそのほかの土坑と比べると、規模はひとまわり小さいものの、掘立柱建物の柱穴と比べるとやや大きいことから、土坑とみなした。埋土は、上層がブロック混じりの黄灰シルト、下層がブロック混じりの灰極細砂～細砂を主体とする。埋土中から黒色土器 A 類の細片が出土しているが、図化可能なものはなかった。出土遺物が少なく、遺構の性格も不明であるが、ほかの土坑と同様に、掘立柱建物 1・2 との関連が推測される。

145 土坑 掘立柱建物 2 の南西 10 m、柱列 3 の南 7 mに位置する円形の土坑で、掘立柱建物や柱穴

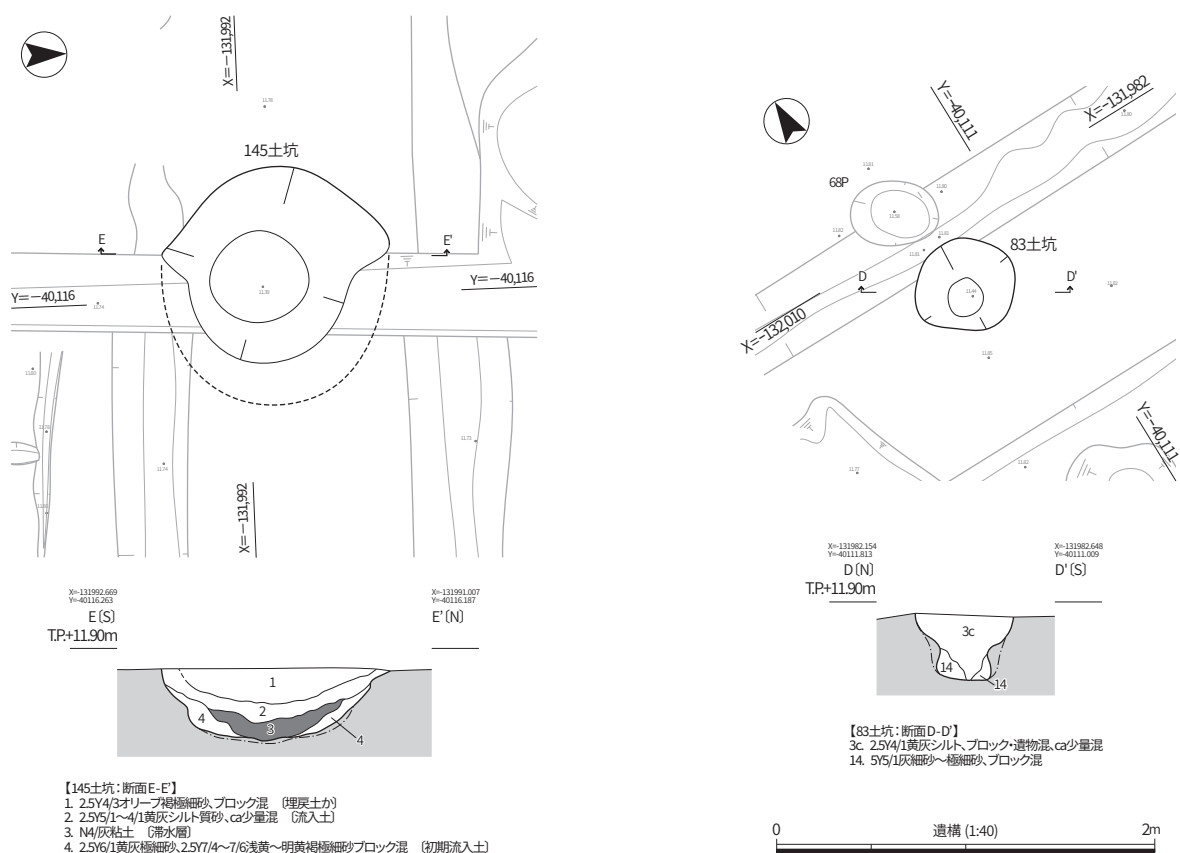
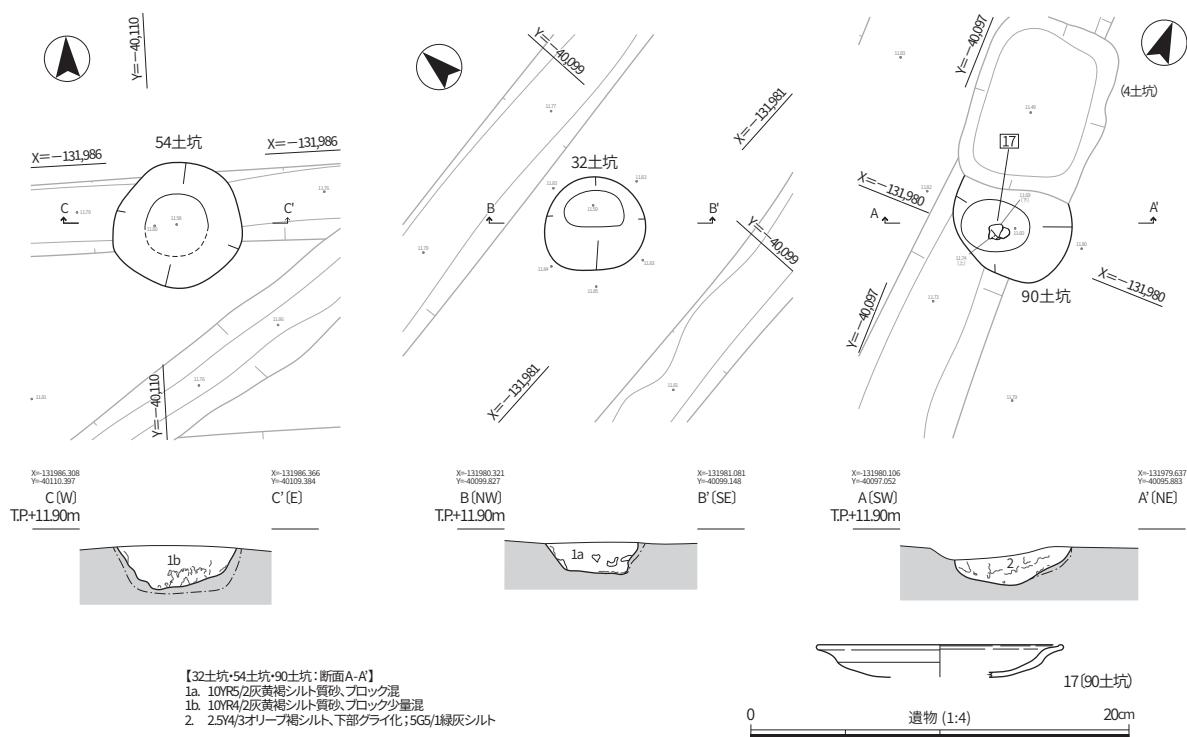


図 28. 90 土坑・32 土坑・83 土坑・54 土坑・145 土坑 平面・断面・出土遺物

群とはやや離れて単独で存在する（図 28）。調査区 1 と調査区 3 の境界に位置することから、東半が調査区の側溝と重複しているものの、径 1.2 m 程度の規模に復元でき、ほかの土坑と比べるとひとまわり規模が大きいことがわかる。検出面からの深さは 0.38 m で、埋土はレンズ状に堆積しており、下半（2）・（3）が自然堆積、上半（1）が人為的な埋戻し土と判断できる。滞水層（3）が認められることから、水溜の機能があったと推測でき、堆積状況からいったん放棄されたのち、人為的に埋め戻されたことがわかる。出土遺物は、土師器と黒色土器 B 類碗の細片が数点出土しているが、図化可能なものはなかった。黒色土器 B 類を含むことから、時期については 10 世紀後半以降と推測でき、掘立柱建物の周囲に掘削された水溜遺構と考えられる。

3. 北西の遺構群〔耕作関連の畦畔・溝・土坑群〕

調査地の中央北西寄りで、正方位を志向する畦畔や溝状遺構等が検出された。ほかでは、南西端付近で、下面に帰属する土坑 2 基が検出されている。

141・137 土坑 調査地北西で検出された 2 基の土坑で、北側の 141 土坑は一部が調査区外にのびる



（図 29）。形態が類似する土坑が上面で 33 基検出されているが、調査区 3 北壁の断面観察から 141 土坑は第 3 層下部から掘り込まれていることが確認された（P 26：図 13）。さらに近接する南側の 137 土坑については、141 土坑と埋土が類似することから下面に帰属する遺構と判断できる。

南側の 137 土坑は、隅丸長方形の平面形を呈し、長さ 1.6 m、幅 1.2 m をはかる。深さは 0.39 m で、埋土は青灰極細砂と明黄褐粘質シルトのブロック土を主体とすることから、人為的に埋め戻されたと判断できる。北側の 141 土坑は、隅丸方形を呈し、検出長 0.6 m で、幅は 0.9 m をはかる。深さは 0.44 m で、137 土坑と同質のブロック土で充填されていることから、同様に人為的に埋め戻されたと判断できる。137 土坑の埋土からは、平安時代の土師器の土釜とみられる細片が 1 点出土しているが、図化可能な遺物はない。遺構の掘り込み面と埋土出土遺物から、平安時代に掘削された遺構と判断でき、遺構の機能・性格としては上面の遺構群と同様に水溜などの機能が想定できる。

図 29. 141 土坑・137 土坑 平面・断面

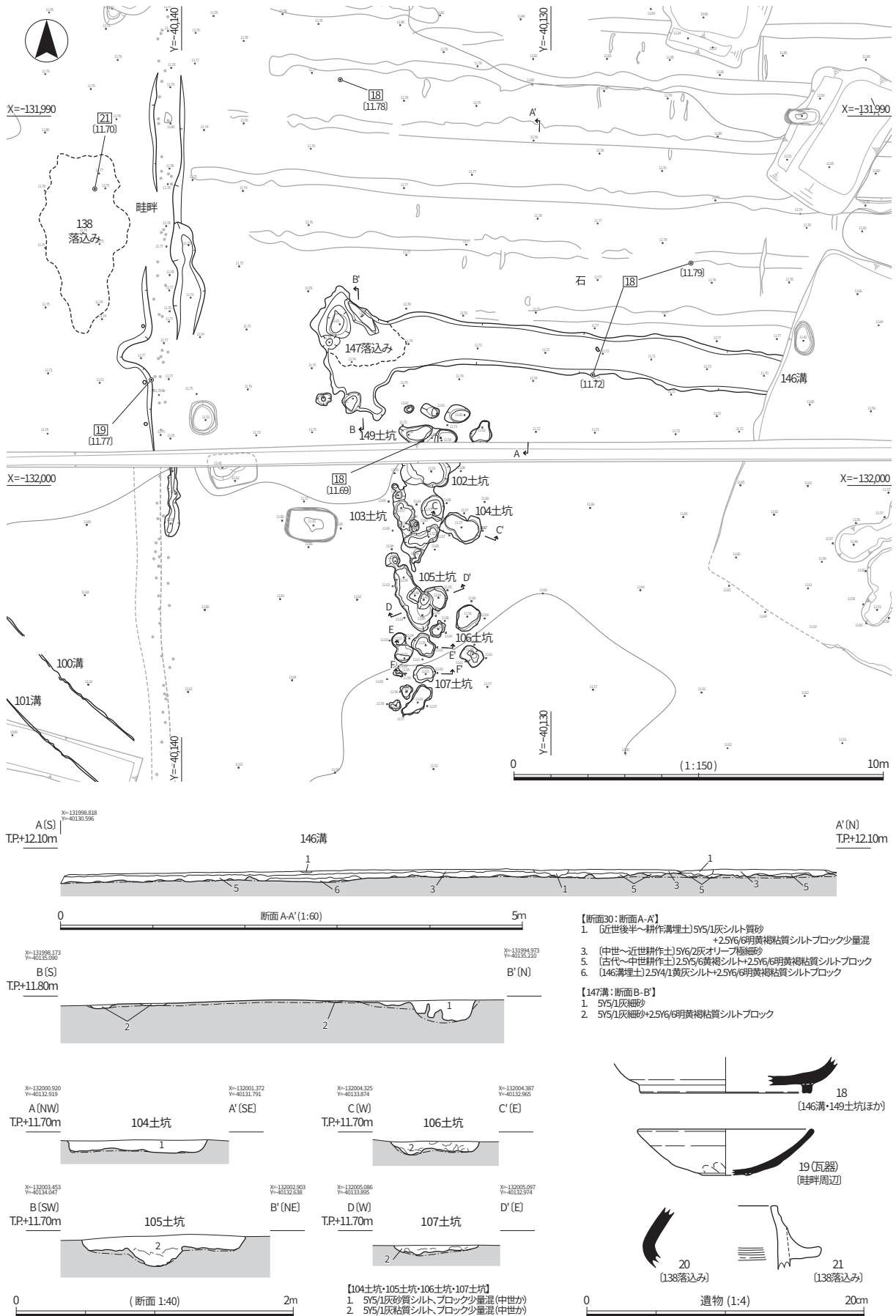


図30. 下面北西 耕作関連遺構 平面・断面・出土遺物

畦畔 調査区3の南西側で南北方向にのびる畦畔が検出された(図30)。検出長10.2mをはかり、上端の幅は約0.6m、高さは最大0.07mである。南半には、西側にむかってわずかにのびる突起状の高まりがあり、反対の東側で検出された溝状遺構(146溝)の延長線上にあることから、この部分も耕地区画を反映する畦畔の一部と判断できる。また、畦畔の東西および南側には、溝状または土坑状の浅い落込みがあり、これらも耕作にかかわる掘り込みの一部と考えられる。畦畔の上面で高台が小型化した瓦器椀(19)が出土したほか、西側の138落込みからは奈良時代～中世の土師器や須恵器、瓦器椀などが出土しており、奈良時代頃の須恵器甕(20)と13～14世紀頃の土師器の羽釜(21)を図化した。検出面とこれらの遺物の年代観から、この畦畔は14世紀頃まではさかのぼるとみて大過はない。なお、上面では、ほぼ同じ位置で擬似畦畔が確認されたほか、近世後半以降の木杭痕跡も重複していたため、現代までほぼ同じ位置に畦畔が踏襲されていたことがわかる。

146溝・147落込み 畦畔の東5mで東西方向にのびる溝状遺構(146溝)が検出された(図30)。検出長12.1m、幅約1.2mをはかり、検出面からの深さは最大0.06mである。146溝の西端部分には、南側にわずかにひろがる不定形の浅い落込みがあり、この部分を147落込みとした。南北3.5m、東西1.9mをはかり、最も深い北端の深さは0.15mである。溝底の標高は、東西で大差はなく、区画等の意図があったと推測される。埋土は、146溝ではブロック混じりの黄灰シルトを主体とし、147落込みでは灰細砂を主体とする。146溝から須恵器杯Bの破片(18)と弥生時代後期～庄内式期の土器の細片が出土したが、全体の出土量はごくわずかである。そのため遺構の帰属時期を限定するのが難しいが、平安時代以降の遺物を含まないことから、奈良時代にさかのぼる可能性がある。ほぼ正方位を志向する点をふまえれば、この溝は条里にかかわる遺構である可能性が高く、付近一帯の条里の施工が奈良時代にさかのぼることを暗示する遺構として重要である。なお、146溝の杯Bの破片(18)は、近接する149土坑や基盤層直上で接合する同一破片が出土しており、溝の掘削と併せて周辺一帯の耕地区画の造成が進められたことがわかる。

ところで、この溝の北側では上層面で東西方向の耕作関連の溝群が検出されているが、南側では検出されていない。このことから、この溝の掘削以降、近世後半まで長期間にわたって耕地区画が踏襲されたと判断される。

102～107・149土坑 146溝・147落込みの南側で検出された不定形の土坑群で、南北8.5m、東西2.7mの範囲に密集する(図30)。不定形の土坑群が南北方向に連なる形で密集して掘削されているが、各々の形状は楕円形のものや細長いものがあるなど定まっていない。大きさや深さもまちまちで、大きさは2.0～0.2m、深さは最大で0.23mをはかる。埋土は、灰色粘質シルトまたは砂質シルトを主体とし、ブロックが少量混じる。出土遺物は僅少であるが、149土坑と103土坑から古代の須恵器片が出土したほか、102土坑から庄内式期とみられる土師器の細片が出土している。特に149土坑出土の須恵器杯は、上述の146溝出土の杯B(18)と接合する同一の破片で、両遺構の関連が示唆される。遺構の性格は不明ながらも、上述の146溝との関連を示すほか、南北方向に拡がりをもつ点などから、条里とのかかわりをもつ耕作関連遺構とみなすのが妥当である。

4. 南西半の遺構群

調査地の南西で東西方向と南北方向の溝群がまとまって検出された。現行地割に即した形で一定の間隔で溝が検出されていることから、相互に関連性をもつ遺構群と認識できる。

東西溝群(111～118溝) 調査地南西で検出された東西方向にのびる計8条の溝群で、最大長11.3m

(115 溝)をはかる(図 31・32)。溝の幅は 0.33～0.48 mで、溝 8 条はほぼ並行し、いずれも方位に即して東西にのびる。溝どうしの間隔は、北端の 111 溝と 112 溝は 0.8 mの間隔で近接しているが、ほかは 2.0～3.8 mの間隔が空いている。溝の東端は、耕作段を境に途切れているため、後世に削平を受けた可能性が高い。南北の拡がりについては、溝どうしの間隔から、111 溝が北端となる蓋然性が高い。その一方で、南側では古池の肩部付近に 118 溝が存在するため、南側については溝群が拡がる可能性が高く、古池の造成に伴って削平されたと考えられる。

溝の深さは 0.1 m前後で、埋土は細砂混じりの暗色のシルト～粘質シルトを主体とする。溝底の標高値は東西で大きな差はないが、いずれも東側に比べて西側は 0.05 m程度高い。埋土に土壤化層が充填されていることから、恒常的な流水は認められないが、周辺の地形は西側から東側に緩やかに下ることから、東側にむかって導水または排水するための機能が推定できる。

埋土からは、庄内式期と奈良～平安時代頃の土師器の細片が少量出土したのみで、図化可能な遺物はなかった。ただし上面からは、古墳時代中～後期(22～24)や奈良時代(25～28)、平安時代(29～31)の遺物が一定量出土している。溝群の埋土には中世以降の遺物を含まない点や、上面出土の遺物の様相などから、東西方向の 111～118 溝は奈良時代～平安時代前半に機能した耕作関連の溝と推定できる。

なお、南端付近の 116 溝・117 溝の周辺で径 0.2～0.3 mの小ピットが 2 基検出されている。出土遺物を伴わないため時期については不明であるが、埋土から同時期の遺構の可能性はある。

南北溝群(119～121 溝) 東西方向の 116 溝の東 5 mに位置する南北方向の 3 条の溝で、北端は攪乱によって、南端は攪乱および古池の造成によって削平を受けている(図 31)。最も残りの良い西側の 119 溝の長さが 3.1 m、溝の幅は 0.29～0.48 mである。溝 3 条はほぼ並行し、いずれも方位に即して南北にのびる。溝どうしの間隔は 0.9～1.1 mで、深さは 0.1 m程度である。埋土は、細砂混じりの黄褐～褐灰粘質シルトを主体とする。溝底の標高値は、北側に比べて南側がやや低い傾向にあり、地形の傾斜に沿っている。検出範囲が狭いため、確実ではないものの、南側にむかって導水または排水するための機能が推定できる。

埋土からは、111～118 溝と同様に庄内式期と奈良～平安時代頃の土師器の細片が少量出土したのみで、図化可能な遺物はなかった。ただし溝の上面付近からは、奈良時代とみられる平瓦(34)と 10 世紀前後の須恵器の鉢または盤の底部(33)が出土しており、溝が機能した時期の一端を示す可能性が高い。

5. 轍痕

調査地の中央東半と中央西半の 2 か所で、斜め方向にのびる 2 条 1 対の細溝群が、2 組検出された(図 33)。東側の北東～南西方向にのびる SD3200・3201 は、隣接する平成 24 年度調査区(CJ12-1)で轍痕として報告された細溝の延長部分であり、今回の調査区の西側で新たに検出された 100・101 溝も同様の性格の遺構と認識できる。

これらの遺構は、いずれも下面(基盤層直上)で検出されたことから、中世以前の遺構とみなすことができるが、溝の幅が狭く、埋土からは遺物は出土していない。一方、隣接する東側の平成 24 年度調査区(CJ12-1)では、SD3200・3201 のほかにも類似する轍痕が複数検出されているが、X＝－132,000 以北では奈良～平安時代に機能したとされる水路 SD2070・2071・3085 の上面で轍痕が検出されていることから、水路の埋没後の遺構とみなすことができる。

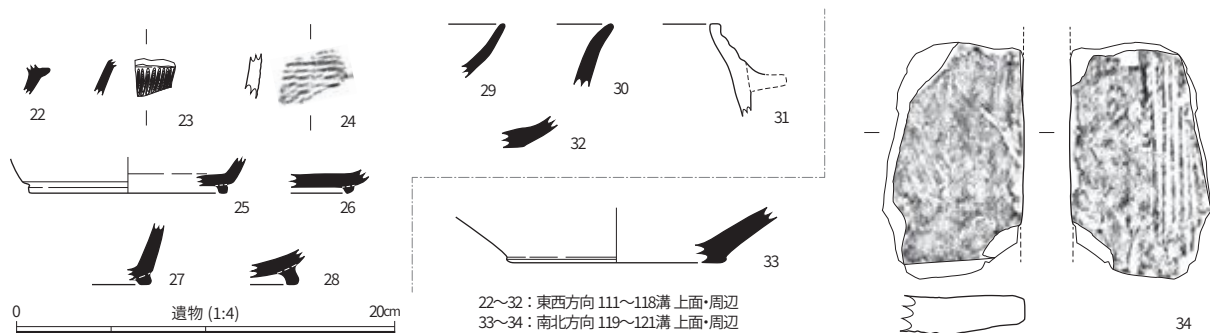
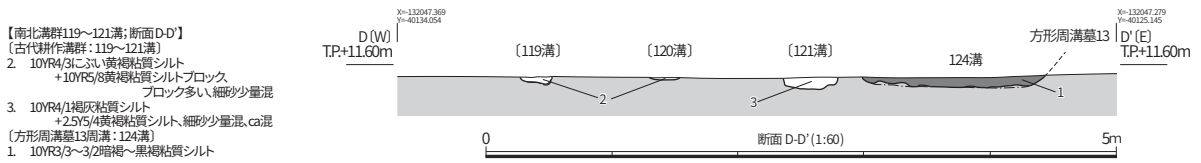
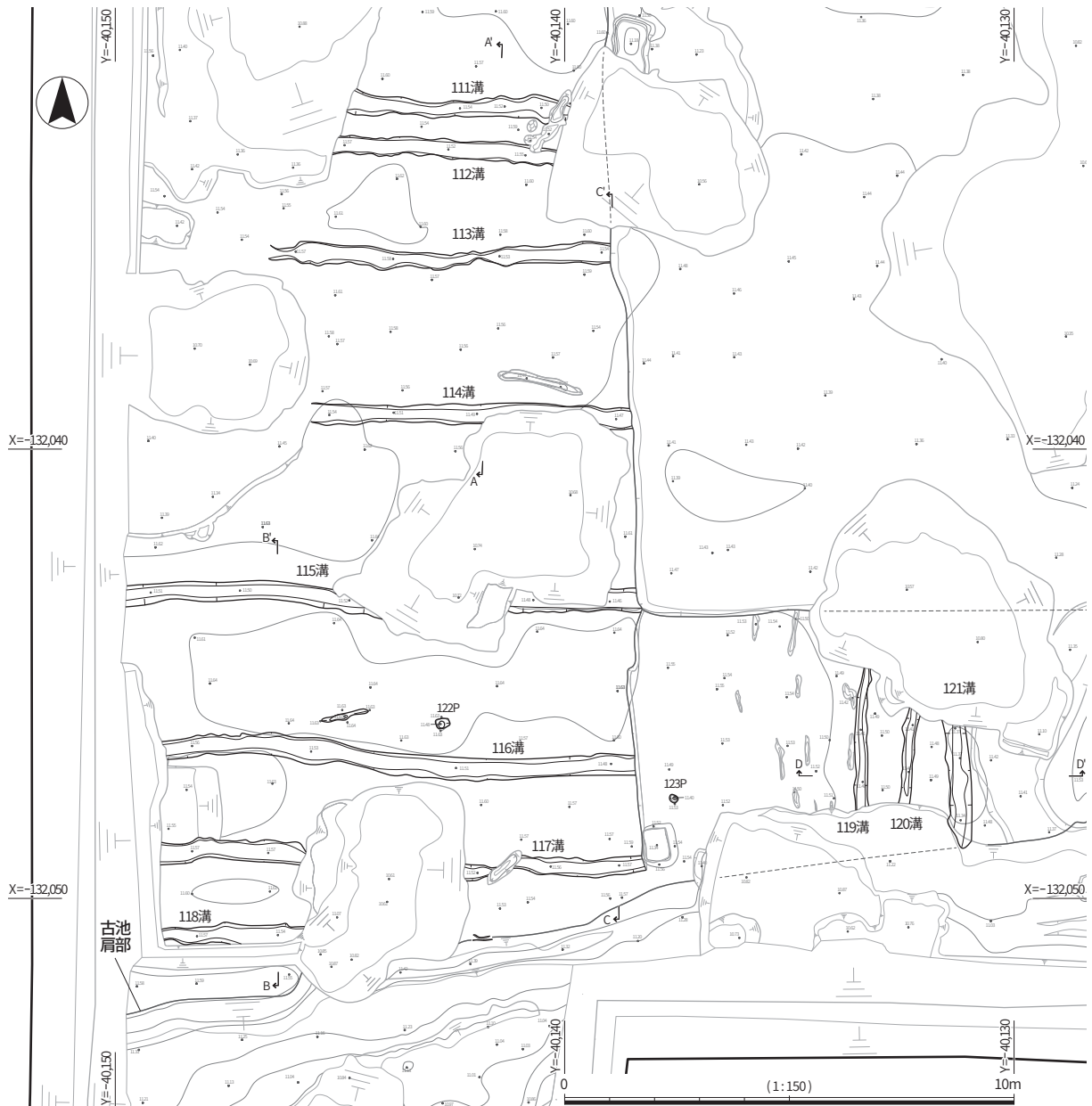


図 31. 下面 南西 東西・南北耕作溝群 平面・断面・周辺出土遺物

なお、調査時には、調査地内で地震痕跡とみられる基盤面の亀裂や噴砂が確認されていたため、この遺構についても人為的な遺構ではない可能性も念頭に置きながら調査を進めていた。ただし、断面の確認によって、下部からの噴砂ではないことが確定し、人為的な遺構であることが確かめられている。

SD3200・3201 調査地の中央東寄りで検出された北東－南西方向にのびる溝状遺構で、今回の調査区内では23 m分が検出されたため、隣接調査区と併せると総延長は28 mとなる。隣接する調査区では、2条1対の溝状遺構が検出されているが、今回の調査区では近接した位置で2条1対の溝状遺構が2組確認できる。つまり北端部分と南端部分は別の溝状遺構と認識でき、北側の細溝群は断面B - B'ライン付近を境により西側にむかってのびるのに対し、南側の細溝群はより南側にむかってのびる。北側・南側ともに細溝群の検出長は20 mをはかり、2条の細溝の間隔はいずれも1.45～1.5 mである。細溝の幅や深さ、埋土の特徴については、いずれも地点ごとに差があり、幅については基本的には0.1 m以下、深さはいずれも0.05 m以下である。ところどころで途切れている部分があるほか、南側の細溝群では南半では2条1対のうち南側の片方だけの検出に留まっている。

100・101 溝 調査地の中央西半で検出された2条1対の溝状遺構で、検出長は45 mをはかる。北西－南東方向に湾曲しながらのびているが、南半ではところどころで途切れているほか、南端部分については後世の攪乱で削平されている。2条の細溝の間隔は1.45～1.5 mで、細溝の幅は0.05 m以下、深さは0.1 m以下で、上述のSD3200・3201と類似する。埋土の特徴も地点ごとにちがいがあ

6. 包含層ほか出土遺物

包含層および上層遺構から出土した遺物は、ほとんどが細片で、出土遺物の量自体も少ない。そ

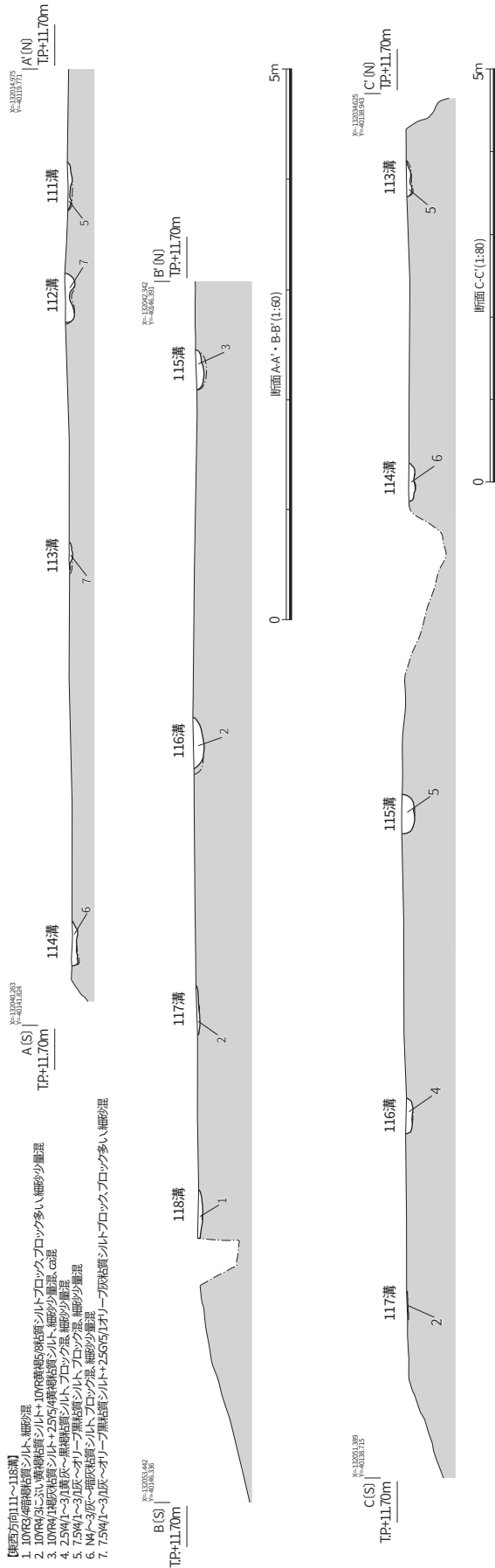
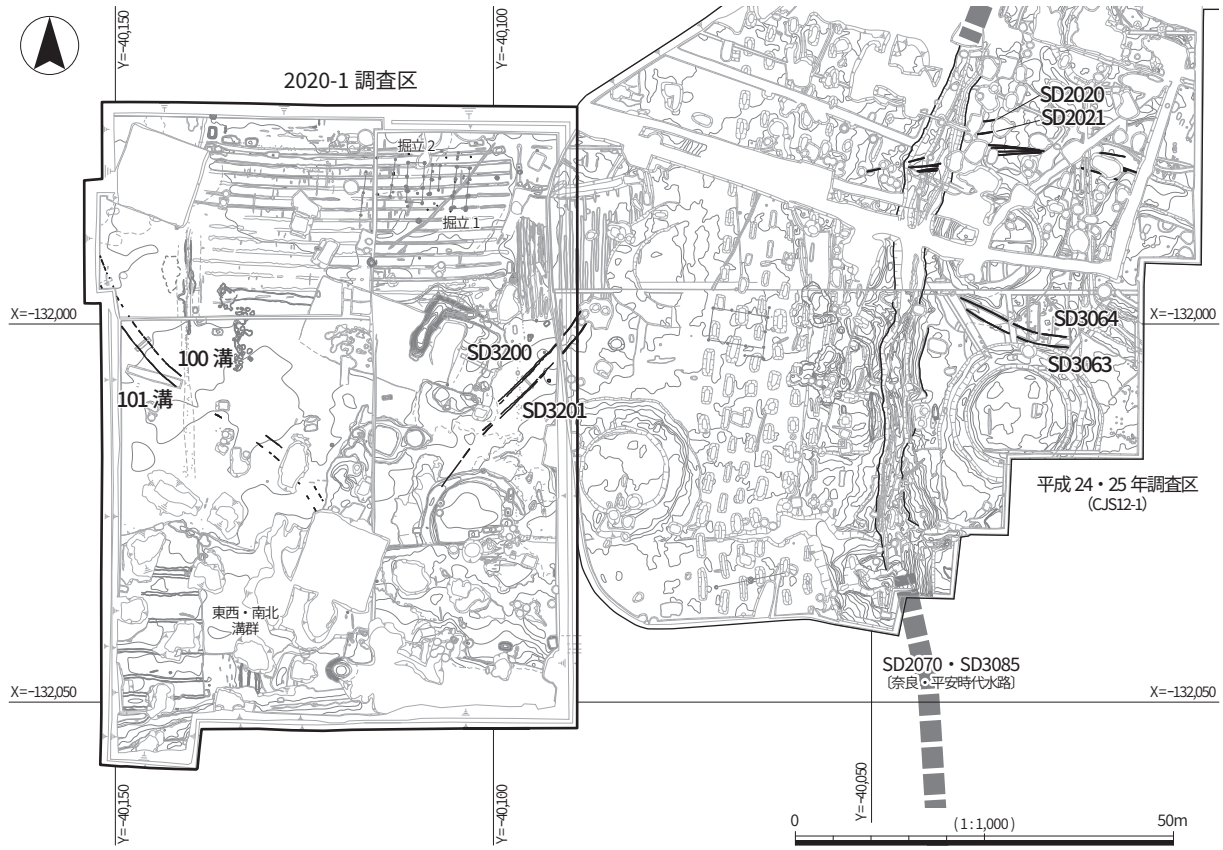
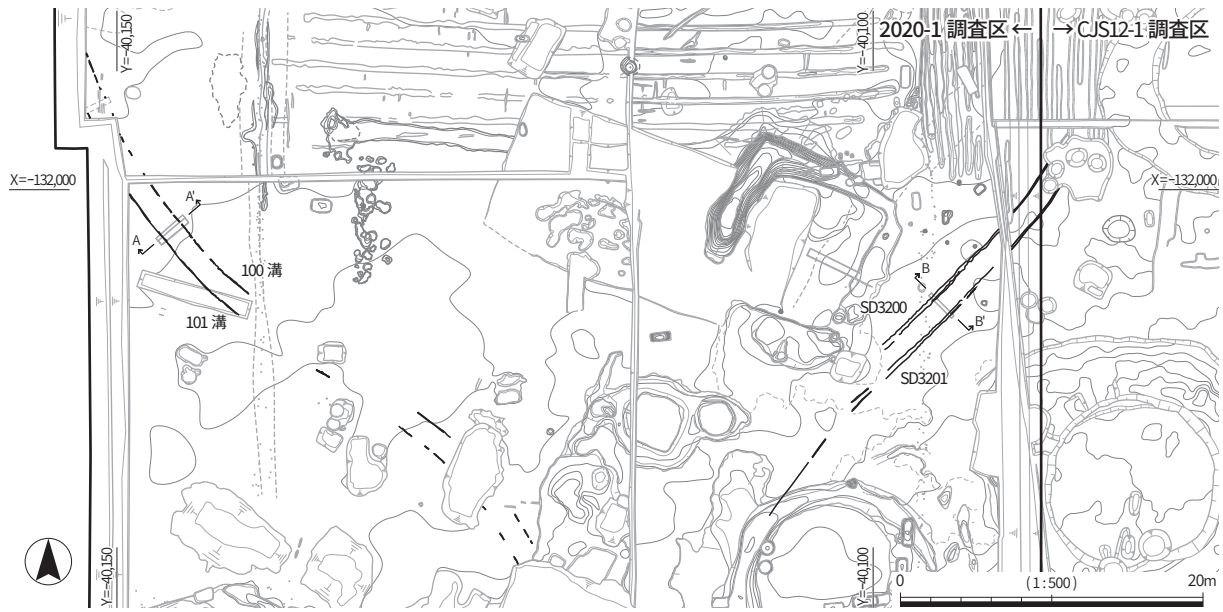


図 32. 下面 南西 東西耕作溝群 断面



【キャンパス内全体 轍痕 検出状況】



【2021-1 調査区 轍痕 平面】

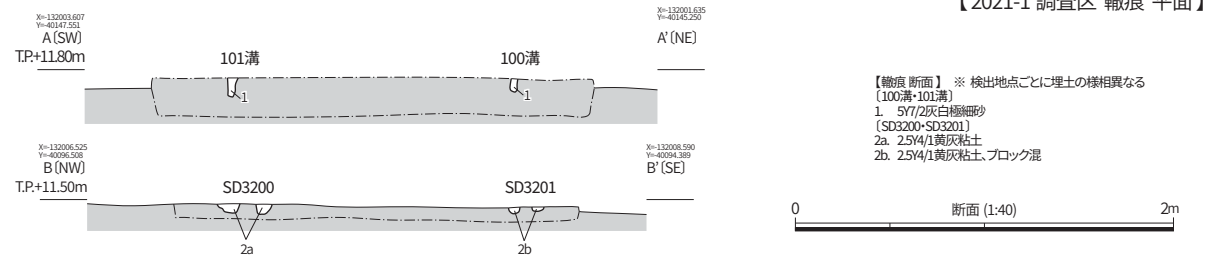


図 33. 下面 轍痕 平面・断面

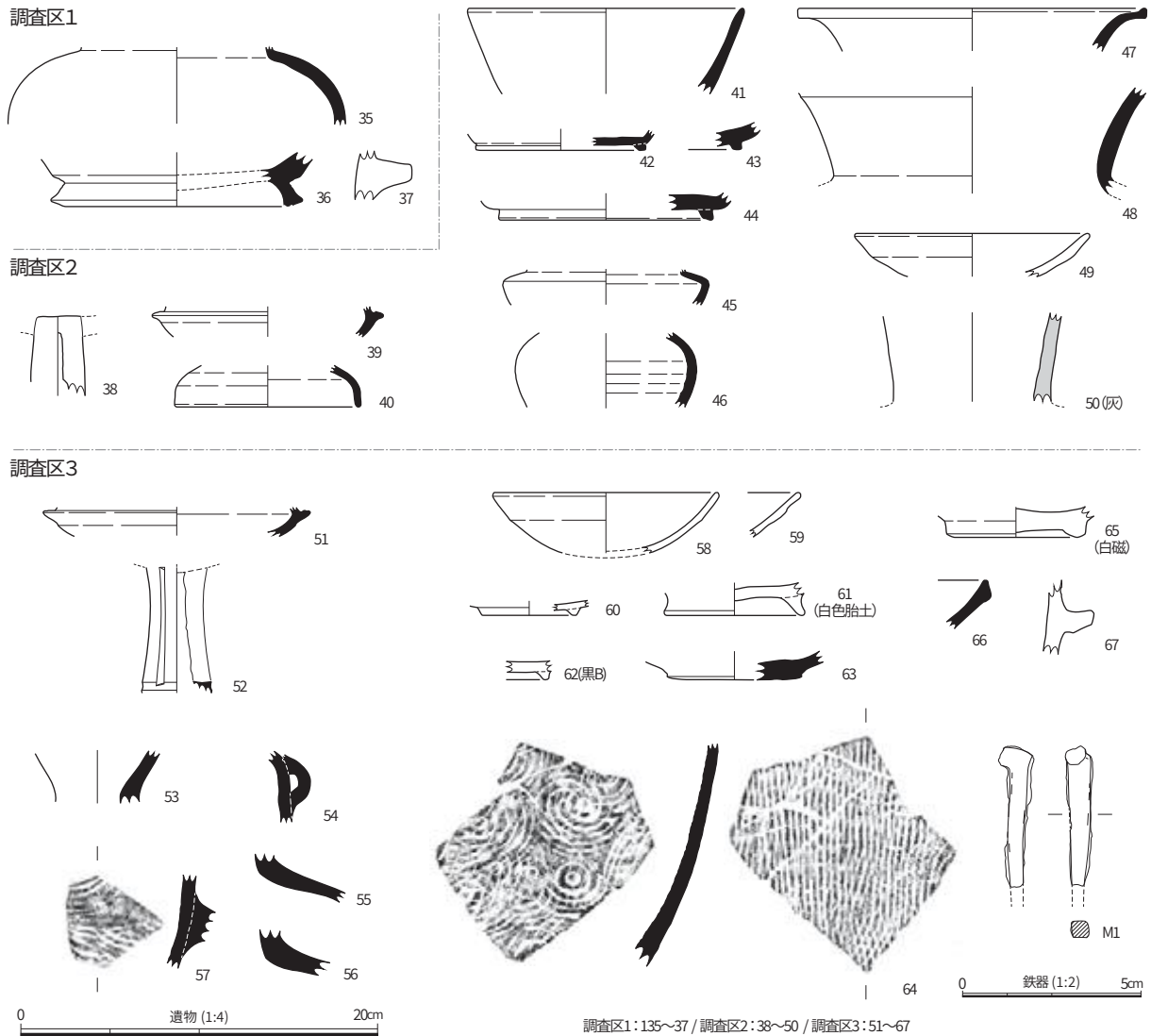


図 34. 下面 包含層出土遺物（古墳時代中期～中世）

のなかで、下面の遺構との関連が想定される古墳時代中期～中世までの遺物については、図化可能なものはすべて抽出・図化した（図 34）。各遺物の出土地点や層位等の情報については、巻末の一覧表に記載しているが、全体的な傾向としては、奈良時代と平安時代の遺物が一定量みられるのに対し（35～37 / 41～50 / 53～64）、古墳時代中期～後期（38・39 / 51・52）、飛鳥時代（40）、中世（65～67）の遺物は限定的である。このなかで、調査区2の包含層出土遺物（38～50）は、いずれも調査区の北西側、畦畔の延長ラインより西側から出土したものであり、ここでは奈良時代の遺物が多く（41～48）、あまり一般的な集落での出土がない壺 Q（47）などのやや珍しい器種も含まれる。西半南端では東西方向の西側からのびる溝群が検出されており、溝群の上面・周辺でも奈良～平安時代の遺物がまとも出土していることから（P54：図 31）、調査地の西側に同時期の居住関連遺構が存在する可能性がある。

そのほか特徴的な遺物としては、古墳時代後期、TK43 型式期の長脚 2 段スカシの高杯脚部（52）や、蔵骨器などに使われる奈良時代の壺 A（35・36）、奈良時代後半～平安時代初頭頃の須恵器の壺 N の肩部（54）、灰釉陶器の長頸壺（50）、白磁（65）などがある。また、高台をもつ土師質の椀（60・61）は、畿内ではあまり類例がない。特に白色胎土の（61）については、胎土や形態的な特徴から山陽東部から

らの搬入品の可能性が高く、時期については11～12世紀代頃とみられる。土器以外では、調査区3から鉄釘(M1)が出土しているが、時期については不明である。

7. 小結

ここまで、下面で検出された遺構・遺物について報告してきた。全体的にみれば、遺構は希薄で、出土遺物も決して多くはないが、2棟の掘立柱建物や耕作関連の遺構群が一定のまとまりをもって検出されるなど一定の成果が得られた。

立命館大学いばらきキャンパス内では、隣接する東側の平成24年度調査区(CJ12-1)で古代～中世の柱穴や土坑、耕作関連の水路や溝などがこれまでに確認されているが、今回の調査区と同様に遺構・遺物は散在的な分布を示している。掘立柱建物の復元も試みられてはいるものの、柱穴がまとまって検出された地点はなかったことから、今回の調査で一定の範囲に複数の掘立柱建物や土坑がまとまりをもって検出されたことは貴重な成果といえる。ただし2棟の掘立柱建物は、出土遺物からいずれも10世紀後半頃の建物と判断できるものの、建物軸がそれぞれ微妙に異なっていることから、同時併存であるのか時期差があるのかについては、検討を要する。このほかにも、調査地南西で耕作溝がまとまって検出されているが、先の建物群も含めていずれも正方位を志向することは重要である。いずれも条里に規定された遺構群とみなすことができるため、古代以降の開発の展開や土地利用の変遷を考えるための手がかりとなる成果となろう。

なお、調査地の東方200～250m地点のキャンパス外の複数の調査区では、飛鳥時代～平安時代の建物遺構や井戸などが豊富に検出されている。キャンパス内の調査区では、この地点に比べると明らかに同時期の遺構・遺物が希薄であることから、周辺の調査区で検出された遺構群との関連や、周辺一帯の総体的な土地利用の検討が課題といえる。

第3節 下面の遺構・遺物(2)：弥生時代中期～古墳時代〔周溝墓群ほか〕

1. 概要および方形・円形周溝墓群の呼称

下面で検出された遺構のうち、ここでは古墳時代以前とみられる遺構・遺物について報告する(図35)。検出された主な遺構は、古墳時代初頭～前期前葉(庄内式期～布留式期前半)を中心とした時期の方形周溝墓・円形周溝墓5基があり、このほかに時期不明の溝2条(31・52溝)がある。周溝墓群は、後世の削平により埋葬施設はすべて残存していなかったが、周溝内から土師器が出土するものがいくつかみられることから、当該時期に属すると考えられる。

東側隣接地の平成24年度調査区(CJS12-1)では、古墳時代中期後葉～後期前葉とみられる古墳が8基検出されているが、このうちの2基(古墳3・古墳4)が今回の2020-1調査区の周溝墓群と近接している。特に南側の古墳3については、周溝の一部が今回の調査区にもかかっており、周溝に関連する可能性が高い落込みが部分的に検出されている。

周溝墓の呼称(番号)については、前回の平成24年度調査区(CJS12-1)との関連が想定されたため、連続する番号を振った。そのため本調査区で検出された5基の周溝墓は、周溝墓9～13までの番号を振っている。墳丘・周溝等各部の計測値については、図36に示す通りであり、墳丘規模は墳丘裾(周溝底)間の距離(図36:a)とする。また、各計測値が削平を受けた値である場合は、〔 〕で明示する。また、方形周溝墓は、低墳丘の事例も少なくないが、今回の調査では埋葬施設はすべて削平されており、

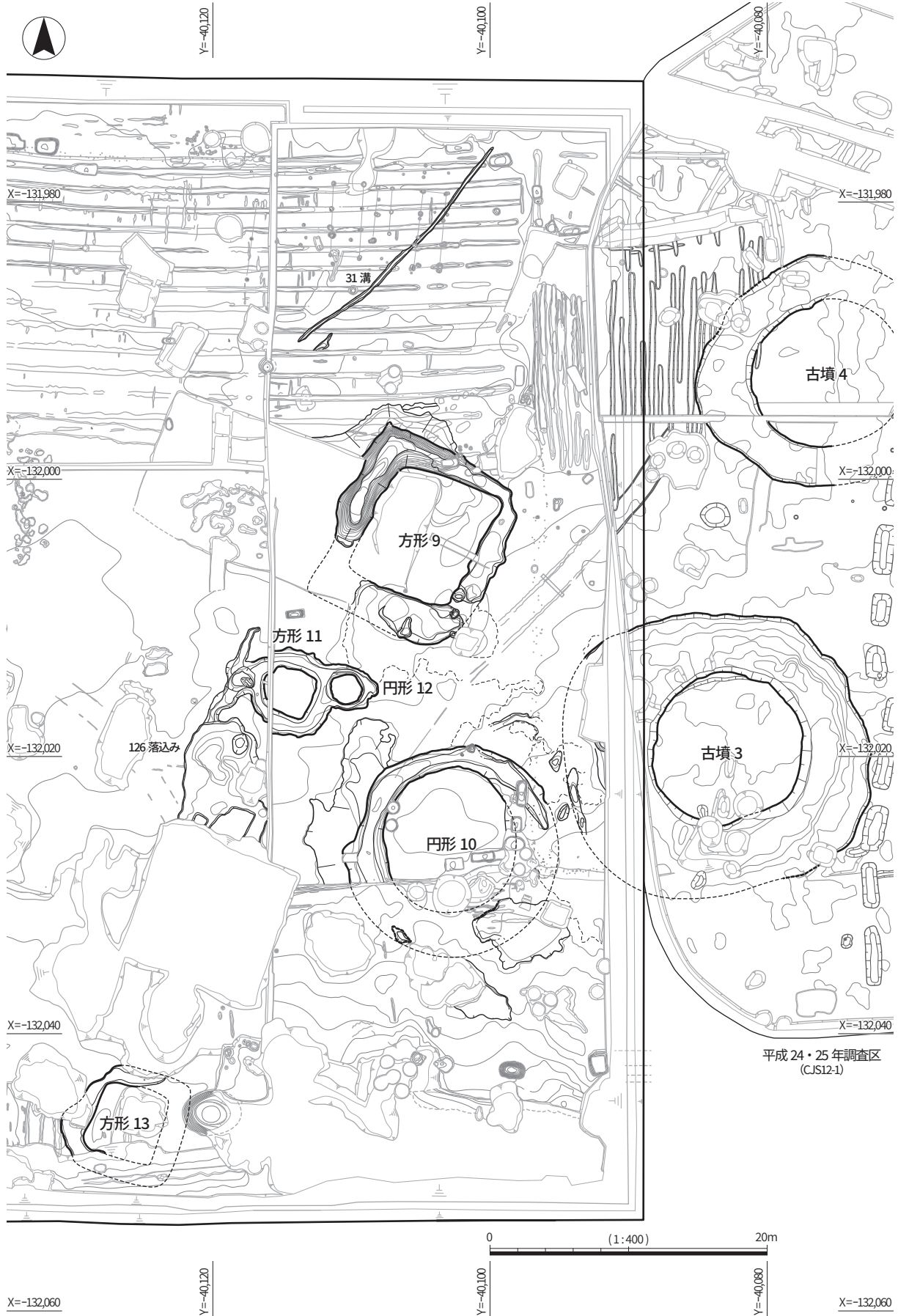


図 35. 古墳時代初頭～前期の周溝墓群

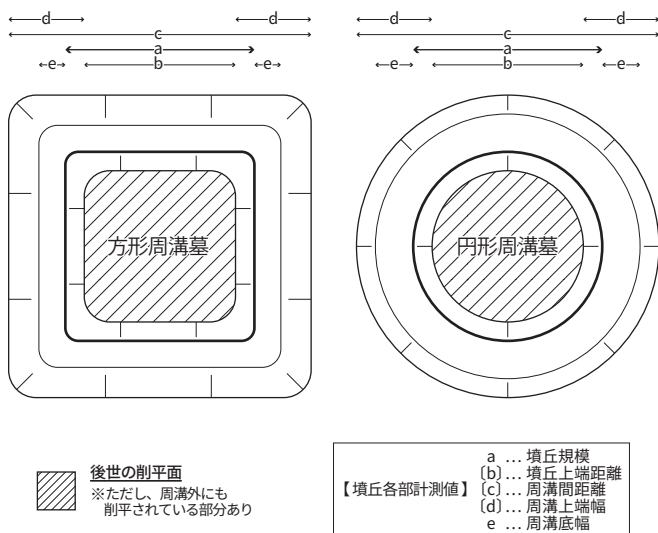


図 36. 周溝墓の墳丘各部の計測値

検出面より高い位置に埋葬施設があったことがわかる。そのため周溝墓の中心部分には、一定程度の高まりをもつ墳丘があったことが確実で、今回の報告では周溝の内側部分を墳丘と呼称する。

調査地の地形は、北西から南東にむかって地形が緩やかに下がるが、耕作域の造成に伴って後世に削平を受けており、雛段状に整形されている。そのため、周溝墓築造前後の旧地表面はほぼ残存していないが、周溝墓の周囲には浅い掘り込み等が一部で残存しており、周溝墓築造時の造成痕跡の可能性はある。

また、調査地北側の 31 溝など、古墳時代以前にさかのぼる遺構・遺物が少量ながらも確認されており、この項で併せて報告する。

2. 方形周溝墓 9

立地と検出状況 今回の調査で検出された周溝墓群の中で最も北に位置する（図 37）。北西から南東に下がる緩斜面地に位置しており、南側 3 分の 2 の範囲が後世の耕作段によって大きく削平を受けている。そのため、墳丘の周囲で旧地表面が残っている範囲はほぼないが、最も高い北西コーナー外側の標高が T.P.+11.7 ~ 8 m、最も低い南側の標高が T.P.+11.4 ~ 5 m であり、地形の傾斜角は 1 / 50 ~ 1 / 60（勾配 1.7%）である。また、墳丘の西半には、旧工場に伴う方形の攪乱が重複しており、墳丘の西半がえぐり取られるような形で大きく削平を受けている。そのため、埋葬施設等の痕跡は、一切検出できなかった。

なお、方形周溝墓 9 の下部には、自然流路 NR02 が重複しており、周溝墓の北西側と南西側で基盤層の性質が大きく異なっている（図 38）。

墳丘・周溝 墳丘規模は、東西 9.2 m・南北 9.5 m をはかり、墳丘の南北軸は 26.1° 東に傾く。ほか、周溝間距離は、〔東西 12.5 m〕・〔南北 13.5 m〕、墳丘上端距離は、〔東西 8.0 m〕・〔南北 9.2 m〕 をそれぞれはかる。以上から、南北方向にやや長い墳丘形態であったことがわかる。

周溝は、墳丘の四周をめぐるが、南東コーナー部分では検出できなかった。旧工場の攪乱による影響を受けた可能性も考えられるが、周溝西側には段があり、中央の最深部に対し南半は 0.6 m 高い。そのため南西コーナー部分まで周溝がめぐっていたか、途切れて陸橋になっていたかは定かではない。また、同様に南東コーナー部分も 0.1 ~ 0.2 m 程度の段があり、この部分についても周溝底が部分的に浅いか、途切れて陸橋になっていた可能性がある。

周溝の幅は、上端の計測値が〔0.7 ~ 3.0 m〕、底で 0.4 m ~ 2.3 m をはかる。周溝の深さについては、北西コーナー付近が深く掘り下げられているのに対し、北東コーナーから南側にかけて浅くなっているほか、上述した通り、南側には段があるため、深さは一定していない。最も深い北東コーナー部分では、深さが〔0.6 ~ 0.7 m〕以上あるのに対し、西側～南側は 0.1 m 未満の部分も多い。周溝の最も深い部分の標高値は、西側中央で T.P.+10.84 m、最も高い北東コーナー付近では T.P.+11.50 m をはかり、比

高は0.66 mである。このように周溝の深さが一定しないため、同様に周溝上端や底の幅も一定していない。そのため周溝底の幅は、深さのある北側の北西寄りの幅が最も狭く0.6 m程度であるのに対し、浅い北東～南側が幅広で0.9 m～2.1 mをはかる。一方、周溝底の標高値は、北側東半から東側・南側にかけては、おおよそT.P.+11.2～11.4 m程度におさまり、周溝底の高さが概ね一定している。しかし北西側については、T.P.+10.84 mまで深く掘り込まれている。これについては、地形的にみて高い部分を意図的に深く掘り下げた可能性も考えられるが、周溝墓の基底面下部の自然流路 NR02 が軟弱な砂質土で充填されているため、周溝墓の築造時に過剰に掘削されてしまった可能性も想定できる。

さらに周溝の北西コーナーの外側部分では、周溝肩部の外側にも掘り込みが確認され、周溝外側の斜面の傾斜角が途中で変化している。地形的にも北西側が高いことから、この部分は二段堀のような形で周溝が掘削されたことがわかる。また、周溝の南東コーナー付近では、周溝底で27土坑や30土坑など土坑状の掘り込みが複数確認された。その性格は明確ではないが、埋土は周囲の周溝内埋土の一部と類似しており、周溝と関連するものとみなせる。

なお、周溝の南西外側では、周溝埋土や第4層と類似する古土壌と基盤層が混じるブロック土が、不明瞭ながらも一定の範囲に拡がることを確認された（図37：平面の南側破線範囲）。後述するように、一部の周溝内埋土等に類似するブロック土の堆積が確認できることから、この範囲は周溝墓群の築造に伴う造成痕跡である可能性が高い。

周溝の堆積状況と遺物の出土状況 上述したように、墳丘は上面が大きく削平されており、平面で埋葬施設等の痕跡は確認できなかった。また、部分的に断割りを入れるなどして注意を払ったが、墳丘の盛土も確認できなかった。

周溝の堆積状況については、周溝の深さや場所ごとの基底面の基盤層の土質のちがいがあり、一様ではない（図38）。周溝が浅い北側東半・東側・南側では、周溝底から初期の流入土または周溝墓築造時の崩落土とみられるブロックを含むシルト～粘土（第5～9層）が約0.05～0.15 mの厚さで堆積し、上面に土壌層（第3層）が最大0.1 mの厚さでレンズ状に堆積している。ただし、南側から東側にかけては、周溝底の初期の堆積土（第8・9層）と古土壌（第3層）の間に顕著にブロックを含む堆積土（第4層）が介在している。特に南側では、この層が側方にさらなる拡がりを見せているが、上述した平面で検出したブロック土と同質のものである点が注意され、この方形周溝墓9の築造後に改めて周辺の地業がなされたことが示唆される。

一方、北側西半・北西コーナー・西側は、周溝が深く、堆積状況も大きく異なる。上層（第1・2層）・中層（第3層）・下層（第4層）に大別できるが、堆積土は下部の自然流路 NR02 の影響により、全体的に砂質が強いことが特徴である。このうち下層は、初期流入土または周溝墓築造時の加工時形成層とみられ、最下部の第9・10層は、周溝底に部分的に拡がるほか、ブロックを多く含むことから、周溝墓築造時に堆積した層と認識できる。一方、第6・7・8層は、レンズ状に堆積するほか、ラミナもみられることから、周溝墓が完成したのち周囲から流れ込んできた流入土とみなせる。全体的に砂質が強いが、最上層は粘土質であり、上方が細粒化する傾向がみられる。このことから墳丘は、周溝周囲の掘削土、つまり北西側では下部の自然流路に由来する砂層を盛り上げられ、それらが比較的是やくに流出して周溝の下半が埋没したことがわかる。なお、下層からは、弥生土器または土師器の細片が出土しているが、その量はごく少量であり、図化できるものはない。

中層（第3層）は、平均0.15～0.20 mの層厚でレンズ状に堆積する暗色の土壌層である。全体的に



【円形周溝墓9（周溝：26溝）断面a-a'・b-b'・c-c'】

【上層：後世堆積土】 ※須恵器（古墳後期～古代）含む＝古墳後期以降の堆積

- 1a1. 25V4/3～4/2オリブ褐～暗灰黄粘質シルト、細砂少量混
- 1a2. 25V～5V4/3オリブ褐～暗オリブ砂質シルト、細砂微量混
- 1a3. 25V4/3～4/2オリブ褐～暗灰黄粘質シルト、細砂混
- 1b1. 25V4/1黄灰粘質シルト、細砂少量混
- 1b2. 25V5/1黄灰砂質シルト、ca少量混
- 1c1. 25V3/3暗オリブ粘質シルト+細砂
- 1c2. 25V4/1黄灰シルト質砂、土師器・須恵器一定量あり
- 2a1. 25V4/3オリブ粘質シルト、ブロック混
- 2a2. 10VR4/1～4/2褐灰～灰黄褐シルト質砂、ブロック混
- 2a3. 25V3/3暗オリブ粘質シルト、ブロック混
- 2b. 25V4/1黄灰シルト、細砂ラミナ（流入土）

【中層：土壌化層、AMS分析2c前～3c前】

- ※周溝内全域あり、直上軟質土器出土（古墳中期か）＝古墳前～中期の長期堆積か
- 3a1. 25V3/1～2/1黒褐～黒粘土、極細砂微量混
- 3a2. 25V2/1黒粘土、ブロック細砂少量混
- 3a3. 25V3/2～3/1黒褐粘土、ca少量混
- 3a4. 75V/R3/1黒褐粘土
- 3b1. 25V4/1～3/1黄灰～黒褐細砂～極細砂（墳丘流出土）
- 3b2. 25V3/1黒褐砂質シルト、細砂少量混（墳丘流出土）

【中層下部：ブロック土】

- ※南～東側ののみ、遺物なし、円形周溝墓10築造時の地盤に伴う堆積土か
- 4a. 25V4/1黄灰粘土+25V7/6明黄褐粘土ブロック
- 4b. 25V4/2～5/2暗灰黄粘質シルト、ブロック細混、肩部細砂混

【下層：初期流入土、AMS分析2c前～4c前】

- ※遺物ほぼなし、初期流入土、弥生後期～庄内期か
- 5a1. 25V4/1黄灰粘土、ラミナあり
- 5a2. 5V4/1灰粘土、fe沈着
- 5a3. 5V4/1灰粘土、細砂～極細砂ラミナあり
- 5b. 10VR4/1褐灰細砂粘質シルト、fe沈着
- 5c. 10VR4/2～4/1灰黄褐～褐灰砂質シルト、fe沈着
- 5d. 25V4/1黄灰細砂混質シルト、fe沈着
- 5e. 25V4/1黄灰粘土、ラミナあり
- 5f. 25V4/2暗灰黄シルト質砂～極細砂、ブロック混
- 6c. 25V4/1～5/1黄灰細砂、ブロック混
- 6d. 75V5/2灰オリブ粘質シルト、ブロック混
- 6e. 5V6/1～7/1灰～灰白極細砂、ラミナあり
- 6f. 5V5/1灰粘質シルト、極細砂微量混、細砂ラミナあり、fe沈着
- 6g. 5V6/1灰極細砂～シルト質砂、ラミナあり、fe沈着
- 6h. 75V5/1灰細砂

7a1. N4/灰粘質シルト、細砂微量混、ca多い（初期水成堆積層）

- 7a2. 5V4/1灰粘質シルト、極細砂少量混（初期水成堆積層）
- 7b2. 75V3/1オリブ黒粘質シルト+10V6/2オリブシルト（初期流入土）
- 7c1. 5GV7/1明オリブ灰砂質シルト+10V4/1灰砂質シルト（初期流入土）
- 7c2. 25V4/1黄灰砂質シルト+75V6/1灰細砂質（初期流入土）
- 8a. 5V8/2～7/2灰白細砂粘質シルト（初期流入土）
- 8b. 25V5/3～5/4黄褐砂質シルト、ブロック混（初期流入土）
- 9. 25V8/2灰白粘土+10VR3/1～2/1黒褐～黒粘土ブロック（加工時形成層）
- 10a. 25GV6/1オリブ灰細砂（加工時形成層か）
- 10b. 10V6/1灰細砂、5V5/1灰シルトブロック混（加工時形成層か）

【基盤層】

- 11. (NR02埋土) 中砂～粗砂
- 12. (NR02築削肩部) 25V6/1黄灰シルト質砂
- 13. (NR02築削肩部) 25V4/1～3/1黄灰～黒褐粘土
- 14. (NR02築削肩部) 25V8/2～8/3灰白～淡黄粘土
- 15. (NR01-02埋土)

図 37. 方形周溝墓9 平面・断面

第3節 下面の遺構・遺物（2）：弥生時代中期～古墳時代〔周溝墓群ほか〕

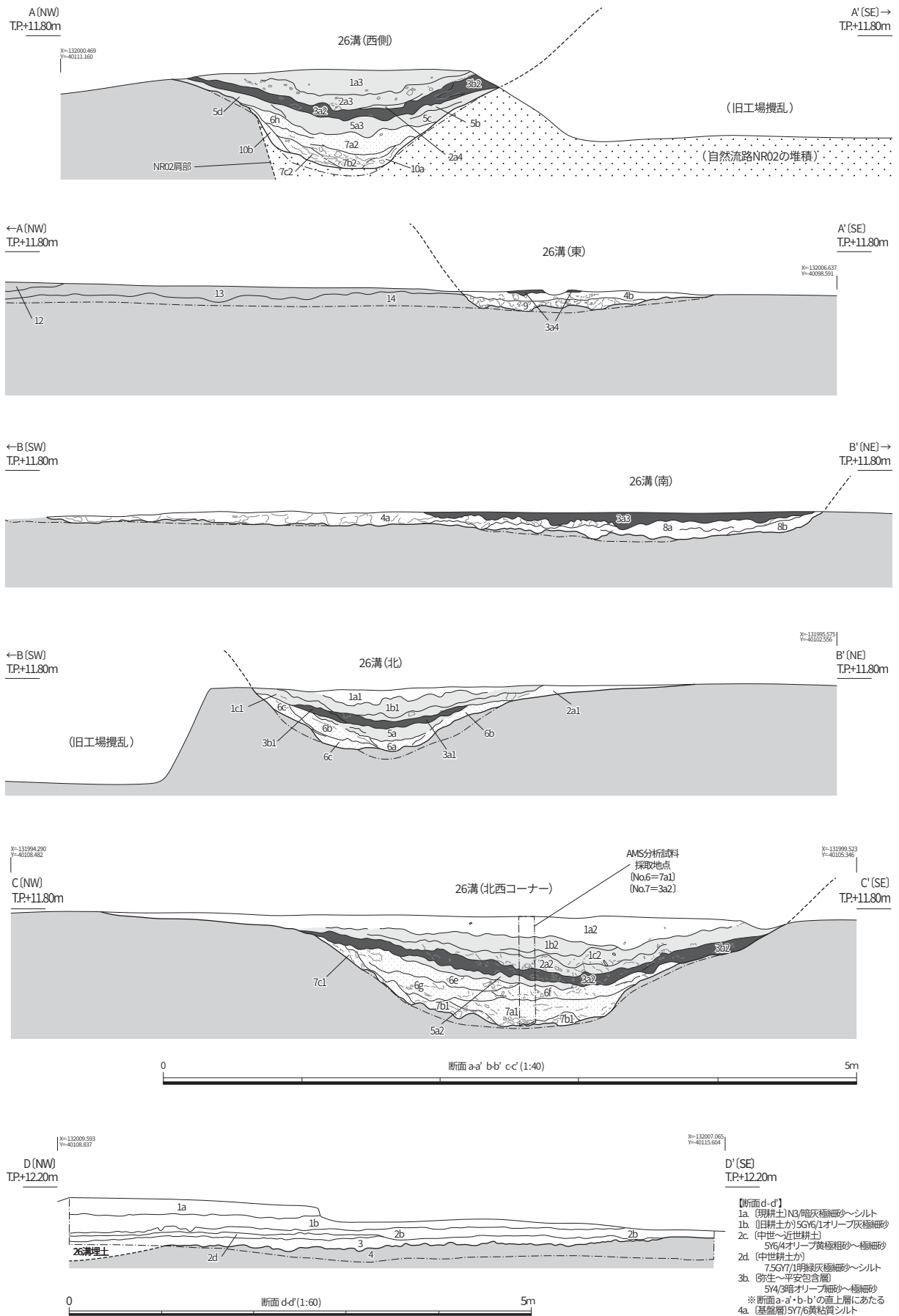


図 38. 方形周溝墓 9 断面 (2)

は粘性度合いが強いが、墳丘側はやや砂質が強い傾向がみられ、東半～南側の土壌層と対応する。こうした状況から、墳丘の築造後、土壌が生成される人為的な攪乱が少ない安定期が存在したことがうかがえる。下層と同様に、中層からの遺物の出土量が少ないが、上層との層境付近から古墳時代中期とみられる韓式系軟質土器の平底鉢（74）が出土しており、この時期頃まで安定期があったことがうかがえる。

上層（第1・2層）は、やや砂質の強いシルト～細粒砂の堆積で、周囲からの流入土とみられる。第1層と2層の層境は不明瞭な部分も多いほか、この間に土壌化等がみられないことから、周囲の開墾等によって比較的はやくに堆積したことがうかがえる。埋土からは、遺物が少量ながらも出土しており、土師器の二重口縁壺（75・76）のほか、古墳時代後期の須恵器（68～73）や奈良時代末葉～平安時代初頭の須恵器（73）などが出土している（図39）。このことから、古墳時代後期以降に、周辺一帯の人為的な開墾が進み、それと同時に墳丘が削平された蓋然性が高い。開墾の具体的な時期については、遺物の出土量が少ないため、やや慎重にならざるをえないが、奈良時代末葉～平安時代初頭に下るものは1点のみであり、そのほか多くは古墳時代後期のものが主体を占める。上面等に多数の攪乱等が存在することから混入の可能性もあるが、開墾の時期が古墳時代後期にさかのぼる可能性を考慮する必要がある。一方、土師器の二重口縁壺は、復元すると1点分の破片に留まる。中層・下層には遺物がほとんど含まれないことをふまえれば、供献土器として二重口縁壺が墳丘上にごく少数あり、それが墳丘削平時に二次的に堆積した状況が推定できる。

なお、上述したように、下層と中層からは出土遺物が少なく、周溝の下半の堆積時期が明確ではなかった。埋土上層の後期の須恵器や、これまでの調査でみつかった周囲の古墳時代中期後葉～後期前葉の中小古墳の存在などから、この方形周溝墓9が中期以降に下る可能性も想定されたため、下層・中層に含まれる炭化材のAMS年代測定を実施した。その結果、中層・下層ともに2世紀前半～4世紀前半の幅におさまる分析結果が得られたため、周溝墓の築造時期は古墳時代前期以前にさかのぼることが確定した【第6章】。

出土遺物 出土遺物は、そのほとんどが埋土上層からの出土で、出土量は総じて少ない（図39）。中層・下層からは、図化不能の弥生土器または土師器の細片に限られる。ほかでは周溝の南側の肩部から土師器片が出土しており、これも関連する可能性が高い（77）。

上層出土遺物は、古墳時代後期～奈良時代の須恵器（68～73）と、土師器の二重口縁壺（75・76）に大別できる。ほかでは、上層と中層の層境付近から韓式系軟質土器が1点出土している（74）。古墳時代後期の須恵器では、杯Hが複数点出土しており（68～72）、時期については大きさや蓋に稜がないこと、天井部のケズリの範囲などからいずれもTK43型式期に比定できる。もう1点は、古代に下る杯Bの底部破片で（73）、これについては高台の位置などから平城V～VI期、奈良時代末葉～平安時代初頭に比定できる。

上層と中層の層境付近から出土した平底鉢は、外面にタタキ、下半にケズリ施す、典型的な韓式系の軟質土器で、複数の破片が散在するような状況で出土した。淀川北岸地域では、出土量が限られる貴重な資料で、一般的には5世紀代を通じて認められ、特に中期前葉にさかのぼる事例が目立つ。ただし、安威川・茨木川流域では、総持寺遺跡で中期後葉に下る事例があるほか、本遺跡が立地する千里丘陵東縁や安威川低地部の溝咋遺跡での集落・墳墓の展開や渡来系集団の定着状況をふまえれば、中期後葉頃に比定するのが穏当といえる。

土師器の二重口縁壺（75・76）については、周溝の主として北側、埋土上層から破片が一定量出土した。

口縁部と頸部の破片があり、接点はないが、胎土からみて同一個体と考えられる。頸部が直立するタイプの二重口縁壺で、一次口縁が側方に屈曲したのち、二次口縁が強く外反して口縁部が大きく広がる。全体が磨滅しており、内外面の装飾や調整は不明瞭であるが、口縁部の屈曲部に二対一組で円形浮文がみられる。全体的に薄づくりで、体部の厚さは0.5～0.6mである。体部以下の破片はなく全体の形状は不明であるが、上述の周溝の南側の肩部から壺の底部片が出土しており（77）、同一のものである確証はないが、図上で復元したような平底であった可能性が高い。形式的には、野々口陽子のB3類、杉本厚典のC類、山本亮の2b類³⁾にあたり、時期については、壺の形式からみて庄内式～布留式古段階古相の範疇におさまる。白色の色調や石英・長石等を多量に含む胎土の特徴から、安威川・茨木川流域一帯の在地産とみなしてよく、内外面の調整は不明ながらも、製作技術の系統は弥生土器からの流れを引くA系統⁴⁾とみなしてよい。

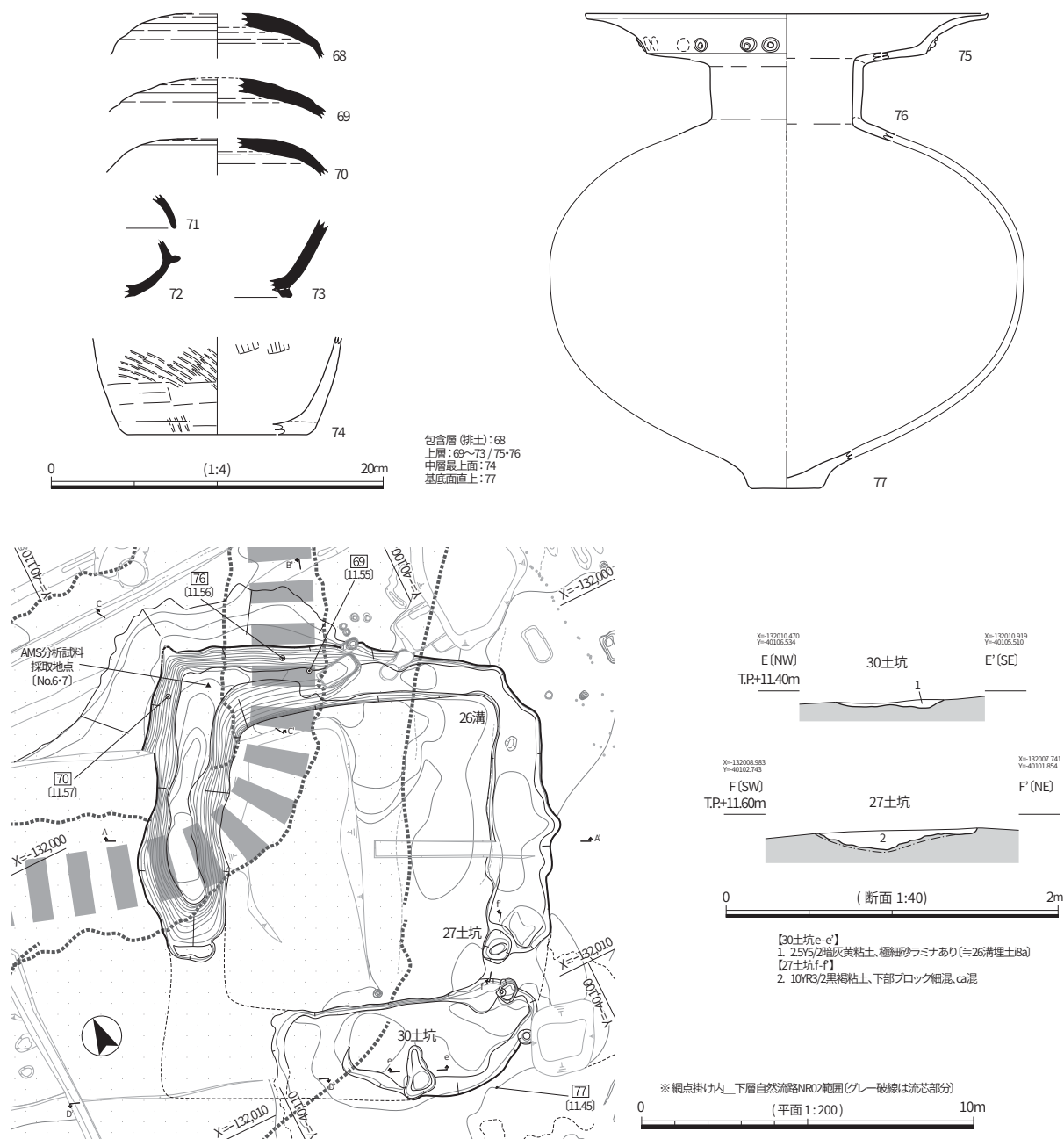


図 39. 方形周溝墓 9 出土遺物・関連遺構断面・遺物出土地点ほか

3. 円形周溝墓 10

立地と検出状況 方形周溝墓9の南20mに位置する(図40)。方形周溝墓9と同様に、上面は大きく削平を受けており、埋葬施設の痕跡や墳丘盛土はいっさい検出できなかった。また、南半は、後世の耕作による段造成により削平を受けており、ほかに周溝墓の南東側には土坑状の攪乱が多数みられる。周辺一帯の地形は、北西から南東方向に緩やかに下がるが、その傾斜は北側の方形周溝墓9に比べて緩やかになっており、周溝の周囲の標高はT.P.+11.3~11.4m前後におさまる。北西側と南東側の高低差は、約15mの距離でわずか0.1m程度であるため(勾配0.7%)、周溝墓の周囲の地形はほぼ水平に近いことがわかる。

墳丘・周溝 周溝が全周しないことから、墳丘裾のラインが明確でない部分がある。そのため墳丘規

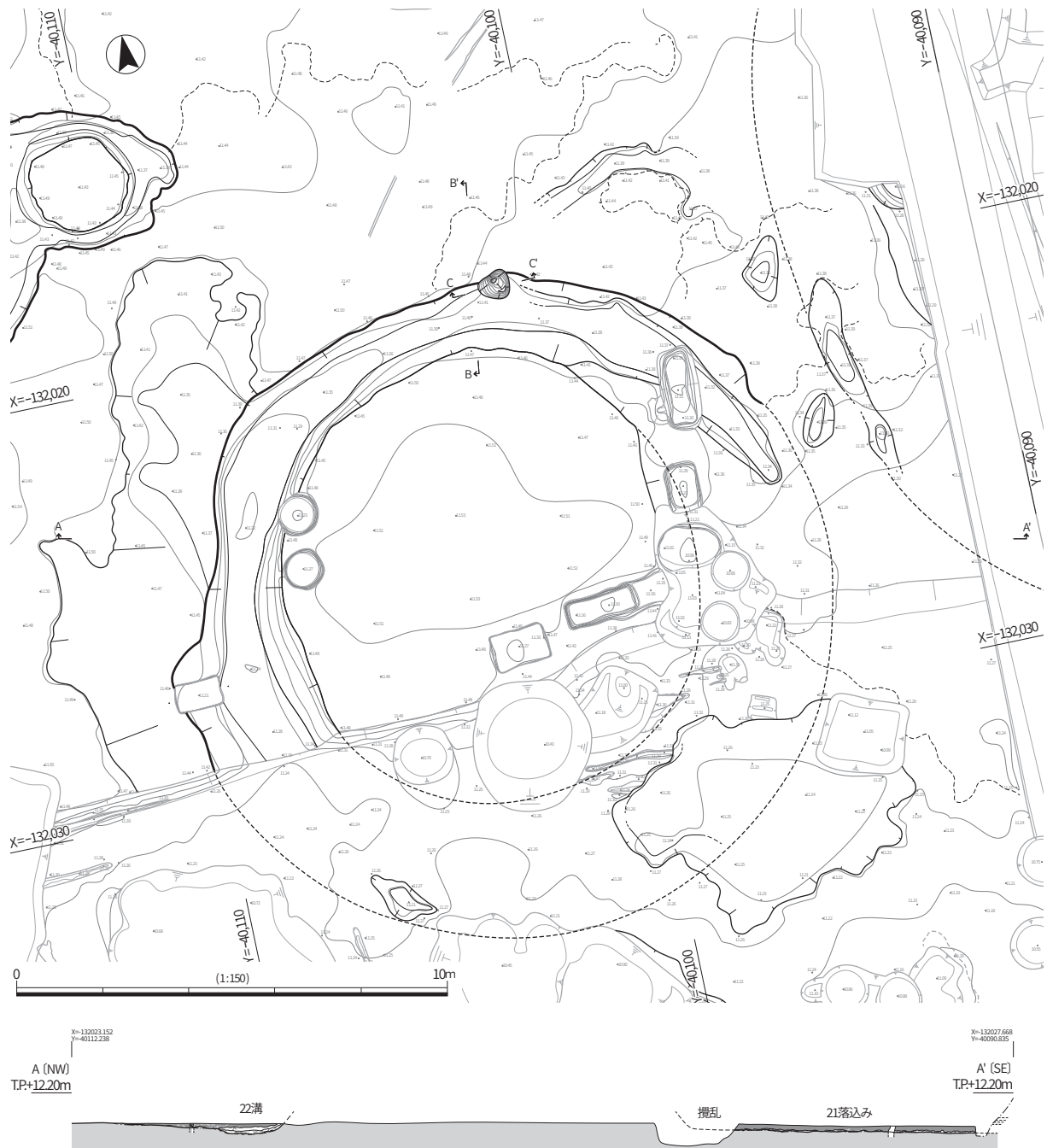


図40. 円形周溝墓10 平面・断面

模を明確にしがたいが、径約 11.5 m 程度の規模に復元できる。ほか、周溝間距離は〔15.5 m〕、墳丘上端距離は〔9.6 m〕をそれぞれはかる。墳丘の形状は、南半が削平を受けているためはっきりしたことはわからないが、東西に比べて南北がやや長い形状を呈するものとみられる。上述した墳丘規模等の数値が、残りの良い東西方向の値であることから、南北方向の規模はやや大きくなる公算が高い。

周溝は、北東側を起点に北側～西側にかけてめぐるが（22 溝）、南東側では明確な溝状の掘り込みは認められなかった。ただし東側では、墳丘側に比べて基底面全体が 0.1～0.2 m 程度掘り下げられており（21 落込み）、堆積状況からみて後世の削平とは考えられないことから、地形がやや高い北半～西側にのみ周溝がめぐっていた可能性が高い。また、段造成によって削平を受けた南半においても、南東側および南西側で浅い掘り込みが検出されており（20 落込みなど）、この部分についても周溝墓築造時の造成に伴う掘り込みの痕跡と考えられる。

周溝の幅および深さは、起点となる北東側では狭く浅いが、西側にむかって徐々に幅広になり深さも増す。上端の幅の計測値は最大〔2.9 m〕、底の幅は 0.6～1.3 m、深さは最大で〔0.24 m〕をはかる。さらに周溝西側では、0.1～0.15 m 程度の不定形の浅い掘り込み痕跡があり（23 落込み）、この部分も円形周溝墓の築造時に造成された痕跡とみられる。そして、その範囲も含めた場合、周溝の幅は〔5.0 m〕をはかる。また、東側の 21 落込み部分については、東隣の平成 24 年度調査区で確認された古墳 3 の周溝の肩部の推定ラインと重複している。しかし円形周溝墓 10 と同様に、古墳 3 の周溝の肩部は検出されておらず、円形周溝墓 10 と古墳 3 の墳丘の間に面的に古土壌（第 1 層）が拡がるのが判明した。このことから、この 2 基は近い時期に築造された蓋然性が高く、後述するように、古墳時代中期～後期とされた古墳 3 の築造時期を見直す必要がある。

周溝の周囲の状況については、段造成がなされた墳丘南半を除いて、周溝埋土（第 5・6・7 層）と同質の古土壌と基盤シルトが混じるブロック土が不明瞭ながらも面的に拡がるのが確認された（図 40：平面の北側破線範囲）。このブロック土の拡がり、北側の方形周溝墓 9 の南側から続く一連のものであり、円形周溝墓 10 の周囲のフラットな地形は墳丘の築造に伴って大規模に造成された可能性が

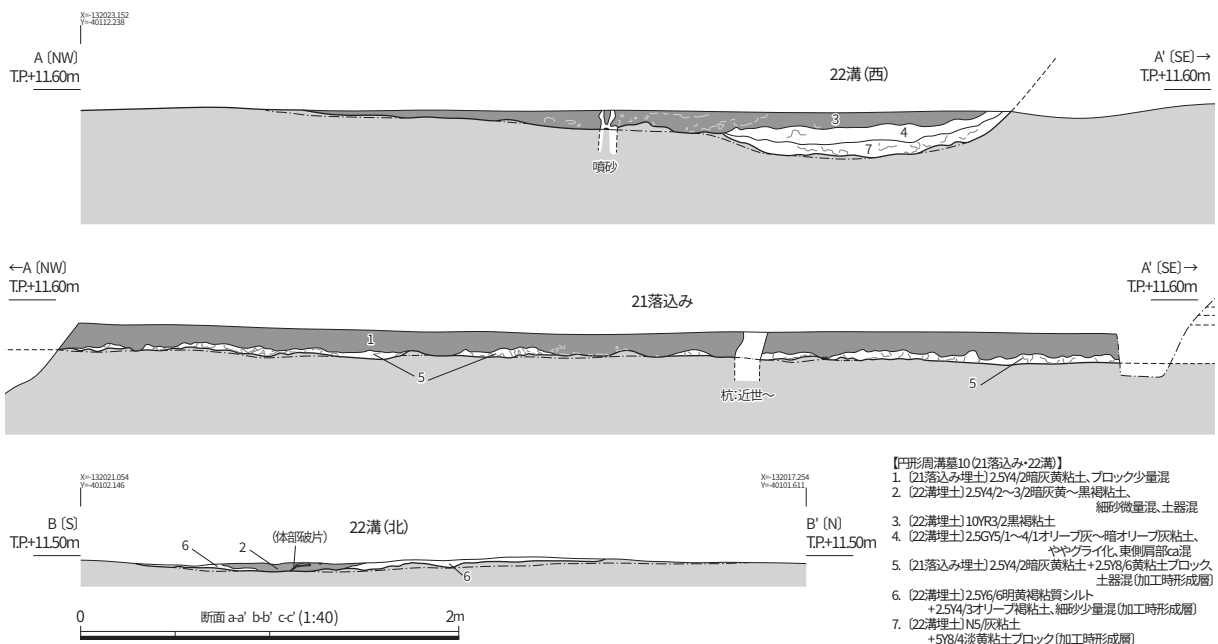


図 41. 円形周溝墓 10 断面（2）

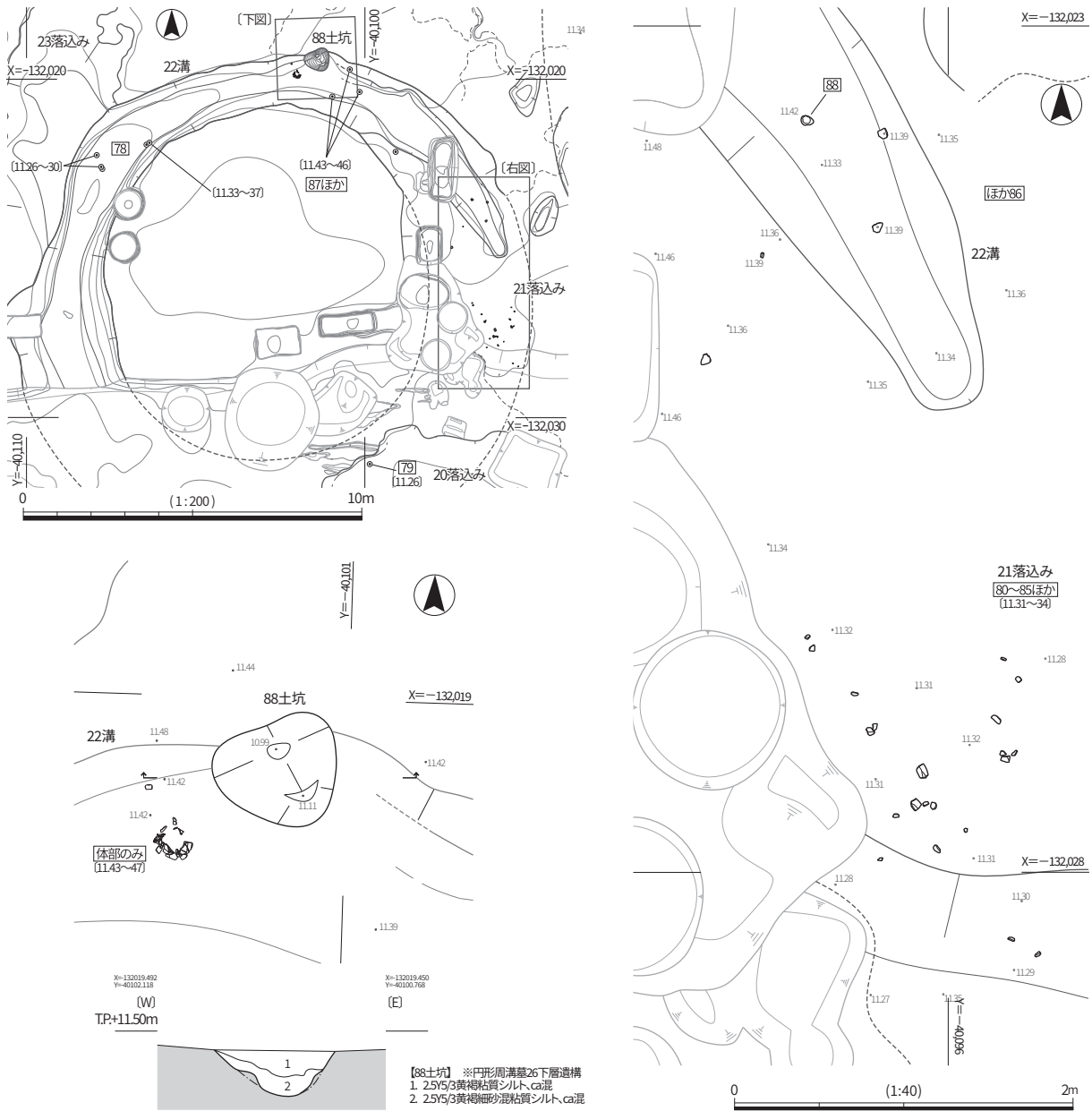


図 42. 円形周溝墓 10 遺物出土状況、下層遺構 平面・断面

高いことが示唆される。こうした周囲の造成痕跡や周溝の検出状況から、円形周溝墓 10 は周囲を深い溝でめぐらす構造ではなく、墳丘周囲を広く平坦に造成した上で墳丘を盛り上げた構造であったと推定できる。

周溝の堆積状況と遺物の出土状況 墳丘全体が大きく削平を受けており、墳丘部分では埋葬施設の痕跡は一切確認できなかった。また、盛土の痕跡も確認されなかった (図 41)。

墳丘周囲の堆積状況は、地点ごとに深さが一定しないものの、東側・北側・西側で概ね類似する状況が認められ、周溝の基底面に加工時形成層とみられるブロック土が堆積し (第 5・6・7 層)、その上には暗色の古土壌が堆積している (第 1・2・3 層)。ただし西側では、中間にやや薄いオリーブ灰色粘質土が介在しており (第 4 層)、周溝がやや深い部分を中心に初期の流入土が堆積していることがわかる。

出土遺物は総じて少ないが、北側から南東側にかけて土師器がややまとまって出土している (80～

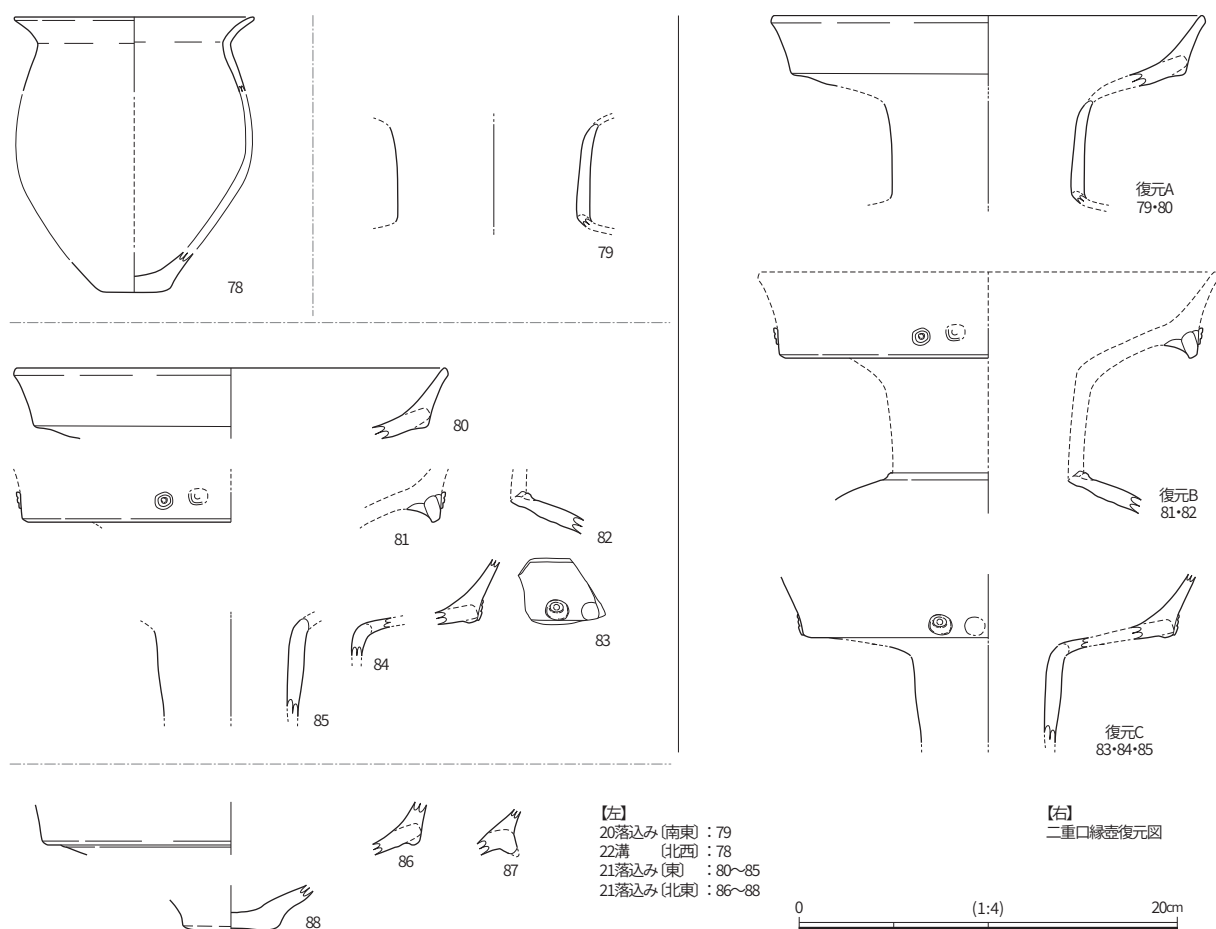


図43. 円形周溝墓10 出土遺物

88)。器種は、大半が壺類で、後述するようにすべて二重口縁壺に復元される。層位的には、いずれも基盤層直上または加工時形成層（第5層）の直上から出土しており、円形周溝墓10に伴う遺物とみなすことができる。西側の周溝埋土中に含まれる遺物はごく少量であるが、北西側で周溝底から0.05 m程度遊離した状態で土師器甕の破片が数点出土しており（78）、いずれも加工時形成層（第7層）の直上からの出土とみなせる。遺物の出土状況や出土量が少なからみて、周溝に意図的に供献土器を投棄したという状況を復元することは困難であり、墳丘上にあった土師器が比較的はやい段階で転落したと考えるのが穏当である。なお、南東側の20落込み埋土中からも、土師器の破片がごく少量出土しており（79）、これについても墳丘から転落した遺物と考えられる。

出土遺物 遺物の出土量はそれほど多くはないが、ほかの4基に比べるとまとまった遺物の出土があり、計8点を図化しえた（図43）。いずれも円形周溝墓10に伴う土師器とみて差し支えなく、上述したように、墳丘上からはやい段階に転落したものと判断できる。出土地点は、上述したように、南東（79）、東～北（80～88）、北西（78）に大別できる。南東と東～北の出土資料は、ほとんどが壺類の破片であるのに対し、北西の遺物は甕に限定される。

南東および東～北の壺類は、図化が難しい体部の破片が多いが、口縁部や頸部、底部なども一定量含む（79・80～88）。いずれも内外面の磨滅が著しく、調整等が明確でないが、口縁～頸部の資料はすべて頸部が直立する二重口縁壺の破片である。やや厚手のつくりで、体部の厚さは0.8 cm前後である。胎土は、総じて石英・長石・チャート・赤色粒を含むなど概ね類似しており、その特徴から近隣での生

産が推定できる。ただし、垂下の有無による口縁部の形状、円形浮文の有無、頸部突帯の有無にバリエーションがあり、胎土の細かなちがいや出土地点などから、図上で3個体ほどが復元ができ（図43：右）、この3個体は、上述の通り、すべて形式が異なる点が特徴といえる。さらには、それとは組み合わない無文の口縁部破片が2点あり（86・87）、（86）については復元Aとした個体（79・80）と同一の破片の可能性はあるが、（87）については口縁部の形状や接合方法が上記の3点とは異なる。このため、墳丘上には形式が異なる二重口縁壺が、少なくとも4個体以上供献されていたと判断できる。口縁部・頸部以外の破片については、体部の破片が一定量あるものの、図化可能なものはない。また、いずれも磨滅が著しく、調整や装飾の有無は明確でない。ほかでは、上記のどの個体と同一であるかは不明であるが、底部の破片が一点あり、底部がやや突出する平底を呈する（88）。

北西から出土した甕（78）は、口縁部がくの字状に外反する小型甕で、平底底部はあまり突出をみない。その形状からみて、V様式系甕の範疇に含まれるが、内外面が著しく磨滅しており、調整は不明である。全体的に薄づくりで、体部の厚さは0.3～0.4mである。胎土は、石英・チャートを多量に含む粗いV様式系特有のもので、在地産とみて差し支えないが、壺類とは胎土の特徴が大きく異なる。

これらの土器の時期については、良好な状態の資料は少ないものの、二重口縁壺はその形式からみて庄内式期以降の資料で、下限については円形浮文から布留式古段階古相以前におさまる。同様にV様式系の甕についても、突出が弱い底部形状から庄内式期以降に下ることが確実で、二重口縁壺と時期的に齟齬はない。

4. 古墳3（円形周溝墓）

隣接する平成24年度調査区（CJS12-1）で検出された古墳3の周溝の一部が、今回の調査範囲にかかっており、周溝の痕跡の可能性のある落込みが部分的に確認された（図44）。平成24年度調査区（CJS12-1）では、遺物の出土がなかったため、同調査区内でまとまって検出された古墳時代中期～後期の小規模古墳と同時期の古墳と認識されていたが、今回の調査で検出された隣接する円形周溝墓10との関係から築造時期を見直す必要がある。

今回の調査区では、北西側～西側にかけて周溝肩部の推定ライン付近で平面的に浅い落込みや溝状の痕跡が検出されたほか、調査区東壁の図44：断面A-A'と断面B-B'でそれぞれ浅い落込み肩部が確認された。平成24年度調査区（CJS12-1）と今回の調査区の遺構検出面の標高値がほぼ同じであることから、これらが古墳3の周溝の痕跡の一部である蓋然性が高い。墳丘規模については、径約12mという点に変わりがないが、周溝が東西方向にやや長い楕円形上にめぐり、周溝間距離が東西で〔21.4m〕あることが判明した。

なお、周溝の南西側では、周溝の痕跡とみられる溝状の落込みが不明瞭になるなど、周溝肩部の輪郭が追えなくなる。ほかでは、東壁南側の断面A-A'では、古土壌の落込み肩部が周溝肩部の想定ラインよりも外側に来るが（図44：南西の外側の破線）、その理由は定かではない。古墳3の南東部分では周溝肩部が明瞭にまわっておらず、部分的に外側から掘り込みがなされた可能性があり、円形周溝墓10と周溝の掘削状況が類似する。また、この周溝南西部分は、上述した通り、隣接する西側の円形周溝墓10と接しており、この2基の墳丘間に21落込みとした一連の古土壌の堆積が認められる（図41：1層／図44：3b層）。このため円形周溝墓10と古墳3の2基は、近しい時期に築造されたと判断でき、古墳3は古墳時代初頭～前期にさかのぼる円形周溝墓であった蓋然性が高い。

平成24年度調査区（CJS12-1）では、古墳3に伴う遺物の出土が報告されていないが、今回の調査

第3節 下面の遺構・遺物（2）：弥生時代中期～古墳時代〔周溝墓群ほか〕

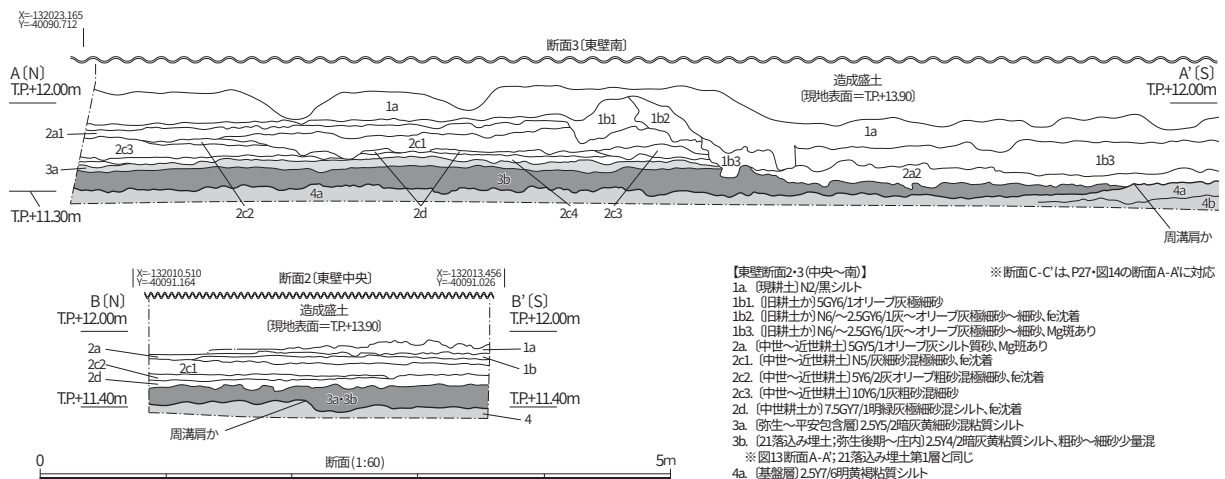
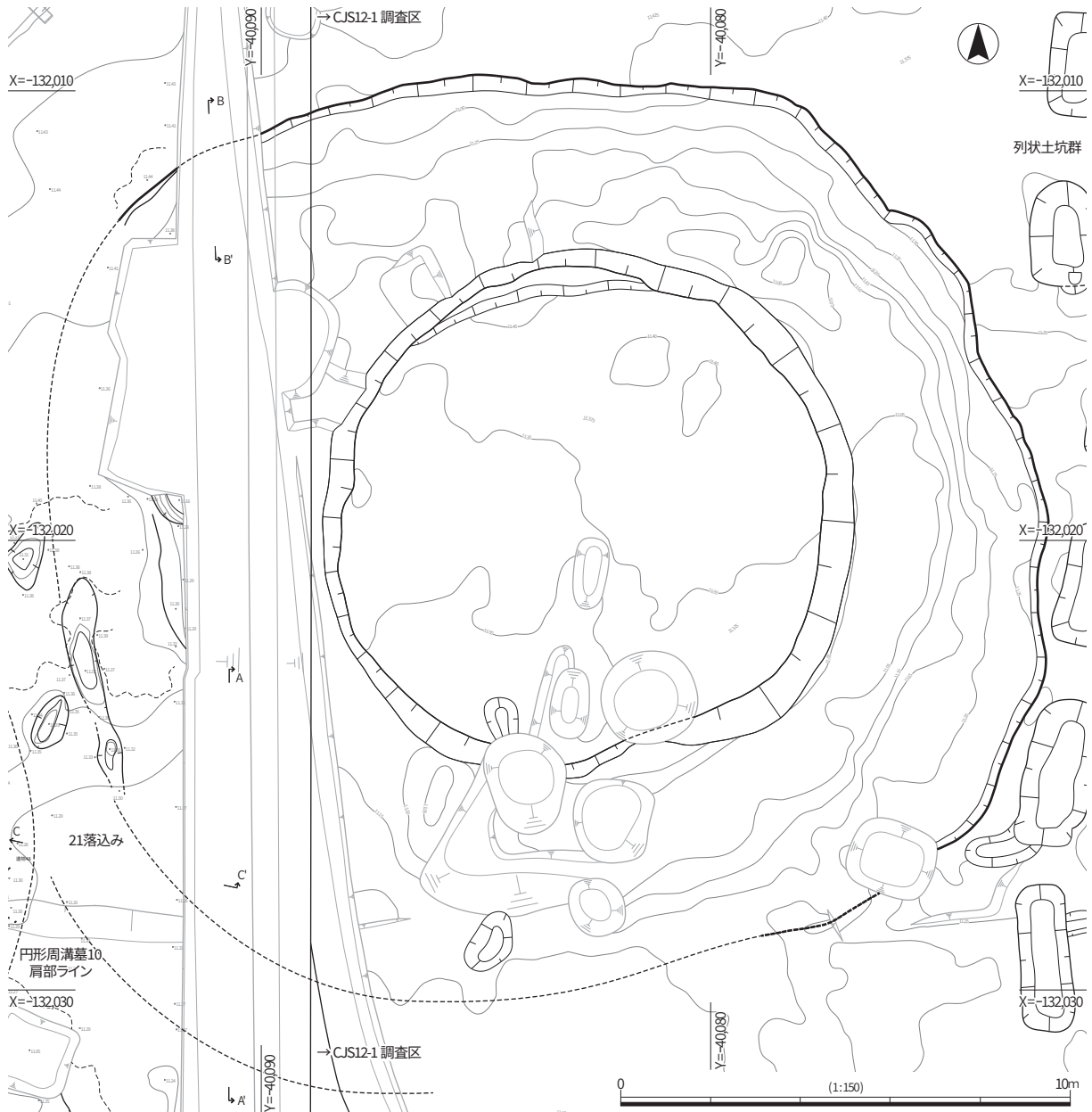


図 44. 古墳 3 平面・断面

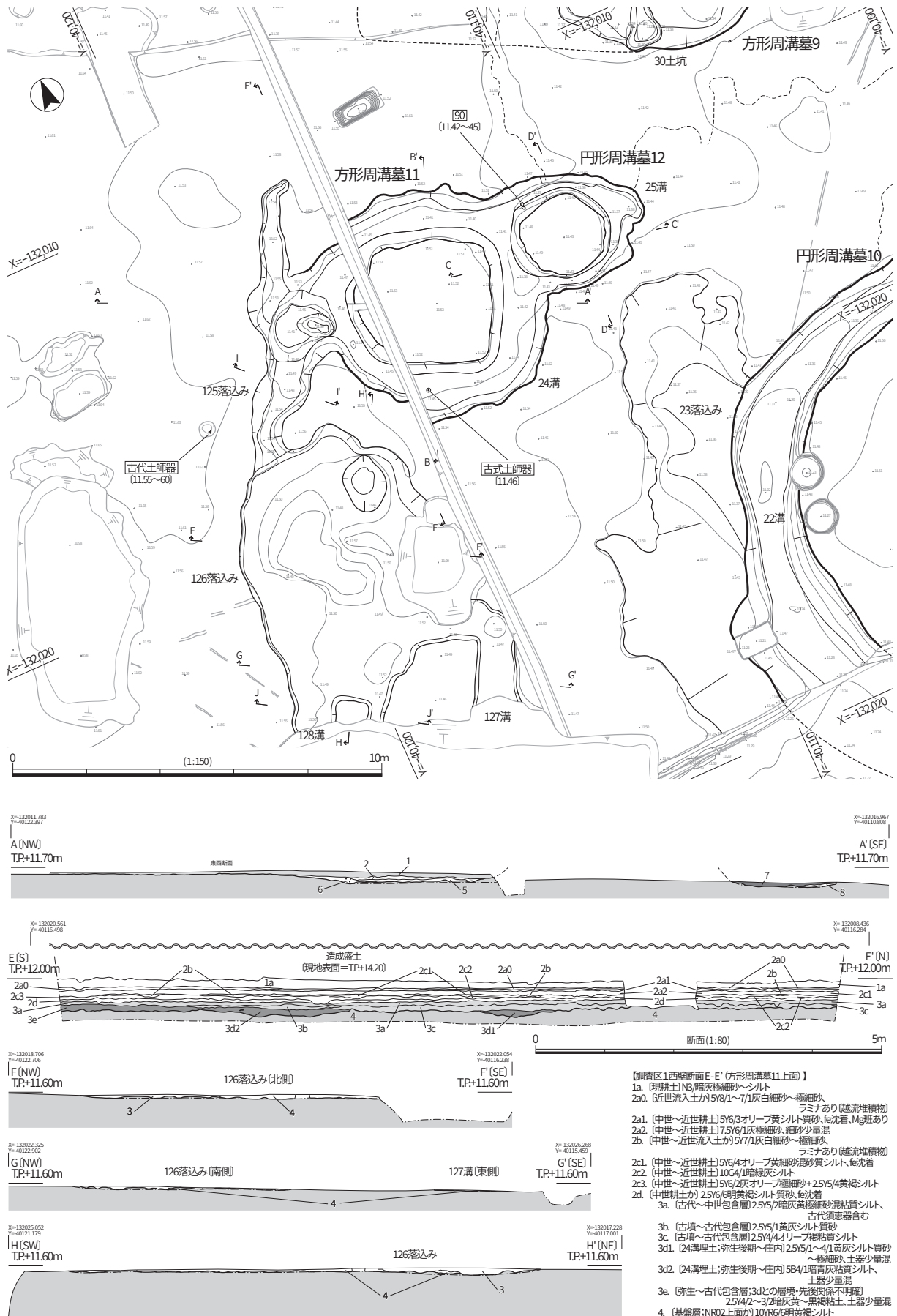


図 45. 方形周溝墓 11・円形周溝墓 12 ほか 平面・断面

では周溝周辺から壺の体部片が計6点出土している。図化可能な破片はなく、出土地点から円形周溝墓10と古墳3のどちらに伴うものであるかは明確でないが、胎土は円形周溝墓10の東側で出土した壺類（図43：80～88）と類似している。そのため、円形周溝墓10に伴う可能性が高いといえるが、今回の調査で検出された周溝墓群では供献土器の絶対量が少ないことをふまえれば、古墳3にも土師器の壺が伴う可能性は残されよう。

5. 方形周溝墓 11・円形周溝墓 12 ほか

立地と検出状況 方形周溝墓11は、方形周溝墓9の南西15m、円形周溝墓10の北西15mに位置する（図45・46）。方形周溝墓11は、調査区1と調査区2にまたがっており、東側には周溝を共有する形で円形周溝墓12が隣接している。いずれも墳丘規模が小さい小型の部類に入る。上面が削平されており、埋葬施設や盛土の痕跡は一切確認できなかった。

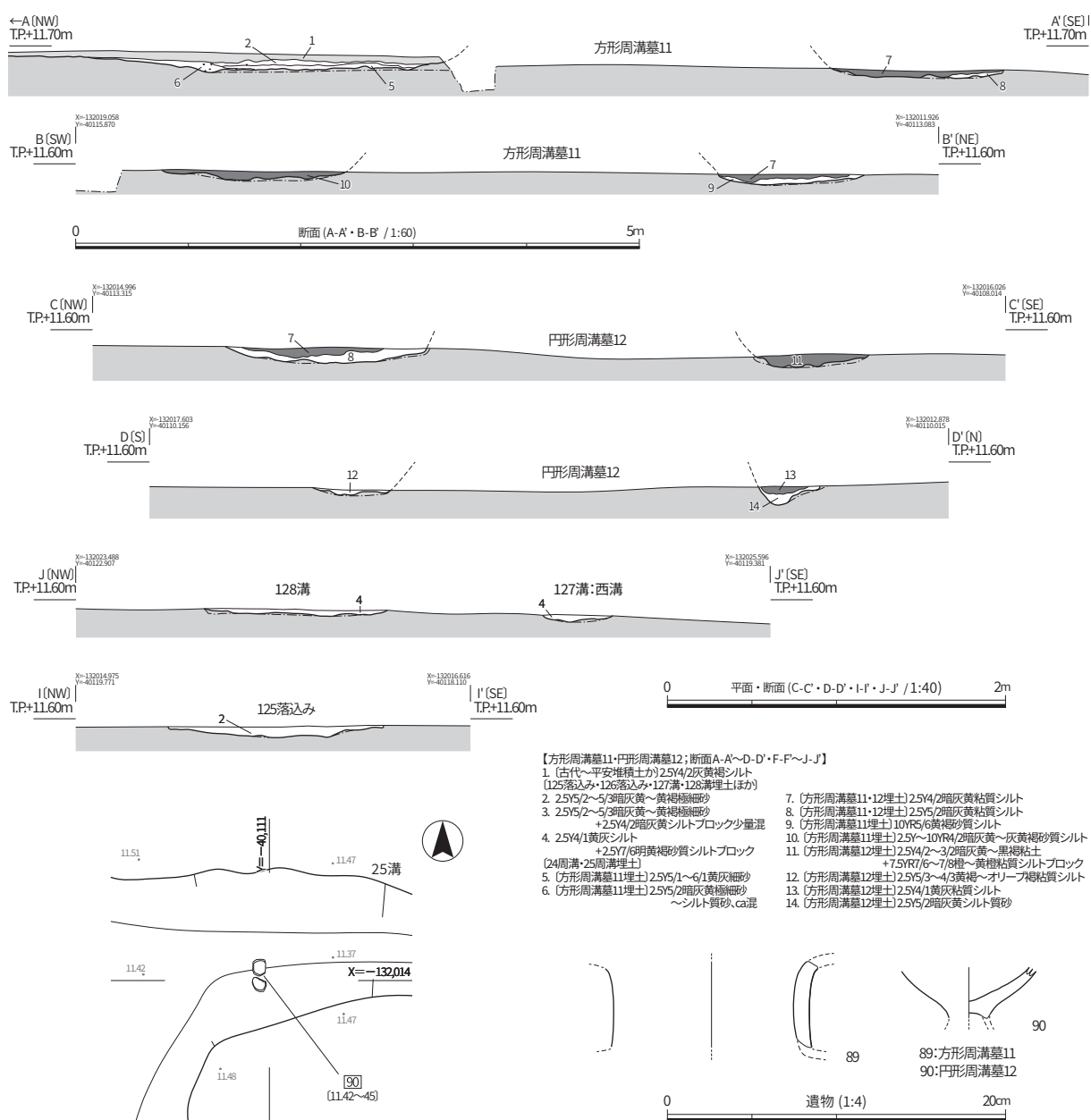


図46. 方形周溝墓 11・円形周溝墓 12 ほか 断面（2）・遺物出土状況・出土遺物

周囲の地形は、概ね標高値 T.P.+11.5～11.6 m前後におさまり、ほぼ水平に近い景観を呈する。ただし、もともとの地形は北西から南東方向に緩やかに下がっており、特に地形が高い北西側では基底面の直上の小規模な落込みから奈良時代～平安時代頃の土師器片が出土している。そのため方形周溝墓 11 の北西側は、後世の耕作地の造成に伴って削平を受けた結果、周囲がほぼ水平にならされた可能性が高い。なお、南西には、深さ 0.05～0.1 m のきわめて浅い落込みや溝（125 落込み・126 落込み・127 溝・128 溝）が検出されており、周溝墓群の築造と関連する可能性が推測される。

方形周溝墓 11 小型の方形周溝墓で、規模は東西 4.2 m、南北 3.9 m をはかる。南北軸は 24.1° 東に傾く。周溝間の距離は、最大〔6.2 m〕、墳丘上端距離は、〔東西 3.4 m〕・〔南北 3.2 m〕をそれぞれはかる。墳丘が正方形に近い形状を呈するのに対し、周溝は四隅が丸みを帯びているのが特徴で、幅は上端で〔1.1～1.5 m〕、底で〔0.4～0.8 m〕をはかる。周溝は東側がより深く、深さは最大で〔0.15 m〕をはかる。周溝埋土は、上部に暗色の粘質シルトが堆積し、下部に初期流入土とみられる黄褐色の砂質シルトが堆積する（図 46）。このことから、墳丘築造後に周辺が土壌化した様子がうかがえる。また、全体的にみて西側はやや砂質度合いが強い。周溝埋土中から土師器の細片が少量出土しており、周溝北側上面から出土した二重口縁壺の頸部 1 点を図化した（89）。

なお、1 区の西壁の断面観察から、墳丘上面が古墳時代～古代頃の耕作土に覆われていることが判明した。墳丘の削平時期については明確ではないが、古墳時代中期～平安時代前半までの間に周辺一帯が大きく削平されたことがわかる。

円形周溝墓 12 方形周溝墓 11 の東側に隣接しており、西側は方形周溝墓 11 と周溝を共有する。墳丘規模がさらにひとまわり小さく、径 2.6 m をはかる。周溝間の距離は〔3.3 m〕、墳丘上端距離は〔2.0 m〕をそれぞれはかる。一部に墳丘裾のアウトラインが直線的な部分があるなどやや不正な形状ではあるが、周溝のアウトラインが円形を呈しているため円形周溝墓とみなした。

周溝の幅は、上端で〔0.5～0.7 m〕、底で〔南北 0.2～0.5 m〕をはかる。周溝の深さは、最大〔0.1 m〕をはかる。埋土は方形周溝墓 11 と同様に暗色の粘質シルトが上部に堆積し、下部には初期流入土とみられる上層より明るい暗灰黄色のシルト質砂が堆積する（図 46）。このことから、墳丘築造後に周辺が土壌化した様子がうかがえる。周溝埋土中から出土した遺物はごくわずかで、北側の周溝底から出土した小型の台付土器 1 点を図化した（90）。

なお、上述した通り、墳丘上面は大きく削平を受けており、埋葬施設等の痕跡は認められなかった。墳丘規模が 2 m 台と極めて小さいことから、棺が設置されていたとしても棺ひとつ分がぎりぎりの大きさであり、少児埋葬等の可能性も考慮する必要がある。

出土遺物 2 基の周溝墓から出土した遺物は少量で、方形周溝墓 11 の周溝（24 溝）上面から出土した二重口縁壺の頸部（89）と、円形周溝墓 12 の周溝（25 溝）底から出土した小型の台付土器（90）の 2 点を図化した（図 46）。方形周溝墓 11 出土の二重口縁壺（89）は、頸部が直立する形式で、胎土に石英・長石・チャート・赤色粒を含む。頸部の破片のみであるため、装飾等の有無は不明であるが、胎土の特徴も含めて円形周溝墓 10 出土の二重口縁壺（図 43：80 など）と特徴が一致する。円形周溝墓 12 から出土した小型の台付土器（90）は、鉢または壺に復元されるとみられ、胎土に石英・長石・チャート等を含むが、上述の二重口縁壺と比べると胎土が粗いことが特徴である。

時期については、方形周溝墓 11 は二重口縁壺（89）の形式から、庄内式期～布留式古段階の範疇におさまる。円形周溝墓 12 出土の台付壺（90）については、時期決定がやや難しい器種ではあるが、方

形周溝墓 11 と周溝を共有することから、ほぼ同時期の所産と考えられる。

125 落込み・126 落込みほか・127 溝・128 溝 方形周溝墓の西側～南西側にかけて、浅い溝状遺構や落込みが面的に検出された。特に方形周溝墓 11 の西側の溝状にのびる 125 落込みは、周溝と接続する形で北東―南西方向にのびており、埋土の様相からみても方形周溝墓 11 の築造時の掘削と判断できる。その長さは〔7.5 m〕、検出面での最大幅は〔1.3 m〕をはかる。

南側の 126 落込みは、125 落込みよりも一段深く掘り込まれている不定形の落込みで、規模は南北〔7.0 m〕、東西〔5.5 m〕をはかる。深さは 0.05 m 以下の範囲がほとんどで、最も深い中央北寄りで最大〔0.08 m〕の深さをはかる。南側では、落込みがより浅くなり、南端部は攪乱により失われている。ただし、やや不正ながらも中央部にわずかな高まりを残した形で溝が方形にめぐっており（127 溝・128 溝）、小型の方形周溝墓に復元できる可能性がある。

出土遺物は、126 落込みから土師器の細片が 1 点出土したのみである。遺構の性格としては、円形周溝墓 10 の周囲でみられるような築造時の造成痕跡と考えられる。

6. 方形周溝墓 13

立地と検出状況 円形周溝墓 10 の南西 30 m に位置し、今回の調査でみつかった周溝墓では最も南西に位置する（図 47）。周辺一帯が奈良時代以降の耕作段の造成によって削平を受けているため、旧地形の詳細は明確でないが、大まかには西から東に緩やかに傾斜する地形が復元できる。墳丘の東側約半分が耕作段の造成によって、南側は古池の築造によって大きく削平を受けており、北西コーナーから西側のみ周溝が残存している。また、墳丘中央部北東寄りには、土坑状の攪乱がある。このように墳丘の大部分が大きく削平を受けており、埋葬施設や盛土の痕跡は一切検出できなかった。

墳丘・周溝 墳丘規模は、残存する南北方向で 5.8 m をはかり、墳丘の南北軸は 15.1° 東に傾く。周溝間距離は〔南北 8.0 m〕以上に復元でき、墳丘上端距離は〔南北 5.1 m〕をはかる。周溝の幅は、上端の計測値が〔0.9～1.3 m〕、底で 0.7～0.9 m をはかる。深さは〔最大 0.12 m〕で、埋土は暗色の粘質シルトを主体とする。周溝下部では、加工時形成層とみられるブロック混じりの堆積を確認した。周溝埋土にはほとんど遺物を含まないが、周溝北側から厚手の土師器壺体部片が出土している（90）。

出土遺物 周溝から出土した遺物は、細片がわずかに出土したのみで、時期決定に資する口縁部や底部などの破片はない。ただし、周溝北側から出土した厚手の壺の体部片（90）は、内面のハケ調整の痕跡や角閃石を含む胎土から、最大径 40～60 cm 程度に復元される生駒西麓産の大型複合口縁壺の体部片とみなすことができる。庄内式新段階以降に出現する器種であることから、方形周溝墓 13 の築造時期は庄内式期～布留式古段階頃と推測される。

なお、埋土中からは、黒色土器 A 類椀の細片が出土しているが（92）、周溝墓の上面が大きく造成・削平を受け、上面には耕作痕跡も多数確認されることから、混入品とみて大過はない。

7. その他の遺構・遺物

31 溝・52 溝 31 溝は方形周溝墓 9 の北側 20 m で検出された北東―南西方向にのびる溝で、総長 19.5 m をはかる。検出面での幅は 0.25～0.4 m 前後で、深さは地点によって異なるが、最大で 0.12 m である。上面が大きく削平を受けているため、溝掘削時の旧地形の詳細は不明であるが、下層の流路とほぼ並行する方向にのびており、本来の地形・等高線に沿う形でのびていたものとみられる。31 溝の南端では、南側に長さ 1.6 m の並行する 52 溝がのびている。2 条の溝どうしの距離は 1.0 m で、方向からみて関連する遺構と目されるが、同時併存の有無や先後関係の有無は不明である。

第5章 遺構・遺物

31 溝の底の高さはほぼ一定で、T.P.+11.75 ～ 11.79 m の範囲におさまる。それに対し 52 溝の底は、T.P.+11.78 ～ 11.80 m で、わずかに高い。埋土は、いずれも灰黄色系のシルト質砂～極細砂を主体とし、埋土の堆積状況から恒常的な流水痕跡は認められない。

出土遺物は、52 溝から庄内式期～布留式頃の土師器の細片が数点出土しているのみで、溝の埋没時期を示すかどうかは現状では不明である。時期については、ほかの遺構との切り合い関係からは、重複する掘立柱建物 1 および周辺の柱穴のいずれよりも先行するため、10 世紀後半以前であることは確実である。また、隣接する平成 24 年度調査区 (CJS12-1) では、奈良時代の水路が複数検出されており、それらはいずれも方位に沿って掘削されていることから、それらよりも先行する蓋然性が高い。以上から、詳細な時期は不明ながらも、古墳時代前期～飛鳥時代までの間に掘削された水路と認識するのが妥当である。

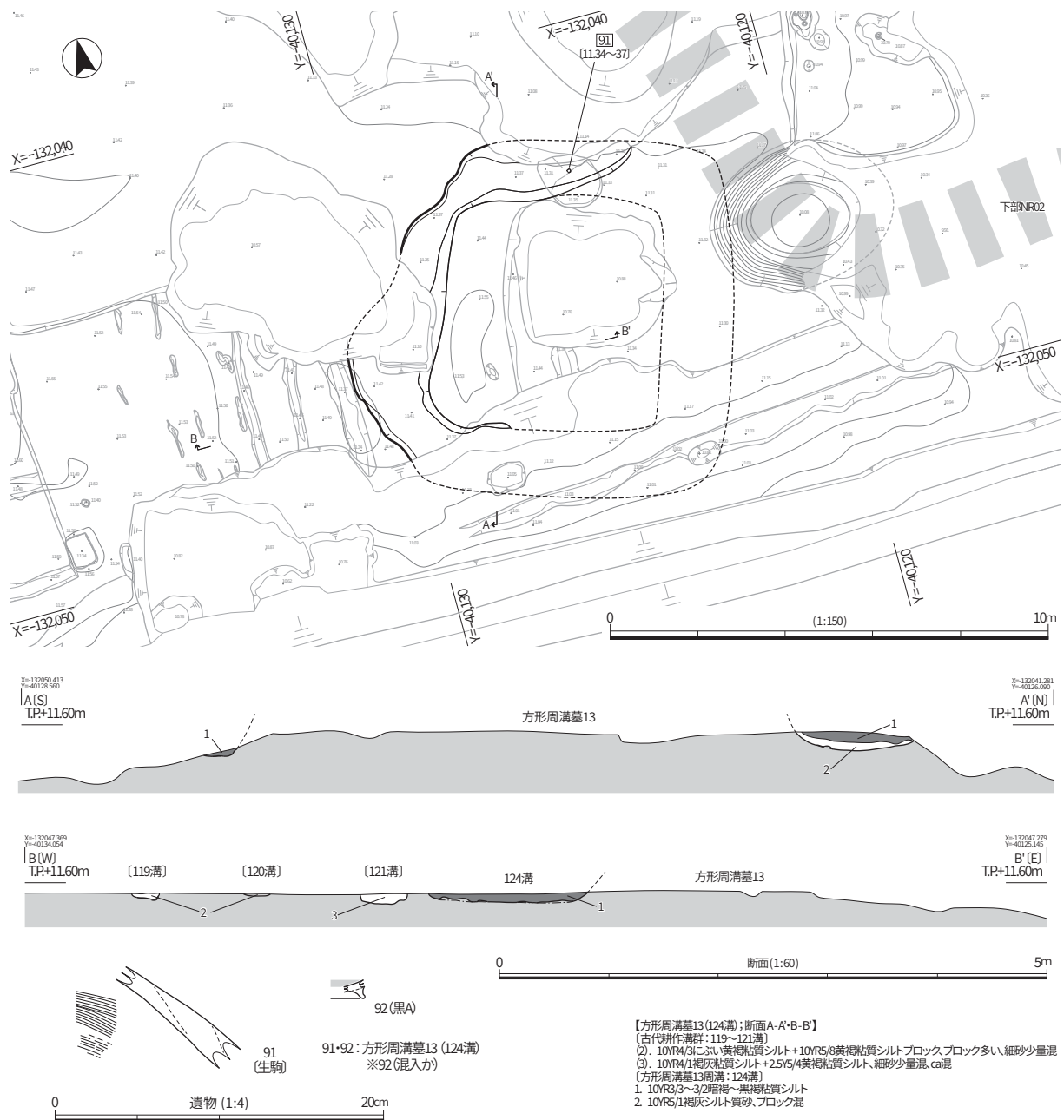


図 47. 方形周溝墓 13 平面・断面・出土遺物

包含層出土の古墳時代前期以前の遺物 布留式以前の遺物については、周溝墓に帰属するものを除けばごくわずかであるが、弥生土器とみられる土器の細片がいくつかあり、図化可能なものはすべて図化した。後期とみられる壺や鉢の口縁部や頸部のほか（93～96）、IV様式～V様式前半頃の鉢または壺の口縁部片（97）、II様式後半頃の小型の広口壺（98）などがある。いずれも胎土に石英・長石・チャート・赤色粒などを含む在地産とみられるが、中期後葉以降の資料（93～97）については、周溝墓群に伴う二重口縁壺類に比べて総じて胎土が粗い。一方、中期前葉にさかのぼる広口壺（99）は、胎土に上記と同様の石英・長石等の大ぶりの混和材を含むものの、粘土素地そのものは緻密で焼成も良い。外面に施されたややいびつな直線文もよく残っており、後期以降の土器とはやや胎土や焼きの質が異なっ

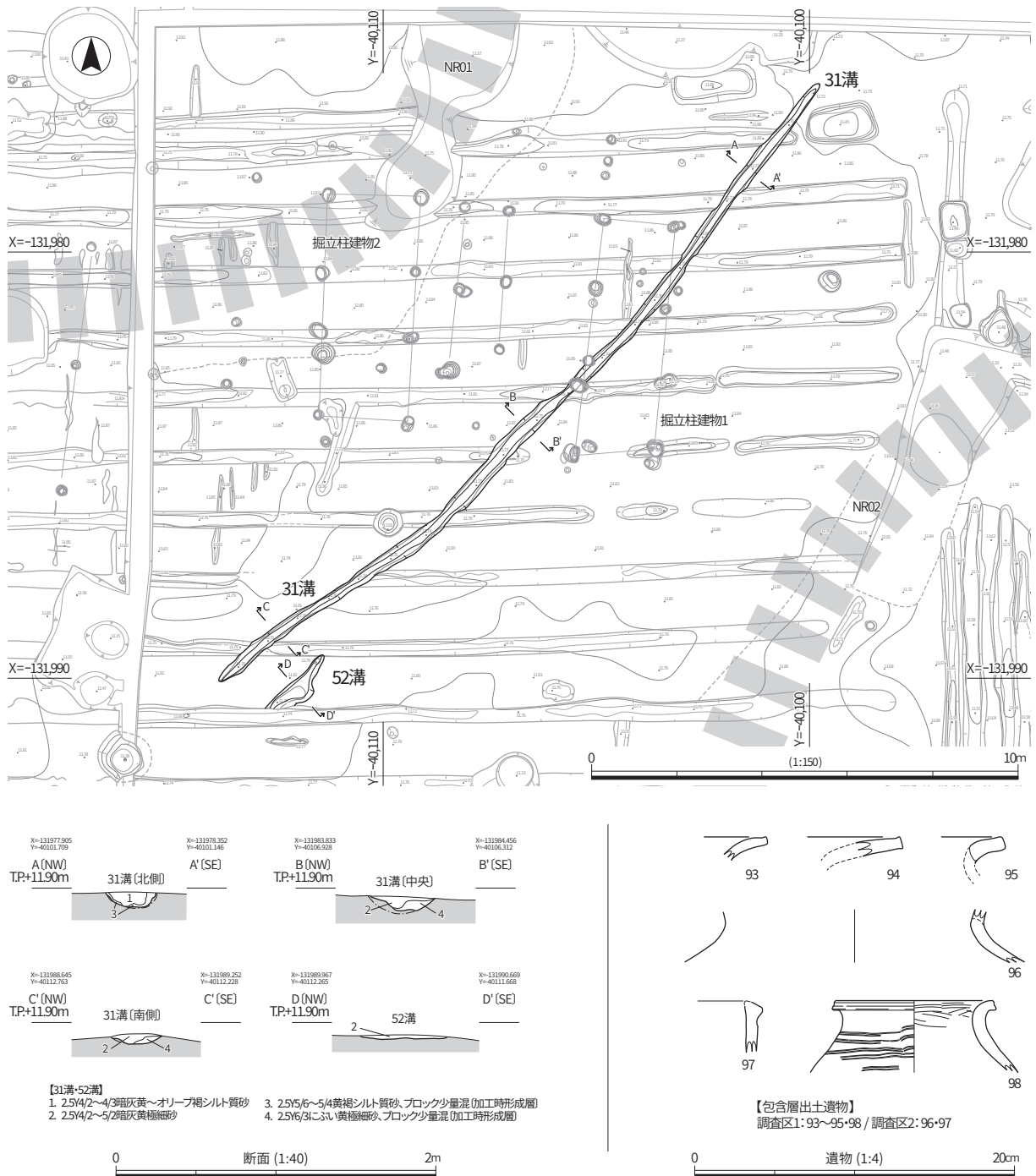


図 48. 31 溝 平面・断面 / 包含層出土遺物

ている。遺物の性格ははっきりしないが、東奈良遺跡周辺での一時的な土地利用に伴って持ち込まれた土器群と推測されよう。

8. 小結

今回の調査区では、古墳時代初頭～前期の方形・円形周溝墓が計5基検出された。規模については、大小の差があり、10 m前後の一群から小さいものでは2 m台のものまでである。上面が大きく削平されていたため、埋葬施設や盛土の痕跡はすべて残っていなかったが、墳丘上に供献されたとみられる二重口縁壺が少数ながらも出土しており、葬送儀礼の一端をうかがい知ることができた。このことに加え、方形周溝墓と円形周溝墓で、周溝形状や築造方法に明確なちがいが認められた点も重要な成果である。ほかでは、方形周溝墓9の埋土上層から古墳時代後期の遺物が一定量出土していることから、この時期に墳丘が削平された可能性が高まったが、これについては古墳時代以降の開発の展開を考える上でも重要な情報となる。

なお、今回の調査区の範囲内で、2012～2013年の調査時に検出された古墳3の周溝の一部が検出されたが、調査の結果、隣接する円形周溝墓10との間の堆積土の関係から、当初想定された古墳時代中期後半～後期の古墳ではなく、古墳時代前期以前にさかのぼる蓋然性が高まった。さらにその北側に位置する平成24年度調査区の古墳4についても、古墳3と同様に出土遺物を含まない点から、築造時期を再検討する必要がある。

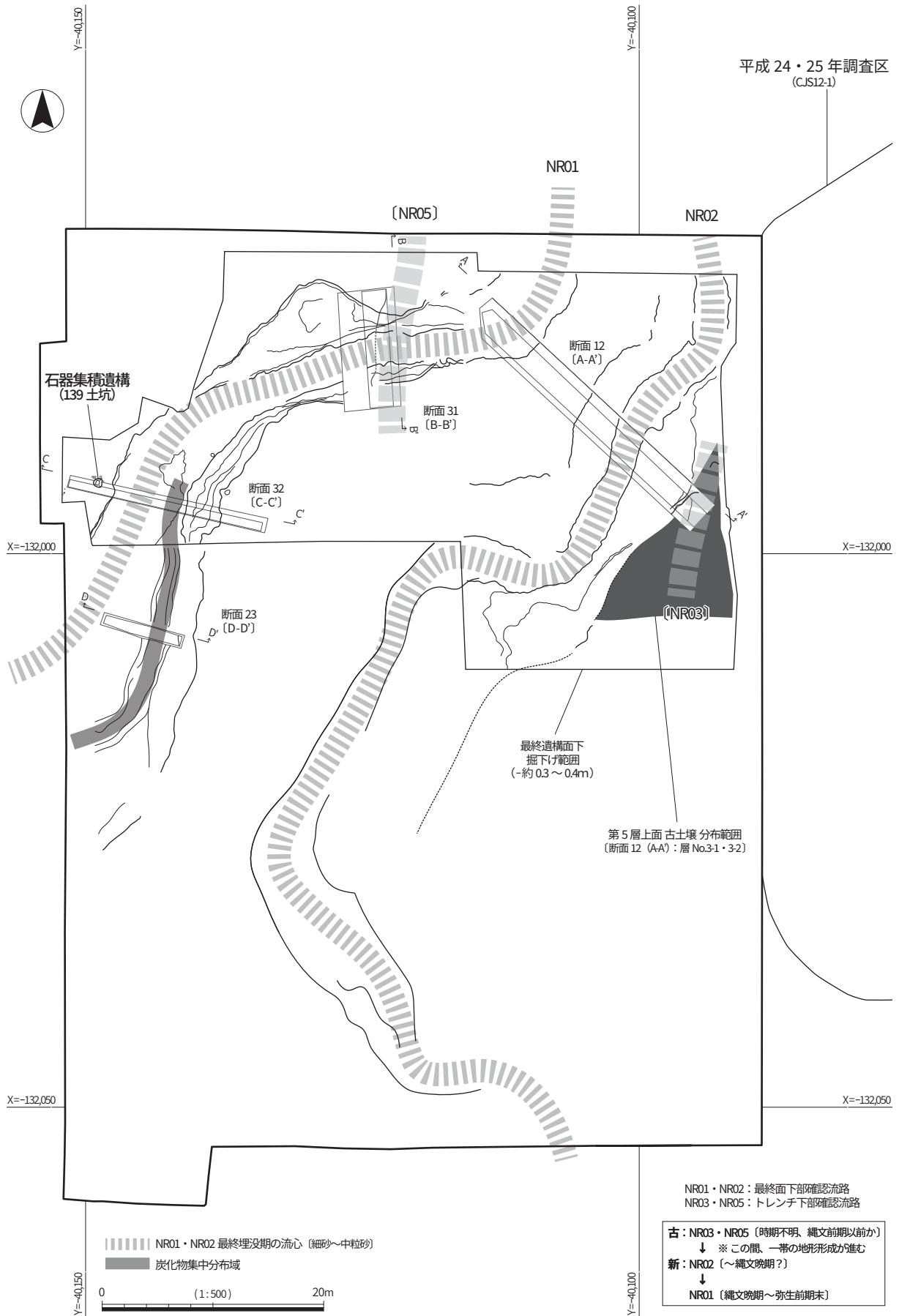
摂津地域では、かねてから弥生時代後期後半以降、円形周溝墓が卓越する地域として注目されてきたが⁵⁾、方形と円形の周溝墓が共存する調査事例はあまり多くない。弥生時代から古墳時代への過渡期にあたる墓制の変化を考える上でも重要な成果であり、詳細な年代や位置づけについては総括にてやや詳しく検討したい。

第4節 下層確認の成果：弥生時代前期以前

1. 概要

今回の調査は、第3層除去面を調査最終面（＝下面）として進めたが、地点ごとに基盤層（第4層以下）上面の層相が異なっていた。特に上面の削平度合いが著しい地点を中心に、下部に複数の流路の存在が確認されたため、重機による部分的な掘り下げや下層確認トレンチを設けて、流路の平面的な拡がりや遺物の有無、調査地一帯の基盤層の壘重状況を確認し、断面の記録を作成した（図49・63・64）。こうしたデータは、周辺一帯の地形の形成過程を考えるための基礎的な情報となり、遺構・遺物の動態と照合することで、環境変化と人間活動の関係を考えるための手がかりとなる。

また、包含層中からは、サヌカイトの剥片を中心に一定量の石器が出土したほか、下面では石器集積遺構（139土坑）が確認された。こうした石器群とそれに関連する遺構は、前節までに報告した弥生時代後期以降の遺構・遺物よりも明らかに先行する時期のものであり、石器の出土傾向や石器集積遺構の位置から近接する自然流路NR01との関連が推定された。石器群の時期については、集積遺構や周辺で土器片が少量伴っていたものの、いずれも磨滅した細片であったため、時期比定が困難であった。そのため、集積遺構内や流路内に含まれる炭化材や流木のAMS年代測定を実施し、時期決定と集積遺構と流路の関係を検証した。その結果については第6章にて詳述するが、石器集積遺構(139土坑)が2,400年前頃（弥生時代前期後半頃）、近接する自然流路NR01が3,000年前頃～2,250年前頃（縄文時代晩



期～弥生時代中期前葉頃) という年代値が得られてたため、石器集積遺構の形成時期に流路が存在していたことが明らかになった。

そこで以下では、調査地全体の石器の出土傾向、石器集積遺構(139土坑)、自然流路の検出状況と基盤層の壘重状況についてそれぞれ報告し、石器製作にかかわる遺構・遺物群とそれをとりまく周辺の地形環境との関係について整理をしたい。

なお、今回の調査で出土した石器石材の大半はサヌカイトで、産地はいずれも二上山とみられる。そのほかの石材では、結晶片岩の板石材(S16)とチャートとみられる剥片(S8)がある。出土した石器のすべてを計測し、サイズを区分した上で、本文中の一覧表およびグラフにて計測データを示している(表3・4・5、図51・57・58)。計測は、長・短・幅・重量を記録し、重量は0.01g単位で計測した。石器のサイズ区分は、長さもしくは幅を基準に、0.2cm未満とそれ以上は0.5cmごととし、サイズa～kまでの11段階に分類した。このうち0.5cm未満のa・bサイズの資料については、微細剥片と呼称する。なお、石器集積遺構(139土坑)から出土した多数の微細剥片を含む一括での取り上げ資料については、まず取り上げ番号ごとに全資料をサイズ区分し、サイズ区分ごとにまとめて重量を計測している。一覧表には、すべての石器の計測データを掲載しているが、重量等を集計したグラフはサヌカイトに限定している。また、関連する土器についても、出土点数と重量の計測データを掲載している(表3・4)。

2. 包含層出土の石器

石器の出土傾向 包含層中から、サヌカイトの剥片を中心に一定量の石器が出土した。石器の分布は、調査地北西の石器集積遺構(139土坑)の周辺に集中する傾向が認められ、ほかの地点では散在的に分布することが確認された(図50)。包含層は、主に大ぶりのスコップを用いて掘削したにもかかわらず、石器の分布に明らかな偏在性があることが確認されたため、石器の分布に一定の有意性があるとみてよいだろう。石器の分布状況から、主に出土地点から石器のまとまりをa～dまで4つに大別できるため、以下ではこれを基準に出土状況を報告し、資料を提示する(表3、図51・52・53)。

石器集積遺構の周辺では、d. 遺構の周囲(図53：S32～S36)と東側に隣接する自然流路NR01の南端付近に偏りがみられ、自然流路NR01上面では石器集積遺構の東側のc. 20-5j地点(図53：S17～S31)と、そこからやや南のb. 2A-5a地点(図52：b・S9～S16)の2地点に分布の中心があることが判明した。これらは、包含層掘削中に出土した資料が大半であるが、一部に原位置で出土した資料もあるため、特に東側のc. 20-5j地点から出土した石器については、近接する位置関係からみて集積遺構との関連が容易に推定できる。それに対し、やや南のb. 2A-5a地点は、集積遺構から約10m離れているが、この付近では基盤層上面で炭化物が帯状に拡がることを確認されている(図50)。石器集積遺構の埋土中にも同様の炭化物や土器の細片が含まれることから、b. 2A-5a地点の石器群は石器集積遺構との一定の関連性がうかがえる。

以上から、調査地北西の石器群(b・c・d)は、石器集積遺構(139土坑)や自然流路NR01と密接にかかわる遺物と考えると大過はなく、分布傾向からみて自然流路NR01よりも西側に石器の製作にかかわる人間活動がおこなわれたと判断できる。また、石器の分布地点が調査地西端に偏ることをふまえれば、調査地の西側にも石器群の拡がりも想定されよう。ただし、自然流路NR01の埋土中から出土した石器は1点のみのため、石器群と流路の具体的な関係性についてはより詳細な検証が必要である。この点については、後述の自然流路の報告項目にて、流路の層序を検討した上で相互の関係を整理した

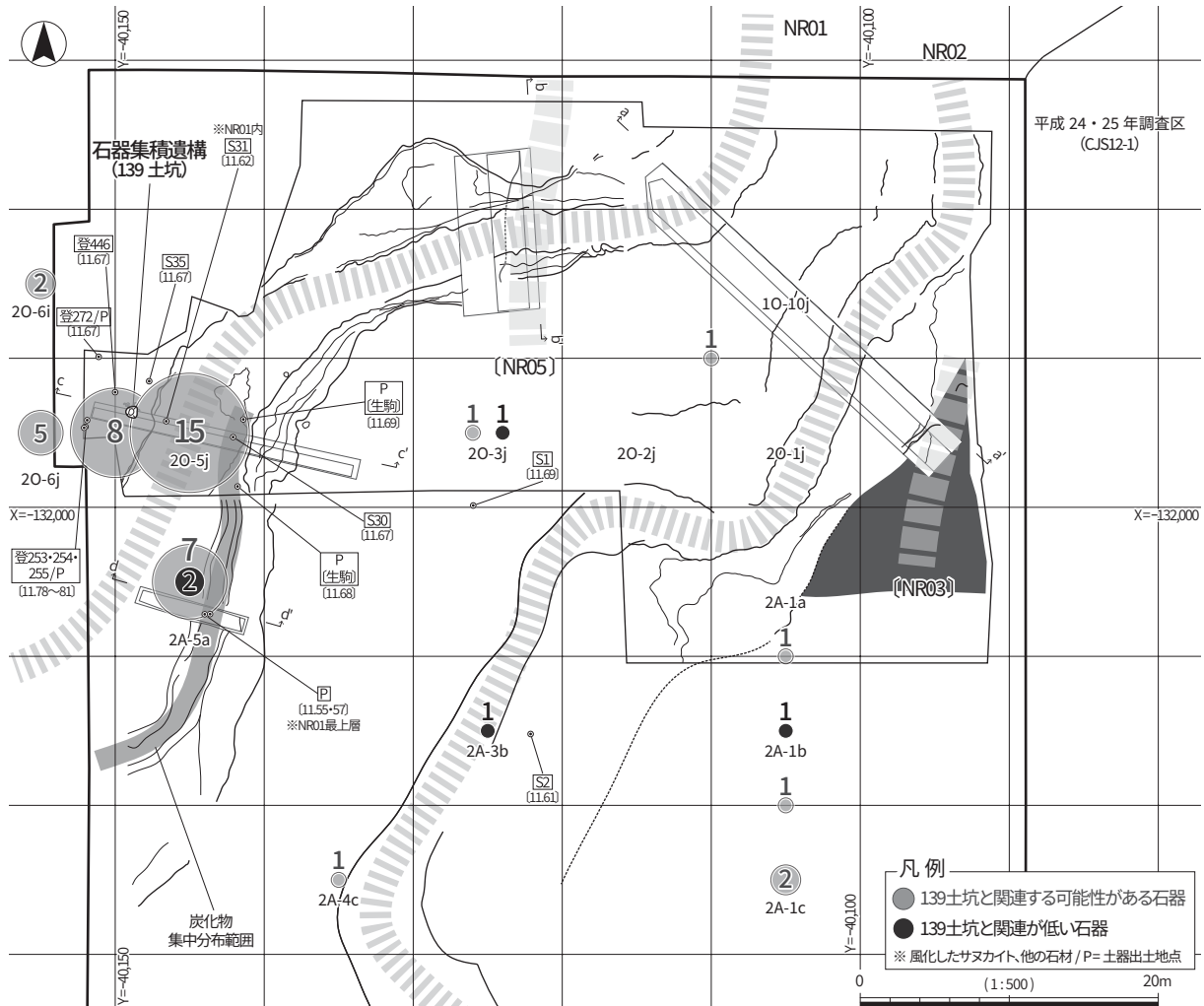


図 50. 石器の分布傾向

い。

また、石器集積遺構（139 土坑）の周辺出土の石器は、大半は検出面と同レベルで出土しているが、層序からみて一部に集積遺構よりも下部の堆積に伴う石器もみられるなど、石器集積遺構よりも先行する資料が確実に一定数含まれる。さらに遺構上面は、検出状況からみて、後世の耕作によって削平されている可能性が高く、検出面と同レベルで出土した石器についても石器集積遺構よりも先行する可能性がある。そのため、集積遺構と関連する資料と先行する資料が混在していると考えられ、個々の資料の位置づけについて注意を払う必要がある。なお、石器の出土地点の周辺では、土器の細片も少量出土しており、それらの大半は在地の弥生土器と胎土が類似し、一部に生駒西麓産胎土の資料が含まれる。石器と近接した位置で出土している資料がいくつかあるため関連が推定できるが、いずれも著しく磨滅しており、図化可能な資料や時期が特定できる資料はない。

これ以外の石器（図 52： a. S1 ～ S8）については、調査地北半を中心に出土地点が分散している。そのため、石器集積遺構（139 土坑）をはじめとする調査地北西の石器群との関連は明確でない。分布の密度は、10 m の範囲で 1 点出土がみられるかどうか、といった程度であり、まったく関連しない資料も一定量含まれると思われる。特に 20 - 3j 地点や 20 - 3b 地点の基盤層直上から出土した 2 点の石鏃（S1 / S2）は、他の石器と比べて石材の風化度合いが著しいことから、関連性が低いより古い時

第5章 遺構・遺物

表3. 包含層出土石器・弥生土器 一覧 (図化資料 + 未図化資料)

表 3-1. 包含層出土石器一覧

報告 No.	図 No.	写真	登録 No.	調査 区	地区	(出土地点・遺構)	器種	(cm)			重量 (g)	サイズ 分類	原 面	備 考	原 位置	座 標 (X/Y)	T.P. 値
								長	幅	厚							
S1	52	18・上	132	2区	2A-3j	基盤層(第4層)直上	石鏃 (凹基式)	2.0	1.7	3.0	0.82	f	風化あり=古い	○	-131999.879/-40125.974	11.683	
S2	52	18・上	138	2区	2A-3b	包含層(第3層)	石鏃 (凹基式)	2.2	1.6	0.3	0.62	f	風化あり=古い 刃部先端欠損 =使用時の打撃痕か	○	-132015.213/-40122.103	11.614	
S3	52	18・上	150	2区	2A-4c	包含層(第2d層)	石鏃 (凹基式)	2.2	2.0	0.3	1.17	f	弥生前期か				
S4	52	18・中	8	1区	10-10j / 20-1j・2j	機械掘削・NR02 上面 (古土壌層=断面 12: No.3-1)	剥片	3.0	4.2	1.3	13.30	j	○				
S5	52	18・中	230	3区	20-3j	下面(遺構面精査・直上)	不明	4.2	2.9	0.4	5.68	j					
S6	52	18・中	23	1区	2A-1b・1c	円形周溝墓 10 22 溝上面	剥片	3.4	1.5	0.5	1.76	h					
S7	52	18・中	52	1区	2A-1c	円形周溝墓 10 22 溝埋土	剥片	2.3	2.3	0.5	3.02	e	○				
S8	52	18・中	53	1区	2A-1b	円形周溝墓 10 23 落込み埋土	剥片	2.7	3.2	0.7	3.92	h					
-	-	-	22	1区	2A-1a・1b	方形周溝墓 9 上面	剥片	2.6	1.3	0.6	2.29	g					
-	-	-	51	1区	2A-1c	円形周溝墓 10 22 溝上面	剥片	3.0	1.5	0.3	1.09	g					
S9	52	18・下	141	2区	2A-5a	包含層下部 (NR01 上面)	剥片	3.7	4.5	0.5	7.76	k	○				
S10	52	18・下	140	2区	2A-5a	包含層下部 (NR01 上面)	剥片	1.8	3.0	0.5	2.12	h					
S11	52	18・下	141	2区	2A-5a	包含層下部 (NR01 上面)	剥片	3.6	3.1	0.7	5.67	i	○				
S12	52	18・下	140	2区	2A-5a	包含層下部 (NR01 上面)	楔形石器	3.3	4.9	0.7	14.12	k	○	両極打法			
S13	52	18・下	140	2区	2A-5a	包含層下部 (NR01 上面)	剥片	3.7	3.6	0.7	9.63	i					
S14	52	18・下	125	2区	2A-5a	包含層 (NR01 上面)	剥片	3.2	3.2	0.7	7.46	h	○				
S15	52	18・下	140	2区	2A-5a	包含層下部 (NR01 上面)	剥片	2.6	3.4	0.5	3.55	h	○				
S16	52	19・下	108/141	2区	2A-5a	機械掘削 / 包含層下部 (NR01 上面)	(板状石器)	10.0	5.9	0.4	35.00	-		※石器:結晶片岩、2点接合 (紅灘片岩の可能性あり) 刃部あり→石包丁 or 石鋸			
S17	53	19・上	221	3区	20-5j	包含層 (NR01 上面・南)	剥片	1.9	3.8	0.9	6.93	i	○				
S18	53	19・上	221	3区	20-5j	包含層 (NR01 上面・南)	剥片	2.0	3.0	0.9	4.96	h					
S19	53	19・上	221	3区	20-5j	包含層 (NR01 上面・南)	剥片	2.1	1.2	0.6	1.39	f	○				
S20	53	19・上	221	3区	20-5j	包含層 (NR01 上面・南)	剥片	2.7	2.0	0.3	2.07	g	○				
S21	53	19・上	221	3区	20-5j	包含層 (NR01 上面・南)	剥片	1.7	2.4	0.4	1.34	f					
S22	53	19・上	221	3区	20-5j	包含層 (NR01 上面・南)	剥片	1.7	2.0	0.4	1.21	f	○				
S23	53	19・上	221	3区	20-5j	包含層 (NR01 上面・南)	剥片	1.4	1.8	0.4	0.76	e					
S24	53	19・上	221	3区	20-5j	包含層 (NR01 上面・南)	楔形石器	1.9	2.0	0.3	0.99	f		両極打法			
S25	53	19・上	223	3区	20-5j・6j	包含層下部 (NR01 上面・南)	剥片	2.9	3.4	0.9	7.89	h	○				
S26	53	19・上	223	3区	20-5j・6j	包含層下部 (NR01 上面・南)	剥片	2.9	1.8	1.3	4.32	g	○				
S27	53	19・上	223	3区	20-5j・6j	包含層下部 (NR01 上面・南)	剥片	3.1	3.3	0.2	3.56	h	○				
S28	53	19・上	223	3区	20-5j・6j	包含層下部 (NR01 上面・南)	剥片	3.6	3.0	0.6	7.56	i	○				
S29	53	19・上	223	3区	20-5j・6j	包含層下部 (NR01 上面・南)	剥片	2.3	1.9	0.5	1.26	f	○				
S30	53	19・上	278	3区	20-5j	第4層 (NR01 検出面直上)	剥片	2.8	1.8	0.3	1.32	g	○		○	-131994.086/-40141.403	11.687
S31	53	19・上	445	3区	20-5j	NR01埋土最上層 (断面 32: No.7)	剥片	2.9	1.4	0.3	1.23	g	○		○	-131994.223/-40146.58	11.616
-	-	-	223	3区	20-5j・6j	包含層下部 (NR01 上面・南)	剥片	0.7	1.7	0.2	0.24	e					
-	-	-	223	3区	20-5j・6j	包含層下部 (NR01 上面・南)	剥片	0.9	0.9	0.2	0.21	b					
S32	53	19・下	233	3区	20-5j	下面(耕作区南埋土)	剥片	1.4	1.3	0.2	0.39	d					
S33	53	19・下	252	3区	20-5j	第4層(139土坑周辺・北)	剥片	1.8	2.1	0.3	0.92	f					
S34	53	19・下	252	3区	20-5j	第4層(139土坑周辺・北)	剥片	1.1	2.0	0.1	0.28	f					
S35	53	19・下	273	3区	20-5j	第4層(139土坑周辺・北)	剥片	1.7	1.6	0.3	0.60	e			○	-131991.521/-40147.721	11.713
S36	53	19・下	312	3区	20-5j	第4層(139土坑周辺・北)	石鏃 (未製品)	1.7	1.5	0.3	0.59	e		左側面のみ押圧剥離痕跡	○	-131992.814/-40149.811	11.765
-	-	-	253	3区	20-6j	第4層(139土坑周辺・西)	剥片	3.2	0.9	0.4	1.36	h			○	-131994.158/-40151.89	11.783
-	-	-	254	3区	20-6j	第4層(139土坑周辺・西)	剥片	1.7	1.3	0.2	0.51	e			○	-131994.596/-40151.992	11.774
-	-	-	255	3区	20-6j	第4層(139土坑周辺・西)	剥片	0.8	1.0	0.2	0.13	d			○	-131994.667/-40152.086	11.778
-	-	-	256	3区	20-6j	第4層(139土坑周辺・西)	剥片	0.9	1.3	0.2	0.21	d		登 No.253～255 周辺			
-	-	-	272	3区	20-6i	第4層(139土坑周辺・北)	剥片	0.9	0.7	0.2	0.09	c			○	-131989.888/-40151.109	11.747
-	-	-	272	3区	20-6i	第4層(139土坑周辺・北)	剥片	0.4	0.5	0.1	0.02	c			○	-131989.888/-40151.109	11.747
-	-	-	310	3区	20-5j	第4層(139土坑周辺・北)	剥片	0.6	0.5	0.2	0.02	c			○	-131993.275/-40148.082	11.741
-	-	-	311	3区	20-5j	第4層(139土坑周辺・北)	剥片	0.6	0.5	0.1	0.03	c			○	-131992.824/-40148.804	11.723
-	-	-	313	3区	20-5j	第4層(139土坑周辺・北)	剥片	2.5	1.4	0.2	0.68	g			○	-131992.834/-40149.8	11.763
-	-	-	446	3区	20-6j	第4層(NR01西側肩部) (断面 32: No.7)	剥片	1.1	0.8	0.2	0.23	d		石器集積遺構下部	○	-131992.263/-40150.006	11.670

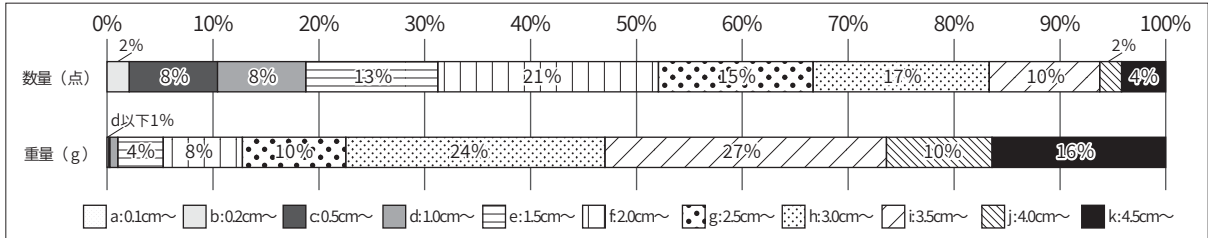
表 3-2. 包含層出土弥生土器一覧

登録 No.	取り上げ 区分	遺構	地区割	座標	T.P. 値	備 考	破片数	総重量 (g)	最大サイズ (cm)	最小サイズ (cm)
252	一括		20-5j			石器集積遺構北 生駒西麓産 x2	3	1.85	2.0	0.9
253	原位置		20-5j	-131994.485/-40151.924	11.807		1	26.67	6.6	
256	一括		20-5j			登録 No.235～235 周辺	15	8.45	2.6	0.6
272	原位置		20-5j	-131989.888/-40151.109	11.747		2	2.05	2.6	1.7
279	原位置	NR01 上面	20-5j	-131994.086/-40141.403	11.687	すべて生駒西麓産	3	9.31	6.0	3.0
314	原位置	NR01 上面	20-5j	-131998.597/-40141.789	11.680	生駒西麓産 x2	3	0.33	1.4	0.6

包含層出土石器サヌカイト剥片集計データ（石器集積遺構以外）

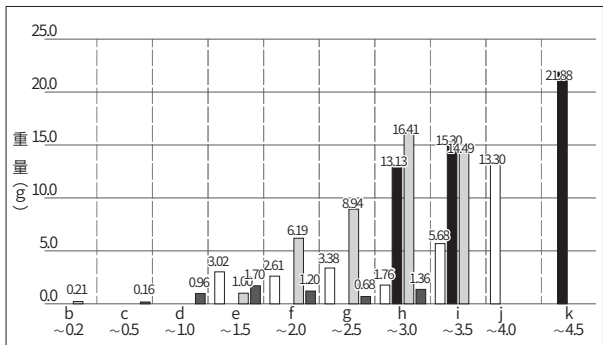
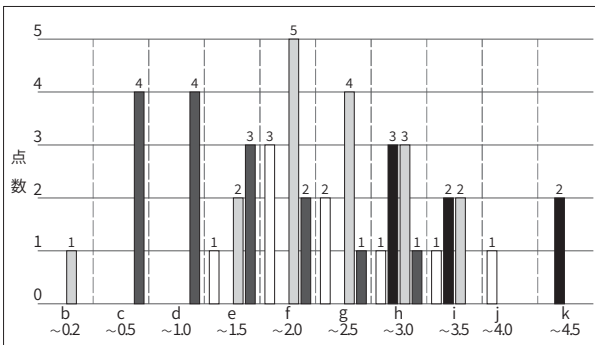
	a: 0.1cm～	b: 0.2cm～	c: 0.5cm～	d: 1.0cm～	e: 1.5cm～	f: 2.0cm～	g: 2.5cm～	h: 3.0cm～	i: 3.5cm～	j: 4.0cm～	k: 4.5cm～
数量 (点)		1	4	4	6	10	7	8	5	1	2
重量 (g)		0.21	0.16	0.96	5.72	10.00	13.00	32.66	35.47	13.30	21.88

サヌカイト総計 48点 133.36g
 (ほか石材) 3点 38.92g



地点別：包含層出土石器サヌカイト剥片集計データ

	a: 0.1cm～		b: 0.2cm～		c: 0.5cm～		d: 1.0cm～		e: 1.5cm～		f: 2.0cm～		g: 2.5cm～		h: 3.0cm～		i: 3.5cm～		j: 4.0cm～		k: 4.5cm～		総点数	総重量
	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量				
a. その他									1	3.02	3	2.61	2	3.38	1	1.76	1	5.68	1	13.30			9	29.75
b. 南東：2A-5a 地点															3	13.13	2	15.30			2	21.88	7	50.31
c. 東：20-5j 地点			1	0.21					2	1.00	5	6.19	4	8.94	3	16.41	2	14.49					17	47.24
d. 集積遺構周辺					4	0.16	4	0.96	3	1.70	2	1.20	1	0.68	1	1.36							15	6.06
総計			1	0.21	4	0.16	4	0.96	6	5.72	10	10.00	7	13.00	8	32.66	5	35.47	1	13.30	2	21.88	48	133.36



【包含層 地点別剥片サイズ組成】

□ a.その他 ■ b.2A-5a地区 ▨ c.20-5j地区 ■ d.集積遺構周辺

図 51. 包含層出土石器 点数・重量別 集計データ

期の資料と判断でき、形態的にみても縄文時代晩期以前にさかのぼる石鏃とみなせる。そのほかの石器については、石材の異なるチャートの剥片（S8）を除き、石器集積遺構を含む調査地北西の石器群と風化度合いは大きく変わらないため、関連する可能性はある。

a. 包含層出土石器 調査地北西の石器の集中地点以外から出土した石器は計9点で、このうちの7点を図化した（図 52：S1～S8）。重量は 33.67g をはかる。石鏃 3 点（S1～S3）と不明の 1 点（S5）のほか、剥片 4 点（S4・S6～S8）があり、石材はチャートとみられる剥片 1 点（S8）を除き、ほかはすべてサヌカイトである。石鏃はいずれも凹基式で、このうちの 2 点は（S1・S2）ほかのサヌカイトの石器と比べて明らかに石材の風化度合いが強く、細身の形状などから先行する縄文時代晩期以前の資料とみられる。それに対し、別の 1 点（S3）については、上記 2 点と同じ凹基式の石鏃ではあるものの、石材の風化度合いや幅広で薄づくり全体の形状、基部の形態などが大きく異なっている。そのため、製作時期が異なることが容易に推定でき、形態からみて弥生時代前期頃と推測される。

器種不明の石器（S5）については、両面に加工痕跡があり、一案として削器としての使用の可能性が考えられる。剥片は、2～3cmサイズの 3 点（S6～S8）のほか、4cm 程度の大ぶりの資料（S4）が 1 点ある。サヌカイトの剥片については、石鏃（S3）や後述する調査地北西の石器群と石材の風化度

第5章 遺構・遺物

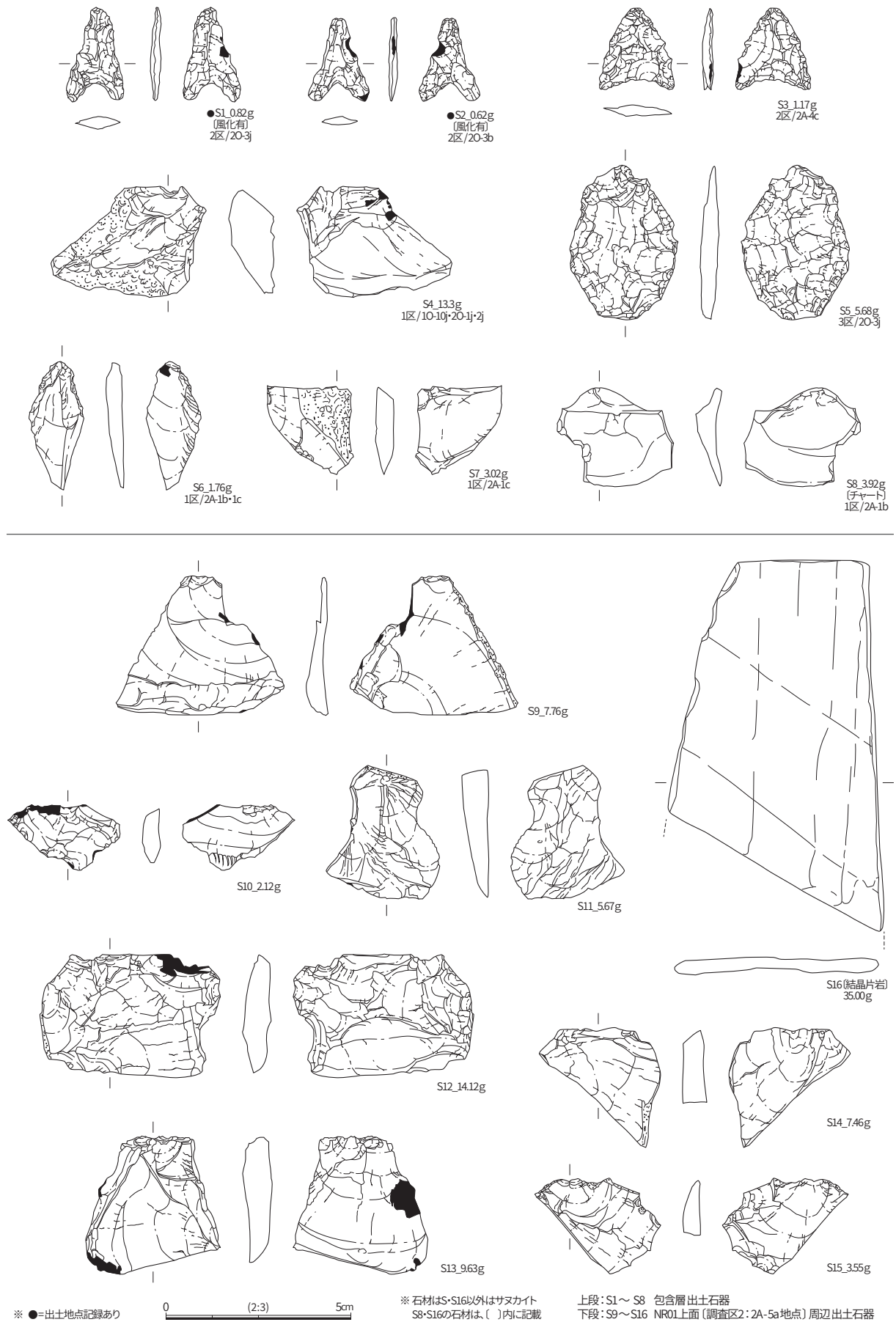


図52. 包含層 / 自然流路 NR01 上面 (調査区2 ; 2A - 5a 地点) 出土石器

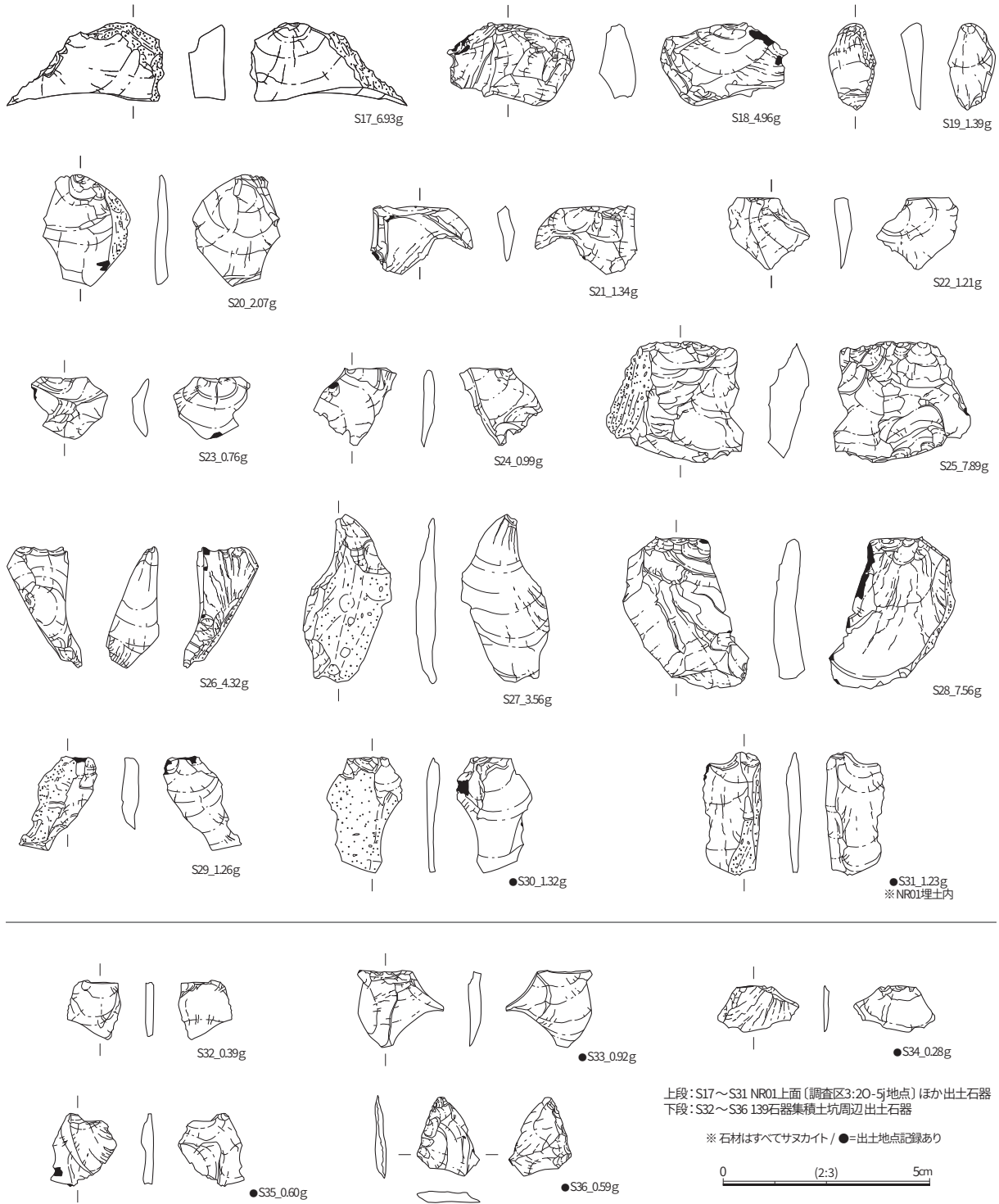


図 53. 自然流路 NR01 上面（調査区 3；20 - 5j 地点） / 石器集積遺構（139 土坑）周辺 出土石器

合いにそれほど大きな差はみられないため、調査地北西の石器群との関連する石器と考えることもできる。チャートの剥片（S8）については、石器の集中地点から離れているため製作時期および集中地点とのかかわりについては不明である。

b. NR01 上面 2A-5a 地点出土石器（集積遺構：南東） 出土した石器は計 9 点で、重量は 85.31g をはかる（図 52：S9～S16）。石材はサヌカイト 7 点と同一個体の結晶片岩の板状石器 2 点（S16）で、重量はサヌカイトが 50.31g、結晶片岩が 35.00g である。サヌカイトの石器は、S12 が両極打法の楔形

石器、ほかはすべて剥片と考えられ、自然流路 NR01 最上部または上面の包含層中から出土している。他の地点の石器と比べ、相対的に大ぶりのサイズの剥片が多いことが特徴で、4 cm以上のサイズの石器 (S9・S12) や重量 7 g以上の資料が複数点含まれるのはこの地点のみである。ほかでは、S9・S11・S12・S14 など原礫面を残す資料が多く、S11 などでは原礫面から直接打撃を加えている。

結晶片岩の板状石器 (S16) の石材については、やや赤みがあるため、紅簾片岩に分類できる可能性がある。2点の接合資料で、図上の上辺と右側辺が自然面で、左側面には使用痕が認められることから、図上の左側面を刃部とする石庖丁または石鋸の可能性が考えられるが、この資料以外に穂摘具や玉生産にかかわる遺物はないため、ほかのサヌカイトの石器との関係が明確ではない。ただし、後述するように、石器集積遺構 (139 土坑) の埋土から同種の石材の極細片が出土していることから、サヌカイトの石器群とかかわりをもつ資料であることは確かであろう。

c. NR01 上面 20-5j 地点出土石器 (集積遺構：東) 出土した石器は計 17 点で、このうち 15 点を図化した (図 53：S17～S31)。石材はすべてサヌカイトで、重量は 47.24g をはかる。出土石器は、1 点 (S25) が両極打法の楔形石器で、ほかは剥片と考えられる。石器の大半が、自然流路 NR01 最上部または上面の包含層中から出土しているが、自然流路 NR07 埋土中からも剥片 (S31) が 1 点出土している。上述の 2A - 5a 地点の石器と比べると、ひとまわり小さいサイズの剥片が多いが、石器集積遺構 (139 土坑) の埋土中や周辺から出土した石器よりは相対的にサイズの大きい石器資料が多い。形状としては、縦長の剥片が多いのが特徴で、そのサイズから製品の石器を製作するための素材剥片ではなく、石器製作時に生じた残滓と考えられる。また、S17 や S25、S27 をはじめとし、原礫面が残る剥片が多いことも特徴で、S17・S22・S29・S31 などは原礫面から打撃を加えた資料である。原礫面をみる限り、母材はいずれも角礫と判断できるため、露頭からの採取が推定できる。

d. 石器集積遺構 (139 土坑) 周辺出土石器 20 - 5j・6i・6j 地点から出土した計 15 点の石器で、このうち 5 点を図化した (図 53：S32～S36)。石材はすべてサヌカイトで、重量は 6.06g をはかる。未図化の石器も含め、細かいサイズの剥片が多いのが特徴で、1 cm以下の資料も含まれる。剥片以外では、石鏃の未製品 (S36) とみられる資料があり、刃部の左側側方のみ押圧剥離の痕跡が確認できるが、反対側には調整剥離がみられない。基部も欠損していることから、製作時のはやい段階で破損したため、廃棄されたと考えられる。

これらは、主に石器集積遺構 (139 土坑) の北側～西側にかけて出土しているが、上述したように、この付近では原位置で出土が確認された資料も多く、その中には石器集積遺構よりも下部で出土した資料が含まれる。集積遺構に伴う石器群よりも先行する資料が一定数含まれるのは確実で、例えば剥片 S37 などは他の石器とは風化度合いが異なっており、こういった資料が集積遺構の石器群よりも古い石器と考えることもできるだろう。

3. 石器集積遺構 (139 土坑)

検出状況と遺構の埋没状況 石器集積遺構 (139 土坑) は、調査最終面 (= 下面) で検出された遺構で、検出時に細粒炭化物と暗色土の面的な拡がりとともにサヌカイトの剥片が一定数含まれることから、石器の製作にかかわる遺構と認識するに至った (図 54・55・56)。時期については、上述したように、埋土に伴う炭化物の AMS 年代測定の結果から、弥生時代前期後半 (2,4000 年ごろ前) という年代値が得られている。

検出面での遺構の平面形状は、やや不正な円形を呈し、規模は 0.8 mをはかる。検出面から底部まで

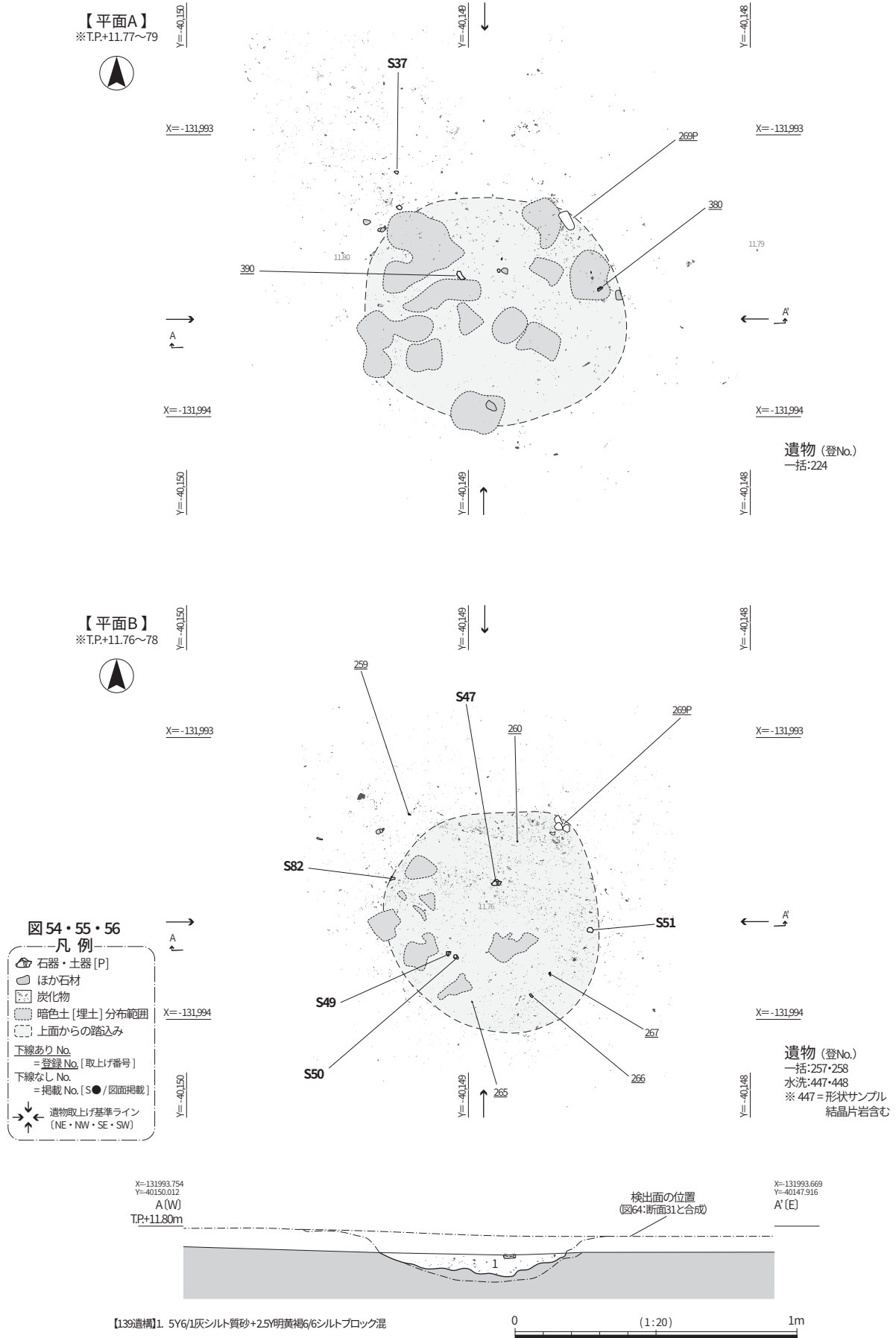


図 54. 石器集積遺構 (139 土坑) 平面・断面 (1)

第5章 遺構・遺物

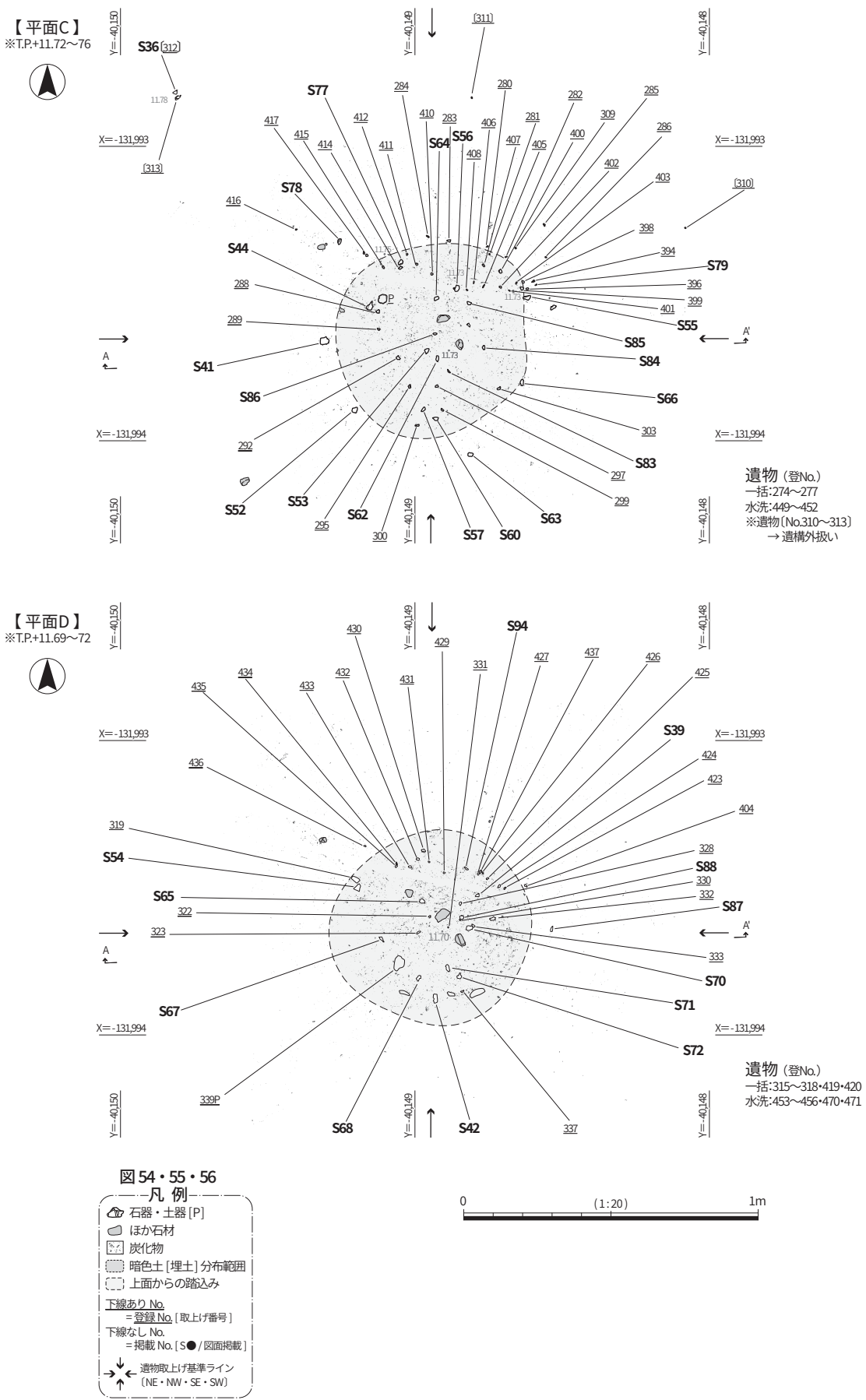


図 55. 石器集積遺構 (139 土坑) 平面・断面 (2)

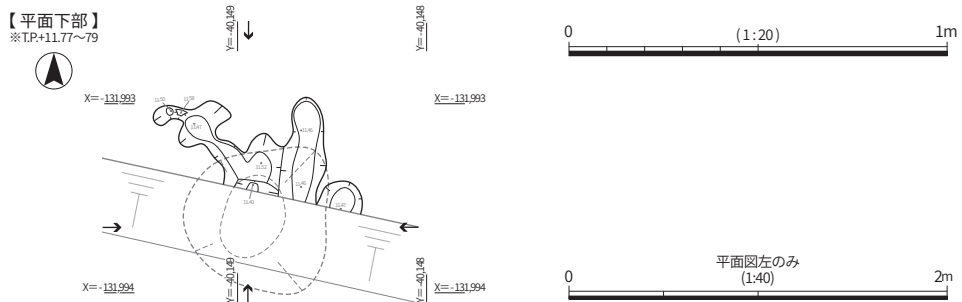
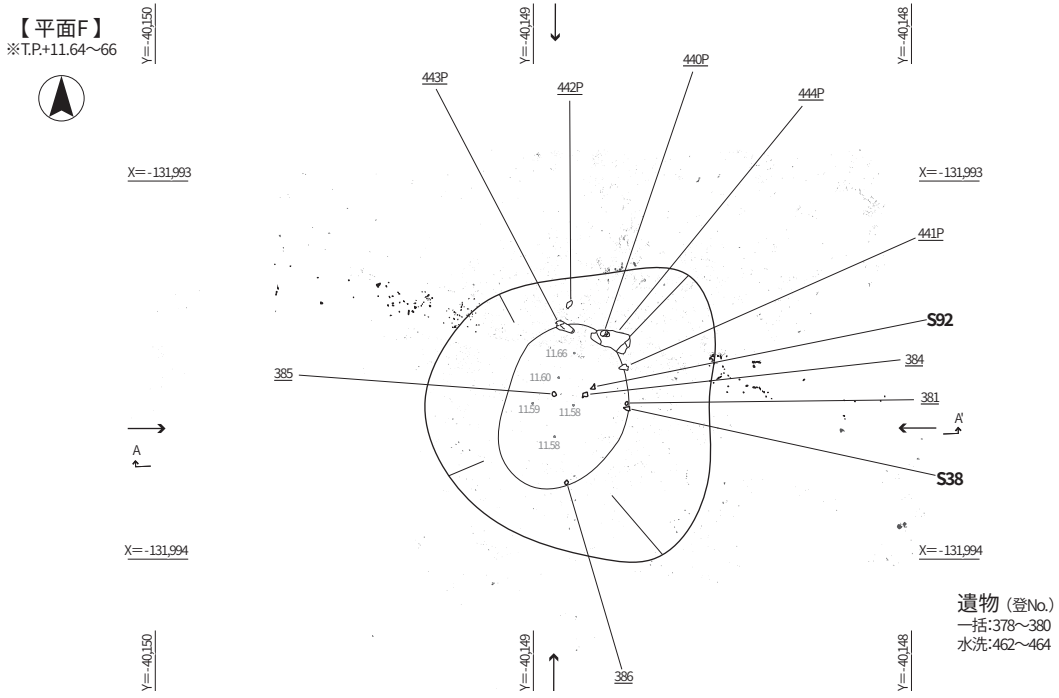
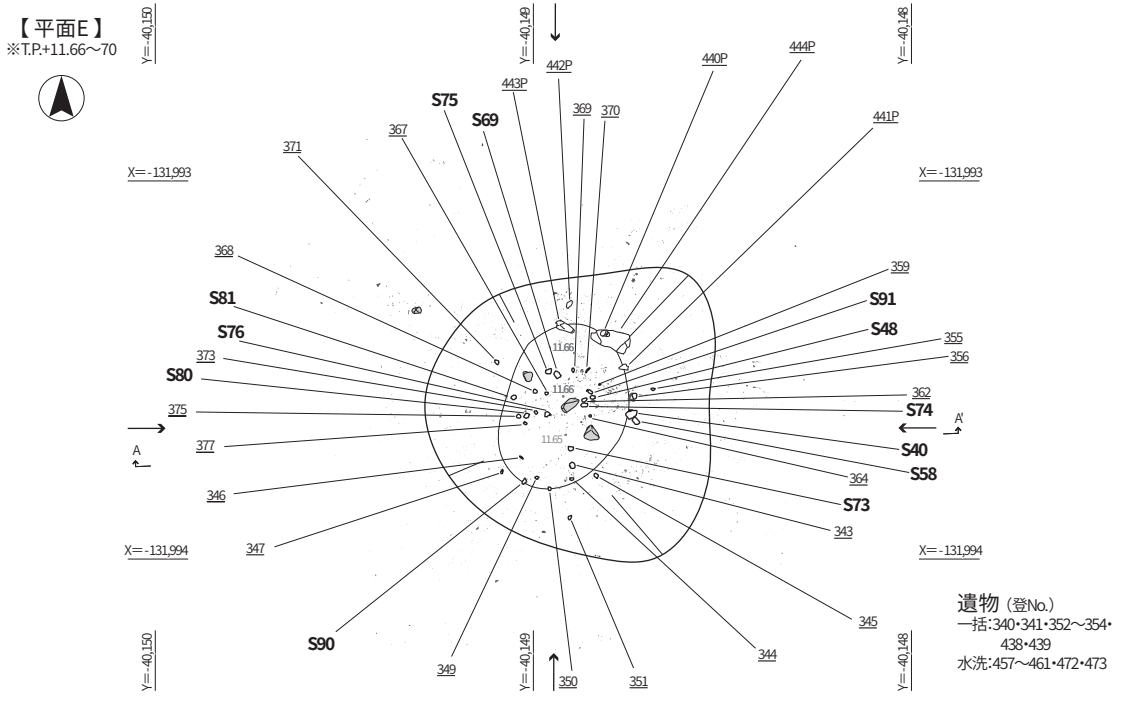


図 56. 石器集積遺構 (139 土坑) 平面・断面 (3)

の深さは0.15 mで、断面形は浅い皿状を呈する。検出時には、遺構の輪郭が不鮮明であったため、細粒炭化物の集中分布と暗色シルトの拡がりから遺構範囲を認定した。そのため、明確な掘り込みを伴う遺構であるかどうか即断できなかったが、断面を観察したところ底部からシャープな立ち上がり認められたことから、人為的な掘り込みを伴う遺構と認識するに至った。また、検出面では、上層からの踏み込みの痕跡とみられる第2層または第3層の斑状の分布が確認されており、上面は後世の削平を受けた可能性が高いと判断される。ほか、遺構下部の断面確認時に、遺構直下に不定形のくぼみが存在することが判明した（P104：図63、断面32）。断面からは直接的なかわりは低いと推測されたが、念のため集積遺構の完掘後に基底面を掘り下げてくぼみを平面的に検出し、そののちに充填土を掘削したが、遺物等の出土がみられなかったことから、人為的な掘り込みではないという結論に至っている（図56：下部平面図）。

遺構埋土は、検出面から底部まで細粒炭化物混じりの暗色シルトが充填され、埋土内には一定量の石器のほか、土器の細片や用途不明の石材などが少量含まれる。また、石器はこの遺構に偏在するものの、埋土内の石器の密土が極端に高いというわけではないため、いわゆる石器用石材を埋納したデポと認識することはできない。石材は大半がサヌカイトの剥片で、そのほかの石材資料については結晶片岩の微細剥片が1点のみ出土している。上述のb、2A－5a地点の結晶片岩の板状石器（S16）と同質の石材であることから、自然流路NR01の南側出土の石器群と有機的な関係があると判断してよいと考えられる。土器については、いずれも磨滅・細片が著しく、図化できる資料はなかった。石器以外の石材としては、5 cmサイズのチャートや風化砂岩などの小角礫などが少量含まれるが、明確な被熱痕跡等は確認できないため、用途や性格は特定できない。炭化物は、いずれも炭化した木材片で、サイズは1 cm前後のものが多く、一部に3～4 cmのものも含まれる。なにかを燃やした残滓と推定されるが、遺構下部や周辺に被熱面はなく、埋土に顕著な焼土も認められないことから、遺構内で直接火を焚いたかどうかは明確ではない。

なお、炭化物については、集積遺構の周辺や遺構下部などにも、点的あるいは部分的に拡がりが見られた。特に検出面付近では、集積遺構の掘り込みラインの周囲にも炭化物が濃密に分布するほか（平面Bなど）、最上面（平面A）では遺構の北西側にも炭化物が大きく拡がるのが確認された。北西の肩部から石鏃の未製品（S37）も出土していることなどをふまれば、遺構周囲の炭化物の拡がりについても集積遺構にかかわる一連のものとするのが妥当といえる。一方、検出面よりも下部においても、遺構周囲の基底面を構成する基盤層中に同様の炭化物が含まれる場所がところどころみられる。特に、遺構平面図Fは、遺構周囲の基盤土を一定程度掘り下げた状態で作成したものであるが、外方にも一定程度の炭化物の分布が確認されている。生物攪拌等の影響などを考慮する必要があるが、上述したように、集積遺構の周辺や下部にも石器の出土などが確認できるため（上述の地点d）、一部に集積遺構とは直接関係しないものも含まれることがわかる。石器は主に自然流路NR01よりも西側に分布する傾向がみられることから、調査地外にも石器が拡がる可能性が高く、集積遺構よりも先行する時期から断続的になんらかの人為的な活動があったと考えることもできるだろう。

遺構の記録と石器の取り上げ方法 遺構の掘削に際しては、出土状況を記録しながら段階的に掘り下げをおこなった。石器は、可能な限り原位置で取り上げ、まとめて石器が出土した段階で平面の記録作成と写真撮影をおこない、遺構底部まで完掘した（図54・55・56）。調査では、断面の記録作成のため南側を底部まで掘り下げたのち、北側を掘り下げた。そのため平面図は、南北で別々に作成しており、

石器集積遺構（139 土坑）出土石器サヌカイト剥片集計データ

	a: 0.1cm～	b: 0.2cm～	c: 0.5cm～	d: 1.0cm～	e: 1.5cm～	f: 2.0cm～	g: 2.5cm～	h: 3.0cm～	i: 3.5cm～	j: 4.0cm～	k: 4.5cm～
数量 (点)	2459	4414	676	133	48	22	9	6	1		
重量 (g)	1.86	17.77	22.93	22.51	18.32	24.03	12.65	30.18	3.45		

サヌカイト総計 7768点 153.70g

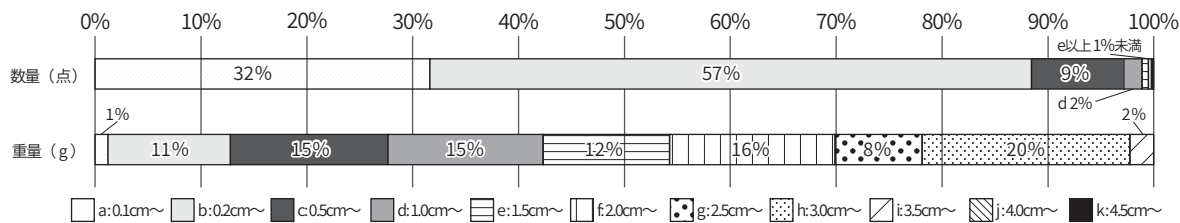


図 57. 石器集積遺構（139 土坑）出土石器 点数・重量別 集計データ（全体）

表 4. 石器集積遺構（139 土坑）出土石器・弥生土器 一覧（全資料分類集計データ）

表 4-1. 石器集積遺構（139 土坑）埋土内出土石器一覧（全資料）

登録 No.	遺物 No.	取り上げ区分	高さ区分	位置区分	対応 No. or (備考)	座標	TP. 値	a: 0.1～		b: 0.2～		c: 0.5～		d: 1.0～		e: 1.5～		f: 2.0～		g: 2.5～		h: 3.0～		i: 3.5～	
								数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量
224	S43・59	一括	A				11.77～79										1	0.43	1	3.57					
257	S45	一括	B	S	447		11.76～78					9	0.51	16	2.73	7	2.26			1	2.14				
258	S46	一括	B	N	448		11.76～78					2	0.09	5	1.01	3	1.20	1	2.74						
274		一括	C	SE	449		11.72～76		1	0.03		8	0.35	1	0.05										
275		一括	C	SW	450		11.72～76					12	0.55	1	0.20										
276	S61	一括	C	NW	451		11.72～76					2	0.17	2	0.19	1	0.53								
277		一括	C	NE	452		11.72～76					16	0.89	2	0.22	1	0.18								
315		一括	D	SE	453		11.69～72		4	0.07		7	0.33	2	0.36										
316		一括	D	SW	454		11.69～72		1	0.02		6	0.26	5	0.53										
317		一括	D	NW	455		11.69～72		4	0.03		8	0.34	3	0.40	1	0.17								
318		一括	D	NE	456		11.69～72					6	0.23							1	1.45				
340		一括	E	SE	457		11.66～70		3	0.03		16	0.88	1	0.12										
341		一括	E	SW	458		11.66～70		4	0.05		11	0.30	2	0.13										
352		一括	E	SE	461		11.66～70					2	0.13	1	0.08	1	0.32								
353		一括	E	NW	459		11.66～70		7	0.04		11	0.42	2	0.22										
354		一括	E	NE	460		11.66～70		16	0.20		24	1.08	2	0.40										
378		一括	F	NW	463		11.64～66					1	0.03												
379		一括	F	NE	464		11.64～66		2	0.02		10	0.60	1	0.10										
380		一括	F	NE	(No.381～384 周辺)		11.64～66		2	0.02		1	0.01												
387		一括	-		(アザ壁面崩落土)		-					1	0.02	2	0.52	1	0.49			1	0.58				
391		一括	B・C	NW	465		11.72～78	1	0.01	16	0.15	11	0.37	1	0.12										
392		一括	B・C	NE	466		11.72～78			2	0.02	6	0.26	2	0.47										
419		一括	D	NW	470		11.71～75			4	0.06	16	0.55												
420		一括	D	NE	471		11.71～75					4	0.10												
438		一括	E	NW	472		11.69～72					3	0.08												
439		一括	E	NE	473		11.69～72			2	0.02	5	0.14												
447		水洗	B	S	257 (結晶片岩細片 x1)		11.76～78	231	0.22	438	1.88	82	2.09	10	0.99										
448		水洗	B	N	258		11.76～78	60	0.05	213	0.88	30	0.99	1	0.10	1	0.15								
449		水洗	C	SE	274		11.72～76	67	0.07	242	1.04	15	0.28												
450		水洗	C	SW	275		11.72～76	187	0.18	225	1.07	29	0.77	1	0.24										
451		水洗	C	NW	276		11.72～76	135	0.10	190	0.78	17	0.64	1	0.12										
452		水洗	C	NE	27		11.72～76	164	0.15	247	1.22	36	1.26	2	0.12										
453		水洗	D	SE	315		11.69～72	80	0.06	113	0.46	10	0.30												
454		水洗	D	SW	316		11.69～72	91	0.07	172	0.77	13	0.46	2	0.26										
455		水洗	D	NW	317		11.69～72	92	0.08	205	0.88	20	0.56	3	0.72										
456		水洗	D	NE	318		11.69～72	79	0.09	163	0.66	19	0.59	1	0.12										
457		水洗	E	SE	340		11.66～70	194	0.15	269	1.08	23	0.79	2	0.28										
458		水洗	E	SW	341		11.66～70	64	0.04	247	0.83	24	0.78							1	0.70				
459		水洗	E	NW	353		11.66～70	260	0.14	211	0.80	14	0.36	2	0.30										
460		水洗	E	NE	354		11.66～70	105	0.08	323	1.03	23	0.54	1	0.09										
461		水洗	E	SE	352		11.66～70	49	0.03	60	0.17	5	0.11												
462		水洗	F	SW			11.64～66	54	0.03	59	0.24	6	0.11												
463		水洗	F	NW	378		11.64～66	26	0.02	83	0.26	5	0.16												
464		水洗	F	NE	379		11.64～66	94	0.06	199	0.72	20	0.49												
465		水洗	B・C	NW	391		11.72～78	49	0.04	80	0.25	4	0.07												
466		水洗	B・C	NE	392		11.72～78	51	0.03	122	0.42	11	0.35												
466		水洗	B・C	NE	392		11.72～78	51	0.03	122	0.42	11	0.35												
467		水洗	B・C	NW	391		11.72～78	40	0.02	48	0.20	3	0.13												

※ 登録 No.=取上 No. / 遺物 No.=図 58・59 掲載 No. / 対応：一括取り上げと水洗抽出の対応関係◎ 登録 No.447：形状サンプル作成データ（図 61・62）

第5章 遺構・遺物

表 4-2. 石器集積遺構 (139 土坑) 埋土内出土弥生土器一覧 (全資料)

登録 No.	取り上げ 区分	高さ 区分	位置 区分	座標	T.P. 値	備 考	破片数	総重量 (g)	最大サイズ (cm)	最小サイズ (cm)
257	一括	B	S				4	2.02	2.5	0.8
269	原位置	B	NE	-131993.325/-40148.65	11.775		5	5.66	2.7	1.2
274	一括	C	SE				1	0.15	1.2	
276	一括	C	NW				5	0.74	1.3	0.5
317	一括	D	NW				1	2.14	2.2	
318	一括	D	NE				1	0.53	1.8	
339	原位置	D	SW	-131993.766/-40149.045	11.708	すべて生駒西麓産	6	2.52	3.0	1.0
440	原位置	F	NE	-131993.405/-40148.815	11.717		3	4.28	2.8	0.9
441	原位置	F	NE	-131993.492/-40148.758	11.696		1	0.57	1.7	
442	原位置	F	NE	-131993.329/-40148.899	11.692		2	0.1	1.0	0.6
443	原位置	F	NE	-131993.383/-40148.92	11.709		7	2.37	2.2	0.7
444	原位置	F	NE	-131993.412/-40148.806	11.697		26	7.34	2.5	0.7
447	水洗	B	S				2	0.37	1.5	0.3
448	水洗	B	N				17	3.87	1.6	0.4
449	水洗	C	SE				3	0.23	1.0	0.7
451	水洗	C	NW				2	0.12	1.0	0.5
452	水洗	C	NE				2	0.09	0.6	0.5
453	水洗	D	SE				16	0.73	1.0	0.3
454	水洗	D	SW				6	0.25	1.0	0.3
455	水洗	D	NW				5	2.31	1.8	0.5
456	水洗	D	NE				22	1.96	2.0	0.4
457	水洗	E	SE				1	0.1	0.9	
458	水洗	E	SW				4	0.31	0.9	0.7
460	水洗	E	NE				28	2.31	1.5	0.4
464	水洗	F	NE				13	2.71	1.7	0.7
469	水洗	-					3	0.18	0.8	0.6
470	水洗	D	NW				2	0.02	0.5	0.4
471	水洗	D	NE				6	0.34	1.0	0.3
total							194 点	44.32g		

平面図作成面の標高値を基準に南北を統合し、記録作成面を A～F 段階に区分した。また、埋土の掘削と遺物の取り上げは、東西南北に 4 分割して実施し、原位置で取り上げができなかった石器は 4 分割した地点と高さごとに区分して取り上げている。さらに遺構埋土は、石器を抽出するためすべてを持ち帰り、1mmメッシュのふるい上で埋土を洗浄し、石器を抽出した。出土・抽出した石器は、出土位置と高さを基準にすべての資料を分類し、データを集計して一覧表にまとめた (表 4、図 57・58)。また、出土土器についても同様に地点ごとに分類し、出土数量の集計データを一覧表にまとめている (表 4)。埋土内の石器の出土傾向と特徴 出土したすべての石器を計測した結果、サヌカイトの点数は 7,768 点を数え、重量は 153.70 g をはかることが判明した (図 57)。

出土石器の全体的な傾向としては、すべてが 4 cm 未満の小型の資料であることと、微細剥片が出土数の大半を占めることが大きな特徴といえる。特にサイズ分類 a・b とした 0.5 cm 未満の微細剥片は、7,000 点近い数にのぼり、全体の出土数の約 9 割を占める。微細剥片の数が極端に多いという特徴は、製作された製品を考察する上でも極めて重要な情報となろう。一方、重量については、サイズ分類 a・b とした 0.5 cm 未満の微細剥片は全体の 13% に留まっているが、この点についてはサイズ分類ごとに 1 点あたりの重量差が大きいことが要因で、サイズごとの合計重量は 0.5 cm 未満の微細剥片からサイズ分類 h とした 3.0 cm 未満のサイズの剥片までそれほど極端な差がみられない。

続いて、遺構内での平面的な位置や高さごとの石器の出土傾向に目を向けると (図 58)、4 分割した位置ごとの差は、点数・重量ともに北側の方が 1.3～1.5 倍程度多く石器が出土しており、特に北東からの出土が最も多いことがわかる。ただし、サイズごとに様相差があり、0.5 cm 以上 (c サイズ以上) の石器の出土数はそれほど顕著な差はみられないのに対し、0.5 cm 未満の微細剥片は数量ともに南側に比べて北側が約 1.5 倍多いというデータが得られている。

地点別：石器集積遺構（139土坑）出土石器サマカイト剥片集計データ

位置区分 (方角)	a: 0.1cm		b: 0.2cm		c: 0.5cm		d: 1.0cm		e: 1.5cm		f: 2.0cm		g: 2.5cm		h: 3.0cm		i: 3.5cm		j: 4.0cm		k: 4.5cm		総 点数	総 重量				
	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量								
N	60	0.05	213	0.88	32	1.08	6	1.11	4	1.35	1	2.74													316	7.21		
NE	607	0.47	1287	5.03	221	7.69	34	5.83	15	6.07	8	7.08	3	4.23	1	7.75											2176	44.15
NW	723	0.46	993	3.88	132	4.63	32	6.17	8	2.90	3	3.36			2	6.84	1	3.45									1894	31.69
S	231	0.22	438	1.88	91	2.60	26	3.72	7	2.26			1	2.14													794	12.82
SE	323	0.24	449	1.81	63	2.54	14	2.53	6	2.60	3	2.46	1	0.92	1	3.12											860	16.22
SW	396	0.32	708	2.98	102	3.24	17	2.42	6	2.22	6	4.82	2	4.32	2	12.47											1232	32.72
※ 総計	2459	1.86	4414	17.77	676	22.93	133	22.51	48	18.32	22	24.03	9	12.65	6	30.18	1	3.45									7768	153.70

※ 上記以外に分類不可項目あり = 上記各項目データ合計数量と※総計の数量は一致しない

高さ区分 (平面図対応)	a: 0.1cm		b: 0.2cm		c: 0.5cm		d: 1.0cm		e: 1.5cm		f: 2.0cm		g: 2.5cm		h: 3.0cm		i: 3.5cm		j: 4.0cm		k: 4.5cm		総 点数	総 重量				
	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量	数	重量								
A (TP:+11.77~79m)					2	0.08			1	0.43	2	4.15													5	4.66		
B (TP:+11.76~78m)	291	0.27	651	2.76	125	3.75	33	4.87	14	4.45	4	5.21	1	2.14	2	8.44											1121	31.89
(B~C) (TP:+11.72~78m)	184	0.13	344	1.29	46	1.45	3	0.59																			577	3.46
C (TP:+11.72~76m)	553	0.50	905	4.14	139	4.98	32	5.89	13	5.35	6	6.34	4	6.18	1	7.92	1	3.45									1654	44.75
D (TP:+11.69~72m)	446	0.34	852	3.56	127	4.40	27	4.29	7	1.87	5	3.72	3	3.75	2	6.07											1469	28.00
E (TP:+11.66~70m)	759	0.48	1234	4.52	176	6.02	30	4.86	11	5.20	4	4.23			1	7.75											2215	33.06
F (TP:+11.64~66m)	174	0.11	345	1.26	43	1.40	5	1.33	1	0.53	1	0.38															569	5.01
※ 総計	2459	1.86	4414	17.77	676	22.93	133	22.51	48	18.32	22	24.03	9	12.65	6	30.18	1	3.45									7768	153.70

※ 上記以外に分類不可項目あり = 上記各項目データ合計数量と※総計の数量は一致しない
 ※ 集計データは下グラフと対応、B~C項目は数量をそれぞれ1/2にしてB項目とC項目に数値を加算

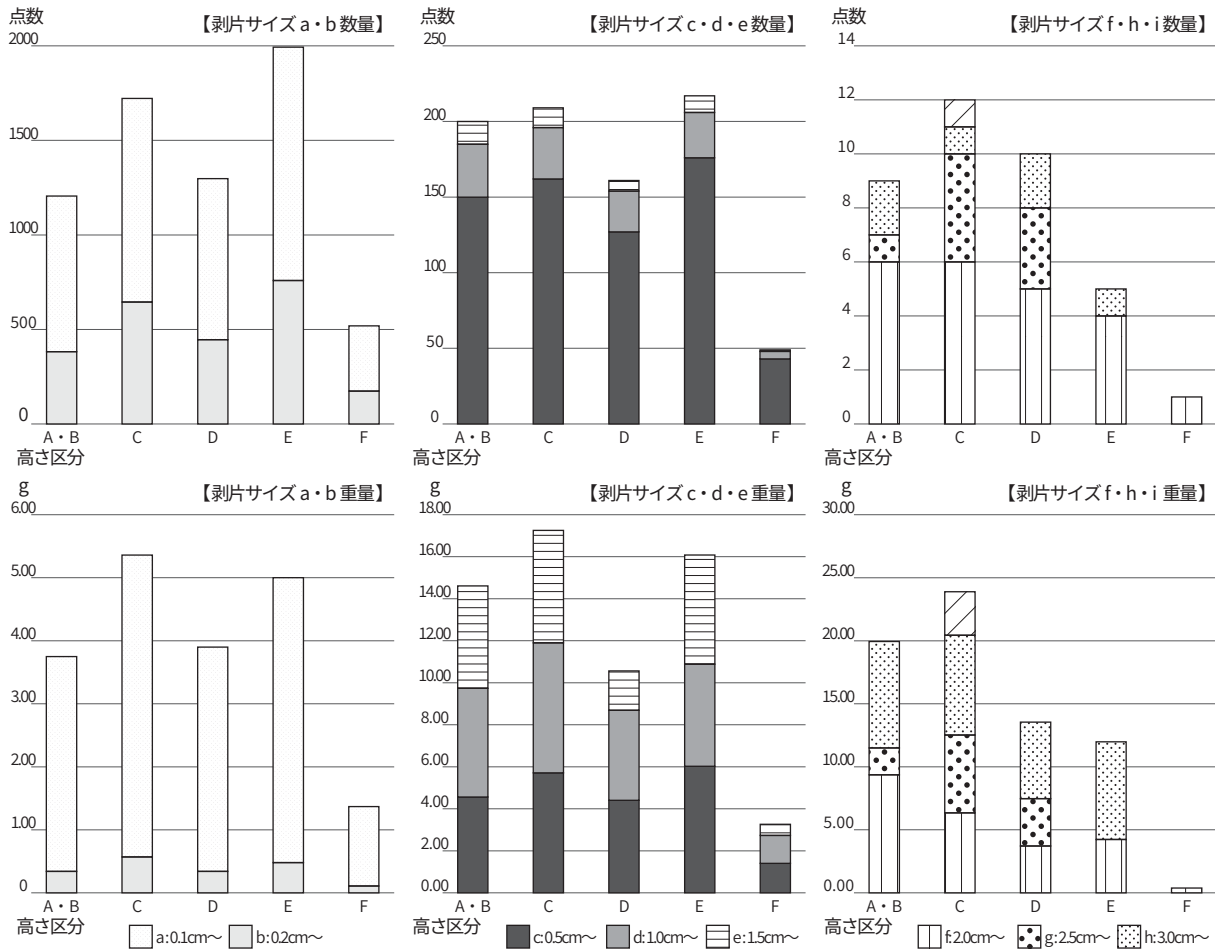


図 58. 石器集積遺構（139土坑）出土石器 点数・重量別 集計データ（地点別）

また、高さごとの石器の出土傾向（垂直分布）に関しては、全体数量にそれほど顕著な差を見出すことができないが、サイズごとにみた場合、1.0 cm未満（cサイズ以下）の薄片が下方により多いという傾向が認められ、特に底部付近の高さ区分Eレベルでは微細薄片が多いことが指摘できる。一方、2.0 cm以上（fサイズ以上）の比較的大ぶりの剥片については、高さ区分Dレベル以上に多く、逆に底部付近の高さ区分Eレベル以下では1.0 cm以上（dサイズ以上）の資料が少ないという傾向が見出せる。この点については、底部付近での0.5 cm以下の微細剥片（bサイズ以下）が多いことと関連する可能性が高い。現状では、この場所で石器製作がおこなわれていたかどうかは定かではないが、遺構内の高さごとに剥片のサイズが異なる点をふまえれば、石器製作との関連についても検討する必要がある。

ほか、埋土中から出土した土器については、周辺出土資料と同様に、サイズが1 cm前後の細片が多く、図化できるものはなかった（表4-2）。出土数量は、計194点、重量44.32gで、大半が粘土素地に主に石英・長石を含む在地産とみられる胎土の資料であるが、生駒西麓産胎土の資料が計6点、重量2.52g含まれる。

出土石器の特徴 図化資料は、未製品や特徴的な剥片などを中心に、できるだけサイズの大きい資料から抽出し、計58点の石器を図化した（図59・60）。微細剥片については、最も点数が多い取り上げ番号の資料（登録No.447）をサンプルデータとして抽出し、写真データから石器の外形をトレースして形状サンプルとして図示した（図61・62）。微細剥片のサンプルデータは、結果として石器全体の約10%の資料点数となったため、微細剥片の特徴を示す上で統計的にも有効性のあるデータとみなせよう。

図化した石器の内訳は、石鏃未製品が3点（S37・S39）、楔形石器と考えられる資料が3点（S40・S42・S46）、石核とみられる資料が1点（S45）で、ほかはすべて剥片と考えられる。石鏃の未製品には、先端が残存する資料2点（S37・S38）と基部が残存する資料1点（S39）があり、先端が残存する2点（S37・S38）については、残存部分のサイズや刃部の確度がほぼ一致しているほか、両資料とも先端から鑄を作り出す特徴をもつなど、規格性の高さがうかがえる。また、（S37）については、基部は欠損しているものの、残存部分の形状から凸基式となる可能性が高い。一方、（S39）は、ほかの未製品2点に比べてひとまわり小ぶりであり、基部形状も凹基式であるなど、特徴がやや異なる。

そのほかの資料では、大半が剥片で、両極打法の楔形石器3点（S40・S42・S46）と石核1点（S45）が確認できる。剥片については、すべて4 cm未満の小型サイズのもので占められるが、そのなかでもサイズ・形状にバリエーションがあるのが特色といえる。こうした小型の剥片は、製品をつくり出すための素材剥片としては不向きなサイズであるため、その多くが石器製作時に生じた不要な残滓と捉えて大過はないと思われる。また、特徴的な資料としては、両極打法に伴う剥片（S48・S85）や、部分的に押圧を施す二次加工のみられる資料（S44・S52・S53・S63）などがあり、特に二次加工のある資料にかんしては、小型剥片をできるだけ製品として仕上げようとする意図がうかがえる。ほかでは、集積遺構周辺資料と同様に、原礫面を残す資料はサイズの大小問わずあり、S44やS48など原礫面から直接打撃を加える資料も確認できる。なお、S79など、石材の風化度合いが若干異なる資料があり、これについては二次的な被熱による可能性を考慮する必要があるだろう。

剥片の形状サンプルデータについては（図61・62）、形状をみる限り、サイズa・bと0.5 cm未満の微細剥片は長・幅のサイズが近似する資料が多いのに対し、ひとまわり大きい0.5～1.5 cmのサイズc・dは縦長の形の資料が多いといった傾向が見出せそうである。また、図上では十分に特徴を示しきれていないが、a・bサイズの微細剥片はいずれも扁平で厚さが均一といった特徴がみられ、石器の最終調

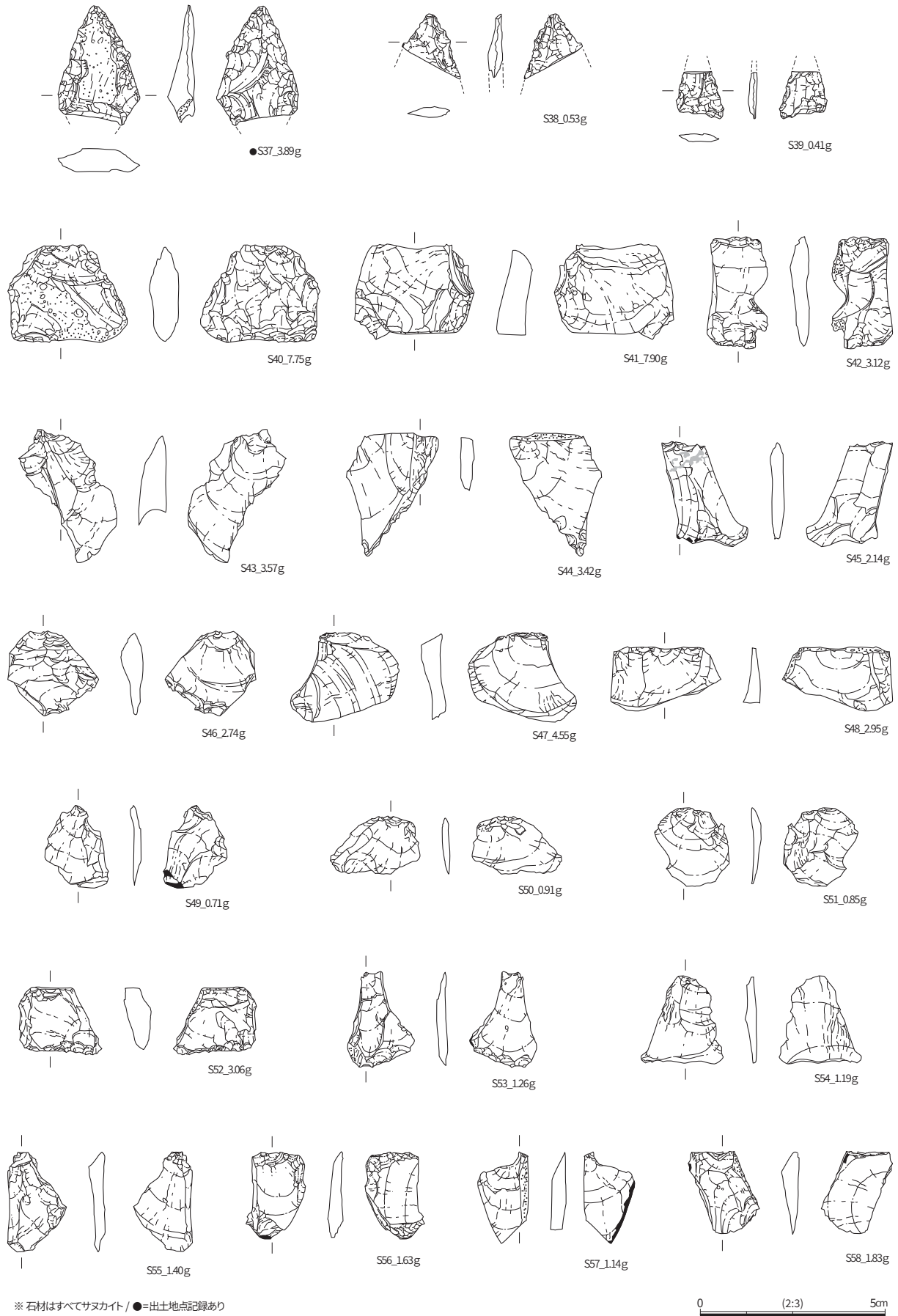


図 59. 石器集積遺構 (139 土坑) 埋土内 出土石器 (1)

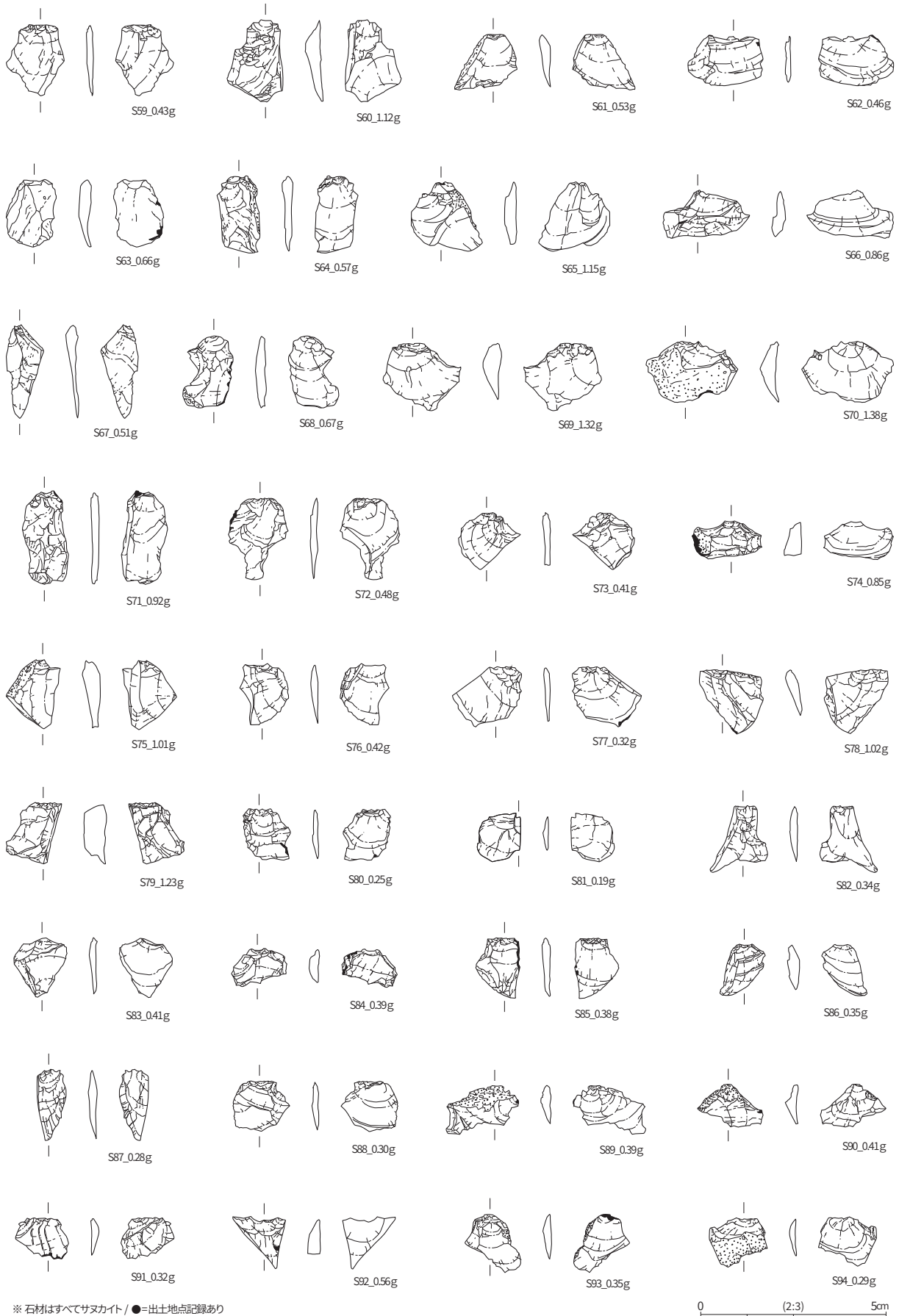


図 60. 石器集積遺構 (139 土坑) 埋土内 出土石器 (2)

第5章 遺構・遺物

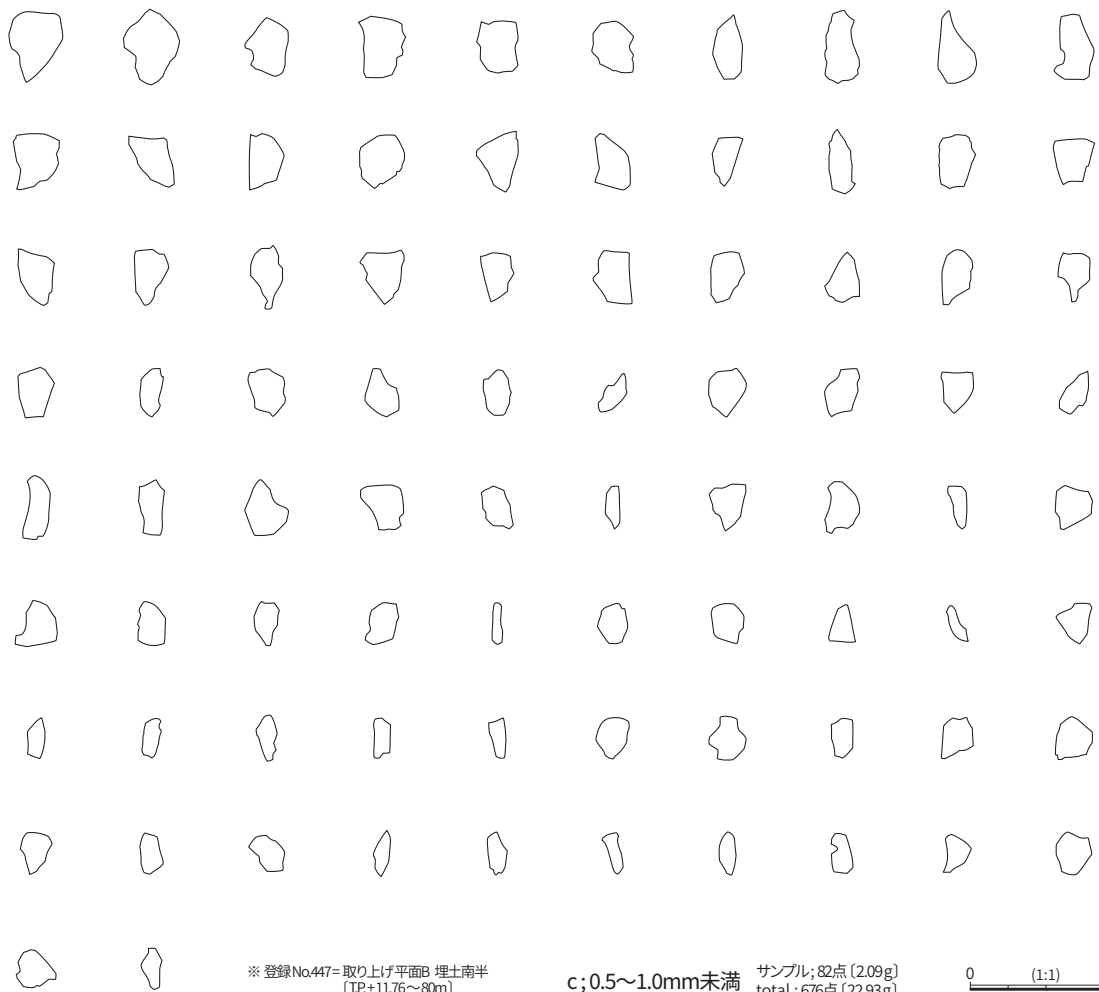
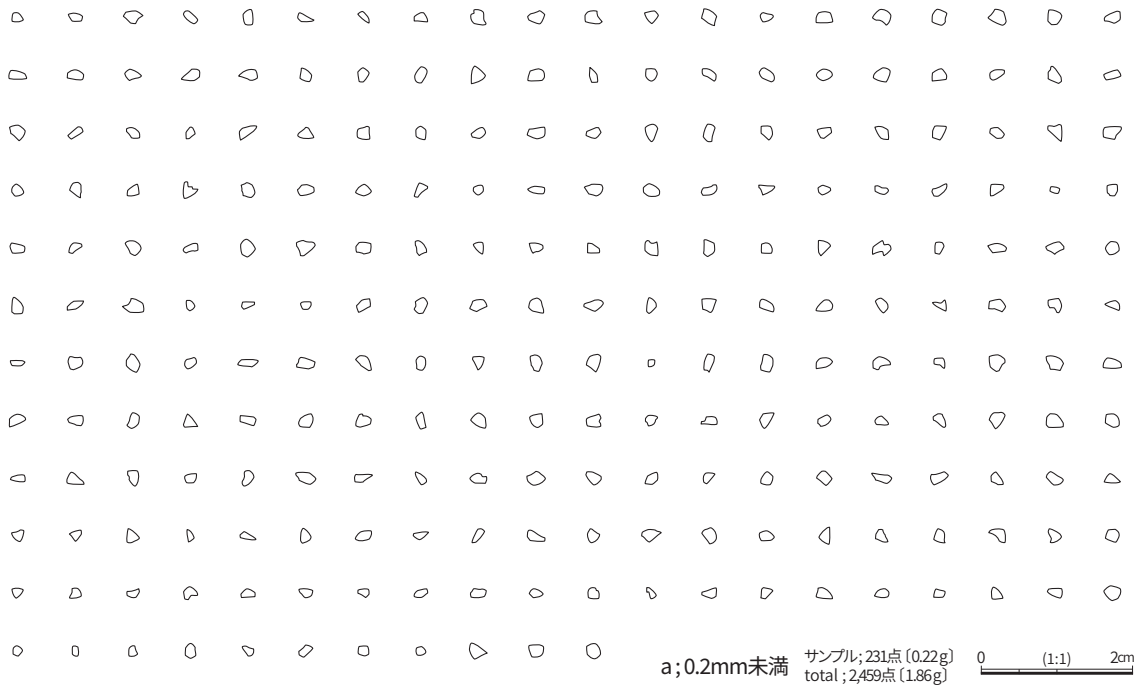
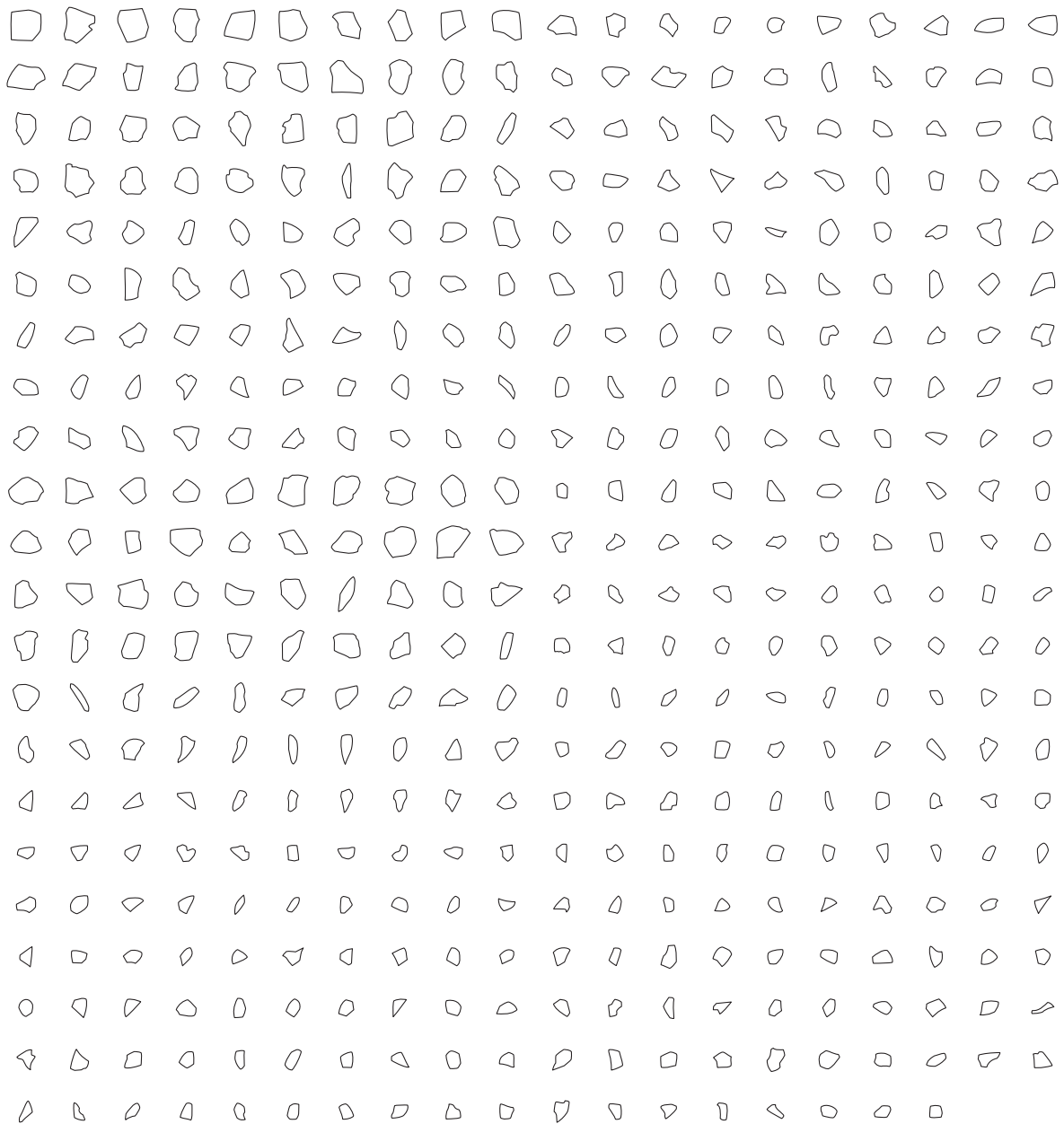


図 61. 石器集積遺構 (139 土坑) 埋土内出土剥片 形状サンプル (1)



b; 0.2~0.5mm未満 サンプル; 438点 (1.88g)
total; 4,414点 (17.77g)

0 (1:1) 2cm



d; 1.0~1.5mm未満 サンプル; 10点 (0.99g)
total; 133点 (22.51g)

0 (1:1) 2cm

※ 登録No.447= 取り上げ平面B 埋土南半
(TP.+11.76~80m)

図 62. 石器集積遺構 (139 土坑) 埋土内出土剥片 形状サンプル (2)

とが調査で確認された。流路そのものは、調査掘削の対象となる層よりも下部に存在したため、部分的な掘削と下層トレンチにより、流路の平面的な拡がりや遺物の有無、流路の埋没状況を確認している（図49・63・64）。特に調査終盤には、流路の肩部で上述の石器集積遺構（139土坑）が検出されたため、流路との関係を追及するために、一部で流路底まで掘削して堆積状況を詳細に観察し、年代測定のための試料の採集もおこなっている。

調査手順としては、基盤層上面では平面で自然流路が明確に確認できる地点と不明瞭な地点が認められたため、そうした状況がより顕著な調査地の北半を中心に基盤層上面から約0.3mを重機で掘削し、流路の平面的な拡がりを確認した。それに対し南半は、攪乱が多くあったため、断面を検証しながら流路の復元につとめた。その結果、南北方向にのびる流路が2条検出され、西側を自然流路NR01、東側を自然流路NR02とした。さらに下層確認トレンチでは、最終遺構面から1.0～1.5m下部で上面とは別の埋没古流路が2条確認された（自然流路NR03・NR05）。こうした下層確認の所見を総合すると、周辺一帯には、表層では確認できないものも含め、埋没古流路が多数存在することが推定でき、大まかには基盤層上面付近で確認される自然流路群と、基盤層下部に介在する流路を含めた堆積に区別できる。そこで以下では、基盤層上面で確認できる上部の自然流路2条（NR01・NR02、第4層相当層）と、それらの流路の基盤面を構成する下部の堆積状況および流路痕跡（第5層以下）に区分し、報告を進める。

上部の自然流路群〔NR01・NR02〕 2条の自然流路は、並行しながら調査地の北から南へのびている。仔細にみれば、北東－南西方向に蛇行しながら流下しているが、周辺の地形は北西から南東方向に地形が緩やかに下がるため、部分的には地形に逆らうような形で流下しているようにもみえる。ただし、東側の自然流路NR02の南端部分は、南東にむかって調査区外へのびているため、大まかには北から南にむかってのびる流路と捉えることができる。なお、調査区2の西端中央で、自然流路NR04と命名した流路痕跡を確認した。調査時には別の流路の可能性を考えていたが、全体を確認したところ自然流路NR01の一部であることが判明したため、同一の流路として取り扱い、自然流路NR04は欠番としている。

西側の自然流路NR01は、基盤層上面で平面的な輪郭がほぼ検出でき、検出面での最大幅は14m、平均的には幅9m前後をはかる。断面31（B-B'）とした下層確認トレンチでは、流路の底面を確認しており、この部分では幅7.0m、深さ2.4mをはかる。場所ごとに流路の幅が大きく異なるが、これは流路の検出幅内で流心を変えながら蛇行を繰り返したためであり、最深部の状況を確認する限り、横断面形は断面31（B-B'）でみられるような基底面をV字状に刻む深い谷状を呈している。こうした状況から、この流路は扇状地面を刻む開析谷と認識できる。

流路内の堆積は、砂や土壌化した泥などで充填されており、流路は下刻と埋積を繰り返しながら徐々に埋没したと判断できる。遺物については、流路南端付近で埋土の最上層（断面32：Cの層No.7）からサヌカイトの剥片（S39）が1点出土したほか、流路南西の最上面（断面32：C-C' および断面23：D-D' の層No.1）や上部の包含層などからも弥生土器の細片やサヌカイトの剥片（P85：図53・S31）などが出土している。近接した位置で石器集積遺構（139土坑）が検出されている点をふまえれば、自然流路NR01の周囲に人為的にサヌカイトが持ち込まれたと判断できる。

なお、自然流路NR01の最終段階での流心は、平面では図49の破線部分にあり、特に流路の南端付近では肩部の西側に流心がある。一方、やや古い時代の流心はより南東側にあったことが平面の検出状

況と断面の堆積状況（断面 32：C-C' および断面 23：D-D'）から推定できるが、南東側の最上面（断面 23（D-D'）の層 No.1c および断面 32（C-C'）の層 No.11a）では炭化物の細片が帯状に連なるような形で平面的に分布していることが確認された。さらにこの部分の上面付近からは、後述するように、土器の細片やサヌカイトの剥片が一定量まとまって出土しており、炭化物の拡がりはなんらかの人為的な活動とかかわる可能性が高い。また、炭化物の介在する層（断面 23（D-D'）の層 No.1c および断面 32（C-C'）の層 No.11a）については、断面から流路の埋没の最終段階よりも古い時期のものと判断できるが、堆積状況からこの層の形成時には流路は既に幅が狭まるなど埋没がかなり進行していた様子が見えてくる。流路の断面の堆積状況や石器の出土状況を総合すると、水深のごく浅い沢を伝ってなんらかの人為的な活動が展開していたことがうかがえる。一方、サヌカイトの剥片（S39）が出土した断面 32（C-C'）の層 No.7 については、肩部の炭化物層よりも新しい時期の堆積と判断できる。そのため、サヌカイトの剥片（S39）については周囲からの流れ込みによる二次的な堆積に伴うものと推定でき、周辺よりもより新しい時期のこの層中からの遺物の出土が少ないことも整合する。このように考えた場合、未掘の断面 32（C-C'）の西側下部には、石器集積遺構（139 土坑）にかかわるサヌカイトが一定量含まれる可能性が高い。なお、断面 32（C-C'）の層 No.7 については、浅い凹地に堆積した泥状の腐植土であることから、この時期には流路は既に放棄されていたと判断できる。そして上部の堆積状況から、最終的には別の周辺流路から細砂（層 No. 1～3 など）が供給されたことにより自然流路 NR01 が完全に埋没したと判断できる。

流路の存続時期については、流路内に含まれる遺物は上述のサヌカイトに限られたため、断面 31（B-B'）および断面 32（C-C'）にて、最下層・上層・最上層ごとに採取した流木や炭化材の AMS 年代測定を実施した。その結果については第 6 章にて詳述するが、下層～最上層の年代値は縄文時代晩期～弥生時代中期前葉に相当する紀元前 10 世紀末～3 世紀末におさまっているため（表 7・図 68 / P112・113）、これと前後する期間の中で下刻・埋積を繰り返されたと推定できる。

東側の自然流路 NR02 については、基盤層上面では肩部の輪郭が不明瞭な箇所が多くあり、基盤層上面を掘削したのち、全体の大まかなアウトラインを確認した。その結果、調査地の北東隅から蛇行しながら南西にむかってのびたのち、調査地の南半で南東方向にむかってのびることが判明した。流路全体を確認できたわけではないため、流路の幅は明確ではないが、部分的な断面確認の状況や平面の検出状況を総合する限り、平均的には 12～14 m 程度であったと推定できる。また、深さについても検出面から 1 m までしか下部のトレンチを掘削していないため不明であるが、流路幅や堆積状況からみて西側の自然流路 NR01 よりも規模の大きく、深いものであったと判断される。

流路内の堆積は、下部（断面 31；B-B' の層 No.2-13 以下）では主に細粒以下の砂で充填されており、有機質を多分に含む土壌層はあまり顕著ではないが、上部（断面 31 B-B' の層 No.2-12 以上）は流路内に充填された堆積物の粒径が相対的に大きい。こうした堆積状況からみて、流路は恒常的に細砂～極細砂の供給を受けつつ徐々に幅を減じたのち、土砂流出が増加してから比較的短期間で埋没したと判断できる。なお、トレンチ部分では遺物の出土が確認されなかったため、流路の存続時期にかかわる手がかりは得られていない。

なお、2 条の自然流路の先後関係については、調査地内では平面的に重複する部分がないため明確ではない。ただし、2 条の流路を横断的する形で設けた断面 12（A-A'）では、確実な切り合い関係は認められないものの、ごく緩やかに立ち上がる自然流路 NR02 の側肩部の埋土を、自然流路 NR01 の東



図 64. 下層確認トレンチ自然流路 断面② (断面 B・D; NR01)

側肩部が急角度で谷状に深く切り込んでいるように見える。さらに上面での流路の検出状況からみても、肩部の輪郭が不明瞭な自然流路 NR02の方が先に埋没が進行したと推定できる。2条の流路はほぼ並行している点をふまえれば、東側の NR02 から西側の NR01 へと流路の位置が側方移動したと推測でき、AMS 年代測定値からみて縄文時代晩期のなかで流路の位置が切り替わった可能性が高い。

基盤層下部の壘重状況と下部の自然流路〔NR03・NR05〕 調査地の北半の下層確認トレンチによって、基盤層下部（基本層序第5層以下）の壘重状況も併せて確認した。断面 12（A-A'）および断面 31（B-B'）としたふたつの下層確認トレンチでは、最終面から約 1 m 下部で南北方向とみられる自然流路がそれぞれ確認されている（NR03・NR05）。検出位置からみて別の自然流路と推測できるため、基盤層の下部には同じような埋没流路が数多く介在することが予想される。

自然流路 NR03 および NR05 内の堆積（第6層相当）は、部分的な観察に留まるものの、いずれも中粒～粗粒砂で充填されている。流路上部の堆積（第5層相当）は、上方にむかって徐々に細粒化する傾向が認められ、最上面では粘土～シルトを主体とし、自然流路 NR02 の東側肩部付近には一定の面積で土壌化した暗色の粘質土（断面 12；A-A' の層 No.3-1・3-2）の拡がり確認できる。こうした所見から、第5層の供給によって周辺の地形の大枠が完成したのち一定期間の安定期があったことがうかがえる。基盤層下部の堆積（第7層相当）については、いずれもやや硬く締めりがあることから、上部の自然流路 NR01・02 の下刻や埋没に伴う堆積とは時期的な隔たりが推定できる。

なお、今回の調査では第5層以下の堆積の時期に関する手がかりは得られていないが、平成 24 年度調査区（CJ12-1）で実施されたテフラ分析によって、基盤層は 30,000～7,300 年前の期間に形成された AT 火山灰を含む大阪層群の再堆積⁷⁾という所見が示されており、上述の断面の観察所見と整合する。

5. 小結

今回の調査では、千里丘陵東縁の扇状地上位面では検出事例が少ない弥生時代前期の遺構・遺物が確認され、当該期の人間活動の一端を復元する上で貴重な調査事例となった。特に石器集積遺構（139 土坑）は、石器製作をおこなった場所と断定するまでは至らなかったものの、剥片の多量出土から遺構近辺で石器製作がおこなわれたことが確実視できる。同時期の遺構・遺物がほかにない点をふまえれば、この付近に安定的に居住していたとは考え難いため、近在する東奈良遺跡や新庄遺跡など同時期の遺構・遺物が展開する遺跡との関わりの中で、石器群の位置づけを検討する必要がある。また、近畿全体でみた場合においても、弥生時代の石器製作にかかわる遺構はそれほど多くはない。石器全体の組成を検討した結果、0.2 cm 未満の微細剥片が大多数であるという特徴が明確となり、石鏃をはじめとする小型石器の製作が推定できるようになったが、弥生時代の石器生産や石材流通のあり方を考える上でも良好な調査事例となろう。

さらに今回の調査では、周辺一帯の地形形成や土地利用の変遷を考えるための情報が多く得られたが、自然流路（開析谷）の周辺で石器製作にかかわる遺構・遺物が検出された点も重要である。中条小学校遺跡とその周辺では、既往の調査においても基盤層上面で時期不明の流路の痕跡が確認される事例がいくつかあったが、こうした自然流路には弥生時代中期以前の古い時期の遺物を含む可能性があることを示した点が新しい知見といえる。本遺跡や周辺では、旧石器時代の遺物の出土事例も複数あることから、今後は弥生時代前期以前の古い時期の遺構・遺物の存在を念頭においた調査が必要となろう。

【注】

- 1) 笹栗拓編 2017『総持寺遺跡4』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第280集
- 2) 合田幸美・伊藤武ほか 2000a『薄作遺跡(その1・2)』(財)大阪府文化財センター調査報告書第49集
合田幸美・伊藤武ほか 2000b『薄作遺跡(その3・4)』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第50集
- 3) 野々口陽子 1996「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第3集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
杉本厚典 2013「二重口縁壺の編年と分布」『大阪文化財研究所研究紀要』第15号(公財)大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
山本亮 2022「近畿地方中央部における二重口縁壺の系列と変遷」『考古学雑誌』日本考古学会
- 4) 田中元浩 2007「庄内式期の編年」『弥生土器集成と編年』大手前大学史学研究所、前掲註3) 山本 2022
- 5) 岸本一宏 2001「弥生時代の低地円丘墓について」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
福永伸哉 2022「ヤマト政権成立期における畿内地域の円丘墓と方丘墓」『纏向学の最前線—桜井市纏向学研究センター設立10周年記念論集—』桜井市立纏向学研究センター
- 6) 石器の所見については、園原悠斗氏(公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター) および井村俊也氏(南山大学大学院)に多くの教示を頂いたほか、センター若林幸子からも助言を得た。
- 7) 辻康男・矢作健二 2015「遺跡検出面基盤層の年代・層序」『中条小学校遺跡発掘調査報告書(分析・考察編)—立命館大学大阪いばらきキャンパスに伴う発掘調査報告書—』茨木市文化財資料集第64集 茨木市教育委員会

第6章 自然科学分析〔放射性炭素年代測定〕

1. 分析の目的と対象

今回の発掘調査では、最終遺構面にて弥生時代後期後半～古墳時代初頭の方形・円形周溝墓群や平安時代前半の掘立柱建物などが検出された。ほかでは、北東－南西方向に流下する自然流路2条と、西側の自然流路 NR01 の西側肩部でサヌカイトの剥片がまとまって出土した石器集積遺構（139 土坑）が検出されたが、遺構の切り合いから上記の周溝墓群や掘立柱建物よりも先行することは確実であるものの、いずれも年代を示す遺物を欠いている。また、円形・方形周溝墓群では、周溝底部から古式土師器の破片が出土するものもあるが、方形周溝墓 9 については埋土上層から古墳時代後期～奈良時代の須恵器が一定量出土している。埋土の中層・下層からは土師器の極細片が数点出土しているものの、時期決定は困難であり、隣接地で古墳時代中期末～後期の古墳が一定する検出されている事実を鑑みれば、周溝墓群の一部は古墳時代後半期まで下る可能性を考慮する必要がある。

そこで以下では、時期の特定がやや困難な、(1) 自然流路 NR01、(2) 石器集積遺構（139 土坑）、(3) 方形周溝墓 9 埋土中層・下層から採取された木材および炭化材を対象に、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を実施した（図 65）。分析した試料は計 7 点で、内訳は (1) 自然流路 NR01 が 3 点、(2) 石器集積遺構（139 土坑）が 2 点、(3) 方形周溝墓 9 が 2 点である。

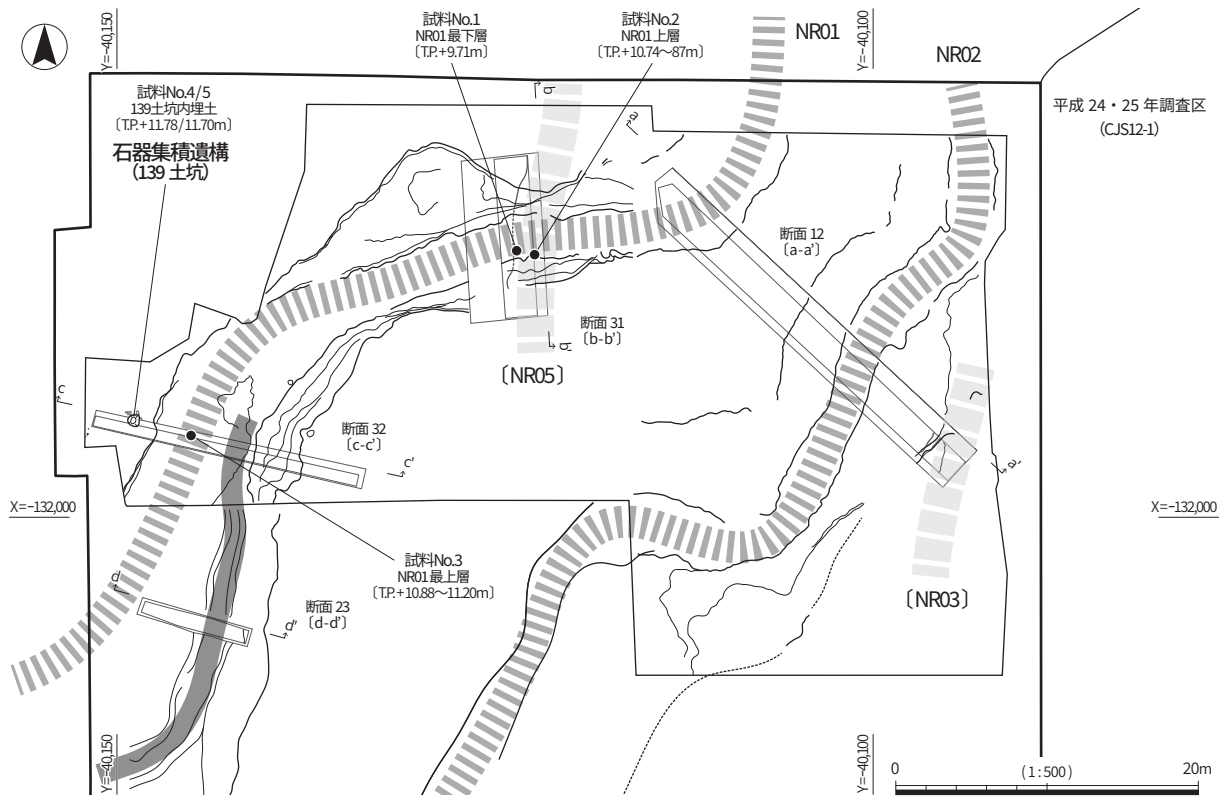
2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 6 のとおりである。測定試料を写真 3 に示す。また、図 66 に自然流路 NR01 と方形周溝墓 9 の模式断面図および試料採取地点の柱状図、図 67 に試料を採取した柱状堆積物の断面と木材の写真を示す。

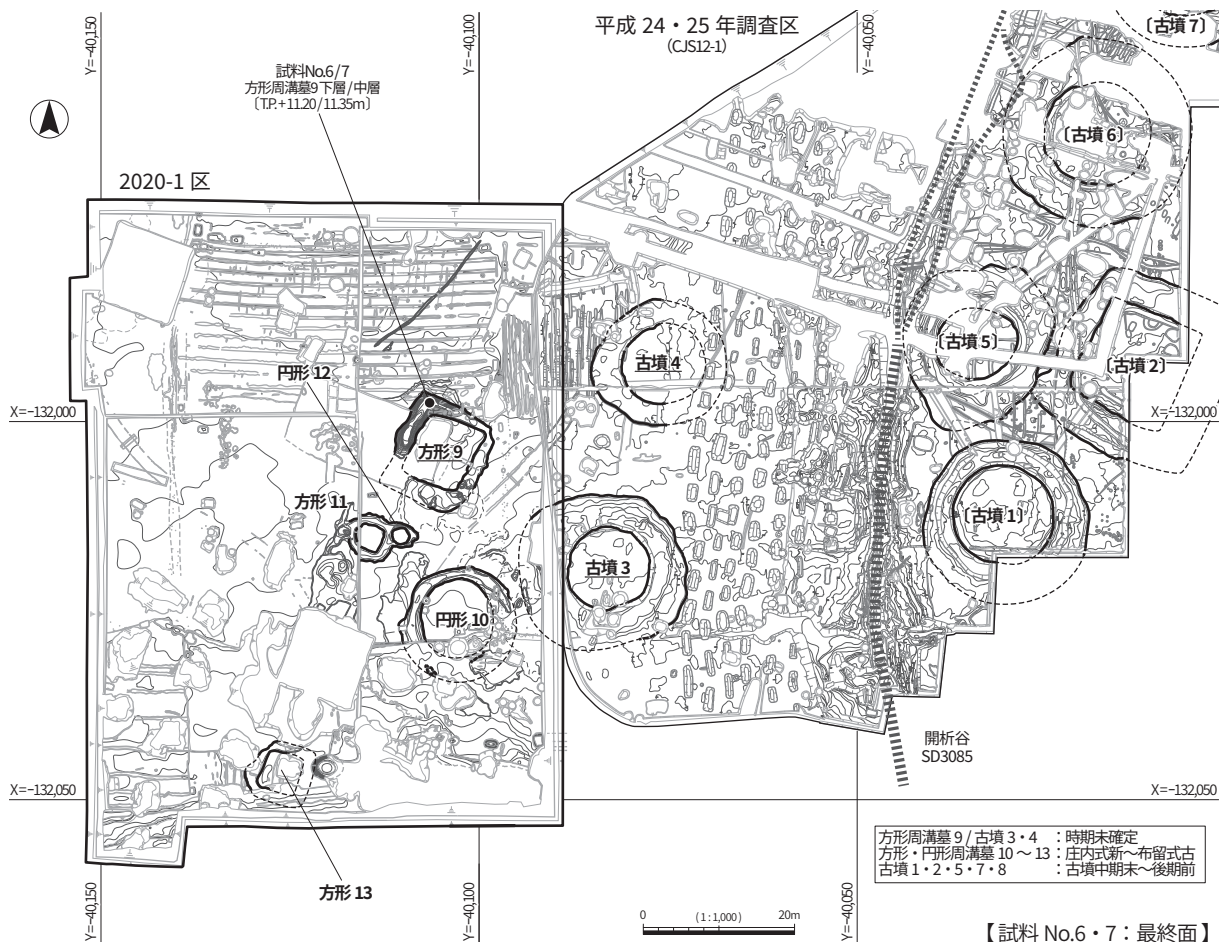
試料は調製後、加速器質量分析計〔パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH〕を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正をおこなった後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 6. 測定試料および処理

測定番号	測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
No.1	PLD-46831	遺構：NR01 層位：最下層 位置：断面 31：層 No.10 登録 No.474	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：12mol/L）
No.2	PLD-46832	遺構：NR01 層位：上層 位置：断面 31：層 No.17 登録 No.479	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：12mol/L）
No.3	PLD-46833	遺構：NR01 層位：最上層 位置：断面 32：層 No.7 登録 No.480	種類：生の不明植物遺体 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：12mol/L）
No.4	PLD-46836	遺構：139 土坑 埋土中炭化物 層位：埋土④～⑤ 登録 No.352	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：12mol/L）
No.5	PLD-46837	遺構：139 土坑 埋土中炭化物 層位：埋土①～② 登録 No.447	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：12mol/L）
No.6	PLD-46835	遺構：方形周溝墓 9 層位：下層：層 No.7a1 登録 No.477- 下	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：12mol/L）
No.7	PLD-46834	遺構：方形周溝墓 9 層位：中層：層 No.3a2 登録 No.477- 上	種類：土壌 状態：wet	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：12mol/L）



【試料 No.1 ~ 5：最終面下部】



【試料 No.6・7：最終面】

図 65. 測定試料採取地点

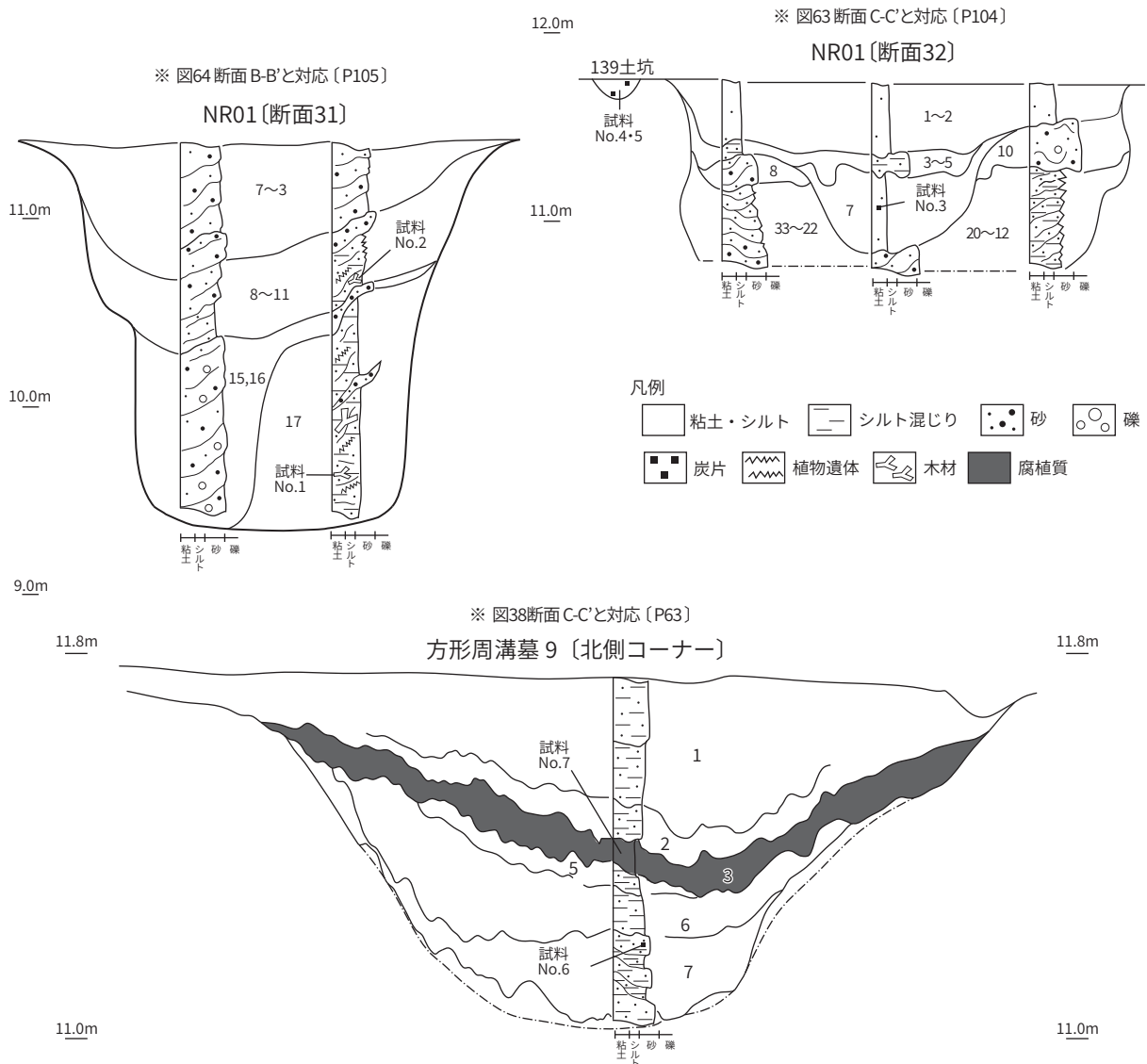


図 66. 測定試料採取地点の模式断面図・柱状図

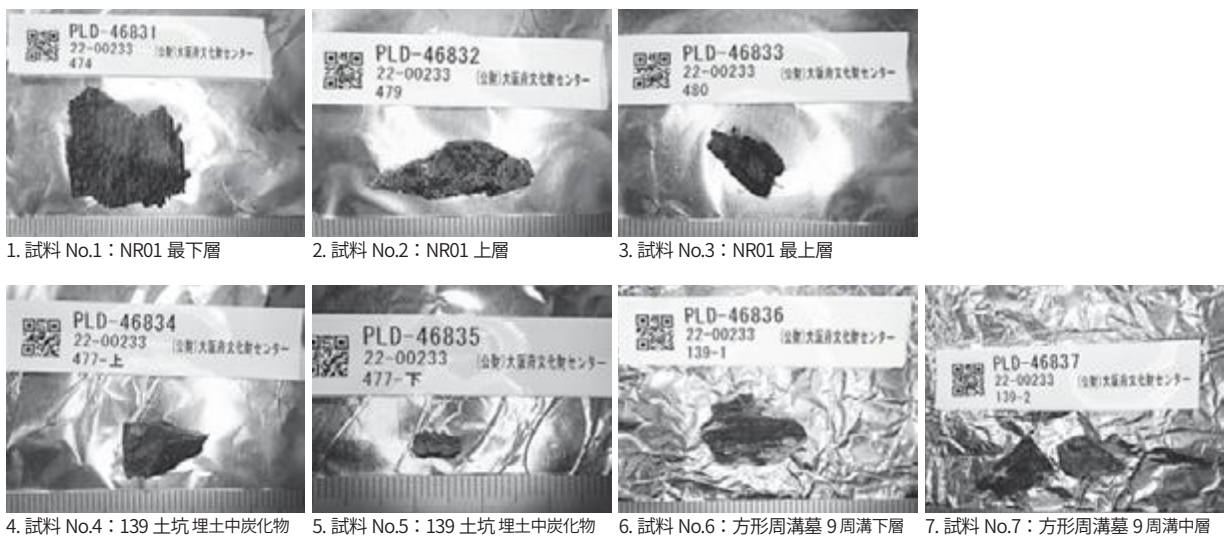
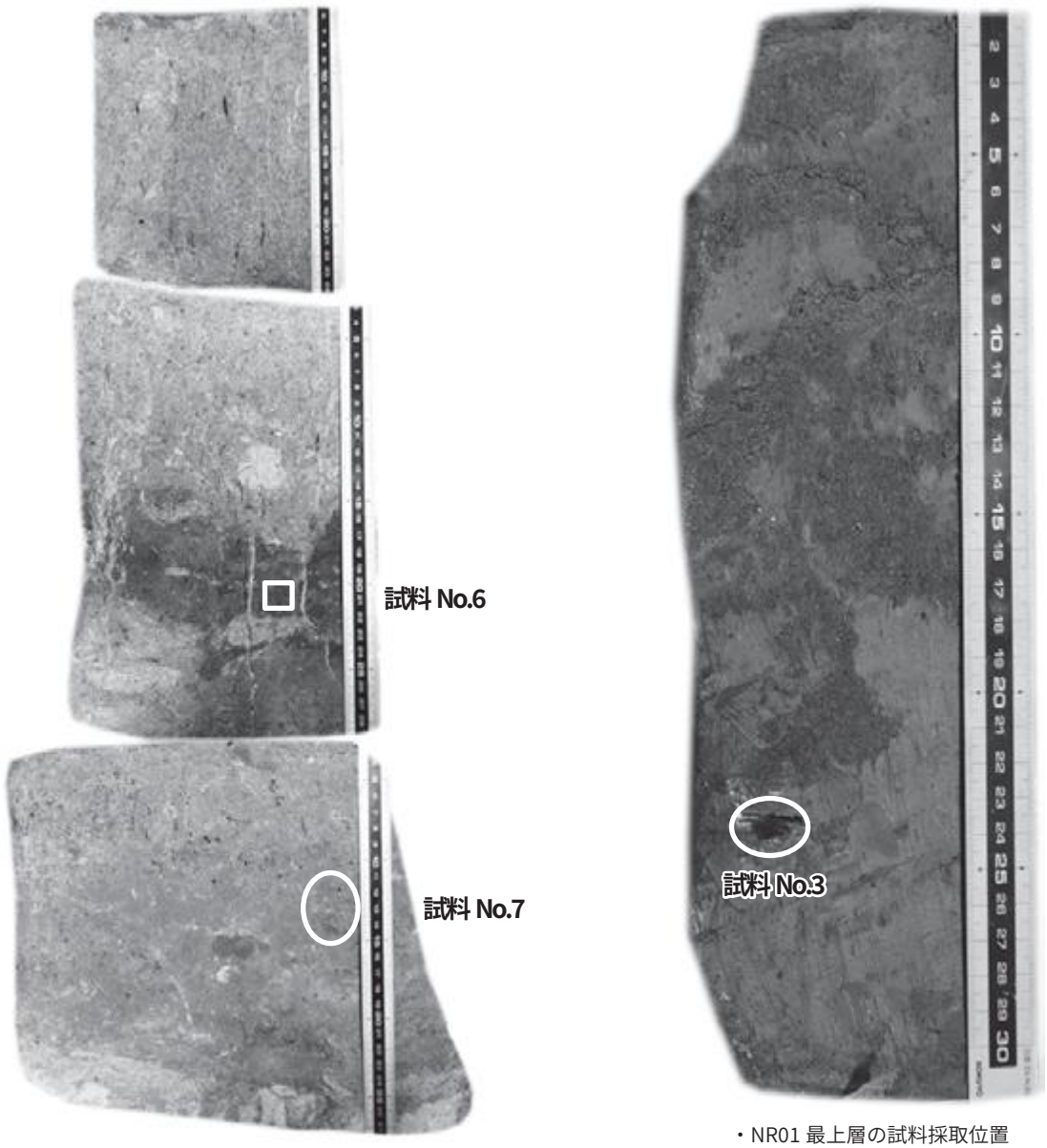


写真 3. 測定試料



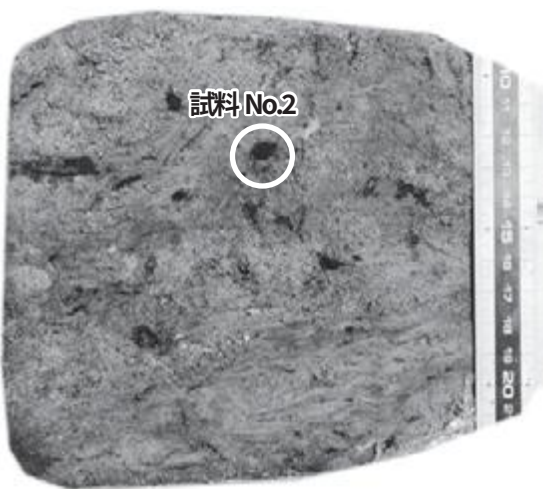
試料 No.6

試料 No.7

試料 No.3

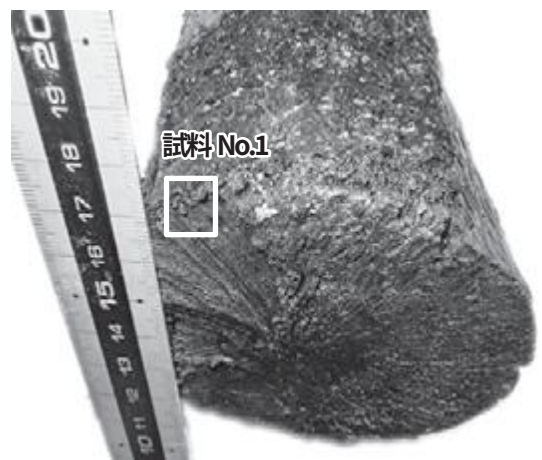
・ 方形周溝墓 9 の試料採取位置

・ NR01 最上層の試料採取位置



試料 No.2

・ NR01 上層の試料採取位置



試料 No.1

・ NR01 最下層の試料 No.474 の測定試料採取位置
*線で囲った範囲が測定試料の採取位置

図 67. 自然流路 NR01・ 方形周溝墓 9 の測定試料の採取位置

表7. 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料番号	内 容	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
						1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
No.1	NR01 埋土 (断面 31 最下層)	PLD-46831 登録 No.474	-33.89 \pm 0.31	2719 \pm 22	2720 \pm 20	898-866 cal BC (36.59%) 855-828 cal BC (31.68%)	907-813 cal BC (95.45%)
No.2	NR01 埋土 (断面 31 上層)	PLD-46832 登録 No.479	-30.81 \pm 0.32	2637 \pm 21	2635 \pm 20	810-796 cal BC (68.27%)	826-788 cal BC (95.45%)
No.3	NR01 埋土 (断面 32 最上層)	PLD-46833 登録 No.480	-16.13 \pm 0.24	2234 \pm 19	2235 \pm 20	370-352 cal BC (13.90%) 287-228 cal BC (47.61%) 219-209 cal BC (6.76%)	382-348 cal BC (21.22%) 314-205 cal BC (74.23%)
No.4	139 土坑 埋土中炭化物 (埋土④～⑤)	PLD-46836 登録 No.352	-29.71 \pm 0.18	2454 \pm 19	2455 \pm 20	746-690 cal BC (31.30%) 665-645 cal BC (10.83%) 563-558 cal BC (1.66%) 550-513 cal BC (17.44%) 503-483 cal BC (7.05%)	751-683 cal BC (33.33%) 667-634 cal BC (13.33%) 622-612 cal BC (1.46%) 591-455 cal BC (41.97%) 445-417 cal BC (5.37%)
No.5	139 土坑 埋土中炭化物 (埋土①～②)	PLD-46837 登録 No.447	-31.97 \pm 0.19	2411 \pm 20	2410 \pm 20	514-500 cal BC (9.46%) 487-410 cal BC (58.81%)	718-709 cal BC (2.34%) 661-653 cal BC (2.30%) 543-404 cal BC (90.81%)
No.6	方形周溝墓 9 (周溝埋土下層)	PLD-46835 登録 No.477- 下	-30.64 \pm 0.17	1824 \pm 19	1825 \pm 20	211-243 cal AD (68.27%)	132-141 cal AD (1.47%) 158-192 cal AD (6.66%) 200-252 cal AD (78.57%) 290-317 cal AD (8.75%)
No.7	方形周溝墓 9 (周溝埋土中層)	PLD-46834 登録 No.477- 上	-28.24 \pm 0.18	1846 \pm 19	1845 \pm 20	134-136 cal AD (1.84%) 166-187 cal AD (16.07%) 203-237 cal AD (50.35%)	129-239 cal AD (95.45%)

3. 結果

表7に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正をおこなって暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代、図68に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正をおこなうために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代 (yrBP) の算出には、14Cの半減期として Libby の半減期 5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い (14Cの半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

(1) **自然流路 NR01** 測定の結果 (以下の較正年代は2 σ の値) は、以下のとおりである。

NR01については、断面31で最下層 (試料 No. 1) と上層 (試料 No. 2)、断面32で最上層 (試料 No. 3) が採取され、流路埋土の底部付近から上部まで層位的な測定をおこなっている。最下層の試料 No. 1は、14C年代が 2720 ± 20 BP (PLD-46831)、較正年代が907-813 cal BC (95.45%) で、紀元

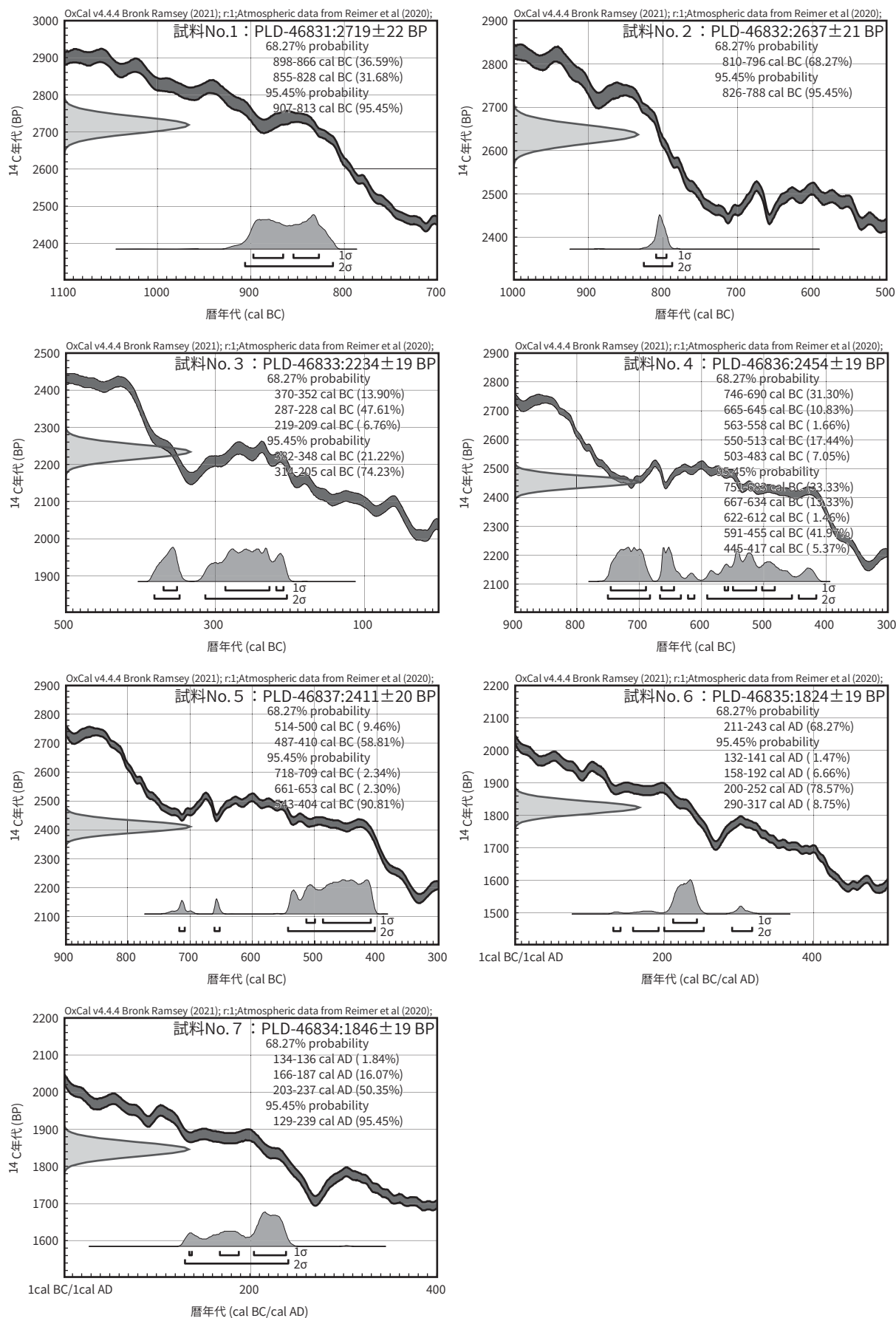


図 68. 暦年較正結果

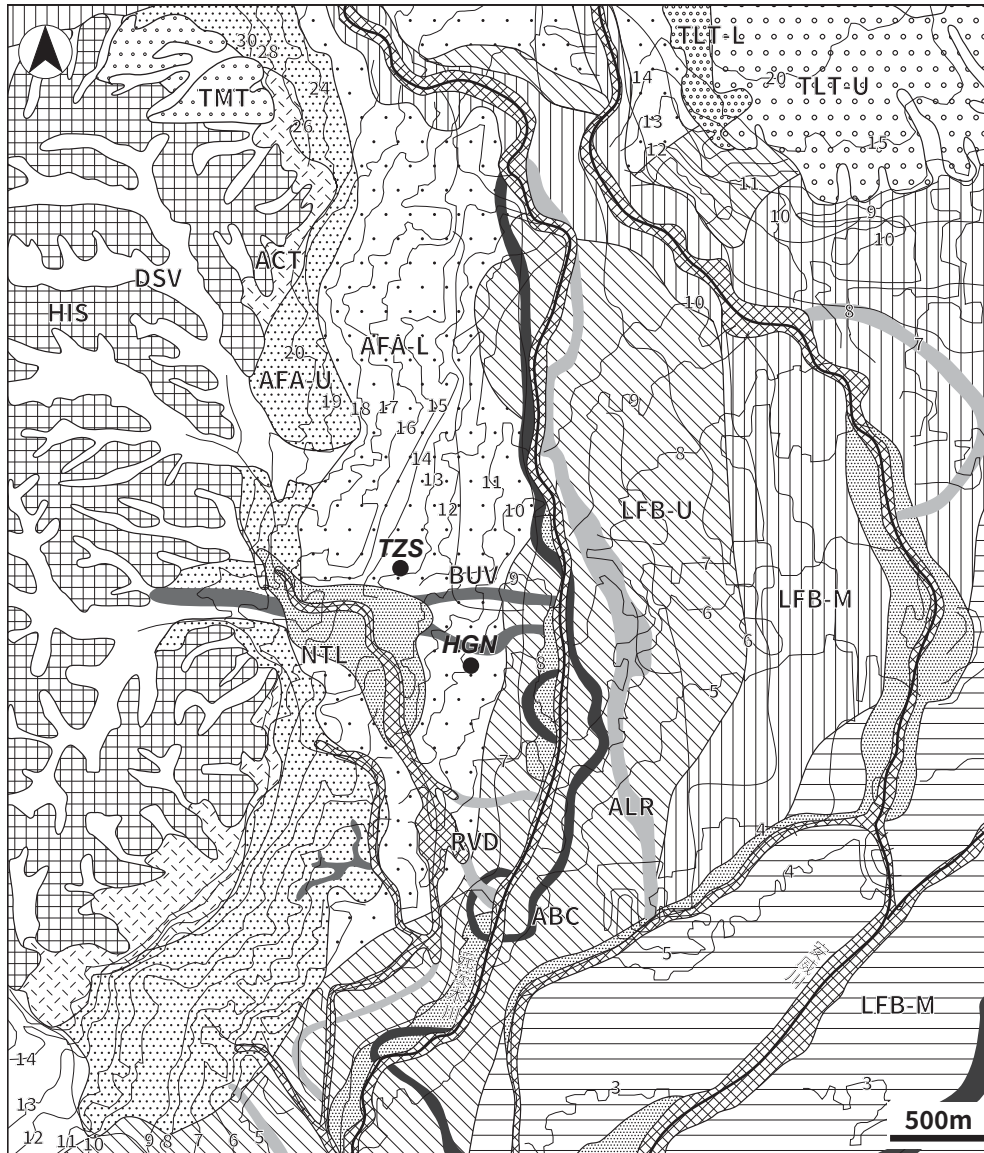
前10世紀末～紀元前9世紀後半の暦年代を示した。上層の試料 No. 2 は、14C 年代が 2635 ± 20 BP (PLD-46832)、較正年代が 826-788 cal BC (95.45%) で、紀元前9世紀後半～紀元前8世紀前半の暦年代を示した。最上層の試料 No. 3 は、14C 年代が 2235 ± 20 BP (PLD-46833)、較正年代が 382-348 cal BC (21.22%) および 314-205 cal BC (74.23%) で、紀元前4世紀前半～紀元前3世紀末の暦年代を示した。

縄文時代の暦年代について（岡田 2012）と（小林 2017）、弥生時代の暦年代については（今村・設楽 2011）による土器付着炭化物の年代学的検討結果にもとづくと、NR01 の測定試料は、最下層の試料 No. 1 が縄文時代晩期中葉、上層の試料 No. 2 が縄文時代晩期中葉～後葉、最上層の試料 No. 3 が弥生時代中期前半に対比される。

なお、流路埋土の断面写真による層相の検討によると、NR01 では、粗粒の砂礫からなる河床堆積物が堆積していない。さらに、NR01 では、周囲の氾濫原に洪水堆積物をほとんど供給していない。そのため、流路周囲には、自然堤防の発達認められない。このような堆積状況から、NR01 は、何らかの要因により、氾濫原面上を下刻して形成された開析谷と考えられる。既往の発掘調査において、NR01 が下刻した氾濫原面については、弥生時代以降の遺構確認面となる基盤層の上部に、再堆積した AT 火山灰が含まれていた（木村編，2015）。基盤層でのテフラの堆積状況と地形学的検討および周辺の発掘調査および分析結果（木村編，2015）から、NR01 が下刻した氾濫原面は、3 万年前前後以降から 7300 年前以前までのある時期に形成された緩傾斜の扇状地面で、後背の丘陵を構成する大阪層群の泥～砂礫の再堆積物を多く含む構成層からなると考えられる（図 69）。

NR01 については、植物遺体を多く含む砂混じり泥で構成される基底部に近い最下層において、河岸に生育していたと推測される自然木を測定して得られた年代値から、下刻時期は縄文時代晩期中葉以前と捉えられる。また、泥混じり砂からなる上層に挟在する木材の年代値と断面写真で確認できる堆積状況から、開析谷は、何度かの再侵食を繰り返しながら、縄文時代晩期中葉から後葉にかけて埋積が進行したと考えられる。埋土の最上部に位置し、流路が再侵食された凹地内を放棄流路状に埋積する泥層内に挟在する最上層内の植物遺体からは、弥生時代中期前半の年代値が得られており、当該期前後に流路の最終的な埋没が進行したと考えられる。後述のように、NR01 に近接する石器集積遺構（139 土坑）に伴う炭化材片からは、弥生時代前期の年代値が得られている。NR01 最上層と集積遺構の年代と堆積状況から、NR01 は弥生時代前期～中期に埋積がかなり進行していたと考えられる。この段階には、埋積が進行した谷状の窪みをなす流路底に、周囲から供給された地下水によって主に涵養される水深の極浅い流路が存在していたと推定される。弥生時代前期～中期には、このような谷の周囲において、人間活動が展開していたと考えられる。

（2）石器集積遺構（139 土坑） 石器集積遺構では、埋土の下位と上位に含まれ炭化材片の年代測定を実施している。下位の試料 No. 4 は、14C 年代が 2455 ± 20 BP (PLD-46836)、較正年代が 751-683 cal BC (33.33%)、667-634 cal BC (13.33%)、622-612 cal BC (1.46%)、591-455 cal BC (41.97%)、445-417 cal BC (5.37%) で、紀元前8世紀中頃～紀元前5世紀後半の暦年代を示した。上位の試料 No. 5 は、 2410 ± 20 BP (PLD-46837)、較正年代が 718-709 cal BC (2.34%)、661-653 cal BC (2.30%)、543-404 cal BC (90.81%) で、紀元前8世紀末～紀元前5世紀末の暦年代を示した。集積遺構の埋土に含まれる炭化材片の測定試料は、上述の（今村・設楽 2011）にもとづくと、いずれも弥生時代前期に対比できる。



地形分類凡例

等高線は、国土地理院（1977）の治水地形分類図から作成

HIS: 丘陵（大阪層群） DSV: 開析谷 BUV: 埋没谷（弥生～古墳には既に埋没） TMT: 中位段丘面 TLT-L: 低位段丘上位面 TLT-U: 低位段丘下位面
 AFA-U: 沖積扇状地上位面（低位段丘相当層） AFA-L: 沖積扇状地下位面（晩氷期～完新世初頭頃） ACT: 沖積錐もしくは崩積性斜面
 LFB-U: 沖積低地上位面 LFB-M: 沖積低地中位面（現氾濫低地） ABC: 放棄流路、旧流路 ALR: 沖積リッジ
 LFB-L: 沖積低地下位面（淀川の影響を強く受ける現氾濫低地） RVD: 人工堤防 NTL: 自然堤防および人工堤防沿いの微高地（主に中世以降に発達）

遺跡略号

TZS: 中条小学校遺跡（調査地点） HGN: 東奈良遺跡

図 69. 遺跡周辺の地形分類図

（3）方形周溝墓 9 方形周溝墓 9 の周溝埋土では、下層（試料 No. 6）と中層（試料 No. 7）で層位的な測定をおこなっている。測定結果については、周溝内の初期の流入堆積層と考えられる泥混じり砂と泥の互層の上部に散在する炭化材片である下層の試料 No. 6 の 14C 年代が 1825 ± 20 BP (PLD-46835)、校正年代が 132-141 cal AD (1.47%)、158-192 cal AD (6.66%)、200-252 cal AD (78.57%)、290-317 cal AD (8.75%) で、紀元後 2 世紀前半～紀元後 4 世紀前半である。周溝内において初期段階の堆積物流入が落ち着き、周溝内の埋没面での土壌化が進行した段階に形成された腐植シルトからなる中層の土壌腐植である試料 No. 7 は、14C 年代が 1845 ± 20 BP (PLD-46834)、校正年代が 129-239 cal AD (95.45%) で、紀元後 2 世紀前半～紀元後 3 世紀前半の暦年代を示した。測定結果は、下層の試料 No. 6 がやや新しく、層位的に矛盾が生じているが、その要因は現段階で不明である。なお、腐植

シルトの上部では、土壌化の影響を強く受けたと推定される塊状無層理の砂混じりのシルト層が積層する（図66：1・2層）。方形周溝墓の周溝の上半部は、周溝内において植生が発達するとともに、周囲から地表堆積物が再堆積しながら埋没が進行したと推定される。

ところで、方形周溝墓9で得られた年代の時期には、奈良県桜井市の纏向遺跡を中心とした遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期の試料に対して集中的に実施された分析結果が存在する（春成ほか2011）。この測定結果によれば、14C年代と土器型式の関係は、大和VI-1様式が2000 14C BP台、大和VI-2様式が1970 14C BP台、VI-3様式が1960 14C BP台、庄内0式期と1式期が1920 14C BP台、庄内3式期が1880 14C BP台、布留0式期が1840～1800 14C BP台、布留1式期が1790～1715 14C BP台となる（春成ほか2011）。上記の年代値にもとづくと、今回の方形周溝墓9の周溝埋土の下層と中層は、いずれも庄内3式期から布留0式期頃の時期に対比される。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料のうち、NR01上層（試料No. 2）、石器集積遺構（139土坑）（試料No. 4、5）、方形周溝墓9の下層（試料No. 6）の4点は、いずれも最終形成年輪を欠く部位不明の木材であり、試料の木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

（パレオ・ラボAMS年代測定グループ：伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadidze・辻 康男）

【引用・参考文献】

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 春成秀爾・小林謙一・坂本 稔・今村峯雄・尾崎大真・藤尾慎一郎・西本豊弘 (2011) 古墳出現期の炭素14年代測定. 国立歴史民俗博物館研究報告, 163, 133-176.
- 今村峯雄・設楽博己 (2011) 炭素14年の記録から見た自然環境—弥生中期—. 設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編「弥生時代の考古学3 多様化する弥生分析」: 48-69, 同成社.
- 木村健明編 (2015) 中条小学校遺跡発掘調査報告書（分析・考察編）. 61p, 茨木市教育委員会.
- 小林謙一 (2017) 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—. 263p, 同成社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- 岡田憲一 (2012) 関西縄文集落の一時的景観と時間的累積—墓地の分析から矢野健一氏の批判に答える—. 関西縄文文化研究会編「関西縄文時代研究の新展開: 松尾洋次郎さん追悼論集」: 13-32, 関西縄文文化研究会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第7章 総括

ここまで報告してきたように、今回の調査では主に弥生時代前期の石器集積遺構、古墳時代初頭の周溝墓群、奈良時代以降の耕作関連遺構と平安時代の掘立柱建物群が確認された。立命館大学大阪いばらきキャンパスの開設時に実施された隣接する平成24年度調査区（CJ12-1）では、弥生時代後期後半頃の居住域や古墳時代中期～後期の古墳群など、異なる時期の遺構・遺物も検出されており、これまでの調査成果を総合すると、調査地は弥生時代後期以降に人間活動が活発化すると考えてよい。また、下層確認調査や自然科学分析によって、地形の形成過程や環境変化に関するデータが蓄積されつつあるため、広域的な面積の調査が限られる市域中心部において、通時的な土地利用の変遷を総合的に検討するための良好なフィールドとなっている。

そこでまずは、前回の調査地を含め、時代順に地形環境と土地利用の推移や遺構・遺物の変遷についてまとめたのち（第1節）、今回の調査成果のトピックスともいえる石器集積遺構と周溝墓群に関する要点と評価を取りまとめ（第2節・第3節）、報告の結びとしたい。

第1節 調査地と立命館大学大阪いばらきキャンパス内の土地利用の変遷

調査地は、千里丘陵の東縁に位置し、西から東にむかって地形が緩やかに下がる扇状地上位面に位置する。地形を仔細にみれば、平成24年度調査区で検出された南北方向の開析谷の東側に尾根上の高まりがあり、こうした細かな地形の起伏は丘陵から流下する開析谷の下刻・埋没作用によって形成されたと判断できる。調査地一帯は、流路の年代測定から、弥生時代中期までには現状の地形面が完成したと

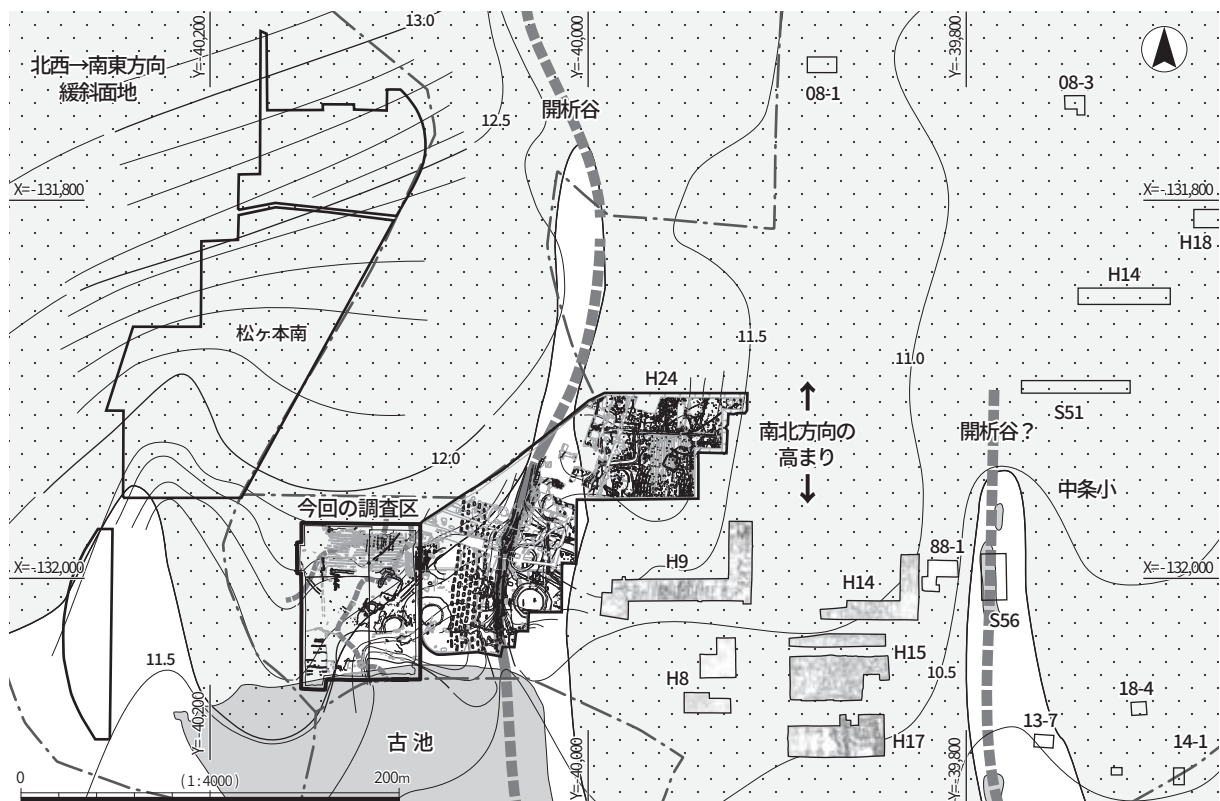


図 70. 調査地と周辺の地形復元

認識できるが、周辺一帯は堆積が薄く、新旧の地形図などを参照する限り、おおよそ図 70 の通りに調査地周辺の旧地形が復元できる。以下では、復元された微地形をふまえ、キャンパス内の調査で検出された遺構・遺物を時代順にまとめ、土地利用の変遷を整理する。

1. 立命館大学キャンパス内で確認された遺構・遺物と土地利用の推移

弥生時代中期以前（図 71-1） 弥生時代前期の石器製作に関わる遺構・遺物を除けば、弥生時代中期以前の遺物はⅡ様式頃の広口壺（98）など数点の出土に限られる。そのため、キャンパス内に中期以前の居住域が広がるとは考え難い。石器群の評価に関する詳細は第3節に譲るが、開析谷（自然流路 NR01）の近傍に関連する遺構・遺物が集中することから、開析谷の周囲で石器製作といった人為的な活動がなされたことがわかる。今回の調査では、検出面で痕跡を追えないものも含め、複数の開析谷・自然流路が介在することが確認されたが、特に自然流路 NR01 は、AMS 年代測定の結果から縄文時代晩期～弥生時代中期前葉頃まで存続したことが明らかとなった。東隣の平成 24 年度調査区の西半では、後続する弥生時代後期以前の開析谷 SD2010・2071・3085 が確認されているため、NR01 の埋没後に SD2010・2071・3085 へと流路の位置が側方移動したと推定できる。

弥生時代後期～古墳時代初頭（図 71-2） 後期後半以降、キャンパス内では遺構・遺物が増加する。特に平成 24 年度調査区では、東部の微高地上で後期後半～庄内式期前葉の土坑や溝等が多数検出されている。確実に建物遺構と認定できるものは多くはないが、竪穴建物の周溝とみられる円弧を描く細筋の溝状遺構や、井戸・土坑などが検出されており、居住域が営まれたことが確実である。出土遺物から、そのピークは後期後半～庄内式期初頭頃にあり、SE1600 など一部の遺構が庄内式期新段階まで存続するものの、その直後には居住域が廃絶する。平成 24 年度調査区で話題となった開析谷西側の列状土坑群は、出土遺物から居住域とほぼ同時期と判断でき、堆積状況から短期間のうちに埋没したと推測される。前回の報告では、集落の縁辺をめぐる区画としての性格が示されていたが、地形の変換点にあたる開析谷とほぼ並行しながら南北方向にのびることから、区画という理解は妥当といえる。

一方、今回の調査で新たに確認された周溝墓群については、第2節にて詳しくまとめるが、出土土師器の特徴からいずれも庄内式期新段階以降に下ると判断できる。さらに平成 24 年度調査区で検出された古墳 3・4 は、前回の報告では古墳時代中期～後期の古墳と判断されたが、須恵器・埴輪を伴わない点や開析谷西側の周溝墓群と近接する点から、庄内式期（古墳時代初頭）の周溝墓群とみなすのが妥当である。以上をまとめると、弥生時代後期後葉～庄内式期前半に開析谷の東に居住域が、西に列状土坑がそれぞれ営まれ、それらの廃絶後に開析谷の西側に周溝墓群が形成されたと考えることができる。

古墳時代中期～後期（図 71-3） 前期～中期前半の遺物は、キャンパス内では数点に留まるため、この間の土地利用は明確ではない。キャンパス内では、中期後半に入ると埴輪を伴う中小古墳が築造されるようになる。平成 24 年度調査区では計 8 基以上が確認されているほか、近接する平成 9 年度調査区でも同時期の円墳が 1 基確認されており、開析谷の東側斜面地に中期後葉～後期中葉（TK23～TK10 型式期新相）の古墳群が営まれたと判断できる。

なお、今回の調査区では、この時期の遺物は少ないが、方形周溝墓 9 の周溝埋土の中層上面から中期後葉頃の韓式系軟質土器の平底鉢が、上層から TK43 型式期の須恵器片がそれぞれ出土している。周溝の堆積状況から、一定期間の安定期を挟んだのち、比較的短期間で埋積したと認識できるため、上層の堆積時、つまり古墳時代後期後葉頃に庄内式期に築造された周溝墓群が削平されたと推定できる。古墳群の造営と周辺一帯の開発が相前後する時期におこなわれたと考えてよいが、今回の調査で検出された

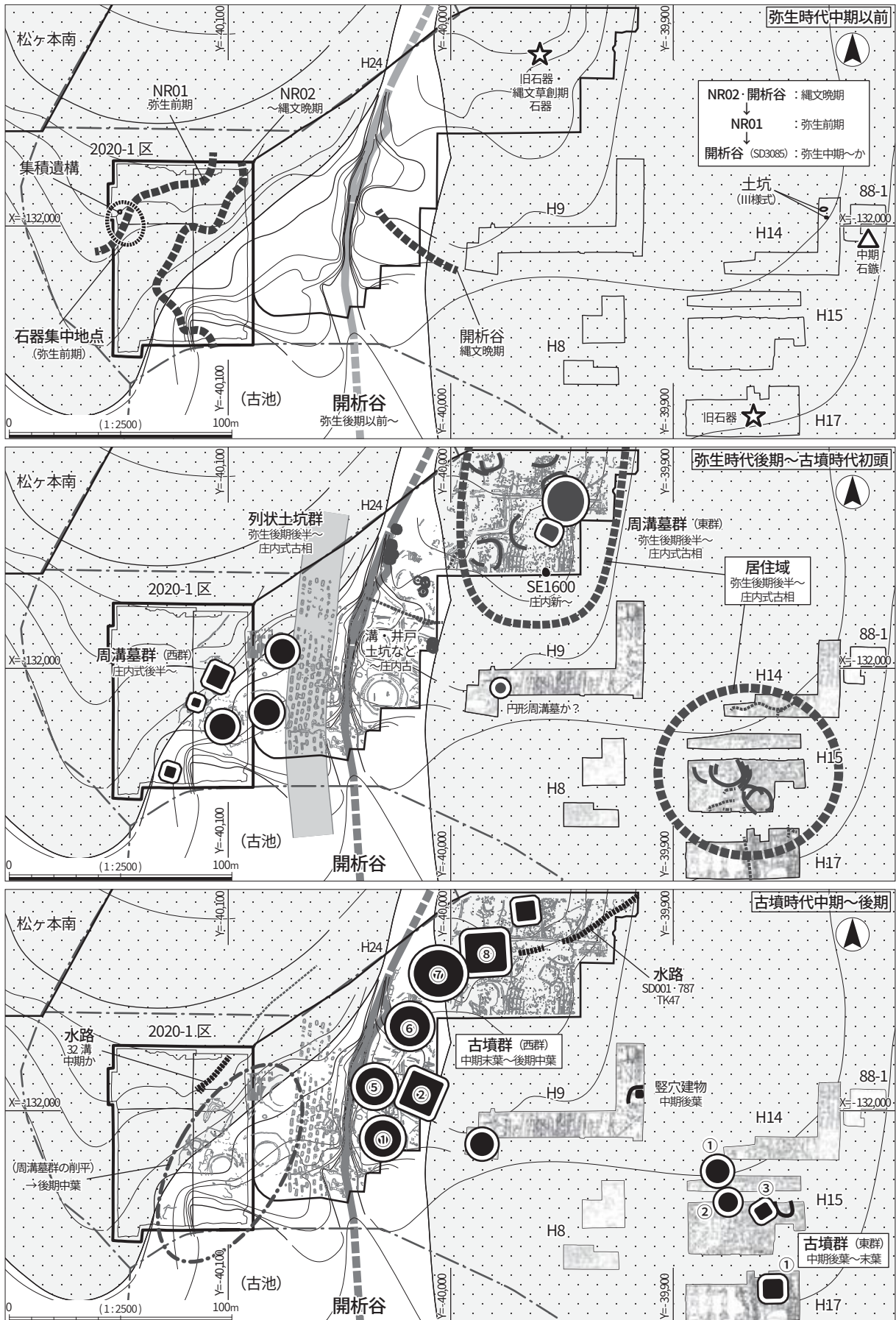


図 71. 調査地と周辺の土地利用の変遷 (1)

31 溝や SD001、SD0787 などの地形に沿ってのびる溝が、遺構埋土や断片的な遺物などからこの時期の遺構と推定できる。

古代 (図 72-1) 後続する飛鳥時代の遺物は、キャンパス内では少ない。そのため、調査地の具体的な土地利用は明らかではないが、調査地南東の平成 17 年度調査区では 7 世紀中葉前後の正方位の掘立柱建物 SB03・SB04 が 2 棟並ぶ形で検出されており、関連が推定できる。

一方、奈良時代に入ると、キャンパス内では遺構・遺物がやや増加する。これまでの調査では方位に即した灌漑水路や耕作関連溝がまとまって検出されているが、今回の調査においても南西側や中央の北寄りでは東西・南北方向の溝群 (111～118 溝・119～121 溝) や東西方向の 146 溝などが確認されている。特に平成 24 年度調査区では、開析谷 SD2010・2071・3085 から東に派生する幅 2 m の基幹水路 SD0300 が確認されており、この水路は坪界溝と重複する位置に微高地部分を横断する形で東西にのびる点が重要で、遅くとも 8 世紀後半までには高燥な扇状地上位面に条里に即した開発がおよんでいたことがわかる。さらにこの時期の耕作関連遺構は、近世の耕作痕跡や現存地割と重複しており、現在につながる土地開発の起点となる時期と認識できる。同時期の居住域は、キャンパス内では確認されていないものの、飛鳥時代の 2 棟の正方位建物が検出された平成 17 年度調査区と北側の平成 15 調査区では、奈良時代の掘立柱建物 4 棟と柵列や区画溝などがまとまって検出されており、周辺一帯の開発の展開を考える上で重要となろう。

平安時代 (図 72-2) 後続する 9・10 世紀代の遺構・遺物としては、耕作地の一画で 10 世紀代の掘立柱建物 2 棟と柵列や土坑が確認されている。2 棟の建物は方位が異なるため、時期差があると推定できるが、その場合、1 棟独立の存在形態となるため、居住という性格の遺構ではなく耕作地内に設けられた簡易的な倉庫などの性格が推定される。なお、奈良時代に整備・掘削された開析谷 SD2010・2071・3085 や基幹水路 SD0300 については、埋土上層の黒色土器や羽釜の年代観から 10 世紀後半頃に埋め立てられたと報告されており、掘立柱建物群と総前後する時期に耕作域の水利体系が抜本的に変化したことがうかがえる。

中世以降 (図 72-3) 11 世紀以降は、キャンパス内全体で遺物が激減する。わずかに調査地北西で確認された畦畔の周辺で 14 世紀代の完形の瓦器碗が出土しているが、それ以外は少量の細片に限られる。遺物の少なさや上面での耕作溝群の存在などをふまえれば、現代まで耕作地として継続的に土地利用がなされたと考えるのが妥当である。

ほか、今回の調査区と平成 24 年度調査区の西半では、2 条 1 組で並行してのびる細筋溝が多数検出されており、この溝については間隔が¹⁾いずれも 1.5 m 前後と規則的なため、轍痕と認識できる。時期については、開析谷 SD2010・2071・3085 の上面で検出されていることから、埋没後の平安時代後半～中世頃と判断でき、調査地周辺での土砂運搬を伴うような土木工事の実施が示唆される。

近世以降の状況について付言すると、調査地の南には 17 世紀前半に古池が造成される。調査地が所在する近世奈良村は、高燥地のため耕作域の用水確保に課題があったとされており、発掘調査の所見からもこの点を追認できる成果といえる。また、調査地では近世以降に土砂供給が増加する傾向がみられたが、その要因として水利体系の変化や丘陵部における山林荒廃などの影響を想定すべきであろう。

2. 中条小学校遺跡と周辺一帯の土地利用の変遷と歴史的展開

ここまでの整理をふまえ、周辺遺跡との関係を整理しながら、本遺跡の性格や特徴、遺跡の立地する千里丘陵東縁一帯の土地利用の推移について簡単に²⁾まとめたい。

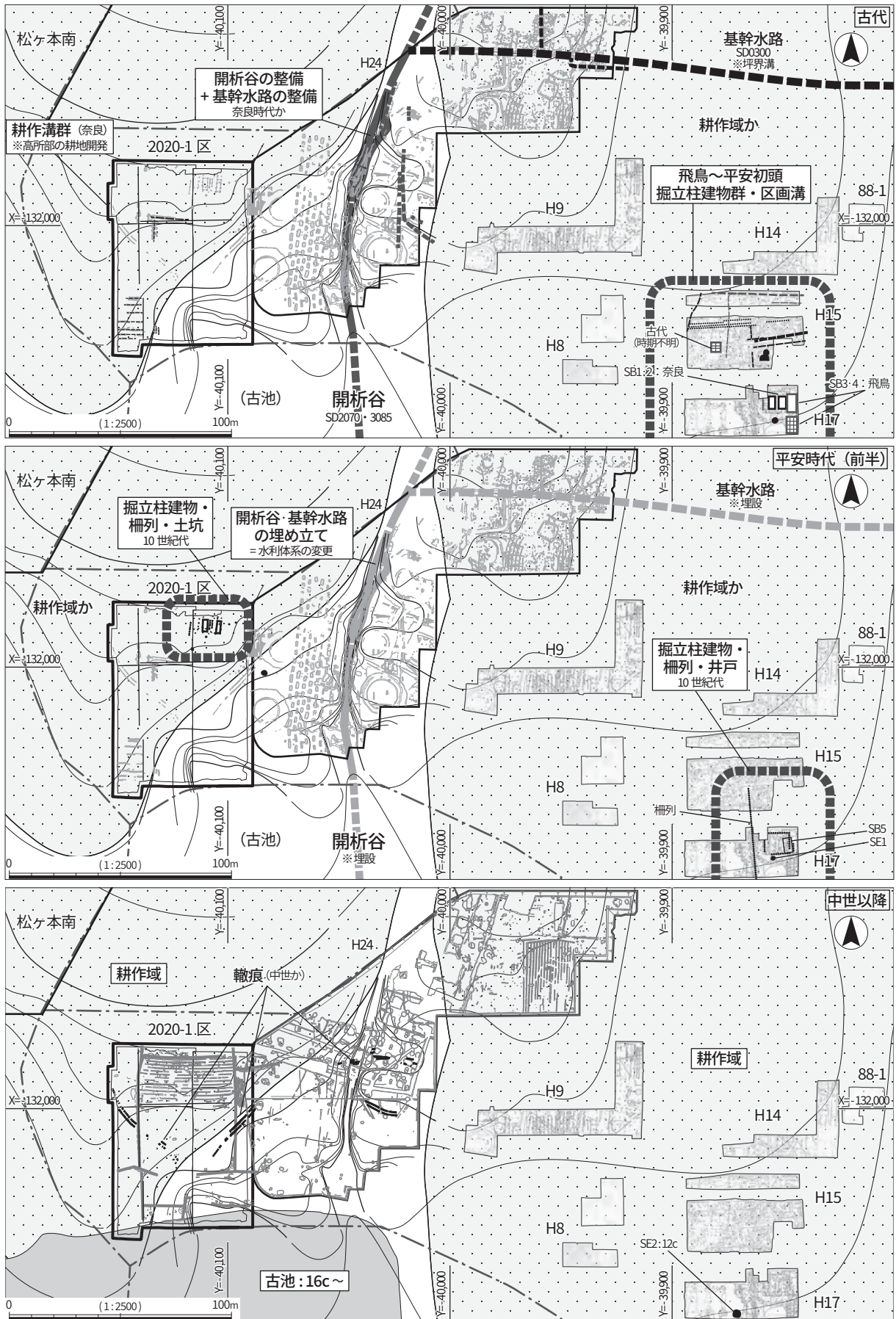


図 72. 調査地と周辺の土地利用の変遷 (2)

周辺では、弥生時代前期以降、東奈良遺跡や新庄遺跡で居住活動が本格化し、中期には東奈良遺跡や郡遺跡・倍賀遺跡で方形周溝墓がそれぞれ100基以上築造されている。そのため調査地は、摂津東部有数の遺構の密集地帯の一角を占めるが、今回の調査でみつかった前期の石器群や中期の少量の遺物群は主要集落の外縁でおこなわれるなんらかの人為的な活動とかかわる可能性が高い。具体的な性格は明らかにしえないが、その一案として山林資源の獲得や狩猟などが考えられよう。

弥生時代後期後半～庄内式期初頭には、調査地にはじめて居住域が進出し、それと併せて居住域の縁辺に列状土坑群が掘削される。ただし、直後の庄内式期前葉には居住域が解体され、墓域へと土地利用が転換するなど、短期間で立て続けに変化が起こる。遺跡全体でも、この時期以降、点的に建物跡や遺物等が認められるようになるが、東奈良遺跡の環濠が解体するなど集落の構造が変化する時期と重なる点は重要である。調査地で確認された開析谷は、東奈良遺跡の中心部が位置する南東方向にのびるため、水利上の繋がりが推定でき、両遺跡で同時に起こる居住域の変化は連動していた可能性が高い。なお、近畿全体でみた場合においても、弥生時代後期後半と庄内式期の2時期は、居住様式が変化する地域が多いとされており、広域的な変化とも連動する点は重要である。一時的に高所部に居住域が移動した要因としては、前段階の居住構造の変化や環境変化などが想定されよう。

古墳時代前期～中期前半は、遺跡全体で遺構・遺物が極めて少ない時期にあたる。東奈良遺跡においても、集落は存続するものの、前期後半以降は遺物が大きく減少するため、居住域は縮小した可能性が高い⁶⁾。それに対し、続く中期後半～後期前半には、調査地で埴輪や須恵器を伴う中小規模の古墳が多数造営されるようになるなど、様相が変化する。遺跡内のほかの地点に加え、郡遺跡、春日遺跡、東奈良遺跡においても同時期の中小古墳がまとまって確認されており、これらには新池窯周辺で生産された埴輪が伴うことから、各古墳群の造営は相互に関連があると推察される。なお、今回の調査によって、庄内式期の周溝墓群の削平が中期後半～後期前半の古墳築造期もしくはその直後と推測されるデータが得られた点も重要である。周辺では、郡遺跡で後期前半頃の馬の埋葬土坑や鍛冶関連遺物、丘陵内で後期後半の須恵器窯なども確認されているため、中期後葉～後期は、人間活動が活発化し、生産遺跡が付随する形で千里丘陵東縁一帯の開発が進められた時期と認識できる。

調査地と周辺の古墳群は、後期前半までには廃絶し、続く後期後半～飛鳥時代前半には千里丘陵や北摂山地に横穴系の埋葬施設を伴う古墳が築造されるようになる。調査地では、この間の遺構・遺物は少なく、具体的な土地利用は不明であるが、上述したように、隣接する平成17年度調査区の正方位の建物跡や東奈良遺跡出土の埴輪⁹⁾など、周辺一帯の重要性を暗示する遺構・遺物が確認されている。正方位を志向する掘立柱建物としては、島上・島下郡域で最古級の事例となるため、この時期も拠点的な性格が継続すると考えてよい。その証拠に、同調査区では奈良時代にも掘立柱建物が継続することに加え、キャンパス内の調査地においても正方位の基幹水路SD0300が掘削されるなど、条里に基づく大規模な開発がおこなわれたことが判明している。茨木市域では、溝咋遺跡や総持寺遺跡、玉櫛遺跡などで、8世紀代に正方位を志向する水路や耕作溝の検出事例がある¹⁰⁾が、調査地周辺は耕作に不適な上位面の高燥地のため、開発エリアの拡大を具体的に示す点が重要な成果といえる。さらにこの時期に整備された土地区画は、現代まで踏襲されるため、調査地周辺における土地利用の一大画期と認識でき、官衙的な様相を備える特殊な建物群も含めた遺跡構造を詳細に検討する必要がある。

平安時代前半期に相当する9・10世紀代も、継続して遺構・遺物が認められ、今回の調査地では2棟の掘立柱建物が確認された。調査地南東の平成17年度調査区や平成12年度調査区においても、同

時期の掘立柱建物や井戸などがまとまって検出されており、遺跡全体でこの時期の遺構・遺物が広域的に拡がる傾向がみられる。さらにこの時期には、開析谷 SD2010・2071・3085 と基幹水路 SD0300 が埋め立てられるなど水利体系に変化がみられるが、周辺では後続する 11・12 世紀頃に茨木川の流路固定がなされたと推定されており、相互の関連があるのかについて検証をする必要があろう。

中世以降は、調査地の遺構・遺物が減少するが、遺跡全体でも同じように減少傾向であり、奈良時代～平安時代前半にかけて形成された耕地区画や水利体系を維持・変質させながら、耕作地として継続して土地利用がなされたと判断できる。

以上、調査地と周辺遺跡の動向を時代順に整理してきたが、居住域がはじめて進出したのち墓域に転換する弥生時代後期後半～庄内式期、古墳群が造営され周辺一帯の開発に着手される古墳時代中期後半～後期前半、条里に即した開発が進みその後の土地利用を規定する奈良時代の 3 時期が、土地利用の転換期と認識することができる。今回の調査で確認された周溝墓群や奈良時代の溝群は、こうした変化を具体的に示す証拠であるほか、10 世紀後半の掘立柱建物群も水利体系の変化と連動する可能性が高いことから、重要な成果といえる。調査地一帯は、高燥地のため遺構・遺物の出土量がそれほど顕著ではないが、時期ごとの土地利用の変化を端的に示す成果が得られたことが重要といえる。

第2節 石器集積遺構（139 土坑）の性格と特質

1. 石器の所見

石器集積遺構（139 土坑）からは、7,768 点に及ぶ石器が出土し、この遺構の周辺包含層である 20 - 5j 地点や 2A - 5a 地点などからも多くの剥片類が見つかった。集積遺構埋土の炭化材を用いた AMS 年代測定では、14C 年代で $2455 \pm 20\text{BP}$ 、 $2410 \pm 20\text{BP}$ という結果が出ており（第6章）、概ね 2400 年前頃（弥生時代前期後半頃）と判断される。以下では集積遺構とその周辺から出土した石器類について、実見を基にした二、三の所見を加え、遺構の評価を行う。

石器集積遺構（139 土坑）の石器類 集積遺構では、埋土中から、打製石鏃（S37～39）、楔形石器、二次加工のある剥片、剥片、微細剥片、石核が出土した。

打製石鏃は 3 点出土している。いずれも欠損箇所があり、完形品は見つかっていない。S37 は基部が欠損する。欠損端部が内側に湾曲し始めている点や、先端から欠損箇所にかけて厚みが減じることなく一定の厚みを保っていることから、凸基式（円基）であると判断できる。また、凸基式の中でも、刃部形態が長三角形で、基部の張り出しが弱い円基であることから、涙滴形である。涙滴形は近畿地域¹²⁾で分布する傾向にあり、なかでも淀川流域から環巨椋池地域、北近畿地域の前期新段階～中期前葉にかけて多く出土する特徴にある。中条小学校遺跡は分布の中心地域に当てはまると言えよう。また、S38 は先端部のみ出土であるが、先端の厚みや、先端角、片面に刃形成に伴った鏃身部重層剥離¹³⁾による疑似的な鏃の形成といった要素において、S37 と近似した特徴を持つ。実際に外形線照合を行うと、平面形においても類似することがわかる（図 73）。2 点だけの資料での判断は尚早であろうが、同一遺構からの出土であることを加味すると S37 と S38 は同一の製作者による製品であると推測できる。一方で S39 は挟りの浅い

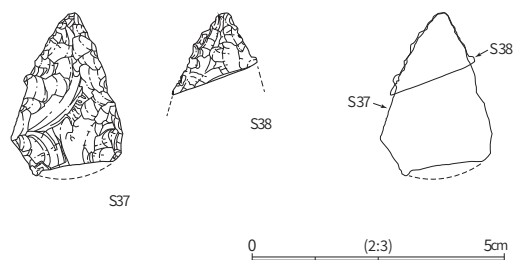


図 73. 集積遺構出土石鏃の平面形同定

凹基式である。基部が左右非対称に見えるが、片側の基部端が欠損していることが原因であり、本来的には左右対称であったと判断できる。

剥片および微細剥片は、大きさのバリエーションが豊富である。加えて、剥片の取り方も縦長と横長のいずれも一定量確認でき、バラエティに富む。一方で大きさが多様といっても、全長4 cm未満の小規模な資料である。総体的に見ても大きさ、形状、厚さにおいて製品が製作できる素材剥片とは言い難い。むしろ素材剥片製作時の直接打撃や、調整剥離時の押圧剥離で生じた残滓であると判断できる。図57 (P91) の剥片の大きさを分類した結果を基に観察すると、0.5 cm未満 (a・b) は厚みが概ね一定で扁平であるが、1.0 cm以上 (d～i) は平面形が不定形で厚みも不均質であるものが大半を占める傾向にある。0.5～1.0 cm (c) の大きさは一定の厚さのものもあれば、不均質なものもあり、傾向の境界的な位置と言える。よって、0.5～1.0 cmを境にして、それ以下は石器の最終調整に伴う押圧剥離で生じた微細剥片、それ以上を素材剥片剥離時の直接打撃によって飛散した剥片であると判断できる。1.0 cm前後を境界とする見解は、¹⁴⁾ 稲田孝司の剥片と碎片の区分や、¹⁵⁾ 長井謙治による剥片と微細剥片の区分などと一致しており、有効であろう。

以上を踏まえると、集積遺構からは、素材剥片からの剥離 (剥片・楔形石器・石核)、最終調整剥離 (二次加工のある剥片・微細剥片)、製品 (打製石鏃) という小型石器を製作する工程の一端が見える状況である。また、遺構内の高さごとの石器の出土傾向 (垂直分布) を見ても、1.0 cm未満 (cサイズ以下) の剥片・微細剥片が埋土下位に集中する傾向は、最終調整剥離によって同タイミングで発生したものが集中した傾向であると言え、石器製作の様子がうかがえる。

集積遺構周辺包含層の石器類 集積遺構の周辺にあたる包含層20-5j地点や2A-5a地点などでは、他の包含層ブロックに比べて石器の出土数が多いことは、既に第5章第4節において述べられている。この包含層から出土した石器類は、楔形石器と剥片に分類できる。とりわけ20-5j地点の剥片は、縦長剥片が多数を占める。剥片14点中9点は原礫面を残しており、その位置は腹背面よりも側面に確認できる傾向にある。このうち、S20・S26・S28・S39は原礫面に打点を持っており、原石ないしは原礫面を残す比較的大形の剥片からの分割であることがわかる。これらの剥片は、集積遺構出土の剥片と同様に、小型石器を製作するにも足りない大きさや形状、厚さである。

小結 石器集積遺構 (139土坑) とその周辺包含層から出土した石器群は周辺の出土状況や石器の観察を踏まえると、一括性の高い一群であると判断できる。

石器群には、製品・未製品・楔形石器・二次加工のある剥片・剥片・微細剥片・石核が確認でき、原石や大形素材剥片を除く資料が揃う点は非常に評価できる。剥片は、石器集積遺構 (139土坑) と周辺包含層を合わせて見てみると、縦長剥片で側縁に原礫面をもち、原礫面からの打撃が見込まれる一群 (A群) と、腹面はポジティブな剥離面のみで、背面に複数の剥離痕をもつ一群 (B群)、そして少量の両極剥片 (C群) に分けることができる (図74)。A群は集積遺構の周囲である包含層20-5j地点に多く、B群は土坑内に多い。両極剥片 (C群) も土坑内からの出土である。今回見つかっている剥片はいずれも石器となりうる製品素材としては不向きであり、製作残滓であると判断できるが、この剥片3群それぞれの出土位置の差は製作工程の差を表すと考えられる。すなわち、A群は原礫から剥離した大型の板状剥片から、素材剥片を剥離する際に生まれた使用不可品 (残滓)、B群とC群は先述の工程によって作られた素材剥片を剥離していく過程で発生した使用不可品 (残滓) であると考えられる。いずれも製品にはなり得ない残滓であるが、作業工程が異なる点は注意しなければいけない。そしてこれら剥片

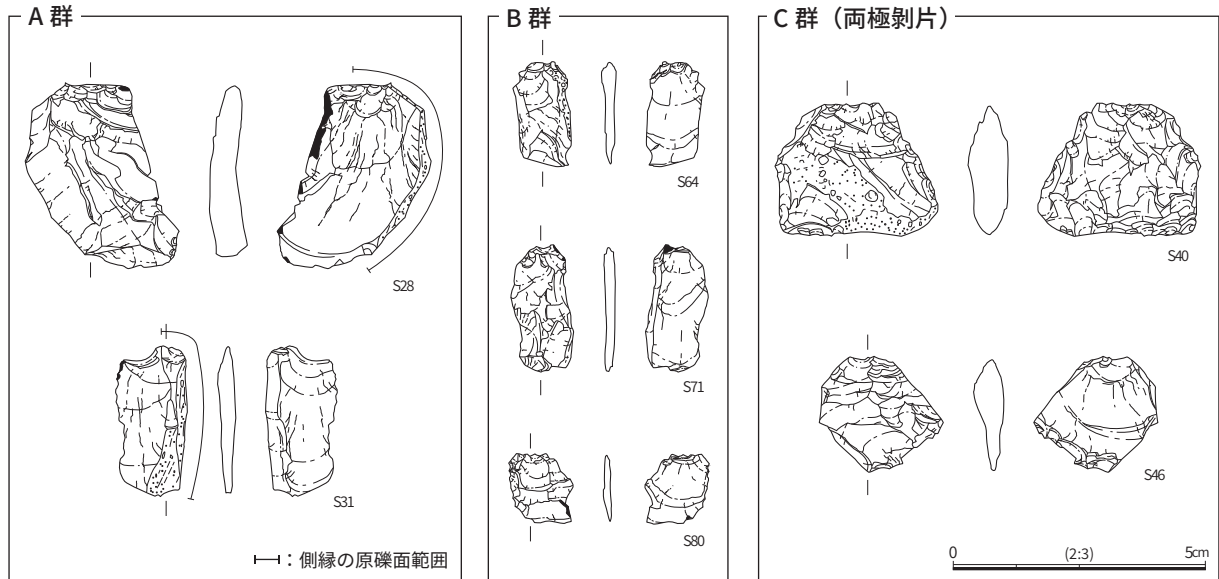


図 74. 石器集積遺構（139 土坑）とその周辺で見られる剥片 3 種

剥離の工程の後、最終調整のための押圧剥離によって生じた微細剥片が、集積遺構の埋土下位から多量に出土するという流れであろう。

一方で製品は、いずれも打製石鏃といった小型石器である。また完形品ではなく、使用中ないしは製作中の欠損品であることは注目すべきである。加えて、石鏃 2 点（S37・S38）が極めて近似した形態である点は限定した製作者の証左となりうる。

以上の諸要素から、石器集積遺構（139 土坑）は、大型の素材剥片から小型石器を製作していた遺構であると考えられ、遺構内や周辺から出土した剥片は、石器製作時に生じた使用不可品（残滓）であると評価できる。完成した製品は持ち出したのであろう。（園原）

2. 石器集積遺構をとりまく周辺環境と遺構の性格

ここまでの検討により、調査地内で弥生時代前期後葉に打製石鏃を中心とした小型石器の製作がおこなわれたことが明確になった。調査地が位置する千里丘陵東縁の扇状地上位面では、北の郡遺跡・倍賀遺跡で弥生時代中期（Ⅱ～Ⅳ様式）の方形周溝墓が 150 基以上確認されているが、これを除けば弥生時代中期以前の遺構・遺物の確認事例は極めて少ない。一方、弥生時代前期の検出事例は、新庄遺跡や東奈良遺跡などやや標高が低い扇状地縁辺部を中心としており、石器集積遺構の周囲に明確な居住域が伴わない点からみても、周辺遺跡との関係が重要であることは言うまでもない。

石器群の出土状況を改めて整理すると、自然流路 NR01 の南端・上面付近から石器がまとまって出土し、西側肩部で検出された石器集積遺構（139 土坑）から多数の微細剥片が炭化物とともに出土した。石器群の周辺からは、磨滅が著しい微細な土器片も出土しているが、明確な居住遺構はないため、この場所を一時的なキャンプ地としながら石器製作を含むなんらかの人為的な活動をおこなわれていたとみるのが妥当である。開析谷と石器群は、集積遺構の炭化物と開析谷内の流木および土壌層内の微細炭化物の AMS 分析の結果から同時期に存在したことが明らかとなっており、開析谷の堆積状況からは、間欠的に土砂流出がある状況が復元でき、この時期には既に埋没が進んでいたと判断できる。開析谷の周囲については、検出状況からみて樹木の繁茂する場所ではなく、ある程度開けた場所であったと推定できるため、この場所を狩猟エリアとしていた可能性などが一案として浮かび上がる。

なお、調査地で石器製作がおこなわれた弥生時代前期後半は、東奈良遺跡では外側環濠が掘削されるなど、居住域の拡大期と重なる¹⁶⁾。そのため、東奈良遺跡出土の石器との比較が肝要となるが、既往の研究においてやや後出する中期前半には地点ごとに石器組成に差があるといった分析結果が示されている¹⁷⁾。時期ごとに各地点との石器の比較検討が進めば、複数の居住集団の複合体として理解される弥生時代の大規模集落¹⁸⁾の、内部構造や集落外縁での活動との関係を有機的に捉えることが期待できる。今回の調査で確認された石器群と東奈良遺跡の居住集団との関わりの有無については、なお検証が必要であるものの、上述したように、調査地と東奈良遺跡は水利上の繋がりがあると考えてよい。調査地で石器製作をおこなった集団が、東奈良遺跡に基盤をもつとみなしてよいのならば、水深の浅い開析谷を伝って上位面へアクセスしていたと推定でき、当該期の石器製作システムや集落域の外縁の土地利用を考える上で、今回の調査成果は貴重な情報となろう。(笹栗)

第3節 古墳時代初頭の周溝墓群の位置づけ

周溝墓群の構造、時期、築造順といった基本情報を整理したのち、これまでに本遺跡の周辺で確認されている円形周溝墓の検出事例との比較から、周溝墓群の位置づけを検討したい。

なお、開析谷の東側には、弥生時代後期後半～庄内式期前半の居住域があり、その至近には円形・方形周溝墓の可能性のある溝状遺構が検出された。これらを周溝墓とみなした場合、墓域は開析谷を境に東西に二分でき、以下では今回調査対象となった西群に絞って様相をまとめる。また、各周溝墓を呼称する際には、「周溝墓」を省略する。(例；円形 10、方形 13 など)

1. 周溝墓群の基本情報

周溝墓西群の構造 今回の調査では、5基の周溝墓を確認した。第5章第3節で述べた通り、開析谷西側の古墳3・4の2基は円形周溝墓とみなせるため、計7基で構成される(表8・図75)。方形周溝墓3基と円形周溝墓4基で構成され、概ね等高線に沿って2・3列に並ぶような形で周溝墓が築造されているように見える。総じて方形周溝墓が高い位置にあるほか、墳丘規模にも若干の差があり、超小型の円形12を除けば、円形はいずれも10mを超えるなど、相対的に規模が大きいものが多い。

出土土師器の特徴 今回の調査で確認された5基の周溝墓からは、土器が少量出土している。出土量が極めて少ないことや、一部に周溝埋土の上方から遊離した状態で出土しているものがあることから、いずれも墳丘上に置かれたものが転落したと推定される。点数は、円形10からは複数個体が確認できるが、そのほかは1・2個体程度の出土に留まり、古墳3・4には直接伴う個体が確認できない(図76)。

器種は、大半が二重口縁壺で、明確な偏りがあるのが特徴である。そのほかの器種は、円形10のV様式系甕、円形12の台付鉢、方形13の大型壺の破片の各1点に留まる。二重口縁壺は、方形9に1個体、円形10に5個体以上、方形11に1個体が伴っており、形式はいずれも頸部が直立するタイプで、底部はいずれも平底である。方形9の出土資料(75～77)は、全体的に薄手で二次口縁の外反度合いが強いが、円形10と方形11の資料はいずれも胎土や器壁の厚み等の特徴が概ね一致している。内外面の磨滅が著しいため、調整等は明確でないが、石英・長石・チャートなどを多く含む粗粒の胎土のものが多く、いずれも在来系¹⁹⁾の技術系統で製作された資料と判断できる。

二重口縁壺には、加飾と無文の両方が含まれるが、加飾は二次口縁の下端に2組1対の円形浮文を施すシンプルなものが主体で、ほか頸部に突帯を施すものが1点含まれる。そのほか、垂下の有無や二

次口縁の接合方法にもバリエーションがあり、複数個体が出土した円形10は形態がすべて異なる²⁰⁾。

出土土師器の年代観 既往の研究では、頸部が直立するタイプの二重口縁壺は、庄内式期以降の出現という見解が示されている²¹⁾。加飾の有無については、庄内式期の開始から両者があるため時期差の指標とはならないが、庄内式新段階～布留式期にかけては総じて文様の簡素化と無文化が進むことから、今回の出土資料はやや時期が下るものが多いと推定される²²⁾。さらに方形13から出土した大型壺の体部片は、胎土に角閃石を含む生駒西麓産の大型複合口縁壺と認識でき、既存の出土事例から庄内式新段階以降の製作とみなせる²³⁾。土師器の出土量が少ないため、周溝墓どうしの時期差は明確ではないが、二重口縁壺については方形9と円形10・方形11で器壁の厚みや二次口縁の外反度合いに様相差があり、これを時期差とみなすこともできる。以上を総合すると、周溝墓西群出土の土師器は、概ね庄内式新段階～布留式古段階におさまる資料群と認識できる。また、円形10では、土師器の出土状況から墳丘上への二重口縁壺の複数個体の配置が推定されるが、こうしたパターンは庄内式新段階～布留式古段階頃に多いとされて²⁴⁾、上述の土師器の年代観とも合致する。

ところで、東側居住域と周溝墓東群、列状土坑群から出土した土器は、二重口縁壺も一定数含まれるが壺の主要形式が広口壺で、小型鉢や有孔鉢が多いといった特徴があるほか、小型器台の出土も数点確認できる。こうし

表8. 周溝墓一覧 (西群のみ)

No.	形	規模 (m)	周溝幅 (m)	出土土器			細片のみ (未図化) 〔ほかの器種〕
				二重口縁壺	壺ほか	甕	
3	円	12	4.0				○
4	円	11	5.5				×
9	方	9.5	2.1	1			
10	円	11.5	2.9	4以上		1	
11	方	4.2	1.5	1			
12	円	2.6	0.7		1		〔小型台付鉢〕
13	方	5.8	1.3		1		〔大型複合口縁壺〕

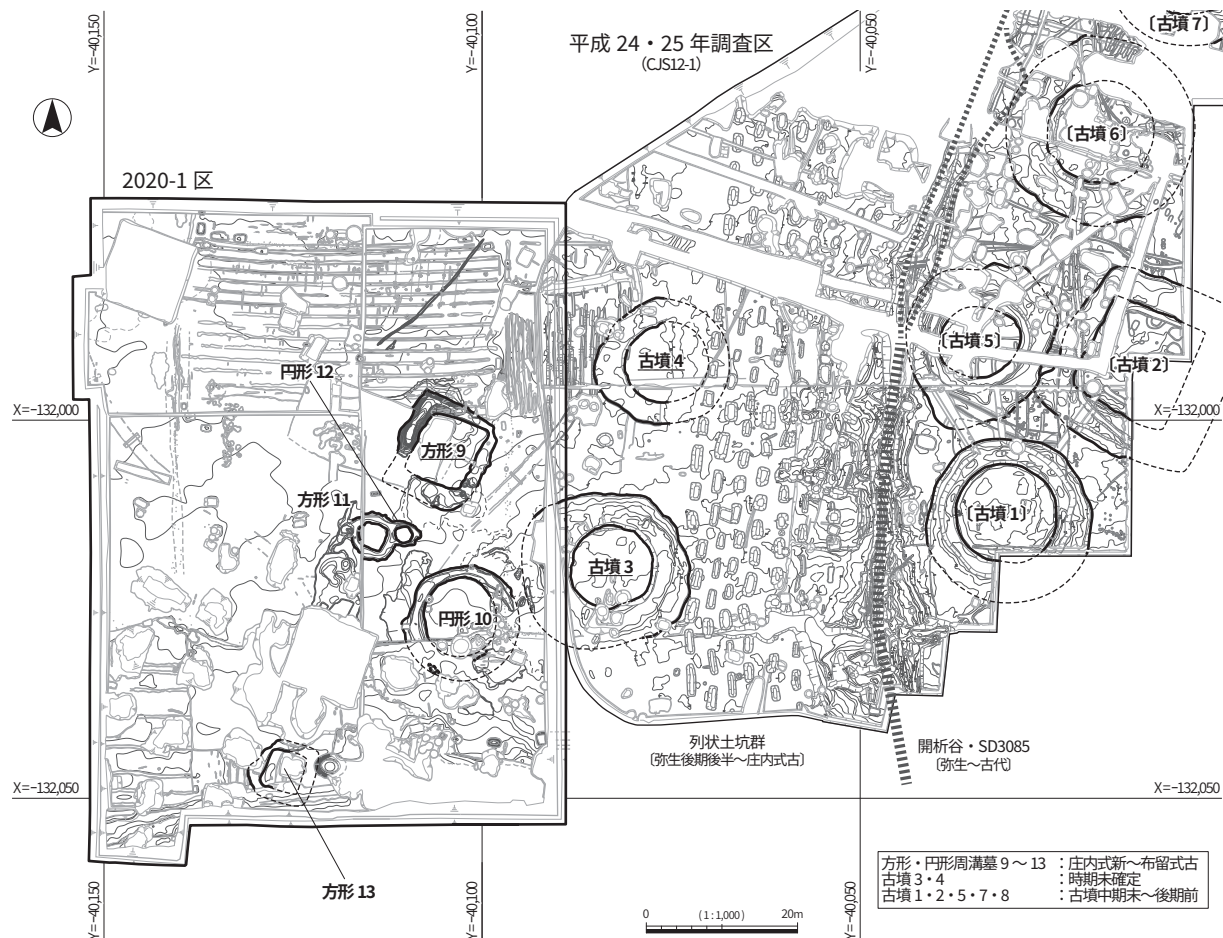


図75. 周溝墓西群の構造と開析谷・列状土坑群・中期後半～後期の古墳群との関係

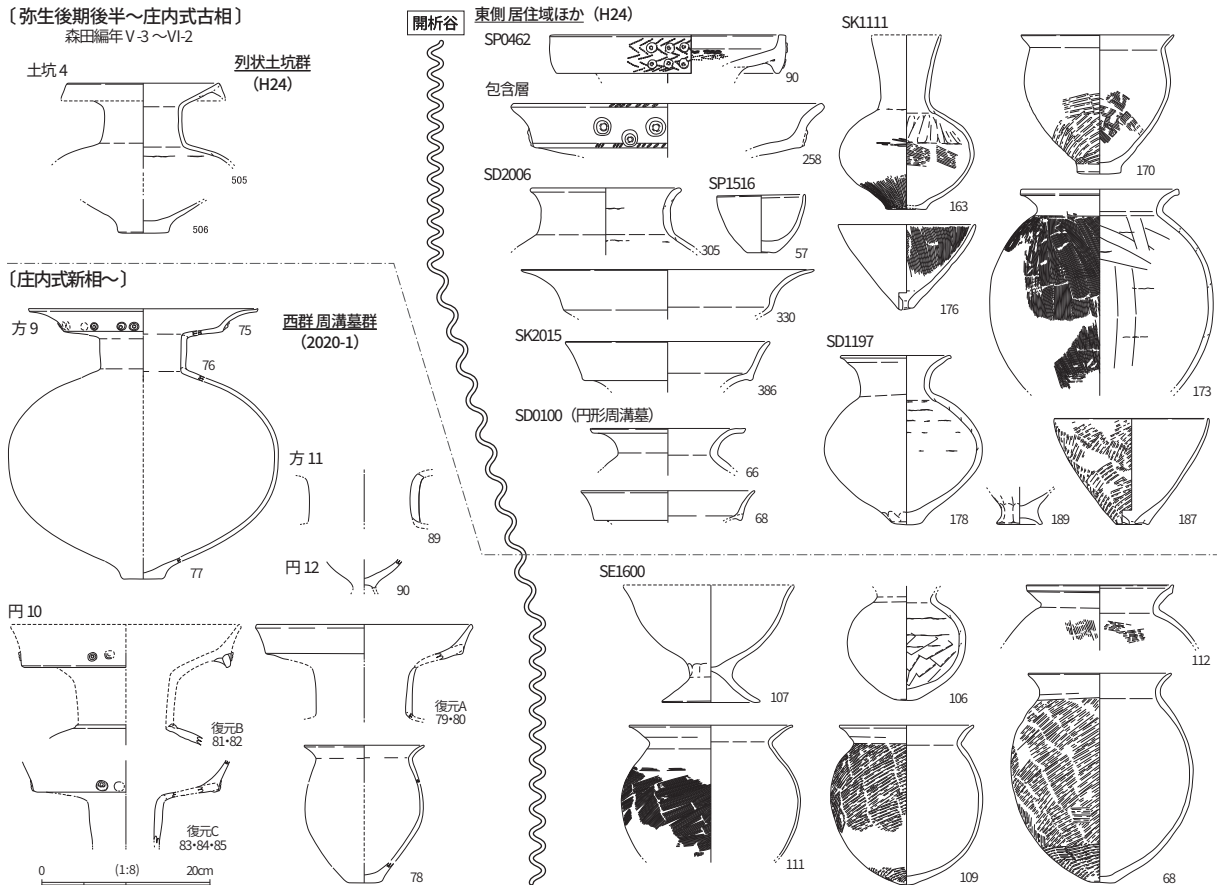


図 76. 周溝墓西群と東側居住域および列状土坑群の出土土器の比較

た点から、弥生時代後期後半～庄内式古段階（森田編年 V -3～VI-2）の範疇におさまると判断でき、資料の大半は周溝墓西群よりも先行する（図 76）。ただし、東側居住域には、尖底化が進む V 様式甕の外面ハケ調整の布留式傾向甕などを含む SE1600 など庄内式新段階以降に下る遺構も一部含まれるため、周溝墓西群と同時期の居住域が周未調査地に存在する可能性がある。

また、近接する東奈良遺跡においても、1978 年調査区（H-3 地区）の大溝遺構から庄内式期を中心とする土師器が大量に出土している。²⁵⁾ 弥生時代後期後半～布留式古段階までの時期幅があるが、庄内式期前半とみられる東奈良Ⅲ（期）には加飾性の強い二重口縁壺が多く含まれており、こうした資料よりも周溝墓西群の資料は後出すると推定される（図 76）。

築造順序と墳形 少量の出土土師器から周溝墓群の築造順を判断することが難しいため、周溝墓どうしの相互関係から変遷を検討する必要がある。これについては、方形 9 の周溝南側の埋土の堆積状況から円形 10 や方形 11・円形 12 の周辺の平坦地の造成がなされたと判断できるため、方形 9 よりも後に円形 10・方形 11・円形 12 が築造されたと推定できる。一方、円形 10 に近接する古墳 3 や古墳 4、最も南西に位置する方形 13 との関係は明確ではないが、方形 9 と円形 10 では墳形が異なるほか、斜面の上方・下方という立地面のちがいもみられる。こうした墳形や立地面のちがいを時期差の反映とみなしてよいのならば、やや不確かではあるが、斜面上方から下位にむかって、方形 9・方形 13 →（方形 11・円形 12）→ 円形 10 → 古墳 3・4 という築造順が推定できる。²⁶⁾

なお、墳形ごとに周溝の深さや形状にちがいがある。方形 9 では、周溝の一部が途切れているが、全体的に幅狭で北西側を中心に深さがあるのに対し、円形 10 や古墳 3・4 の周溝は全体的に幅広で浅く、

周溝外側の立ち上がりが極めて緩やかとなっている。方形9については、斜面勾配が急な北西側が最も周溝が深いため、立地による影響を考慮する必要があるが、円形1の周溝の外側には築造時に広い平坦地が造成されており、周溝の掘削を含む墳丘周囲の造成方法に根本的な差があると推察される。特に円形周溝墓では、周囲の造成土を墳丘盛土にあてたと考えられるため、墳形のちがいは単なる形のちがいに留まるものではなく、円形周溝墓は盛土主体の「墳丘墓」、方形周溝墓は周囲に溝を巡らす「区画墓」といった、墓の構築方法に起因する本質的なちがいを読み取ることが可能である（図77）。この点については、重要な問題を提起するため、他の事例も含めたより詳細な比較検討が必要となろう。

造営母体 周溝墓西群は、上述したように、東側居住域や列状土坑の廃絶後に営まれたと考えられる。そのため、造営母体をどこに求めるのが課題となるが、この点については調査地の南東1kmに位置する東奈良遺跡との関係がやはり鍵を握る。調査地の開析谷が東奈良遺跡の中心部付近に流下するなど、両遺跡は水利上の繋がりも有しているが、東奈良遺跡で弥生時代後期後半～庄内式期にみられる大溝遺構の多くは位置関係からみてこの谷に接続するとみなしてよく、周溝墓西群が開析谷に隣接する斜面地に立地する点は極めて重要である（図78）。第1節でも述べたように、弥生時代後期後半における中条小学校遺跡の居住域の出現と東奈良遺跡の居住構造の変化が連動することや、両遺跡における列状土坑群の連なりなどから、ふたつの遺跡は密接に関わることに疑いはない²⁷⁾。以上を総合すれば、東奈良遺跡の居住集団の一部が、集落縁辺の上位面にあたる水源地に墓域を設定したと理解するのが、現状ではもっとも整合的な理解といえるだろう。

2. 摂津東部の円形周溝墓と中条小学校遺跡の評価

円形周溝墓は、これまでの悉皆的な集成と総括的な検討から、東部瀬戸内で弥生時代前期にかけて出現したのち、中期には播磨を中心に分布することが知られている²⁸⁾。一方、近畿中央部は、弥生時代を通じて方形周溝墓が卓越する地域であり、円形周溝墓は後期以降に出現するが、大阪湾岸では分布に差があり、南部の大和川流域よりも北部の六甲山南麓から淀川北岸地域にかけて多く分布する傾向がある²⁹⁾。摂津東部では、今回の検出事例のほかにも、郡家川西遺跡、総持寺遺跡、郡遺跡、深見遺跡、中条小学

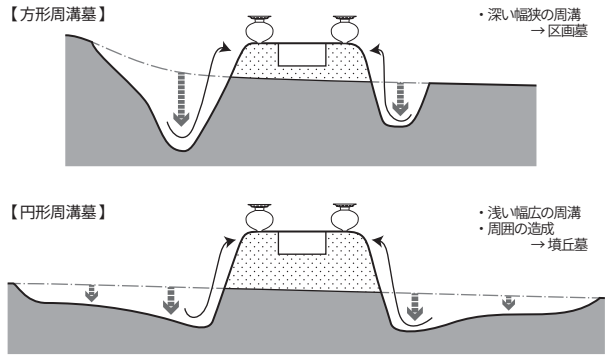


図77. 方形周溝墓と円形周溝墓の構造のちがいを

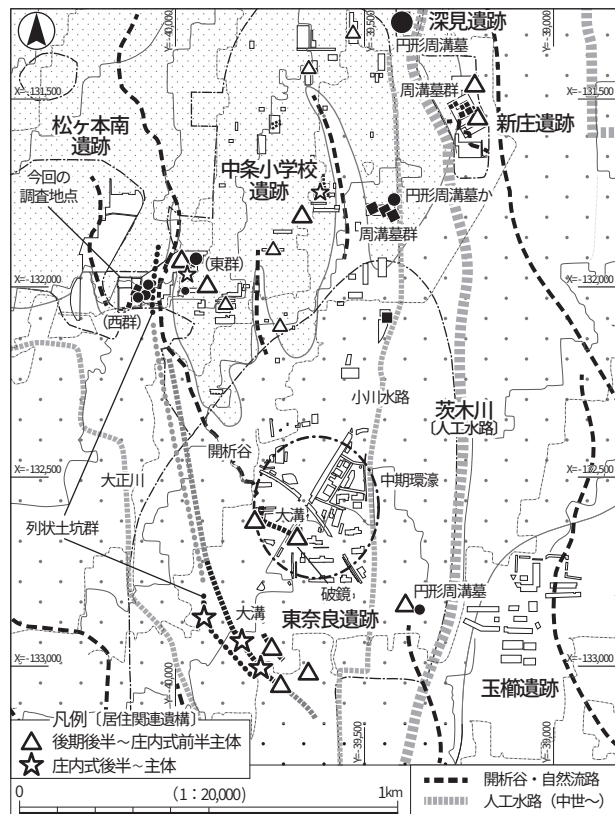


図78. 弥生時代後期後半～庄内式期の
中条小学校遺跡の構造と周辺環境

表9. 摂津東部における円形周溝墓を伴う事例一覧

遺跡名	所在	地形面	時期	基数			土器 周溝墓 規模	出土土器							特記事項	出典	
				計	円	方		二重口 緑壺	広口 壺	ほか 壺	甕	高杯	小型 鉢	有孔 鉢			その他
1 郡家川西	高槻市 群家新町	A 扇状地面	庄内式 新段階~	(1) +	1		9.3 m	◎								二重口緑壺x2 (在地x1、生駒x1) 近隣に弥生後期後半頃の方形周溝墓	三好裕太郎 2022 『川西古墳群の開始 とその特徴』『高槻市文化財年報令和 2年度』高槻市
2 総持寺	茨木市 三島丘	B 低位 段丘上	弥生後期後半 (VI・0・1)	4	2	2	1号: 90 m 4号: 55 m	△		○				△		多器種構成、在地土器主体 (V様式系壺主体、二重口緑壺・ほか壺) 土器棺に焼成後穿孔 (搬入土器あり)	奥和之編 2007 『総持寺遺跡』 大阪府教委
3 郡	茨木市 畑田町	C1 扇状地面 上位	(庄内式新~)	(1) +	1		20 m	▲	-	-	-	-	-	▲		供献土器あり 土器棺 (二重口緑壺+大型鉢など) x3 ※うち1基、小型仿製壺・管玉、 ガラス小玉を副葬	▲濱野俊一 2000 『郡遺跡』『平成 11 年度発掘調査概報』茨木市教委
4 深見	茨木市 駅前	C1 扇状地面 上位	-	1	1		10 m	-	-	-	-	-	-	-		土器あり、部分的・少量か	△未報告 (R03.3 現説資料)
5 中条小学校 (東群)	茨木市 岩倉町	C1 扇状地面 上位	弥生後期後半 (VI・0・1)	(3) +	(2)	(1) +	(H22: 20 m) (H9: 5 m)	△	○	○	○					円形: SD0100・1313・0380/H9 (西端) 方形: SD0555 多器種構成 ※いずれも周溝墓か断定できない	木村健男編 2015 『中条小学校遺跡発 掘調査報告書 (本文編)』茨木市教委 △ H9 年 (市史七巻)
6 中条小学校 (西群)	茨木市 岩倉町	C1 扇状地面 上位	庄内式 新段階~	7	4	3	3号: 12 m 4号: 11 m 10号: 11.5 m 12号: 2.6 m	◎	△	△				△		二重口緑壺主体 他器種少量 (生駒大型複合口緑壺体部)	木村健男編 2015 『中条小学校遺跡発 掘調査報告書 (本文編)』茨木市教委 本報告書
7 東奈良	茨木市 東奈良	C2 低地	弥生後期後半 (VI・0・1)	1	1		11.5 m			○		△	△			V様式系壺 (周辺から小型鉢・有孔鉢) 溝幅 0.8 m (細い)	大阪府教委 1976 『東奈良遺跡発掘調 査概報』

【凡例】 行の網掛け = 庄内式新以降の事例 / 所在: A 女瀬川流域、B 安威川東岸、C 茨木川西岸 / 土器棺: ○中心主体に採用あり、▲周辺埋葬
出土土器: ◎主体となる器種、○出土あり、△ごく少量あり、▲土器棺に伴う器種、- 有無の詳細不明 / 出典の△=正報告未刊

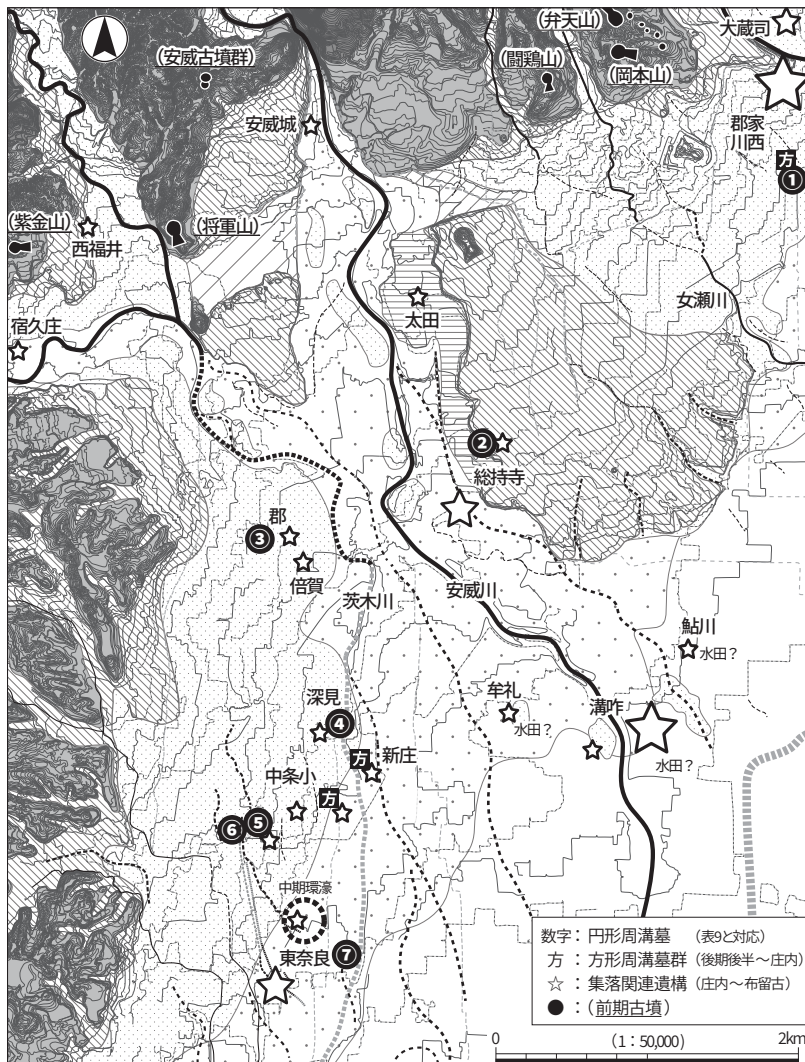


図 79. 摂津東部の円形周溝墓と集落・前期古墳の分布

校遺跡、東奈良遺跡で円形周溝墓が確認されており、淀川北岸の集中地域でもあることから、この地域の円形周溝墓の様相を整理した上で、円形周溝墓の位置づけを探りたい (表9・図79)。

まず、地域内での分布を確認すると、安威川・茨木川の流域に偏在するといった特徴があり、ほかでは女瀬川扇状地帯の郡家川西遺跡の1基に限られる。立地については、段丘上や扇状地上位面など上位面での検出事例が大半で、低地部の事例は東奈良遺跡に限られることから、茨木川西側の千里丘陵東縁の扇状地上位面に分布の中心があることがわかる。また、郡遺跡・倍賀遺跡と東奈良遺跡では、これまでに弥生時代前期~中期の方形周溝墓がそれぞれ100基以上確認されているが、円形周溝墓は中期以前の方形周溝墓に比べるといずれも高所部に位置し

ており、立地に大きな特色があることがわかる。

円形周溝墓の築造時期については、いずれも弥生時代後期後半～庄内式期の範疇におさまる。ただし、遺跡ごとに供献土器の器種組成に差があり、後期後半の総持寺遺跡や東奈良遺跡では甕や壺、有孔鉢など複数器種が伴うのに対し、庄内式期の郡遺跡や中条小学校遺跡では二重口縁壺に限定されるなど、後期後半と庄内式期以降で様相が異なる。この点については、庄内式期前半～布留式古段階まで継続する河内の久宝寺墳墓群での供献土器の組成の変遷³⁰⁾とも概ね一致しており、時期的な特徴をよく示している。

居住域との関係については、上述したように、中条小学校遺跡の事例は近接する東奈良遺跡との関係が推定できるほか、総持寺遺跡では南西500mの低地面で同時期の居住域が確認されている。また、郡遺跡や深見遺跡では、母体となる居住域は確定していないものの、近隣には弥生時代後期後半～布留式期古段階の遺構・遺物の検出地点があることから、居住域が近在することが予想される。こうした点から、居住域のおおよそ1km内外に円形周溝墓を含む当該期の墓域が営まれたと認識でき、総持寺遺跡、郡遺跡、中条小学校遺跡での事例から、居住域よりも上位面に墓域が存在するパターンが一般的と想定される。

なお、近畿中央部における円形周溝墓は、上述したように、時期ごとの分布の推移から、播磨など東部瀬戸内地域から弥生時代後期に伝わったと考えられている。総持寺遺跡と郡遺跡の円形周溝墓には、主体部や周辺埋葬に土器棺が伴う³¹⁾が、土器棺の検出事例は摂津では弥生時代後期以降に増加する傾向がみられるのに対し、河内では大きく減少する³²⁾。さらに遠隔地では、播磨、特に揖保川流域において庄内式期以降の事例が多くみられるため³³⁾、東部瀬戸内地域との接点を見出すこともできる。円形周溝墓を含めた西方地域との繋がりについては、集落などの遺構・遺物など総合的な知見から、その妥当性を検証していく必要がある³⁴⁾。

以上、今回の調査で確認された事例も含め、摂津東部の円形周溝墓の様相をごく簡単に整理した。立地や時期などに一定の地域的な傾向が見出せるほか、円形周溝墓を取り巻くいくつかの要素から東部瀬戸内からの伝播という理解も成り立つ見込みも十分にある。さらに供献土器の組成や配置は、河内をはじめとする近畿中央部全体の時期的な動向と概ね連動していると認識できるため、円形周溝墓が集中する安威川流域・茨木川流域の墳墓の実態を端的に示す良好な調査事例として、今回の中条小学校遺跡の円形周溝墓の調査成果を位置づけることができる。

なお、摂津東部では、庄内式期～古墳時代前期は河川流域ごとに集落と古墳がうまく対応するが³⁵⁾、安威川・茨木川流域では後続する古墳時代前期前葉の墓の検出事例がなく、今のところ紫金山古墳や將軍山古墳といった大型前方後円墳や安威古墳群など前期中葉の築造を待たねばならない。一定の空白期を挟むことに加え、墓の立地と構造も大きく変化することから、低地部の円形周溝墓群と丘陵上の有力古墳が地域の中でどのように接続するのかが、今後の検証すべき課題といえる³⁶⁾。

第4節 調査成果のまとめ

ここまで、調査地の通時的な土地利用の変遷を整理したのち、今回の調査成果の要点ともいえる石器群と円形周溝墓に関わる評価についてまとめてきた。まとまって出土したサヌカイトの石器類に関しては、石鏃をはじめとする小型の打製石器の製作痕跡と認識できたが、具体例が少ない近畿地方における弥生時代の石器製作システムを復元するための良好な調査事例となる。さらに、近在する東奈良遺跡の拡大型と重なるため、大規模集落の外縁での人間活動の実態を復元する上でも貴重な情報となる。

また、茨木市域は、大阪府下で円形周溝墓が最も集中する地域であるが、周溝墓の詳細な構造や出土遺物の実態が把握できる事例はあまり多くはなく、今回は方形周溝墓とセットで検出された良好な調査事例といえる。古墳出現期における墓制変化を具体的に考えるための手がかりとなるが、周辺事例との比較からこの地域の円形周溝墓は弥生時代後期後半～庄内式期に限定でき、居住域の外縁に営まれたと理解できる。今後は、この地域の墓制が後続する紫金山古墳や將軍山古墳といった大型前方後円墳へとどのように接続するのかを、集落との関係をふまえながら解明していく必要がある。

また、今回の調査で検出された遺構・遺物の量は決して多くはないが、広域的な面積の調査によって、茨木市中心部における環境変化、土地利用の推移、開発の展開などを復元するための有用なデータを得ることができた。弥生時代後期以降の遺構・遺物は、時期ごとの土地利用のあり方を端的に示すものであり、特に奈良時代の遺構は高燥地である扇状地上位面に開発の手がおよんでいたことを具体的に示す成果として重要である。広域的な面積の調査により、南東低地部に所在する東奈良遺跡とのコントラストも明確になりつつあることから、今後は立地が異なる周辺遺跡との相互関係を追及しながら地域史の復元を進める必要がある。調査事例の蓄積が厚く、弥生時代～古代の考古学的なデータも豊富な地域でもあることから、地域史のみならず、環境変化と土地利用の相関関係や、近畿中央部における社会変化の具体像を復元するためのデータとして、今回の調査成果がひろく活用されることが望まれる。

【注】

- 1) 江浦洋「轍と開発—新家遺跡「土俵敷き遺構」の再検討—」『大阪文化財研究』第10号(財)大阪府文化財調査研究センター
- 2) 中条小学校遺跡の既往の調査成果については、第2章第2節(P14～17)にてまとめており、詳細および出典も含め、そちらを参照されたい。
- 3) 木村健明 2020「東奈良遺跡の環壕の変遷」『茨木市立文化財資料館館報』第5号 茨木市立文化財資料館
- 4) 古代学研究会編 2016『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
- 5) 近年の年輪酸素同位体比の分析による長周期の降水量変動のデータによれば、弥生時代中期から後期にかけて安定した乾燥期から降水量が増加する湿潤期へと転じたのち、古墳時代を通じて湿潤期が継続することが判明している(中塚2020)。淀川流域では、弥生時代後期から古墳時代にかけて低地部から高所部へと集落が移動する現象がみられ、これが上述の気候変動とうまく対応するという理解が示されているが(若林2020)、中条小学校遺跡(上位面)への居住域の進出や東奈良遺跡における集落構造の変化とも極めて整合的なため、関連について注目すべきであろう。
中塚武 2020「先史・古代における気候変動の概観」『気候変動から読みなおす日本史3 先史・古代の気候と社会変化』臨川書店
若林邦彦 2020「気候変動と古代国家形成・拡大期の地域社会構造の変化の相関—降水量変動と遺跡動態から—」同上
- 6) 安威川の河畔に位置する溝作遺跡では、大規模な居住域が継続するため、この時期は主要河川沿いでの活動が主体であったと考えるのが穏当である。ただし東奈良遺跡においても、石釧やTK73型式の初期須恵器器台の出土などが確認されているため、有力集団によるなんらかの活動が継続したと考えることもできる。
- 7) 木村理 2021「三島地域における埴輪生産の変遷」『弁天山D4号墳整理成果報告書—埴輪・須恵器編—』高槻市
廣瀬寛 2022「新池埴輪窯の展開と三島の古墳秩序」『淀川流域の古墳時代—太田茶臼山古墳と今城塚古墳をめぐって—』季刊考古学・別冊39 雄山閣
- 8) 清水邦彦 2014『茨木に眠る資料—免山篤コレクションを中心に—』茨木市立文化財資料館
- 9) 菱田哲郎 2017「東奈良遺跡出土の埴」『茨木市立文化財資料館館報』第2号 茨木市立文化財資料館
なお、菱田は、東奈良遺跡出土と阿武山古墳・初田1号墳の埴の共通性から、東奈良遺跡の周辺に藤原鎌足の三島別業が存在した可能性を指摘する。
- 10) 溝作遺跡：合田幸美・伊藤武ほか 2000a『溝作遺跡(その1・2)』(財)大阪府文化財センター調査報告書第49集、合田幸美・伊藤武ほか 2000b『溝作遺跡(その3・4)』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第50集
総持寺遺跡：笹栗拓編 2017『総持寺遺跡4』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第280集
玉櫛遺跡：阪田育功 2003「玉櫛遺跡周辺における河道の変化と条里水田の開発」『玉櫛遺跡II』(財)大阪府文化財センター調査報告書第95集
- 11) 前掲註10) 阪田 2003

- 12) 園原悠斗 2021 「近畿地域における弥生時代打製石鏃の研究」『日本考古学』52号 日本考古学協会
- 13) 園原悠斗 2020 「弥生時代における低地集落と高地性集落—石鏃からみた小地域様相—」『考古学研究』66巻第4号 考古学研究会
- 14) 稲田孝司 2002 「剥片」『日本考古学事典』三省堂
- 15) 長井謙治 2003 「直接打撃と押圧打撃—石器製作における微細剥片の解釈—」『立命館大学考古学論集』III-1 立命館大学考古学論集刊行会
- 16) 前掲註3) 木村 2020
- 17) 上峯篤史 2015 「石器製作の構造と弥生大形集落の実像」『同志社大学考古学シリーズXI 森浩一先生に学ぶ』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 18) 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価—大阪平野弥生時代中期遺跡群を中心に—」『日本考古学』第12号 日本考古学協会
- 19) 弥生時代以来の在来系の製作技術による、いわゆる「A系統」の土器群と認識できる。
田中元浩 2005 「近畿地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号 日本考古学協会
長友朋子・田中元浩 2007 「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年—播磨編—』大手前大学史学研究所
- 20) ひとつの墓からの複数の二重口緑壺の出土する事例では、ホケノ山古墳に代表されるように、庄内式期—布留式古段階古相では異なる文様構成や口縁部形態のもので構成されるパターンが多いと考えられる。
岡林孝作・水野敏典編 2008 『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所
- 21) 野々口陽子 1996 「いわゆる畿内系二重口緑壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
杉本厚典 2013 「二重口緑壺の編年と分布」『大阪文化財研究所研究紀要』
山本亮 2022 「近畿地方中央部における二重口緑壺の系列と変遷」『考古学雑誌』日本考古学会
- 22) 後述するように、東側居住域の土器群は、周溝墓西群に先行する弥生時代後期後半—庄内式期古段階を主体とするが、ここではより加飾性の強い広口壺や二重口緑壺が一定数出土している。そのため、本遺跡出土の加飾壺にかんしては加飾の度合いから時期差を見出すことも可能であろう。
- 23) 山本亮 2015 「大型複合口緑壺の系譜と古墳出土の意義」『元稲荷古墳の研究』向日丘陵古墳群調査研究報告第2冊 (公財)向日市埋蔵文化財センター
- 24) 田中元浩 2013 「古墳出現期における墳墓土器祭祀の成立と波及」『立命館大学考古学論集VI』立命館大学考古学論集刊行会
- 25) 山口衣代 1979 「土師器」『東奈良 発掘調査概報I』東奈良遺跡調査会
- 26) 後述するように、弥生時代後期後半—庄内式期の墳墓は、時期ごとに供献土器の器種組成に差があると考えられるため、二重口緑壺主体の円形10よりも台付壺を伴う円形12の方が時期的に先行する、とみることも可能である。
- 27) そのほかに中条小学校遺跡の東側居住域では、土錘が一定量出土している点が注目できる。近隣の漁労活動が推定できることから、低地部に基盤を有すると考えることができる。
- 28) 岸本一宏 2001 「弥生時代の低地円丘墓について」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
岸本一宏 2009 「周溝墓を中心とした播磨地域の様相」『弥生墓からみた播磨』第9回播磨考古学研究会の記録
- 29) 福永伸哉 2008 「大阪平野における3世紀の首長墓と地域関係」『待兼山論叢』42号 大阪大学文学研究科
福永伸哉 2022 「ヤマト政権成立期における畿内地域の円丘墓と方丘墓」『纏向学の最前線—桜井市纏向学研究センター設立10周年記念論集—』桜井市纏向学研究センター
- 30) 亀井聡 2005 「墳墓の築造」『久宝寺遺跡発掘調査成果—2001～2004年度のまとめ—』(財)大阪府文化財センター
森屋美佐子・亀井聡編 2007 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VII』(財)大阪府文化財センター調査報告書第156集
- 31) 本遺跡周辺では、東奈良遺跡や溝作遺跡など集落内でも土器棺の検出事例が目立つ。
東奈良遺跡：濱野俊一 1991 「東奈良遺跡(90-1) HN G-7C・G・K地区」『茨木市埋蔵文化財発掘調査概要 平成2年度』茨木市教育委員会
溝作遺跡：前掲註10) 合田・伊藤ほか 2000a
- 32) 角南聡一郎 1999 「土器棺葬の変容—摂河泉の弥生時代中期後葉—古墳時代前期の様相—」『溝作遺跡(その1・2)』(財)大阪府文化財センター調査報告書第49集
- 33) 荒木幸治 2009 「統計的にみた播磨の弥生墓」『弥生墓からみた播磨』第9回播磨考古学研究会の記録
- 34) 当該時期は、人・物・情報が広域的に動く時期と認識されており、そうした実態を如実に示す外来系土器の分析も有効である。中条小学校遺跡の東側居住域の資料については、実見した限り、他地域系土器は数点に留まるものの、総持寺遺跡や溝作遺跡、東奈良遺跡では庄内式期前後の外来系土器が豊富に出土しており、具体的な地域間関係を探る手がかりとなろう。
合田幸美 2000 「溝作遺跡出土の外来系土器について」『溝作遺跡(その1・2)』(財)大阪府文化財センター調査報告書第50集 (財)大阪府文化財センター
山田隆一 2003 「淀川流域の古墳時代初頭集落について」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢』同刊行会
- 35) 笹栗拓 2022 「淀川流域と北岸地域の古墳時代集落」『淀川流域の古墳時代—太田茶白山古墳と今城塚古墳をめぐって—』季刊考古学・別冊39 雄山閣
- 36) 東の檜尾川流域や芥川流域では、庄内式期新相—古墳時代前期前葉にかけて安満宮山古墳や弁天山古墳群など丘陵上に墓域が移動する。安威川流域・茨木川流域では、低地部での造墓活動が続くのか、それとも東方地域と同様に古墳時代前期前葉に丘陵上に墓域が移動するのか、あるいは墳墓そのものが不在であるのか、明らかにする必要がある。

出土遺物一覧

土器類一覧（瓦含む）

No.	図No.	写真	遺物	器種	部位	時期	調査区	地区割	遺構名 (検出面/層位)	口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1	3		須恵器	杯H蓋	受部	古墳後期TK10	試掘		(1r) 池の下			(1.8)	内:10YR6/2 灰黄褐 外:N6/灰 断:10YR7/4 にぶい黄橙	密	軟	破片	
2	3		須恵器	杯B	底部	奈良 平城III	試掘		(1r)		9.4	(2.3)	内:N7/灰白 外:N7/灰白 断:N7/灰白	やや密	硬	底;1/12	
3	25	16	黒色土器A	椀	全形	平安 10c 後半	1区	20-1h	掘立1/40P (下面)	14.0	7.2	(5.7)	内:25Y2/1 黒 外:10YR8/3 浅黄橙 断:10YR8/3 浅黄橙	密	やや軟	口;3/12	高台のみ剥離
4	25		黒色土器A	椀	口縁	平安 10c 後半	1区	20-1h	掘立1/40P (下面)			(4.8)	内:25Y2/1 黒 外:10YR7/2 にぶい黄橙 断:10YR7/2 にぶい黄橙	密	やや軟	口;1/12 以下	
5	25		黒色土器A	椀	口縁	平安 10c 後半	1区	20-1i	掘立1/41P (下面)			(2.2)	内:25Y2/1 黒 外:10YR7/1 灰白 断:10YR7/1 灰白	密	普通	口;1/12 以下	
6	25	16	黒色土器A	椀	底部	平安 10c 後半	1区	20-1i	掘立1/43P (下面)		6.4	(1.1)	内:5Y2/1 黒 外:10YR7/2 にぶい黄橙 断:10YR7/2 にぶい黄橙	密	やや硬	底;3/12	
7	25	16	黒色土器B	椀	口縁	平安 10c 後半	1区	20-1i	掘立1/41P (下面)	14.0		(3.7)	内:5Y2/1 黒 外:5Y2/1 黒 断:5Y2/1 黒	密	普通	口;2/12	
8	25		黒色土器B	椀	口縁	平安 10c 後半	1区	20-1i	掘立1/37P (下面)			(1.6)	内:25Y2/1 黒 外:25Y2/1 黒 断:25Y2/1 黒	密	やや軟	口;1/12 以下	
9	25		土師器	皿	口縁	平安 10c 後半	1区	20-1i	掘立1/38P (下面/埴土上層)			(1.6)	内:10YR6/2 灰黄褐 外:10YR6/2 灰黄褐 断:5YR7/3 にぶい橙	密	普通	口;1/12 以下	
10	25		須恵器	壺	体部	平安 10c 後半	1区	20-1i	掘立1/40P (下面)			(7.2)	内:N6/灰 外:5Y6/1 灰 断:N6/灰	やや密	やや硬	破片	外面併行タタキ 内面同心円あて具痕
11	25	16	須恵器	壺	体部	平安 10c 後半	1区	20-1i	掘立1/41P (下面)			(7.4)	内:N7/灰白 外:N7/灰白 断:N7/灰白	密	硬	破片	回転ナデ凹凸顕著
12	25	16	黒色土器A	椀	口縁	平安 10c 後半	1区	20-1i	掘立1周辺/62P (下面)	14.0		(3.5)	内:7.5YR3/1 黒褐 外:10YR7/2 にぶい黄橙 断:2.5YR5/4 にぶい赤褐	密	硬	口;2/12	
13	26	16	土師器	ての字皿	口縁	平安 10c 後半	1区	20-1i	掘立2/64P (下面)	15.0		(1.9)	内:10YR7/2 にぶい黄橙 外:10YR7/2 にぶい黄橙 断:10YR7/2 にぶい黄橙	密	普通	口;2/12	
14	26	16	黒色土器A	椀	全形	平安 10c 後半	1区	20-1i	掘立2/64P (下面)	14.0	7.2	5.1	内:10YR2/1 黒 外:10YR7/2 にぶい黄橙 断:10YR7/2 にぶい黄橙	やや密	やや硬	口;2/12 底;12/12	
15	26		須恵器	壺	体部	平安	1区	20-2i	掘立2/68P (下面)			(6.0)	内:5Y7/1 灰白 外:5Y7/1 灰白 断:5Y7/1 灰白	やや粗	やや軟	破片	外面併行タタキ 内面同心円あて具痕 3区包含層 No.65 と類似、同一か
16	27	16	黒色土器A	椀	口縁	平安 10c 後半	1区	20-1h	柱列1/58P (下面)		4.6	(1.1)	内:10YR2/1 黒 外:7.5YR7/4 にぶい橙 断:7.5YR7/4 にぶい橙	やや密	やや軟	底;11/12	
17	28		土師器	ての字皿	口縁	平安 10c 後半	1区	10-10h	90 土坑 (下面)	13.0		(1.7)	内:2.5Y8/3 浅黄 外:2.5Y8/3 浅黄 断:2.5Y8/3 浅黄	密	軟	口;2/12	
18	30	16	須恵器	杯B	底部	奈良 平城III	3区	20-3j	146 溝・149 土坑 (下面直上)		12.2	(2.6)	内:10Y7/1 灰白 外:10Y7/1 灰白 断:10Y7/1 灰白	やや密	やや硬	底;3/12	
19	30	16	瓦器	椀	全形	中世 14c	3区	20-5j	(畦畔周辺) 2d~3層)	12.5	3.6	3.4	内:N2/黒 外:N2/黒 断:N7/灰白	密	やや軟	口;2/12	高台小さい
20	30		須恵器	壺	頸部	奈良か	3区	20-5j	138 落込み (上面)			(4.1)	内:N7/灰白 外:N7/灰白 断:N7/灰白	普通	やや硬	破片	
21	30		土師器	羽釜	口縁	中世 13c~14c 前	3区	20-5j	(3層) (下面直上)			(4.6)	内:2.5Y4/1 黄灰 外:2.5Y4/1 黄灰 断:2.5Y7/4 浅黄	粗	硬	口;1/12 以下	橋本編年II b 期頃
22	31		須恵器	杯H身	受部	古墳後期	2区	2A-5e	(東西溝群上面) (機械掘削)			(1.6)	内:N4/灰 外:N4/灰 断:N4/灰	密	硬	破片	
23	31		須恵器	臚	頸部	古墳後期 MT15 前後	2区	2A-5e	(東西溝群上面) (機械掘削)			(1.9)	内:5PB6/1 青灰 外:5PB6/1 青灰 断:5R4/1 暗赤灰	やや密	硬	破片	
24	31		軟質土器	鉢か	体部	古墳中期 か	2区	2A-5e	(東西溝群上面) (2d~3層)			(2.4)	内:5Y4/1 灰 外:2.5Y2/1 黒 断:10YR6/2 灰黄褐	やや粗	やや軟	破片	外面タタキ
25	31		須恵器	杯B	底部	奈良 平城III	2区	2A-5d	(東西溝群上面) (機械掘削)		10.4	(1.9)	内:N7/灰白 外:N7/灰白 断:N7/灰白	やや密	やや硬	底;1/12	
26	31	16	須恵器	杯B	底部	奈良 平城III	2区	2A-5e	(東西溝群上面) (2d~3層)			(1.2)	内:10Y7/1 灰白 外:10Y7/1 灰白 断:10Y7/1 灰白	やや粗	軟	底;1/12 以下	
27	31		須恵器	杯B	底部	平安初頭 (長岡京期)	2区	2A-5d	(東西溝群上面) (機械掘削)			(3.2)	内:5PB6/1 青灰 外:5PB7/1 明青灰 断:5PB5/1 紫灰	密	硬	底;1/12 以下	
28	31	16	須恵器	壺	底部	奈良	2区	2A-5e・5f	(東西溝群上面) (機械掘削)			(1.8)	内:N6/灰 外:N6/灰 断:N6/灰	やや密	硬	底;1/12 以下	
29	31		須恵器	杯	口縁	平安前 10c	2区	2A-5e	(東西溝群上面) (2d~3層)			(2.8)	内:N7/灰白 外:N6/灰 断:N7/灰白	やや粗	普通	口;1/12 以下	
30	31		須恵器	壺	口縁	奈良~ 平安前	2区	2A-5e	(東西溝群上面) (2d~3層)			(3.3)	内:7.5Y5/2 灰オリーブ 外:7.5Y5/2 灰オリーブ 断:5P7/1 明紫灰	やや密	硬	口;1/12 以下	自然釉・降灰 東海産か
31	31		須恵器	杯	底部	平安前 10c	2区	2A-5e	(東西溝群上面) (2d~3層)			(1.6)	内:N6/灰 外:N6/灰 断:5R3/1 暗赤灰	やや粗	やや硬	破片	
32	31		土師器	羽釜	口縁	平安前 10~11c	2区	2A-5e	(東西溝群上面) (機械掘削)			(4.9)	内:10YR7/1 灰白 外:2.5Y8/1 灰白 断:2.5Y8/1 灰白	やや粗	やや軟	口;1/12 以下	和泉C型羽釜
33	31	16	須恵器	盤or鉢	底部	平安前 10c	2区	2A-4e	(東西溝群上面) (機械掘削)		11.0	(2.9)	内:N7/灰白 外:N7/灰白 断:N7/灰白	やや粗	やや軟	底;2/12	

【凡例】 写真C6・C9:カラー図版6・9 / 器高()あり=残存高 / 残存率;口縁・底部など●/12で表記
胎土=5段階表記:「密」・「やや密」・「普通」・「やや粗」・「粗」 / 焼成=5段階表記:「硬」・「やや硬」・「普通」・「やや軟」・「軟」

No.	図 No.	写 真	遺物	器種	部位	時期	調査 区	地区割	遺構名 (検出面/層位)	口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	残存率	備考
34	31	16	平瓦			奈良	2区	2A-4e	耕作土(新) (東西溝群上面)				内:5Y8/1 灰白 外:5Y8/1 灰白 断:5Y8/1 灰白	やや粗	軟		凹面布目痕 凸面タタキ
35	34		須恵器	短頸壺	肩部	奈良	1区	10-10j 20-1j・2j	(機械掘削)			(4.4)	内:N5/ 灰 外:N5/ 灰 断:5Y6/1 赤灰	密	硬	破片	
36	34		須恵器	壺	底部	奈良	1区	10-10j 20-1j・2j	(機械掘削)	12.0	(3.0)		内:5P85/1 青灰 外:5P85/1 青灰 断:5Y6/1 赤灰	やや密	硬	底;1/12	
37	34		土師器	土釜	鐔	平安か	1区	20-2j	(下面直上)			(2.8)	内:75YR6/4 にふい橙 外:75YR6/4 にふい橙 断:75YR6/4 にふい橙	やや粗	普通	破片	
38	34		土師器	高杯	脚部	古墳中期	2区	2A-5b	(西端北半) (2d~3層)			(4.4)	内:75YR7/4 にふい橙 外:75YR7/4 にふい橙 断:75YR7/4 にふい橙	やや粗	やや硬	破片	辻編年3~4段階 TK208~23頃
39	34		須恵器	杯H身	受部	古墳後期	2区	2A-5b	(西端北半) (2d~3層)			(1.7)	内:N6/ 灰 外:N5/ 灰 断:N6/ 灰	やや粗	やや硬	破片	
40	34	16	須恵器	杯H蓋	口縁	飛鳥 飛鳥I新	2区	2A-5c・5d	(西端北半) (2d~3層)	10.2	(2.3)		内:N5/ 灰 外:N5/ 灰 断:N5/ 灰	密	硬	口;1/12	
41	34		須恵器	杯B	口縁	奈良~ 平安初 平城V・VI	2区	2A-5b	(西端北半) (2d~3層)	15.4	(4.8)		内:N8/ 灰白 外:N4/ 灰 断:N8/ 灰	密	軟	口;1/12	
42	34		須恵器	杯B	底部	奈良~ 平安初 平城V・VI	2区	2A-5b	(西端北半) (2d~3層)		9.5	(1.2)	内:N7/ 灰白 外:N7/ 灰白 断:N7/ 灰白	密	硬	底;2/12	
43	34		須恵器	杯B	底部	奈良 平城III	2区	2A-4c	(西端北半) (2d~3層)			(1.5)	内:N6/ 灰 外:N6/ 灰 断:N6/ 灰	やや密	普通	底;1/12 以下	
44	34		須恵器	杯B	底部	奈良 平城II・III	2区	2A-4c	(西端北半) (3層)	11.8	(1.5)		内:N7/ 灰白 外:N7/ 灰白 断:N7/ 灰白	密	硬	底;2/12	
45	34		須恵器	短頸壺	肩部	奈良	2区	2A-5a	(西端北半) (2d~3層)			(2.0)	内:N7/ 灰白 外:N7/ 灰白 断:N7/ 灰白	密	硬	体;2/12	
46	34		須恵器	壺L	体部	奈良 平城V	2区	2A-5b	(西端北半) (2d~3層)			(4.2)	内:N7/ 灰白 外:N7/ 灰白 断:N7/ 灰白	やや密	硬	破片	
47	34	16	須恵器	壺Q	口縁	奈良 平城II・III	2区	2A-5c	(西端北半) (2d~3層)	19.4	(2.4)		内:N7/ 灰白 外:N5/ 灰 断:N7/ 灰白	やや密	硬	口;1/12	類似少ない器種 exp.長屋王部(平城II)など
48	34		須恵器	壺Q	頸部	奈良 平城II・III	2区	2A-3c	(西端北半) (3層)			(6.0)	内:N6/ 灰 外:N6/ 灰 断:N6/ 灰	やや密	硬	破片	類似少ない器種 exp.長屋王部(平城II)など
49	34		土師器	皿	口縁	平安前 9c後	2区	2A-5b	(西端北半) (2d~3層)	13.0	(2.4)		内:75YR7/2 明燐灰 外:75YR7/2 明燐灰 断:75YR7/2 明燐灰	やや粗	普通	口;2/12	榎本編年I a-3・4期
50	34		灰釉陶器	長頸壺	頸部	平安前 9c	2区	2A-5c	(西端北半) (2d~3層)			(5.0)	内:25Y7/1 灰白 外:25Y7/1 灰白 断:25Y7/1 灰白	密	硬	破片	東海系
51	34		須恵器	杯H	受部	古墳後期 TK43	3区	20-4h	(2d~3層)			(1.7)	内:5P87/1 明燐灰 外:5P87/1 明燐灰 断:5P87/1 明燐灰	やや密	やや硬	破片	
52	34		須恵器	高杯	脚部	古墳後期 TK43	3区	20-4h	136 土坑 (上面)			(7.1)	内:5P87/1 明燐灰 外:5P87/1 明燐灰 断:5P87/1 明燐灰	密	硬	破片	長脚2段3方スカシ
53	34		須恵器	長頸壺	頸部	~奈良前	3区	20-4h	(下面直上精査)			(3.0)	内:N7/ 灰白 外:N7/ 灰白 断:N7/ 灰白	やや密	やや硬	破片	
54	34	16	須恵器	壺N	肩部	奈良~ 平安初 平城V・VI	3区	20-4j	(2d~3層)			(3.9)	内:N7/ 灰白 外:N7/ 灰白 断:N7/ 灰白	やや密	硬	破片	
55	34		須恵器	大甕	肩部	古代	3区	20-4j	(下面直上)			(2.6)	内:N6/ 灰 外:25Y7/1 明オリブ灰 断:N6/ 灰	やや密	硬	破片	56と同一個体か
56	34		須恵器	大甕	肩部	古代	3区	20-4i	(2d~3層)			(2.6)	内:N5/ 灰 外:N4/ 灰 断:N5/ 灰	やや密	硬	破片	55と同一個体か
57	34	16	須恵器	甕 or 鍋	把手 付	奈良か	3区	20-4h	(2d~3層)			(5.2)	内:N7/ 灰白 外:N7/ 灰白 断:N7/ 灰白	やや粗	硬	破片	
58	34		土師器	杯		平安 9c後半	3区	20-4i	(下面直上)	12.6	(3.4)		内:10YR7/2 にふい黄橙 外:10YR7/2 にふい黄橙 断:75YR7/3 にふい橙	やや密	やや硬	口;2/12	類似少ない器種
59	34		土師器	皿		平安 9c後半	3区	20-5j	(2d~3層)			(2.5)	内:10YR7/2 にふい黄橙 外:10YR7/2 にふい黄橙 断:25Y7/1 灰白	密	やや硬	口;1/12 以下	
60	34		土師器	椀	底部	平安か	3区	20-3h	(2d~3層)	5.3	(0.8)		内:10YR7/2 にふい黄橙 外:10YR7/2 にふい黄橙 断:5Y6/4 にふい橙	やや粗	やや軟	底;3/12	白色胎土 東部瀬戸内系か
61	34	16	土師器	椀	底部	平安か	3区	20-5h・6h	(2d~3層)	7.6	(1.8)		内:25Y8/2 灰白 外:25Y8/2 灰白 断:25Y8/2 灰白	やや粗	硬	底;3/12	
62	34		黒色土器 B	椀	底部	平安 10c後半	3区	20-2j	(2d~3層)			(1.0)	内:10YR2/1 黒 外:10YR2/1 黒 断:10YR2/1 黒	やや密	普通	底;1/12 以下	
63	34		須恵器	杯	底部	平安前 10c	3区	20-5j	(機械掘削)	7.5	(1.6)		内:5P7/1 明燐灰 外:5P7/1 明燐灰 断:5P7/1 明燐灰	やや粗	やや硬	底;3/12	
63	34		須恵器	甕	体部	平安か	3区	20-2j	(下面直上)			(12.5)	内:5Y7/1 灰白 外:5Y7/1 灰白 断:5Y7/1 灰白	やや密	軟	破片	掘立2・No.15と類似、同一か
65	34	16	白磁	椀	底部	中世 13c	3区	20-3h	(上面耕作溝群)	7.0	(1.7)		釉:75Y7/1 灰白 素:75Y8/1 灰白	密	硬	底;3/12	
66	34		須恵器 (東播系)	鉢	口縁	中世 13c	3区	20-4h	(2d~3層)			(2.7)	内:N7/ 灰白 外:N5/ 灰 断:N7/ 灰白	やや密	硬	口;1/12 以下	
67	34		土師器	羽釜	口縁	中世 13c~14c前	3区	20-5h	(上層) (機械掘削除去面)			(4.2)	内:75YR6/3 にふい橙 外:75YR6/3 にふい橙 断:5Y6/6 橙	やや粗	硬	口;1/12 以下	

出土遺物一覧

No.	図No.	写真	遺物	器種	部位	時期	調査区	地区割	遺構名 (検出面/層位)	口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	残存率	備考
68	39		須恵器	杯H蓋	天井	古墳後期TK43前後	1区		(排土)			(2.5)	内:N6/灰 外:N4/灰 断:N6/灰	密	硬	破片	方形周溝墓9に伴う可能性大
69	39		須恵器	杯H蓋	天井	古墳後期TK43前後	1区	20-ii	方形周溝墓9 26溝(下面)			(2.4)	内:N7/灰白 外:N2/黒 断:N7/灰白	密	硬	破片	
70	39	17	須恵器	杯H蓋	天井	古墳後期TK43前後	1区	20-1j	方形周溝墓9 26溝上~中層(下面)			(2.2)	内:N6/灰 外:N5/灰 断:N6/灰	密	硬	破片	
71	39	17	須恵器	杯H蓋	口縁	古墳後期TK43前後	1区	20-1j	方形周溝墓9 26溝上層(下面)			(2.0)	内:N6/灰 外:N6/灰 断:N6/灰	密	普通	口;1/12 以下	
72	39		須恵器	杯H蓋	受部	古墳後期TK43前後	1区	2A-1a・2a	方形周溝墓9 26溝上層(下面)			(4.7)	内:75Y7/1灰白 外:75Y7/1灰白 断:75Y7/1灰白	やや密	やや硬	底;1/12 以下	
73	39	17	須恵器	杯B	底部	平安初頭(長岡京期)	1区	20-1j	方形周溝墓9 26溝上層(下面)			(3.4)	内:N6/灰 外:N6/灰 断:N6/灰	密	硬	破片	
74	39	17	軟質土器	平底鉢	底部	古墳中期(後半か)	1区	2A-1a・2a	方形周溝墓9 26溝上層(下面)		10.8	(5.9)	内:25Y7/3浅黄 外:10YR6/4にふい黄橙 断:25Y7/3浅黄	やや粗	やや硬	底;4/12	渡来系 石英・長石・チャート exp.溝作跡(5世紀後半)
75	39	C6 17	古式土師器	二重口縁壺	口縁	庄内~布留古	1区	2A-1a・1b	方形周溝墓9 26溝(下面)	24.2		(2.7)	内:10YR8/3浅黄橙 外:10YR8/3浅黄橙 断:10YR6/3にふい黄橙	やや粗	硬	口;1/12 以下	75~77同一個体 頸部直立タイプ 白色胎土・石英・長石多い、赤色粒少量
76	39	C6 17	古式土師器	二重口縁壺	頸部	庄内~布留古	1区	20-1j	方形周溝墓9 26溝上層(下面)			(4.7)	内:10YR8/3浅黄橙 外:10YR8/3浅黄橙 断:10YR6/3にふい黄橙	やや粗	硬	破片	75~77同一個体 頸部直立タイプ 白色胎土・石英・長石多い、赤色粒少量
77	39	C6 17	古式土師器	二重口縁壺	底部	庄内~布留古	1区	2A-1a・1b	方形周溝墓9 26溝(下面)		4.1	(2.3)	内:10YR8/3浅黄橙 外:10YR8/3浅黄橙 断:10YR6/3にふい黄橙	やや粗	硬	底;12/12	75~77同一個体 頸部直立タイプ 白色胎土・石英・長石多い、赤色粒少量
78	43	17	古式土師器	くの字蓋	口縁+底部	庄内~布留古	1区	2A-1c	円形周溝墓10 22溝(下面)	12.6	2.6	(3.8)	内:25Y6/2灰黄 外:10YR6/4にふい黄橙 断:25Y7/2灰黄	粗	硬	口;2/12 底;7/12	V様式系 石英・長石・チャート特 に多い外面マツツ、調整不明
79	43		古式土師器	二重口縁壺	口縁	庄内~布留古	1区	2A-1d 1A-10d	円形周溝墓10 20落込み(下面)			(5.3)	内:25Y7/3浅黄 外:10YR8/3浅黄橙 断:10YR6/4にふい黄橙	普通	硬	破片	79・80同一個体=復元A 無文・頸部直立タイプ 石英・長石・チャート多い
80	43	C6 17	古式土師器	二重口縁壺	頸部	庄内~布留古	1区	1A-10c	円形周溝墓10 21落込み(下面)	22.6		(3.7)	内:10YR6/4にふい黄橙 外:10YR8/3浅黄橙 断:10YR8/3浅黄橙	普通	硬	口;1/12	79・80同一個体=復元A 無文・頸部直立タイプ 石英・長石・チャート多い
81	43	C6 17	古式土師器	二重口縁壺	口縁	庄内~布留古	1区	1A-10c	円形周溝墓10 21落込み(下面)	21.2		(1.6)	内:10YR7/3にふい黄橙 外:10YR7/3にふい黄橙 断:75YR6/6橙	普通	硬	口;1/12	81・82同一個体=復元B 円形浮文・加飾垂下口縁 石英・長石・チャート多い
82	43	C6 17	古式土師器	二重口縁壺	肩部	庄内~布留古	1区	1A-10c	円形周溝墓10 21落込み(下面)			(2.2)	内:10YR7/6明黄褐 外:10YR7/6明黄褐 断:10YR7/6明黄褐	普通	硬	破片	81・82同一個体=復元B 頸部突帯 石英・長石・チャート多い
83	43	C6 17	古式土師器	二重口縁壺	口縁	庄内~布留古	1区	1A-10c	円形周溝墓10 21落込み(下面)			(5.1)	内:10YR8/3浅黄橙 外:10YR8/3浅黄橙 断:75YR6/6橙	普通	硬	破片	83・84・85同一個体=復元C 円形浮文 石英・長石、赤色粒
84	43		古式土師器	二重口縁壺	口縁	庄内~布留古	1区	1A-10d	円形周溝墓10 21落込み(下面)			(2.0)	内:10YR8/2灰白 外:75YR6/6橙 断:10YR6/4にふい黄橙	普通 ~やや粗	硬	破片	83・84・85同一個体=復元C 石英・長石・チャート多い
85	43	C6 17	古式土師器	二重口縁壺	頸部	庄内~布留古	1区	1A-10c	円形周溝墓10 21落込み(下面)			(5.2)	内:10YR8/3浅黄橙 外:10YR8/3浅黄橙 断:75YR6/6橙	普通	硬	破片	83・84・85同一個体=復元C 石英・長石、赤色粒
86	43	C6 17	古式土師器	二重口縁壺	口縁	庄内~布留古	1区	1A-10c	円形周溝墓10 22溝(下面)			(2.8)	内:10YR8/3浅黄橙 外:10YR8/3浅黄橙 断:10YR5/4にふい黄褐	普通	硬	破片	石英・長石・チャート多い
87	43		古式土師器	二重口縁壺	口縁	庄内~布留古	1区	2A-1c	円形周溝墓10 22溝(下面)			(2.4)	内:75YR7/3にふい橙 外:75YR7/3にふい橙 断:10YR8/2灰白	普通	硬	破片	垂下口縁 石英・長石ほか多い
88	43	C6 17	古式土師器	壺か	底部	庄内~布留古	1区	1A-10c	円形周溝墓10 22溝(下面)		3.8	(2.4)	内:10YR6/4にふい黄橙 外:10YR6/4にふい黄橙 断:10Y7/3にふい黄橙	普通	硬	底;12/12	石英・長石ほか多い
89	46	C6 17	古式土師器	二重口縁壺	頸部	庄内~布留古	1区	2A-2b	方形周溝墓11 24溝(下面)			(4.8)	内:10YR8/2灰白 外:10YR8/2灰白 断:10YR8/2灰白	普通	硬	破片	口縁部直立タイプ 石英・長石多い、赤色粒 溝上面(古土埋層)から出土
90	46	17	古式土師器	台付壺か	底部	庄内~布留古	1区	2A-2b	円形周溝墓12 25溝(下面)			(3.0)	内:25Y6/1黄灰 外:10YR5/4にふい黄褐 断:25Y7/3浅黄	やや粗	やや硬	破片	石英・長石やや多い 内外面マツツ、調整不明
91	47	C6 17	古式土師器	大型壺	体部	庄内新~布留古	2区	2A-3e	方形周溝墓13 124溝(下面)			(6.1)	内:75YR5/4にふい橙 外:5YR5/6明赤褐 断:10YR3/2黒褐	普通	硬	破片	肩部か、内面ハケ 大型複合口縁壺体部 角閃石=生駒西麓産
92	47		黒色土器A	椀	底部	平安10c後半	2区	2A-3e	方形周溝墓13 124溝(下面)			(1.1)	内:75YR2/1黒 外:25YR5/6明赤褐 断:25YR5/6明赤褐	やや密	やや硬	底;1/12 以下	混入か 周辺の耕作溝等に伴うか
93	48		弥生土器	広口壺	口縁	弥生後期後V様式後半	2区	2A-5c	(2d~3層)			(1.5)	内:10YR6/2灰黄褐 外:10YR6/2灰黄褐 断:10YR5/6黄褐	やや粗	やや硬	口;1/12 以下	石英・長石多い
94	48		弥生土器	広口壺	口縁	弥生中~後期IV~V	2区	2A-4c	(2d~3層)			(1.2)	内:10YR6/6明黄褐 外:10YR6/6明黄褐 断:25Y5/2暗灰黄	やや粗	やや硬	口;1/12 以下	石英・長石多い 雲母ごく少量、赤色粒
95	48		弥生土器	広口壺	口縁	弥生後期後V様式後半	2区	2A-5e	(2d~3層)			(1.6)	内:10YR5/6黄褐 外:10YR7/3にふい黄橙 断:10YR5/6黄褐	やや粗	硬	口;1/12 以下	石英・長石多い、赤色粒
96	48		弥生土器	広口壺	口縁	弥生後期V様式	3区	20-4j	(2d~3層)			(3.4)	内:10YR7/4にふい黄橙 外:10YR7/4にふい黄橙 断:10YR7/4にふい黄橙	普通	硬	破片	石英・長石多い 雲母ごく少量、赤色粒
97	48		弥生土器	鉢or壺	口縁	弥生中期後IV-1・2	3区	20-5j	138落込み(上面)			(3.2)	内:5YR6/4にふい橙 外:10YR7/2にふい橙 断:10YR5/2灰黄褐	やや粗	やや硬	口;1/12 以下	石英・長石多い 雲母少量
98	48	17	弥生土器	広口壺	口縁	弥生中期前II様式後半	1区	1A-10e	16土坑(上面)	9.8		(4.5)	内:10YR7/1灰白 外:10YR7/2にふい黄橙 断:75YR4/1褐灰	やや密	硬	口;4/12	外面直線文、摺津白色胎土 石英・長石多い

金属器一覧

No.	図No.	写真	種類	時期	調査区	地区割	遺構名 (検出面/層位)	長	幅	厚	重量 (g)
								(cm)			
M1	34		鉄釘	(不明)	3区	20-3i	[上面耕作溝群]	3.9	0.5	0.5	3.80

写真図版



石器集積遺構（139 土坑） 検出作業状況



調査地遠景〔調査区1/北西から〕中央のマンション群の奥が東奈良遺跡

カラー図版 2

調査地遠景



調査地遠景

(上：調査区3/南東から) 奥；北摂山系/手前；千里丘陵
(左：調査区3/北東から) 奥；千里丘陵・吹田方面



調査地遠景（調査区3/南南東から）奥；北摂山系/右；赤白鉄塔付近が茨木市役所



調査地全景
（左上：調査区1/北から、左下：調査区3/南から、右：調査区2/南東から）

カラー図版4

弥生時代後期～古墳時代初頭
周溝墓群



周溝墓群全景〔上：完掘状況／南西から、下：検出状況／南西から〕奥の建物部分が列状土坑群の検出調査区



周溝墓群俯瞰
〔調査区1/ 上が北東〕



円形周溝墓 10 土器出土状況
〔中：南東 21 落込み / 南東から〕
〔下：22 溝北側断面 / 東から〕

カラー図版 6

弥生時代後期～古墳時代初頭
周溝墓群



方形周溝墓 9 (26 溝)
〔北東コーナー断面 / 南西から〕



方形周溝墓 9 (26 溝)
〔南北断面南側 / 東から〕



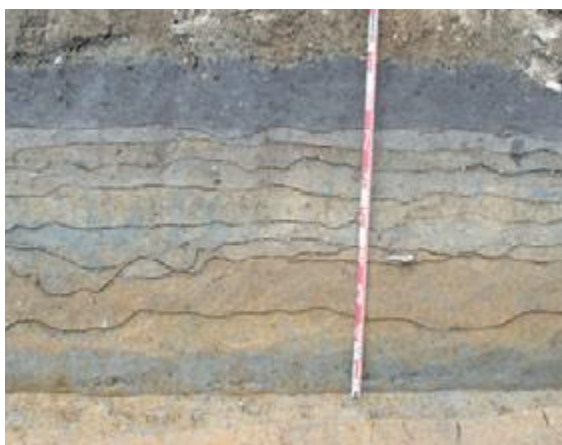
円形周溝墓 10 (22 溝)
〔東西断面西側 / 南西から〕



周溝墓群出土土器



平安時代前期 掘立柱建物群
〔調査区1：南西から〕



基本層序・断面5〔調査区1：東から〕



奈良〜平安時代耕作関連溝群〔調査区2：南西から〕



轍痕（100・101溝）検出状況・断面〔調査区2：南東から〕



古池検出状況・堤防断面〔調査区2：南東から〕

カラー図版 8

縄文時代
〜 弥生時代前期
下層
自然流路



上段：下層流路検出状況

〔左：調査区1/北東から〕

〔右：調査区3/南西から〕

左手前：石器集積遺構 (139 土坑)



下段：下層自然流路1 断面

〔上：断面 31/西から〕

〔下：断面 32/南東から〕

左上；石器集積遺構、流路埋土上層にサヌカイト剥片

上面：平面 B 段階
(南から)



下部：平面 E 段階
(南半 + 断面 / 南から)



埋土内出土石器群



カラー図版 10

調査地
全景俯瞰



調査地全体オルソモザイク〔上が北〕



調査区壁断面

〔上：調査区 3 北壁断面 29 / 南西から〕〔中：調査区 2 北西コーナー断面 24・29 / 南東から、下：調査区 2 西壁断面 19 / 南東から〕

図版 2

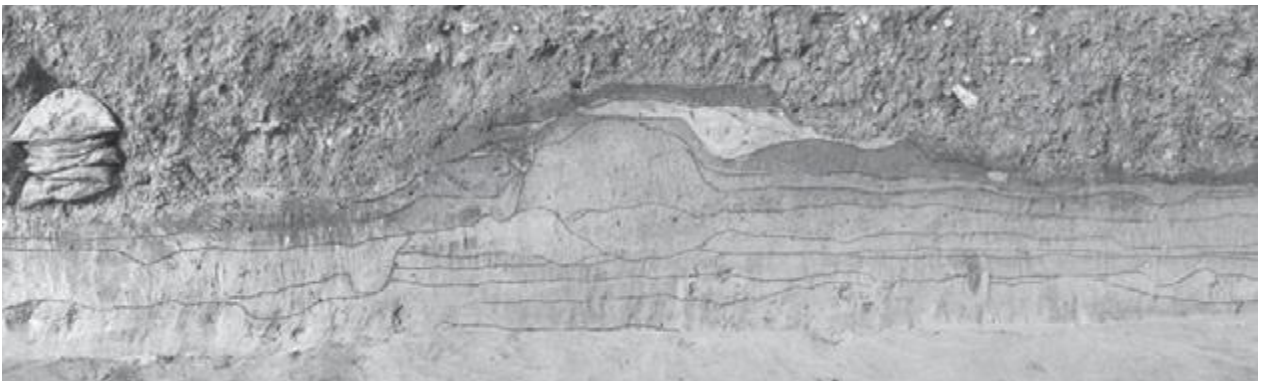
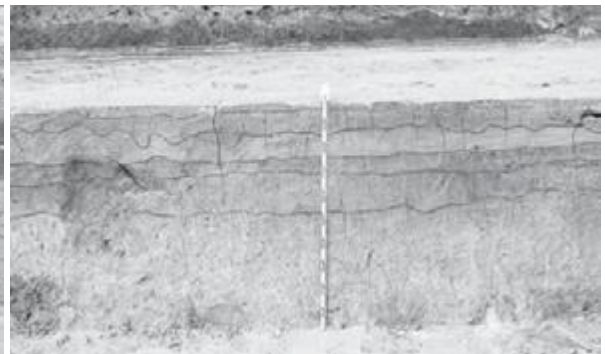
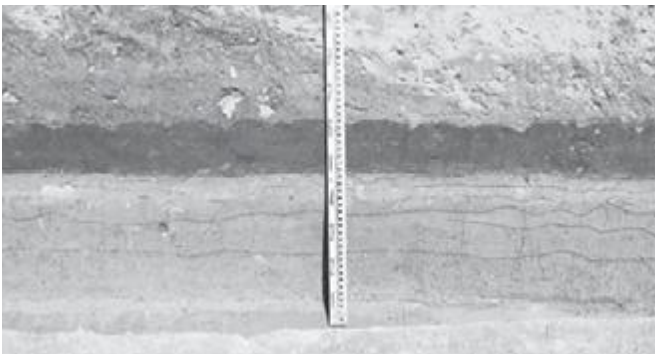
調査区全景
／
基本層序・堆積状況



調査区3全景
〔北から〕



調査区2全景
〔南から〕

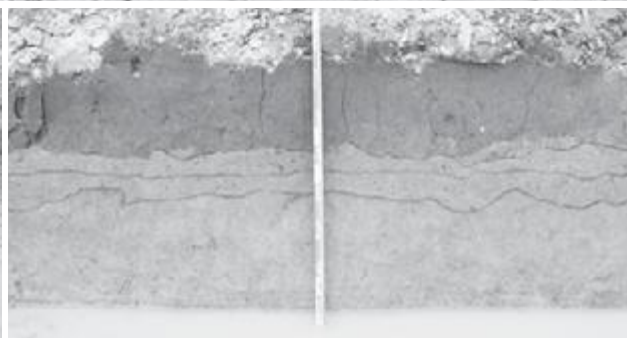
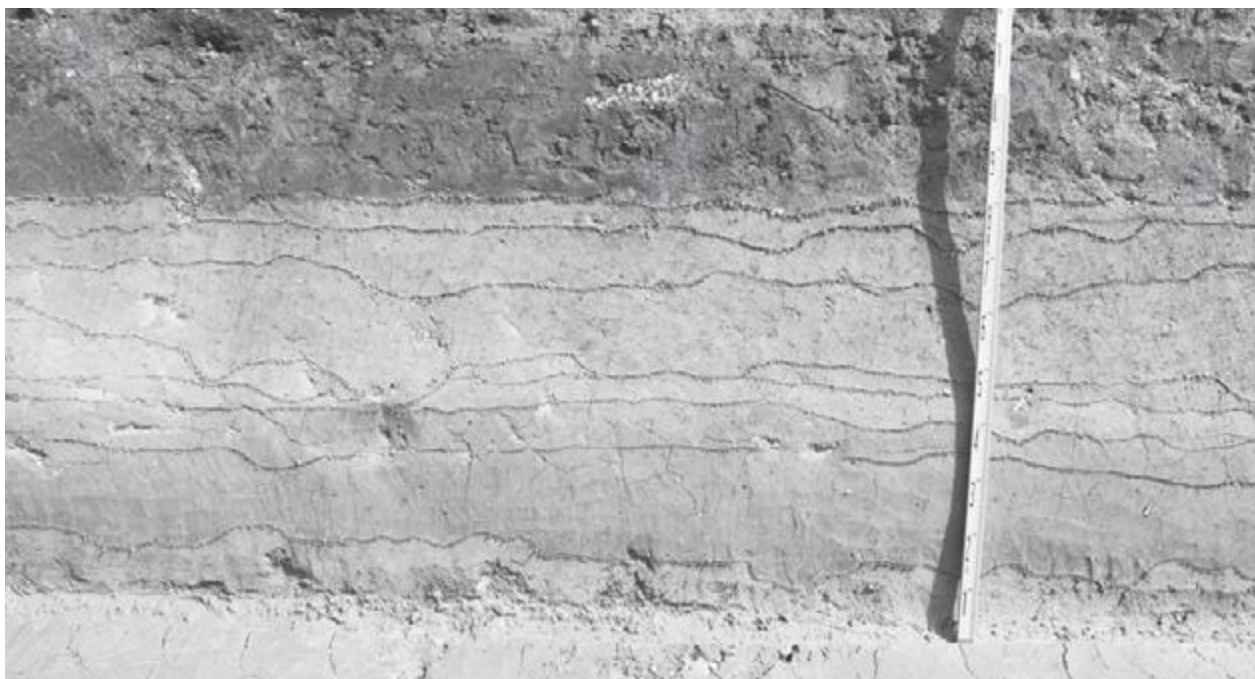


調査区壁断面（西側アップ）

〔左上：調査区3断面 29/ 南から、右上：調査区3断面 24/ 東から、下：調査区2西壁断面 19/ 東から〕



調査区1全景〔上が北〕 左上：建物部分が調査区3/左下：排土部分が調査区2



調査区壁断面（東側アップ）

〔上：調査区1東壁断面3/西から、左下：調査区2西壁断面19/東から、右下：調査区1西壁断面5/東から〕

図版 4

中世後半～近世の土地利用



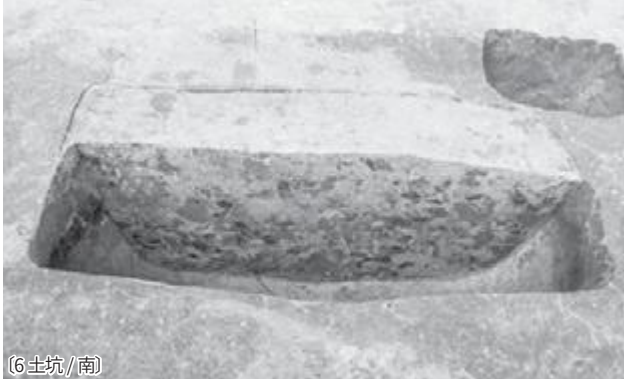
調査地北側 上面耕作溝群 (調査区3/北東から)



(2土坑/南)



(134土坑/南)



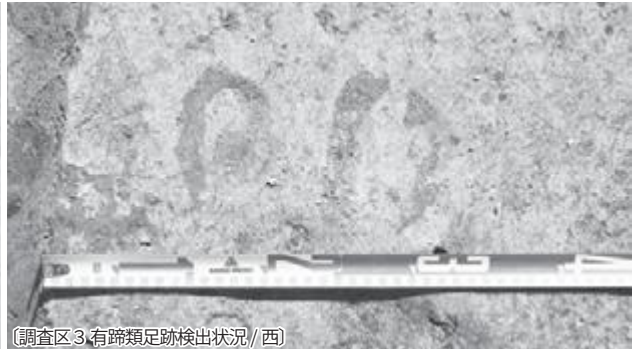
(6土坑/南)



(16土坑/北)



(97土坑/東)



(調査区3有蹄類足跡検出状況/西)

耕作関連土坑断面ほか (写真下: 遺構名 / 撮影方向)



古池検出状況
〔調査区1/北西から〕
奥：残存する古池



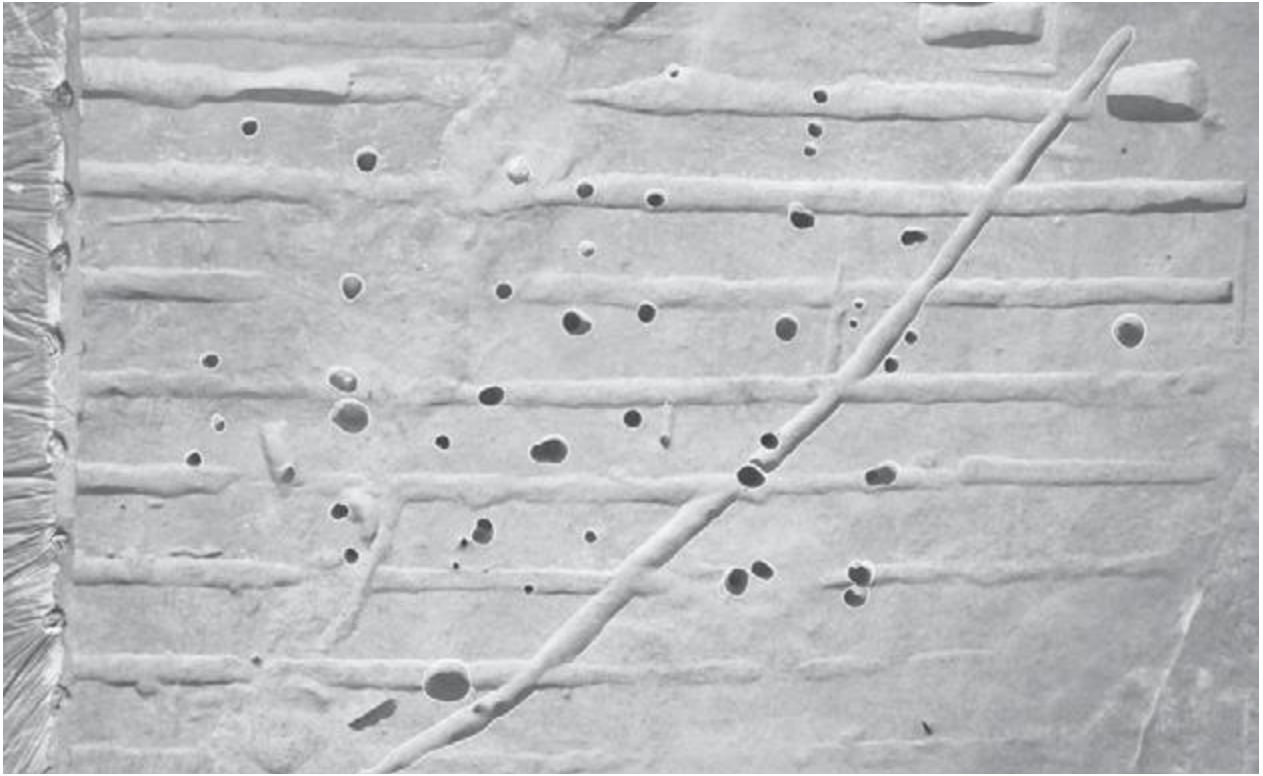
古池肩部検出状況
〔調査区2/南西から〕



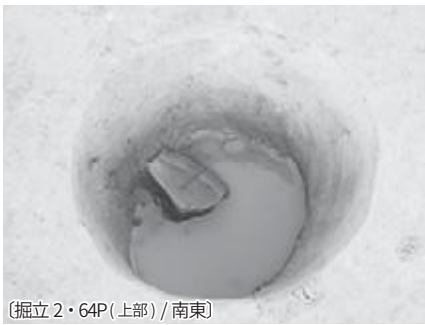
古池堤防断面〔左：調査区2西端/南東から、右：調査区1東端/北西から〕

図版 6

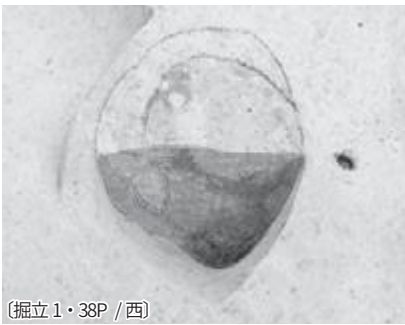
平安時代
掘立柱建物・土坑



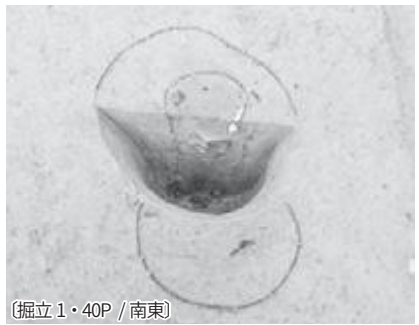
調査地北側 掘立柱建物・柵列 (調査区1/上が北)



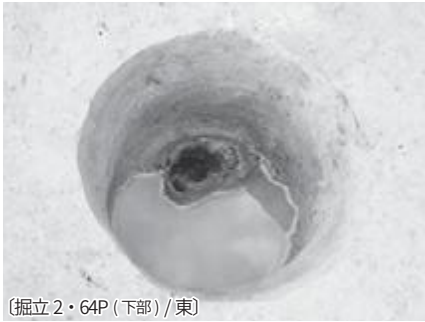
(掘立2・64P(上部)/南東)



(掘立1・38P/西)



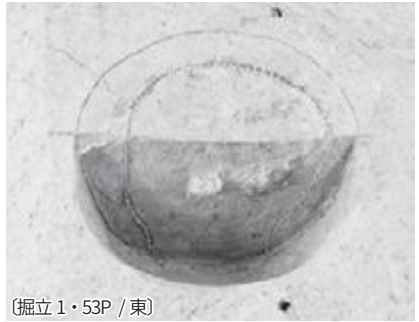
(掘立1・40P/南東)



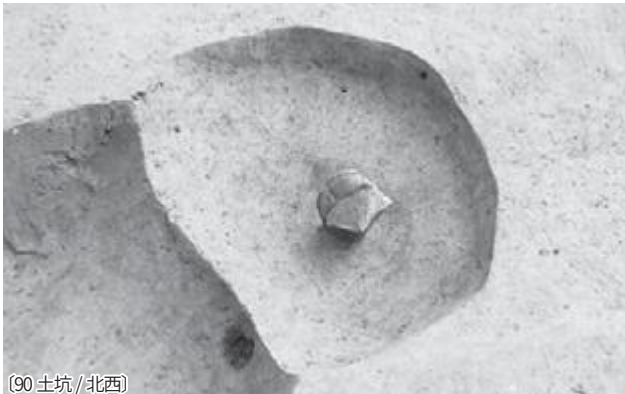
(掘立2・64P(下部)/東)



(掘立2・67P/西)



(掘立1・53P/東)



(90土坑/北西)



(54土坑/南)

柱穴および建物周辺土坑断面・遺物出土状況 (写真下: 遺構名/撮影方向)



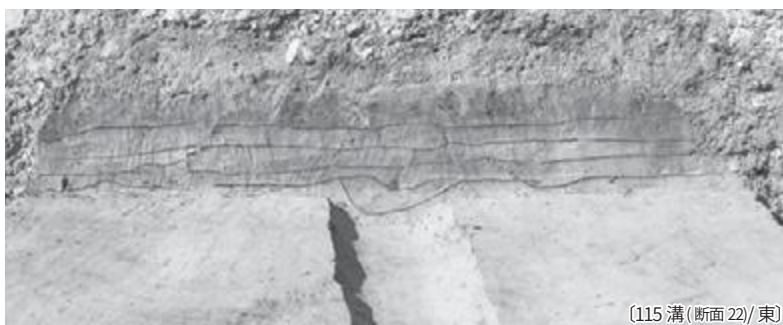
〔116溝/東〕



〔121溝/南〕



〔耕作溝群完掘状況/北西〕



〔115溝(断面22)/東〕

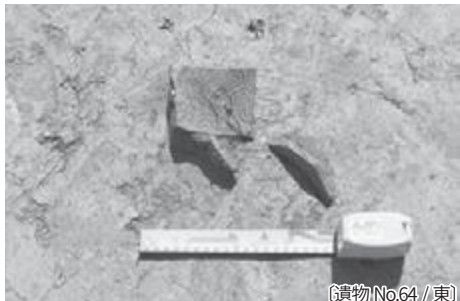


〔106土坑/南〕

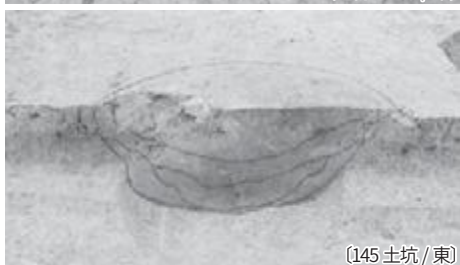
調査区 2 耕作関連溝・土坑 (写真下: 内容・遺構名 / 撮影方向)



〔遺物No.18/北〕



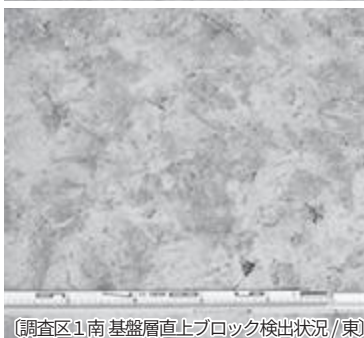
〔遺物No.64/東〕



〔145土坑/東〕



〔146溝検出状況・断面30/北東〕



〔調査区1南 基盤層直上ブロック検出状況/東〕



〔146溝検出状況/東〕

調査区 1・3 耕作関連遺構検出状況・遺物出土状況 (写真下: 内容・遺構名 / 撮影方向)

図版 8

弥生時代後期～古墳時代初頭
周溝墓群
／
轍痕



調査区 1 周溝墓群全景 (南から)



(100・101 溝 / 北西)



(100・101 溝 / 南東)

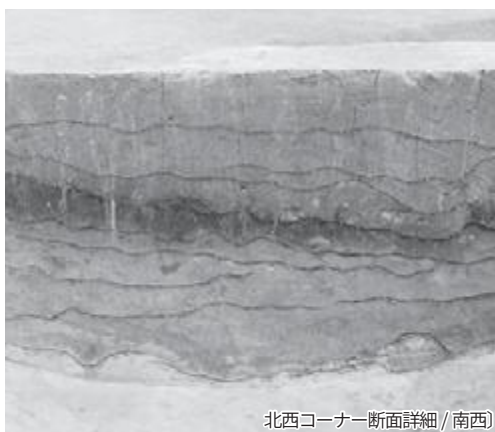


(SD3200 / 南西)

轍痕 検出状況・断面 (写真下: 内容・遺構名 / 撮影方向)



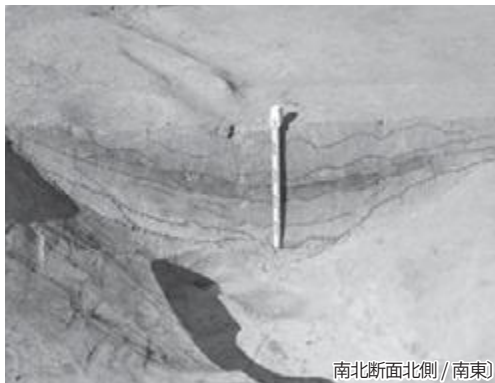
方形周溝墓 9 検出状況 (南西から)



北西コーナー断面詳細 / 南西



東西断面西側 / 南西



南北断面北側 / 南東



東西断面東側 / 南西



上層須恵器遺物 (69) 出土状況 / 北西



南北断面南側 / 東

方形周溝墓 9 断面・遺物出土状況 (写真下: 内容 / 撮影方向)

図版 10

円形周溝墓 10



円形周溝墓 10 検出状況 (南西から)



円形周溝墓 10 検出状況 (南から)



(北西コーナー遺物出土状況 / 東)



(東西断面東側、南東コーナー遺物出土状況 / 南)



(東西断面西側詳細 / 南西)

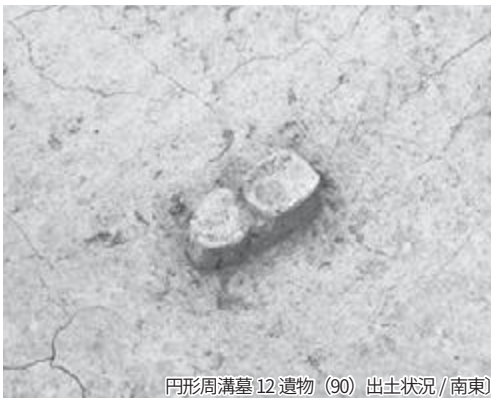


(東西断面東側・調査区1東壁断面3 / 南西)

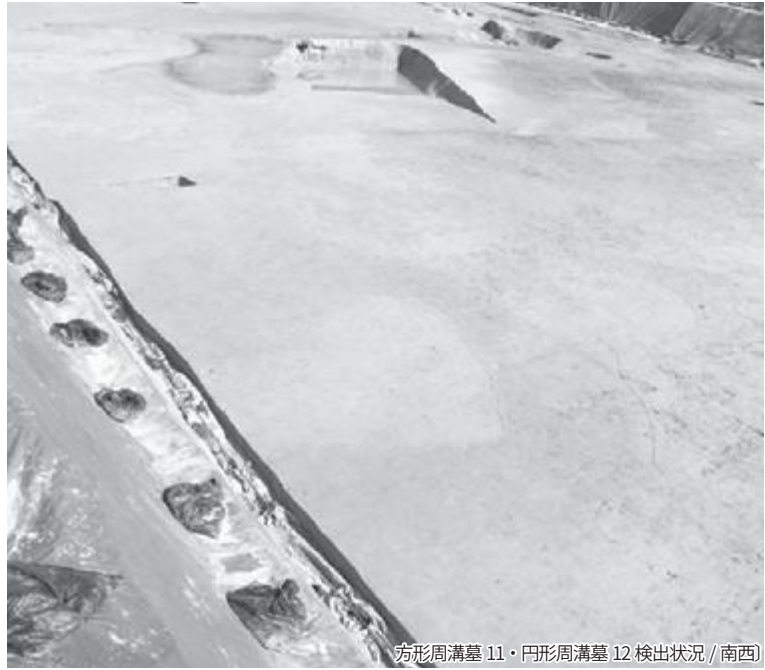
円形周溝墓 10 断面・遺物出土状況 (写真下：内容 / 撮影方向)



円形周溝墓 12 南北断面北側 / 東



円形周溝墓 12 遺物 (90) 出土状況 / 南東



方形周溝墓 11・円形周溝墓 12 検出状況 / 南西



方形周溝墓 11 南北断面南側・調査区 1 西壁断面 5 / 東

調査区 1 方形周溝墓 11・12
検出状況・断面・遺物出土状況
〔写真下：内容 / 撮影方向〕



調査区 2 方形周溝墓ほか
完掘状況 (北西から)
左が方形周溝墓 11・落込み群
右端が方形周溝墓 13



方形周溝墓 11・125 溝
東西断面西側 (南西から)

図版 12

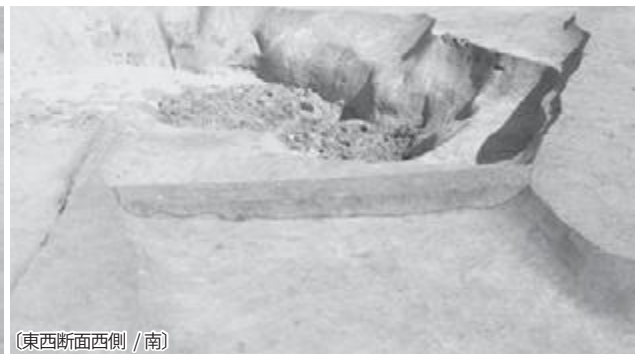
方形周溝墓 13
／
縄文時代、弥生時代前期
下層自然流路



〔検出状況 / 南〕

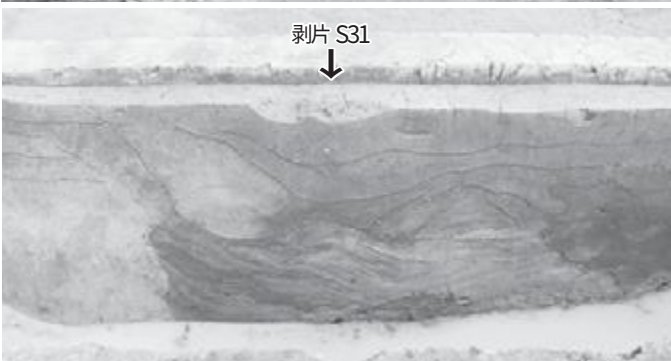


〔南北断面北側 / 東〕

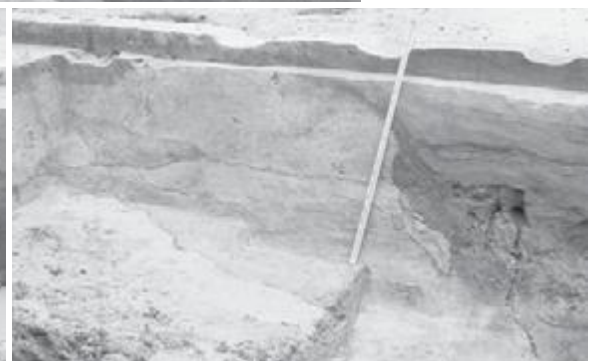


〔東西断面西側 / 南〕

方形周溝墓 13 検出状況・断面〔写真下：内容 / 撮影方向〕



剥片 S31



調査区 3 自然流路 NR01 断面〔上：断面 32/ 南東から、左下：断面 32 東側肩部詳細 / 南から、右下：断面 31/ 南西から〕

調査区1 自然流路
検出状況
〔北から〕 左上：NR02
右下：NR01



調査区3 自然流路1
検出状況
〔北から〕



調査区1 断面 12
自然流路1・2
〔右：NR02、西から〕



自然流路 断面詳細〔左：西端 NR01/ 南西から、右：NR02 東端・下部 NR03/ 西から〕

図版 14

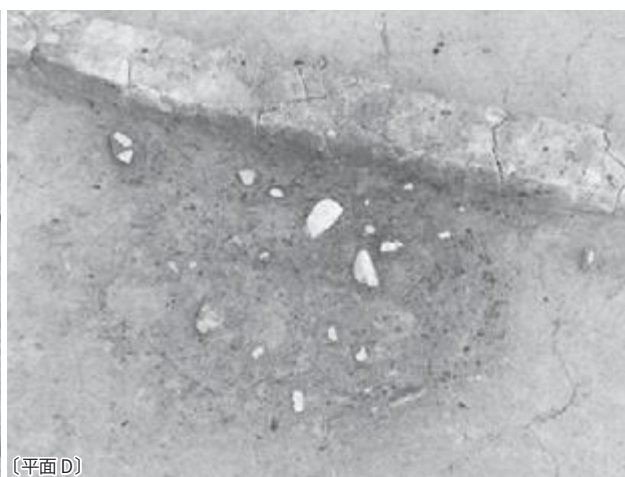
石器集積遺構
(139 土坑)



石器集積遺構 (139 土坑) 検出状況 [平面 A / 南から]



[平面 B]



[平面 D]

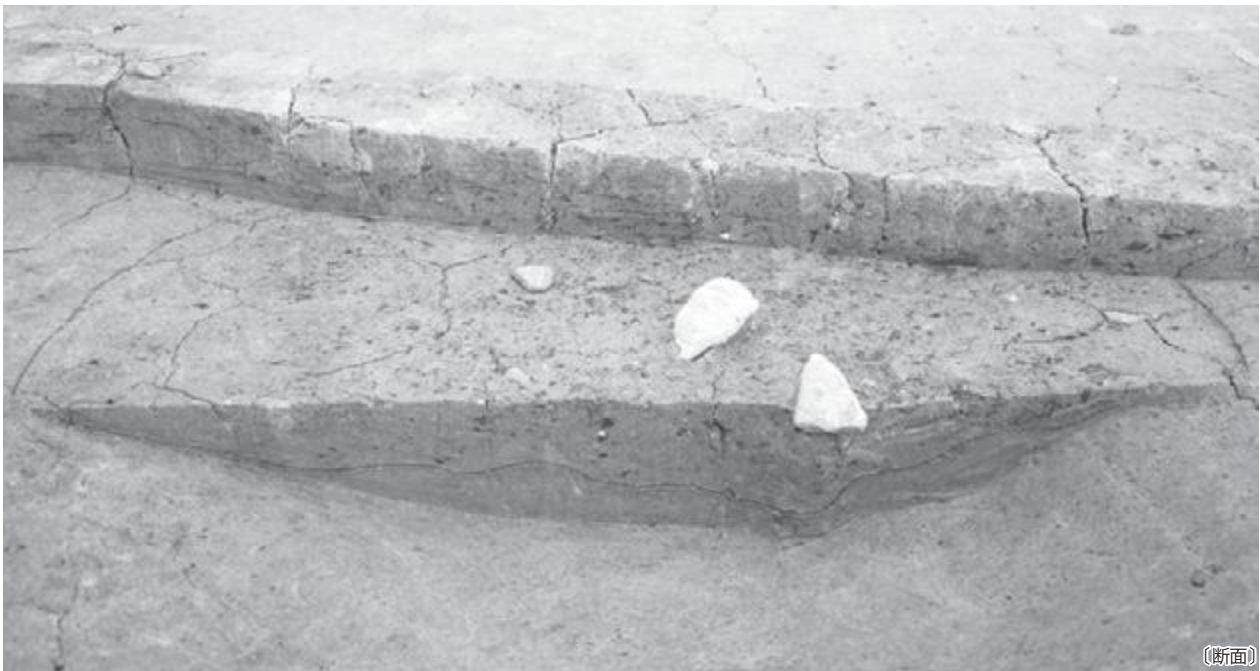


[平面 E : 南半]



[平面 F : 南半]

石器集積遺構 (139 土坑) 石器出土状況 [いずれも南から、写真右下に平面 No. 記載]



〔断面〕



〔平面 C: 北半〕



〔断割り断面〕

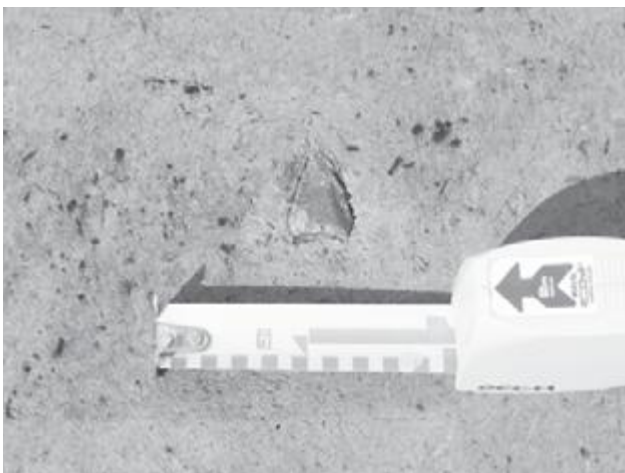


〔平面 D: 北半〕



〔平面 E: 北半〕

石器集積遺構 ((139 土坑) 断面・石器出土状況 (いずれも南から、写真右下に内容・平面 No. 記載)



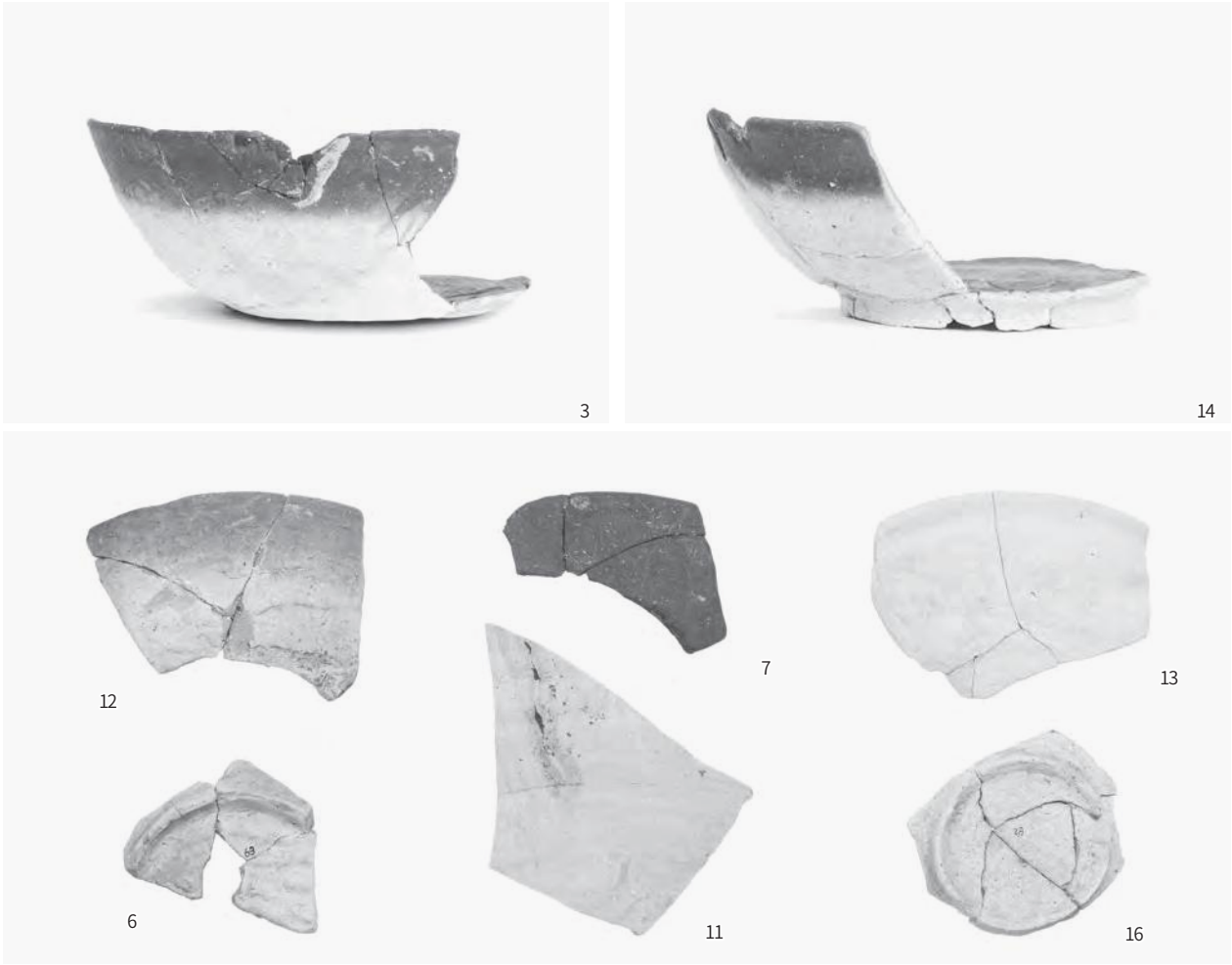
石器集積遺構 (139 土坑) 上面肩部
石鏃未製品 (S37) 出土状況 (東から)



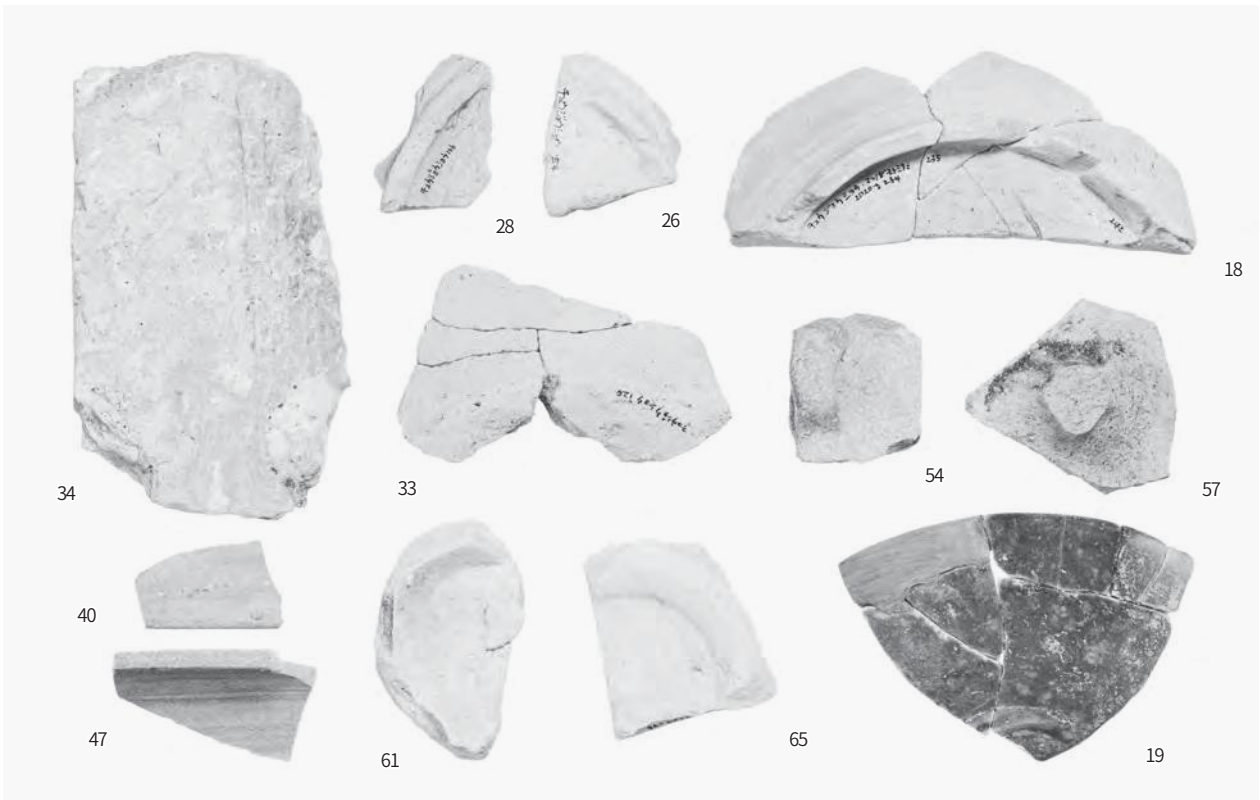
基盤層第 4 層直上 石鏃 (S1) 出土状況 (北から)

図版 16

出土遺物 1 (古代・中世)



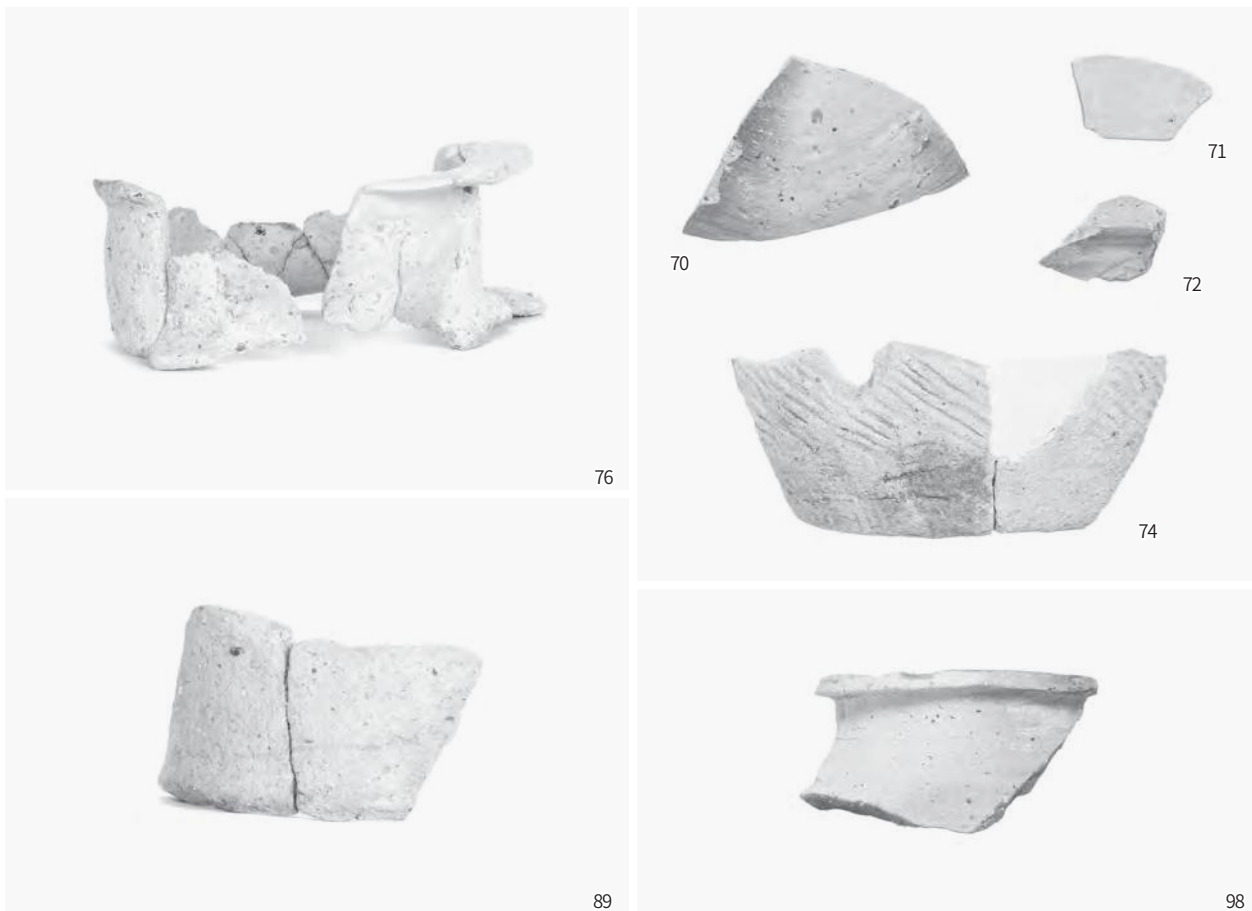
掘立柱建物 1・2、柱列 1 出土遺物 (掘立 1; 3・6・7・11・12 / 掘立 2; 13・14 / 柱列 1; 16)



包含層ほか出土遺物 (調査区 2 南西溝群上面; 26・28・33・34 / 調査区 2 (北西); 40・47 / 調査区 3; 18・19・54・57・65)



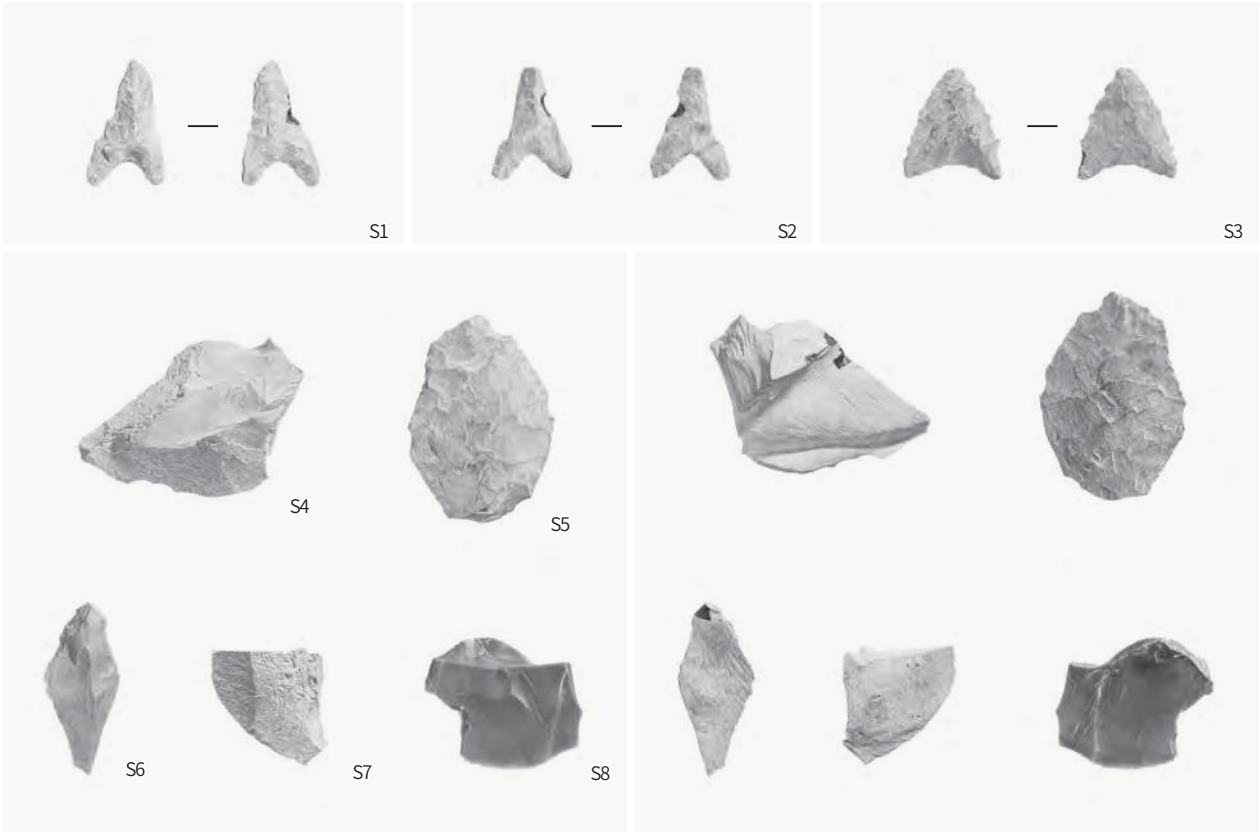
周溝墓群出土遺物〔方形周溝墓 9；75・77/ 円形周溝墓 10；78・80・81・82・85・86・88/ 円形周溝墓 12；90/ 方形周溝墓 13；91〕



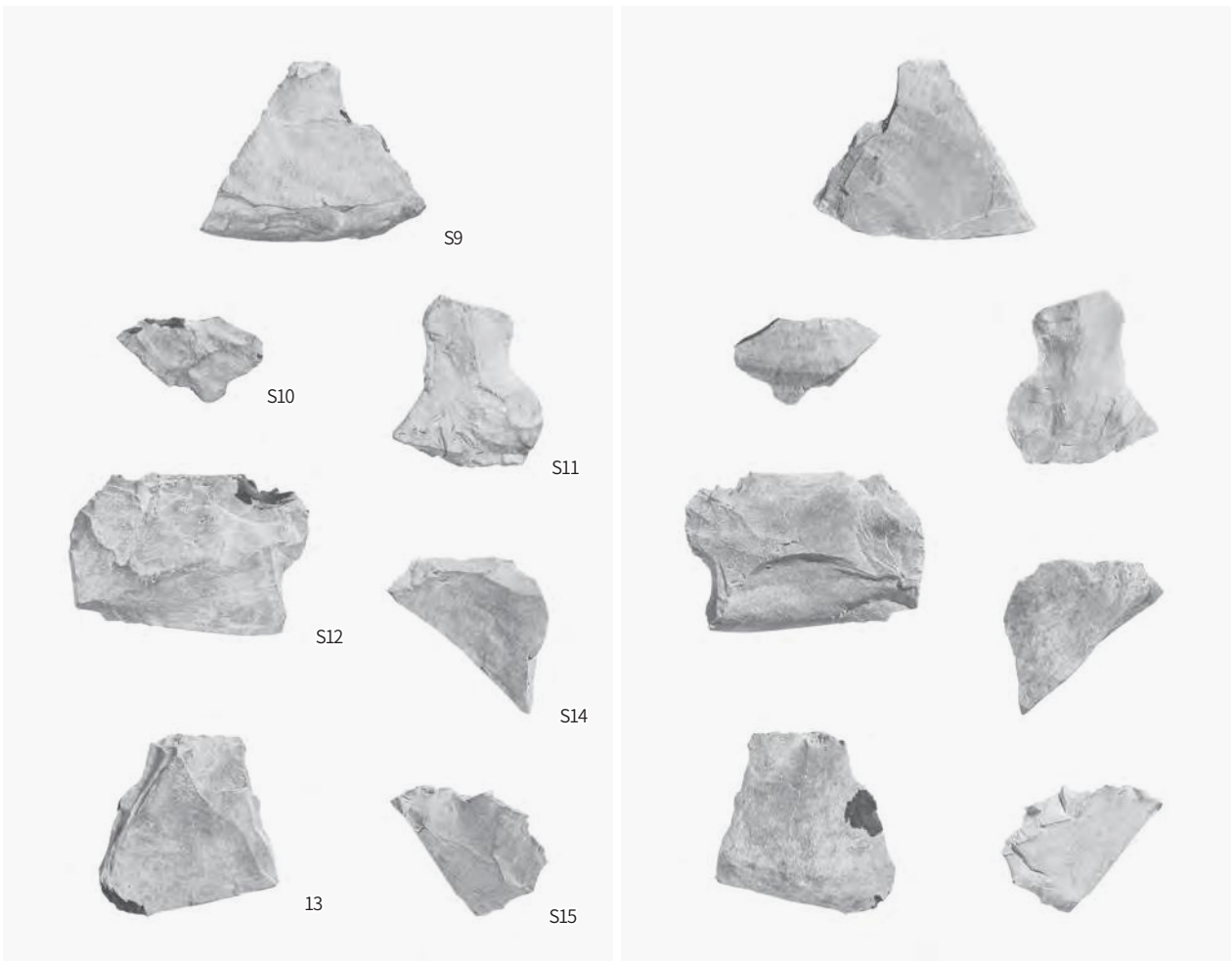
周溝墓群出土遺物ほか〔左側 上段；方形周溝墓 9 / 下段；方形周溝墓 11〕
〔右側 上段；方形周溝墓 9 上層 / 下段；包含層〕

図版 18

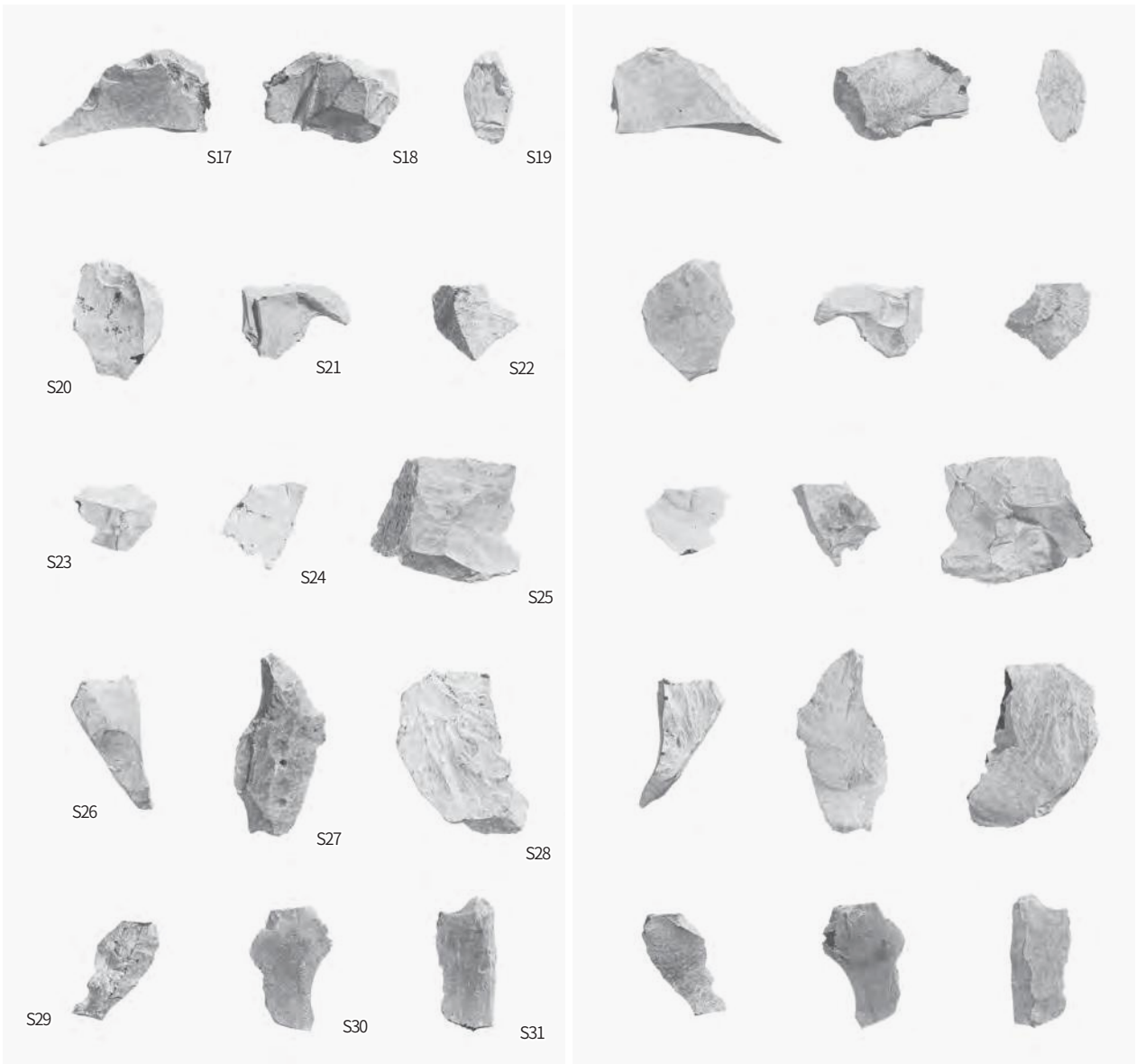
出土遺物 3 (包含層出土石器)



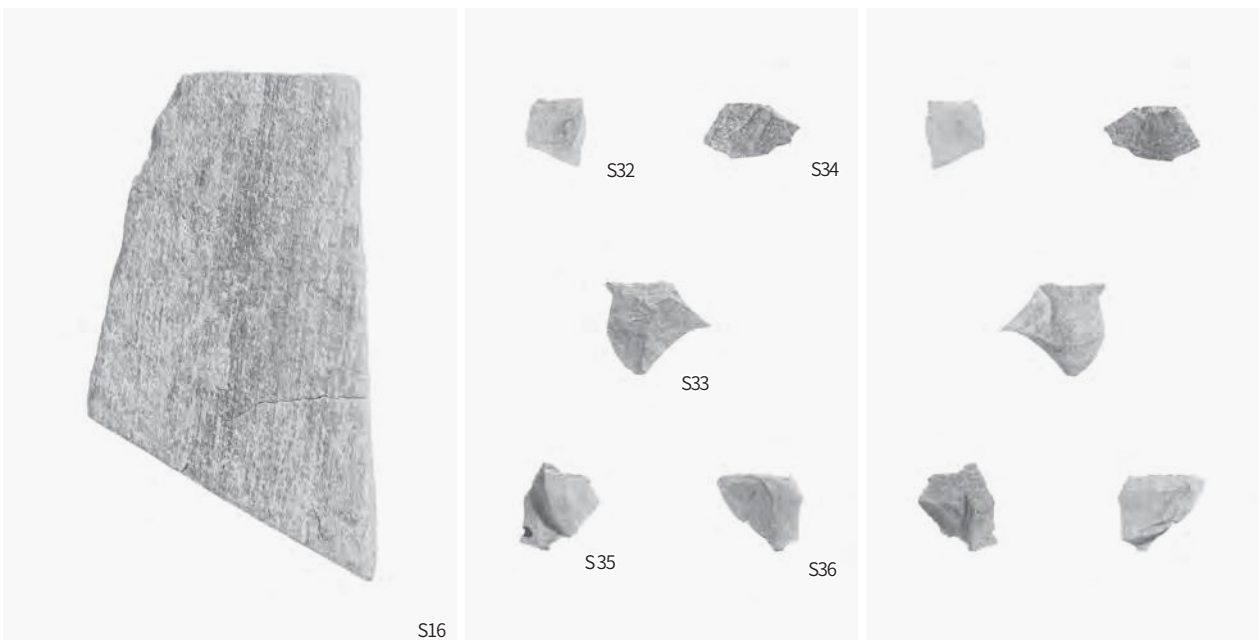
包含層出土石器 (左側:表面/右側:裏面)



自然流路 NR01 上面 (2区 2A-5a 地点) 出土石器 (左側:表面/右側:裏面)



自然流路 NR01 上面 (3区20-5j 地点) 出土石器 (左側: 表面/右側: 裏面)

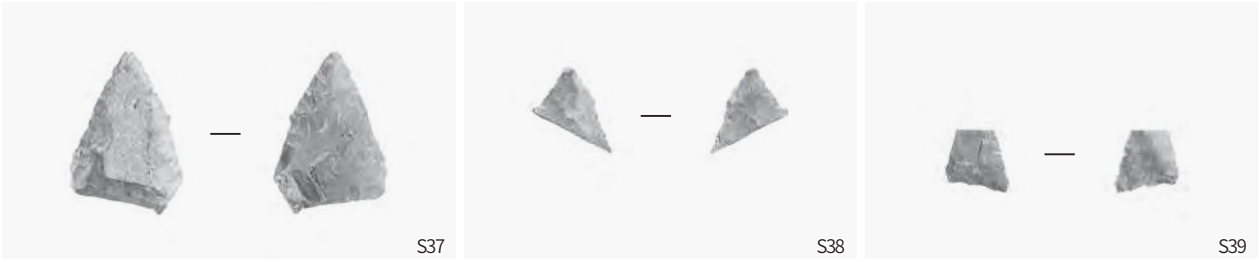


自然流路 NR01 上面 (2区2A-5a 地点) 出土結晶片岩

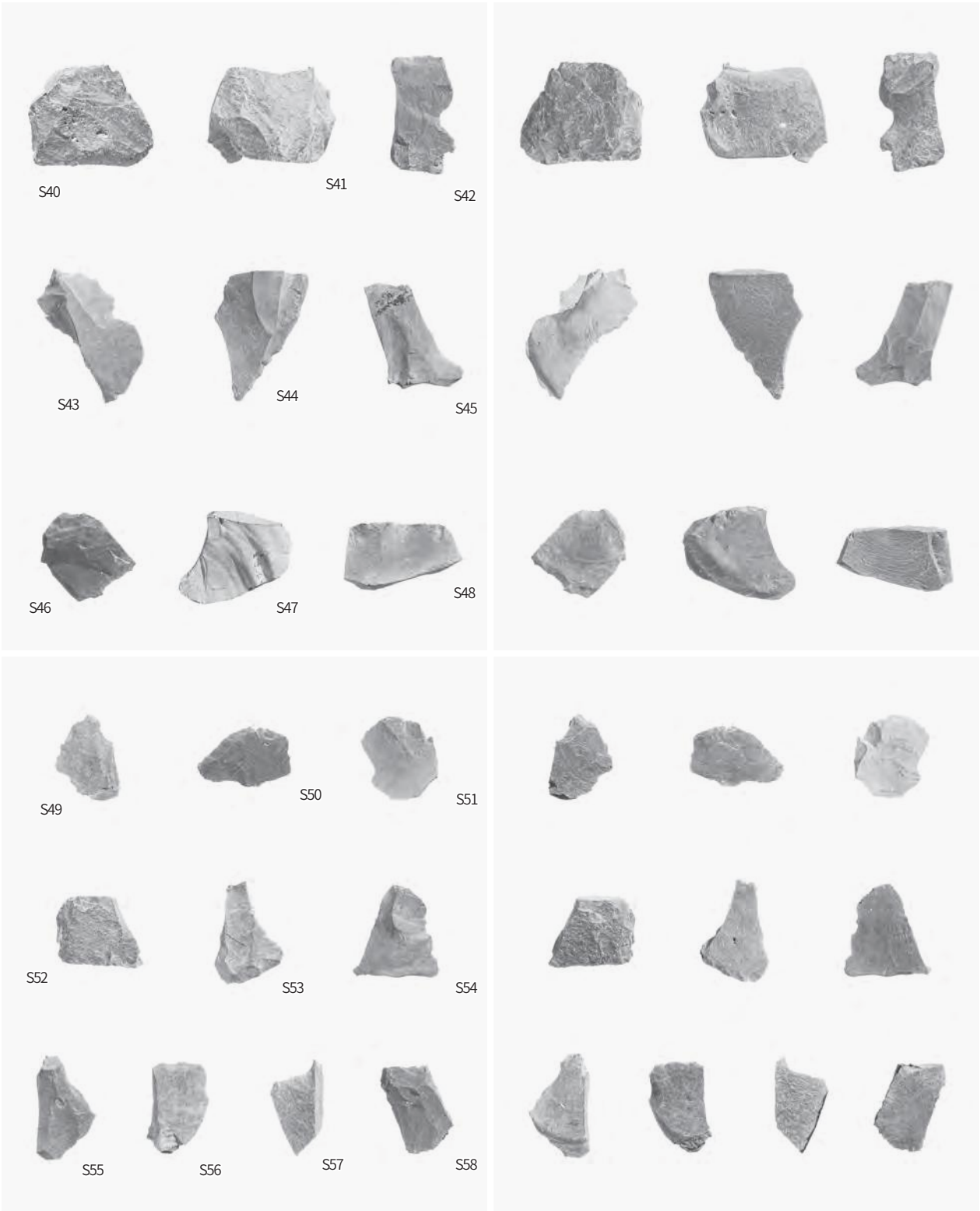
139 石器集積遺構周辺 出土石器 (左側: 表面/右側: 裏面)

図版 20

出土遺物 5 (石器集積遺構出土石器)



石器集積遺構 (139 土坑) 出土石器 (石鏃未成品) [左側：表面/右側：裏面]



石器集積遺構 (139 土坑) 出土石器 (剥片・楔形石器・石核) [左側：表面/右側：裏面]

報告書抄録

ふりがな	ちゅうじょうしょうがっこういせき・まつがもとみなみいせき1						
書名	中条小学校遺跡・松ヶ本南遺跡1						
シリーズ名	茨木市文化財資料集						
シリーズ番号	第86集						
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書						
シリーズ番号	第329集						
編著者名	笹栗 拓 (編)、坂田典彦、園原悠斗						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号 TEL 072-299-8791						
発行機関	茨木市教育委員会						
所在地	〒567-8505 大阪府茨木市駅前3丁目8番13号 TEL 072-620-8121 (代表)						
発行年月日	令和6年(2024年)3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
ちゅうじょうしょうがっこう 中条小学校遺跡 まつがもとみなみ 松ヶ本南遺跡	おおさかふいばらきし 大阪府茨木市 いわくらちょう 岩倉町1番1ほか	27211	—	北緯 34° 80' 93" 東経 135° 56' 14"	令和3年 8月 23日 ～ 令和4年 6月 30日	4,628 m ²	立命館大学 大阪いばらき キャンパス 校舎建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
中条小学校遺跡		弥生時代 (前期)	石器集積遺構・自然流路		石器 (サヌカイト) 土器	微細剥片が多数出土 小型石器の製作痕跡	
	墓	古墳時代 (初頭)	円形周溝墓・方形周溝墓		古式土師器 (二重口縁壺)	庄内式期、計5基 異なる墳形によって 構成された周溝墓群	
松ヶ本南遺跡	集落	平安時代	掘立柱建物・柱列・土坑		土師器・須恵器・ 黒色土器	掘立柱建物2棟ほか	
	生産	奈良時代 ～ 近世	畦畔、耕作溝群 土坑 (水溜遺構)		土師器・須恵器・ 黒色土器・瓦器・ 陶磁器類・瓦・鉄釘	条里地割に基づく 耕作関連遺構	
要約	<p>千里丘陵東縁の扇状地面に立地する遺跡で、主に弥生時代前期、古墳時代初頭、奈良時代～平安時代の遺構・遺物が確認された。</p> <p>弥生時代前期以前の遺構の検出は、当遺跡でははじめてで、近畿全体でみても類例が少ない打製石鏃などの小型石器の製作痕跡が確認された。庄内式期の円形周溝墓群は、方形周溝墓とセットで確認された良好な調査事例となり、墳丘上に少数の二重口縁壺が供献されたと考えられる。耕作関連遺構では、正方位を志向する奈良時代～平安時代初頭にさかのぼる溝群が確認されたほか、耕作域の一角で平安時代前半(10世紀代)の掘立柱建物群も検出された。いずれも当地での条里に基づく耕地開発のはじまりを考える上で有益な情報となった。</p>						

茨木市文化財資料集 第86集

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第329集

中条小学校遺跡・ 松ヶ本南遺跡1

発行年月日 / 令和6年(2024年)3月31日

編集 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

発行 / 茨木市教育委員会
大阪府茨木市駅前三丁目8番13号

印刷・製本 / 丸山印刷株式会社
兵庫県高砂市神爪1丁目11-33

